THE CENTRAL REVIEW

中央公論

3-1922

三月號

第三十七年　第三號　第四百六號



卑猥なる廣告の申込みは謝絶す　中央公論社

山縣公の政治的功過の總決算

▼詞華

現代藝術家餘技集



プラトン
萬年筆
改造の時代に生れて
改造を生みつゝある
萬年筆用
プラトン
インキ
PLAT
何時までも削らず
に書ける大流行の
プラトン
シャープ鉛筆
日本文具製造株式會社特製
中山太陽堂文具部發賣



LANDSCAPE WITH FIGURES. CONSTABLE

大正十一年

中央公論

三月一日發行

三月號

第卅七年第三號

第四百六號

議會政治の刷新

議會昨今の不仕鱈は本當に困つたものだ。併し之を以て直に一般國民の風紀頽廢の象徴と觀るのは早計であらう。況して之を理由として議會政治そのものを呪咀するが如きは大なる間違である。之を人體にたとへるなら、這の不仕鱈は云はゞチフスかコレラの様な特種の病菌の結果であつて、一般健康の増進と云ふ事だけで急速に根治し得る底のものではない。

無論健康が完全でないから病菌にも冒される。國民の道義觀念の薄弱といふことにも一種の責任がないではないが、平素溫厚篤實を以て知られてゐる人でさへ一度政爭の渦中に投ずると忽ち思慮辨別を失ふといふ實例を觀ても、此處には何等か特別の病源が流れて居ることを想はねばならぬ。

然らば議會政治に特有なる病根とは何か。予輩は之を求めて『政爭の非道義的解決』といふ事實に發見した。現今の政爭に於て、勝負の決が道義的に定らず、依然戰國亂世の當時の如く强いもの勝になつて居ることが、實に人々をして中正公平ならしめ得ないのだと信ずる。

見よ。今日我國の政界に於て何處に正しい事が通つて居るか。正しい事を主張するもの必しも多數黨となるのではない。多數黨の主張は何時でも通る。但だ其の内面的價値の如何は主要の問題とならない。而して多數黨が多數黨たる所以は、專ら其の偶々樞要の地位を占めたるに乘じ、其地位の利用に依て獲たる金と力とを巧に散じて益々多數の味方を作つた點に在り、國民の眞の信頼の有無は殆んど問ふ所でない。其事其物の本質的に要求さるゝ條件の充足は、斯くして政爭の勝負と何等の關係がないとすれば、所謂顯要の地位は必しも當然之に値する人に開かれずして、而かも猫にも杓子にも其の取るに委せらるゝことになる。只腕力あるものが其の取るに委さるゝのである。而して一旦之を取れば、所謂一夫關を擁して萬夫も之を拔く可らざるの勢を占むるから、反對派としては理が非でも之を覆すに手段を擇ばざるに至るは亦自然の成行ではないか。

道理が勝負の最終決定者たらざる處只腕力の支配あるのみなるは、古今を通じて渝らない。今日我國の議會が喧々擾々爭の爲の爭ひに浮身をやつし、宛として源平相鬪ふの亂世を想はしむるは毫も怪むに足らぬのである。

政友會の幹部が無頼漢の行爲にも比すべき味方をかばつたり、加藤憲政會總裁までが所謂勇敢なる闘士の元氣を賞讃するを見て呆れてはならない。各種徒黨の狂演亂舞場ときめて仕舞へば、今日の議會は之を對岸の火災視して見物するに誠に絕好の觀物だ、國民が毎朝の新聞を待ち兼ねるのも恐らく斯うした心理からであらう。夫れかあらぬか一國の選良の中にすら昨今の此輕薄なる風潮に迎合して只管大向の喝采を博せんと心掛くる者もあるやうだ。斯くして我國の議會は今や正に國利民福を籌劃する場處ではなくなつてしまつた。

併し此の政治的疾患は考へて見れば我國特有のものではない。何處の國も大抵一度は通つた。然らば如何してて之を脫し得たかと我々心ある者に取つて大切な研究問題になる。而して歴史の教ふる所に依ると、不思議にも先進諸國は、此禍を脫せんとする意識的努力からは其目的を達し得ずして、皆期せずして他の動機よりする一種の改革に依て偶然にも此病より恢復し得た。それは何かといふに、普通選擧の實施則是である。

詳しい說明は他の機會に讓る。簡短に要點だけを列擧するならば、普通選擧の實施は第一に現在各政黨の地盤關係を根本的に顚覆する。爲に彼等は新制度の許に於て從來の勢力を維持せんとせば全く新に努力奮闘する所なければならない。而してこの新運動に於て從來慣用の醜穢なる手段の爲すなきは言ふまでもない。斯くして第二に政爭に勝負を決する標準は段々國民の良心の信頼といふ道義的基礎に落ち付いて來ることになる。

さうすると、總選擧後數年の間は各政黨間の勢力關係は一時固定するが如きも、政府黨は常に多數黨たる今日の樣に、それは國民の信任を離れて固定するのではない。而して國民は絕へず判斷する。其の與ふる信任も從つて絕えず動搖する。斯くて政黨は始めて正しい事善い事を競ふことに依つて結局の勝負を爭ふことになる。議會の言論の如き亦、目前の勝負に利するよりも寧ろ國民の判斷に訴ふる意味に於て眞面目に爲さるゝ樣になる。

尤も普通選擧制の樹立に由て政界刷新の目的を達せんには、之に伴つて改善すべき猶ほ幾多の綱目あることを忘れてはならぬ。けれども、チフス患者に對しては先づ以て其病菌の撲滅を謀つてやらなければならぬ。之をやり遂げるまでは外の手當に及び兼ねることもある。此意味に於て予輩は普通選擧制の一日も速に確立せんことを冀ふものである。只普通選擧の問題は、其の政治的根據からばかりでなく、社會文化的立場からも、就中一般道義的基調からも、大に究明せらるゝの必要あるは言を待たない。

中央公論



第卅七年第三號
三月號
第四百六號

賣淫の社會學的考察

林癸未夫

一　結婚の創造と私通の永續

凡そ人間の性的交渉は通常結婚か私通か賣淫かによつて行はれる。しかも社會現象としての發生の順序からいへば、結婚は賣淫に先んじ、私通は更に結婚に先んじた。

私通の起源は人類の歷史と共に悠遠である。太古に於ては私通は唯一の性的交渉の手段で、同時に又人類增殖の唯一

の原因でもあつた。私通は即ち公通であつた。

人類が結婚なる觀念を創造したのは遙に後の時代であつたと想はれる。惟ふに結婚なるものは、其原始的の意義に於ては、特定の男と女とが（其一方又は双方が複數であつても差支ない）排他的に性的交渉の便宜を領有せんがために、永續的に同棲するか、或は少くも相互に特別の機會を提供する所の單なる事實であつた。而して其手段が双方の約束であると、賣買であると、掠奪であるとは敢て問はなかつた。然るに斯の如く或特定の男女が排他的に且永續的に結合するといふことは、必ず周圍の他の男女に多少の不滿、若くは不便を與へたに相違ない。從つて彼等がこの不滿不便に堪へ得られないで、飽くまでも此事實を認容せずに、性的交渉の機會均等主義を主張して息まなかつたとするならば、右の如き事實の存在が困難であつて、つまり結婚は成立し得ない。人類相互が各自の不滿不便を忍んでも、他の男女の排外的永續的結合を是認し、尊重しやうとするに至つた時に、初めて結婚なるものゝ成立の可能が生ずるのである。從つて結婚なるものは或民族の仲間に於て、相互が私を捨てゝ公に順ふといふ觀念、言ひかへれば相互の抑制によつて共同生活の平和を維持しやうとする社會組織の根本思想が發生する程度にまで彼等の智慮が進んだ後でなければ發生し得ないものである。從つて人類の思想が此程度まで進まなかつた以前に於て、結婚なるものゝ存在しない幾千年か幾萬年かを經過したに相違ないのである。

併しながら尙進んで結婚が社會生活に必要な一制度として普く認識されるに至つた後に於ても、私通が結婚の豫備條件たる地位を占めた時代が相當に經續したものと思はれる。奈良朝及平安朝文學に描寫されたる當時の上流階級の生活狀態は明に之を證明してゐる。彼等に於て尙且さうであつたとすれば、一般の武士及士民の間に於ては一層さうであつたことは否まれない。

同時に又結婚の豫備行爲としてゞない單純な私通が、結婚制度の發生に依つてすこしも妨げられることなしに、あらゆる時代を通じて間斷なく行はれ來つたことも疑ふべからざる事實である。唯吾等の注意すべきは、結婚制度發生以後に於て、私通を不道德的行爲と認める思想が創造せられ且漸次普及したこと之である。殊に猶太民族間の宗教的倫理觀の上では、私通を惡むこと最も甚しかつたことは、利未記、申命記其他舊約の豫言書が、屢々私通を罰するに死を以てすべきことを訓へてゐるに見ても明かである。此思想は新約に於て更に高調せられ、單に婦女を見て邪念を起すことすら之を不道德として非難するに至つた。尤も耶蘇は他面に於て、信仰によつて罪の宥さるべきことを力說したがゆゑに、モーセの訓へたやうな峻嚴なる律法の適用は著しく緩和せられたけれども、とにかく基督教道德が私通を罪惡視する思想は古今に一貫して變る所はなかつた。

佛教が色慾邪淫を以て人間最大の罪障中に數へたことは、更めて說くまでもない。又男女七歲にして席を同じくせずといふが如き儒訓も、やはり私通を以て不道德と認めて之を豫防せんとするものに外ならなかつたのである。

併しながら古往今來の道德律中、私通禁止ほど、その說かるゝ所多くして、その守らるゝ所少かつたものは恐らく他になかつたと言つて可い。若しあつたとすれば「虛言を吐くな」の教訓だけであつたらう。何故に私通の禁止はそれ程困難であつたか。惟ふにそれは結婚よりも、賣淫よりも、より多く戀愛の結果たるがために外ならない。

掠奪、賣買等による場合を度外するならば、結婚は其發生の初期に於ては、社會制度の完備した後の時代よりも、當事者の戀愛によつて成立つ場合が遙に多かつたと想像せられる。勿論その戀愛が精神的の動機からであつても、肉體的の誘引からであつても、又一時的であつても、永續的であつても、それは姑く別問題とする。要するに特定の異性に對する愛慾の念が廣い意味に於ての戀愛である。この戀愛が初めに私通となり、結婚制度が發生してからは結婚となつ

た。しかも社會制度の幼稚な時代には、後の時代に見るやうな、而して又現代に於てすら尙多少行はれつゝあるやうな、當事者の自由意志による選擇を經ない、若くはそれを無視したる結婚を强要する所の社會的の必要が未だ存在しなかつたがゆゑに、結婚の動機は槪して戀愛であり得たのであつた。

然るに結婚が社會制度として漸次其地位を確立するに至り、且それが生死に次での顯要なる一人事と看做さるゝに及んで、結婚は必ず其成立の際に一定の儀禮を以て之れを表現せらるゝやうになつた。かく結婚が儀禮を伴ふやうになつたことは、一面結婚の社會的意義が重要となつて來たことを證據立てると同時に、結婚なるものが次第に其自由性を失つて、制度習慣の拘束の下に立たなければならぬものとなつたことを意味するのである。言ひかへれば結婚が個人的から社會的に推移したのである。斯の如き推移は社會組織が漸次復雜を來たすに伴れて、階級に上下が設けられ、貧富の差別を生じ、身分職業に異同を見るに從つて、一層急調に進行したに相違ない。殊に私通禁止の道德律は、ます〳〵青春の男女を離隔せんとするの努力を强要したがゆゑに、特定の男女間に戀愛關係を發生すべき機會は之れがために著く局限されたのみならず、假令かくの如き關係が發生しても、各々が屬する階級、身分、並に父兄の政治上若くは社會上の地位迄が此關係に干渉して、其戀愛を結婚にまで發展せしめることを難んずる場合が稀でないやうになつた。斯くの如き事情は同時に又戀愛を伴はない結婚の成立を餘儀なくせしめる原因ともなることは勿論であるから、竟に原始社會に行はれたやうな戀愛と結婚との因果關係は著しく障害され、毫も戀愛なき結婚が隨所に行はれることになつたのである。

併しながら如何なる社會制度の威力を以てしても、戀愛そのものゝ發生を禁遏することは絕對に不可能である。唯幾分か其機會を制限することを得るのみである。既に戀愛の發生が禁ずべからざるものであつて、しかもそれを結婚に進

展せしめることを局限する制度習慣が殘存するに至つた場合に於ては、戀愛の當事者は性的交渉を斷念するか、然らざれば私通する外はないのである。多くの道徳律はかゝる場合に斷念を訓へた。甚しきに至つては戀愛其ものをも罪惡視しやうとした。併しながら人間の本能は斯の如き訓戒に聽從すべく常に餘りに強烈であつた。殊に斯の如き道徳律が權威を有たなかつた時代に於て、いかに私通が濫行されたかは、羅馬の帝政時代、我邦の平安朝時代、元祿及幕末時代、佛蘭西のブールボン王朝時代に於ける文献の吾等に明示して餘蘊なき所である。

二　賣淫の起源及び其發達

前節に述べた通り、性的交渉發展の順序から言へば、戀愛から私通となり、私通が進化して結婚となり、結婚が次第に其個性を失つて、餘りに社會性を帶ぶること大なるに及んで、更に私通の發生を誘引し、あらゆる聖賢が之を制限するに餘力を惜まなかつたに拘らず、終に其効果を擧げることができなかつた。而して其理由は主として結婚が其動機に於て若くは結婚生活の過程に於て、次第に戀愛から遠ざかる傾向を有するに反し、私通は假令一時的ではあつても、戀愛關係の存在を前提として行はれるものであるから、人間が戀愛關係に基く性的交渉の慾望に打勝つだけの強き意志を有しない限り、若くは打勝つの必要を自覺せざる限り、私通を禁遏することは不可能であつたからである。これは先づ吾等の承認しなければならない事實である。

私通がかくの如く禁遏し難い事實であつたにも拘らず、何故に賣淫なるものが社會に出現したであらうか。賣淫に對する社會學的考察は玆に出發しなければならない。

私通は戀愛を前提とする。勿論その戀愛は熱烈眞摯である場合もあれば、輕浮淺薄である場合もある。永續的である

場合もあれば、刹那的である場合もあるが、とにかく相互の間に多少の愛惜なくしては行はれ難いものである。少くとも性的交渉に對する相互内心の欲求なくしては行はれ得ないものである。果してさうだとすると、私通は其當事者が第一に相識の間柄であることを必要とし、第二に相互に愛情を生ずることを必要とし、第三に其愛情が私通に對する道徳的抑制の意志に打勝つだけの强さにまで發達することを必要とする。以上三階段の經路を通過した後に初めて私通が實現されるのである。從つて其處には最初の對面から性的交渉の實現に到達する迄には、「時間」の媒介が必然の要素とならなければならない。尤も此時間は數年又は數十年を要することもあり、數日又は數箇月で足りることもある。それは當事者の性格教養、及境遇によつて千差萬別であり、又此時間の長短が必ずしも其愛情の深淺、眞僞を測る尺度とはなり得ないけれども、とにかく如何なる場合に於ても、或時間の經過なくしては戀愛から私通への發展があり得ないのである。此時間の經過がないか、若くは餘りにそれが短時間である場合は、私通ではなくして寧ろ凌辱、少くもそれに近いものと斷じて差支ないと思ふ。

右の如く私通成立には、時間の媒介が必然的要素である以上は、此時間の媒介を利用することを得ない事情の下に在る者に取つては、私通が不可能となることは言ふまでもない所である。然らば如何なる種類の人間が斯る事情の下に在るかといふならば、それは第一に「旅行者」である。

旅行者は原則として未知未見の人々の間に短時間の滯在をなすものである。從つて彼等が其性慾を滿たすの方法として私通の手段に依ることが不可能であるか、又は非常に困難であることは、前述の私通成立の經路に照して明白である。

賣淫といふ事實が人類の社會に出現した最初の動機は實に旅行者のためであつた。而して其最も舊い起源は軍旅の必

要に應じたものと思はれる。何となれば戰爭のための遠征は多く壯年男子のみの旅行であり、又他に慰安の途が全く見出せないからである。茲に於てか古代の征戰には常に若干の婦女子を携帶して、陣中享樂の具に供せられる例であつたことは史乘に散見する所の事實であつて、それが賣淫の濫觴と看做されるのである。

私は此場合に於て賣淫の意義を明にするの必要を感ずる。賣淫は原則として當事者の一方が他方に報酬を支拂ふことによつて行はるゝ所の性的交渉である。言ひかへれば或對價を支拂ふ者に對しては、何人の需要にも應じて供給せらるゝ所の勞務である。法律上の性質から言へば一種の雇傭契約であつて、按摩と同一視すべきものである。從つてそれが戀愛を前提としない點に於て全く私通と性質を異にするものである。勿論賣淫關係が同時に戀愛關係を伴ふことは有り得る。否徳川時代の文學の中樞を爲す所の題目は多くはそれであつた。併しながらそれは寧ろ偶發稀有の事情であつて賣淫本來の性質でないことは言ふ迄もない。從つて賣淫は其行はるゝ方法形式は種々雜多であるけれども、無戀愛にして報酬の授受を必須要素とするものであることゝ、又其當然の結果として私通の場合に於けるが如き時間の經過を必要としない性的交渉であることを其特徴とするのである。

古代に於ける多數人の長途の旅行は殆ど征戰の場合に限られてゐた。然るに人類社會生活の發展に伴れ、遠隔せる地方に居住する人民が互に往來して商業を營むやうになつてからは、平和の目的を以てする旅行者が次第に其數を増して來た。しかも是等の旅行者は他郷に於ける滯在期間を成るべく孤獨の寂寥に惱むことなくして過ごしたいといふ自然の希望から、酒と音樂と異性とに强い誘引を感じない譯には行かなかつた。しかも彼等の財嚢は新しい取引によつて重く彼等の身邊は異國人の眼を喜ばすやうな珍奇な品物によつて飾られてゐたがゆゑに、彼等が拂ふことを辭せない豐かなる報酬と引かへに、彼等の最も渴望する所のものを與へやうと志す者が出現するに至つたことは寧ろ自然と言はなけれ

ばならぬ。即ち何れの國に於ても賣淫の最も早く發達した土地は、常に必ず他國人の往來の頻繁な商港であつたことは全く右の事情に原因するものである。

　十字軍は種々なる點に於て、世界の文化史上に重要なる意義を有する大事件であつたが、それから招來された意外な結果の一つは實に賣淫制度の普及といふことであつた。何となれば前後八回の十字軍は之に參加した者の多數であつた點に於て、其往來した地域の廣濶であつた點に於て、之がために海陸の交通運輸の便が著しく發達した點に於て、而して又かゝる狀態の繼續が約二百年の長きに亘つた點に於て、必然的に賣淫制度の普及を促進すべき諸條件が完備してゐたからであつた。

　十字軍は第十三世紀の末葉に於て終結したけれども、それが賣淫制度の發達に及ぼした影響は其後却て恒久的な勢力となつた、何となれば十字軍が文化史上に齎した最も顯著なる二功績の一は、實に近世資本主義勃興の基礎を造つたことであつたからである。（他の一が文藝復興の氣運を促進したことにあるは言ふまでもない）。勿論現代の資本主義が社會生活の全般を支配するほどの一大勢力を揮ふに至つたのは、產業革命以來の事に屬するけれども、資本主義的精神其者の萠芽は十三世紀以後の伊太利の商業都市に發生したものであることはゾムバルトの精到なる研究によつて闡明せられた。しかも十三世紀以後に於ける北伊諸都市の異常なる繁榮は、十字軍のためにしたる莫大なる人馬の運輸、物資の交易に發端したものであることは、あらゆる史家の所見を同じくして居る所である。

　十字軍の影響として歐洲の商業は著しく活潑となつた。而して商業の發達は必然的に人事の往來を頻繁ならしめると共に、都市の勃興を促進するものである。何となれば水陸交通の要衝に市場を設けて、賣買せんとする物資を茲に持寄ることが便利であるからである。しかのみならず人間は斬新有用なる生活資料を見出したときには、なるべく速に之を

求めて自家の用に供したいのが人情であるからして、斯る有用品を得るに最も便利な場所、即ち賣買市場に接近して共居を定める者が次第に増加することは自然の勢であつて、何時しか共處に都市が出現することになるのである。

商業都市の建設が賣淫制度の發達を促す一大動因となつたことは爭はれない事實と認められる。都市大なるに從つて賣淫はます／＼多きを加へる。而して現代の驚くべき都市の膨脹は主として資本主義的經濟組織の結果であり、資本主義的精神の發達は南歐に於ける商業の繁榮によつて促進せられ、南歐商業都市の建設は十字軍に依つて誘致せられたものとするならば、現代賣淫制度の沿革を遡つて十字軍に及ぶことは當然の見解と言はなければならない。

三　賣淫と現代社會生活の特質

賣淫は都市の發達と共に發達した。併しながら現代に於てそれが防遏すべからざる勢を以て蔓延しつゝある直接の原因は、更に之を現代社會生活の特質に求めなければならない。

一世紀乃至半世紀以前この方、政治上及産業上の一大變革が各國民の社會生活の上に及ぼしたる影響はさま／＼ではあるけれども、いづれの國にも共通な特質としては少くも左の五つを擧げることができる。

第一には農村から工場への多數人の移動である。大規模な機械的の生産組織は勢ひ勞力の供給を農村に求める。山の麓、森のほとりに、父母兄妹と共に暮してゐた年の若い男女は、相率ゐて他郷の工場に出稼ぎに行く。勿論それは最初の間は、農村に過剩な勞力を他に振向けることによつて、彼等の生活難を緩和することに與つて効があつたに相違ない。併しながら工場生産事業の擴張に伴ふ勞力の需要は、農村に於ける人口の自然増加に依る過剩勞力の供給よりも遙に急速であつたがゆゑに、勢ひ農村に於て耕作、牧畜等のために保存して置かなければならぬ筈の勞力をも、工場のために

縋ひ去られることになつた。而して大部分未婚の多數の青年男女は、親愛の情を以て保護監督してくれる者の誰もゐない、群集したる孤獨の生活の中に突入して行つたのであつた。

第二には商業の發達である。蒸汽及電氣を動力とする運輸、通信、交通諸機關の異常なる發達は、激增したる工業製品の分配及交換を迅速且簡易ならしむることによつて、商取引の顯著なる發達を遂げしめた。銀行、保險、倉庫等の業務も亦之と共に激增して、人事の往來はます／＼頻繁を極めるやうになつた。

第三には行政機關の膨脹である。社會生活の複雜を來たすに伴れて、國家及公共團體に於て處理すべき事務はいやが上にも膨脹して、之に從事する人々も亦從つて增加した。

第四には教育の普及である。往昔僧侶又は村夫子等の手によつて分散的に行はれてゐた普通教育は、新なる大校舍の下に移され、次いで高等教育並に諸般の科學的專門教育の發達するに伴れて、多數の青年は遠く父母の膝下を離れて、青春時代を異鄕の遊學に費すやうになつた。

第五には軍備の擴張である。普佛戰爭以來際限なく行はれた列强の軍備の擴張は、或は强制的徵兵制度となり、或は大規模な軍器製艦の工場となつて、多數の壯丁又は職工を比較的狹小な地域に密集して生活せしめるやうになつた。

右に擧げたやうな諸種の原因が人類の社會生活の樣式に一大變化を齎らしたことは言ふまでもないが、其最も直接な結果の一つとして認められるのは都市の膨脹といふことであつた。世界各國の首都並に商工業の中心たる都市は垂直的に且水平的に急速度を以て擴張せられ、其中に收容する人口は、より以上の急速度を以て增加した。全國の人口が二倍し三倍する間に、都市の人口は五倍し十倍するのが常である。しかも其割合は前に揭げた五箇の原因を有する程度の高い國ほど、言ひかへれば政治的及經濟的に國力發展の勢ひの强い國ほど著しいのは固より當然である。

次に吾等の認めなければならぬことは婚期が一般に次第に晩れて行くといふことである。これは三つの理由から來ると思はれる。第一の理由は教育及兵役のためである。徴兵のため壯年期の數箇年を兵營に送らなければならぬ者、高等教育を受けるがために青春時代を學舍に過さうとする者が、是等の務めを竣へるまで結婚を避けやうとすることは已むを得ないことでもあり、又是認すべきことでもある。殊に女子教育がます／＼普及するに伴れて、彼等が人の妻たるべき準備を完了する時期は少くも數箇年の遲延を來すことになつたがために、通常女子よりも數歲年長であることを例とする男子の婚期もそれだけ先へ延ばされることになつた。第二の理由としては個人生活の自由を保持しやうとする要求である。此傾向は都市生活者に於て一層著しい。何となればそれは一面享樂に對する欲望の增大と相伴ふものであるからである。都市の膨脹は必然あらゆる意味に於ける享樂的の設備を促す。美術館、博物館、圖書館、劇場、音樂堂、公園等の如き文化的意義あるものから、遊廓、飲食店、見世物の如き低級な娛樂機關に至るまで、都人士の日常生活を退屈せしめないやうな刺戟を絕えず提供してゐる。都會が田舍人に對して有する蠱惑的な誘引は主として是等の享樂設備の力に依るのである。何となれば其等は粗朴、閑寂な農村生活に於ては到底得ることのできないものであるからである。斯くの如き都市に於てのみ得ることのできる豐饒な享樂は、農村に於ては堪へ難い非家庭的生活も、都市に於ては毫も苦痛と感ぜしめないばかりでなく、家庭生活の束縛と煩累とから免かれて、個人としての自由を保持するためには、孤獨を必要條件と感ぜしめるに至つたのである。勿論或年齡に達すると、外界に於ける刺戟の强い享樂よりも、家庭內に於ける平靜な和樂を欲するやうになるのが人情の自然であるから、終生を獨身で通す者は今日尙稀であるけれども、少くも之が結婚の時期を遲らす一原因であることは爭はれない。

第三の而して最大の理由として指摘すべきは一般生活程度の向上である。現代の一般民衆は何れも其所得が自己の生

活慾を滿足せしめることのできない事實に對して不滿を抱いてゐる。これは固より當然である。併しながら彼等の感ずる生活難は、一時的な物價の騰落を度外して、長い年月に就て之を觀察するならば、其大部分が彼等自身知らず識らずの間に向上しつゝある生活慾の無限の擴大に原因するものであることを認めない譯には行かない。精神的にも物質的にも、より良き、より美しき、より豊に、より大なる生活資料を獲得しやうとする人間の欲望は日に日に進展して止まる所を知らない。殊に教育の普及するに伴れて、物質的及精神的文明の提供するあらゆる生活資料――住宅、燈火、燃料、飲食、被服、圖書、藝術――に對する智識が開發せられ、次で慾望が之に追隨することは必然の經路であるがゆゑに、各自の所得は曾て減少しないのみか、年々歳々幾分かづゝ增加しつゝあるに拘らず、生活資料に對する滿たされざる慾望の範圍は益々擴大せられ、從つて生活難を感ずること愈々强きを加へて行くのである。若し吾等が十年若くは數十年以前に於て、現在の吾等と同じ程度の社會的地位を占めてゐた人々が、如何なる生活資料に甘んじてゐたかを回顧するならば、右の事實は直に首肯せられるであらう。併しながら生活難の原因が何であるにせよ、吾等がそれを痛感する以上は、一層生活資料の缺乏を誘致するであう所の結婚を出來るだけ繰延べやうとするに至つたことは自然の結果と言はなければならない。

而して上述の如き現代社會生活の特質が、賣淫の普及を促しつゝある最も有力な原因である。

四　大都市に於ける賣淫と私通

賣淫は現今に於ては殆ど全部が都市の問題であると言へる。歐洲に於ける商業勃興以前の大都市は總て囘々教徒によつて建設されたものであつた。中世に於てコンスタンチノープル、バグダツト及カイローが百萬の人口を有し、セビルラ

及コルドヷが五十萬を有してゐた當時、巴里は二十萬、ウヰーンは五萬、倫敦は三萬五千、キヨルンは三萬、ハンブルグは一萬八千の住民を有するに過ぎなかつた。等しく都市と言つても、其規模の大小は市民生活の様式に著しい差異を來すものである。小都會に於ては旅行者を除いては未知人(ストレンヂャー)の混住が稀であるから、大抵相識の間柄で、家族と家族とが親密なる交際を有する點に於て、田舍と殆ど變りがない。從つて其處には私通が比較的容易に行はれる代りに、賣淫の存在が困難であるか、或は極く小範圍に局限される。何となれば小都會に於て此種の業務を營む婦人及其顧客は忽ち一般の視聽を牽いて、之に接近する者は惡評を免かれ難いからである。

然るに過去數世紀の間に、人口僅か數萬の小都市であつた倫敦は七百萬、巴里は三百萬、ウヰーンは二百萬、ハンブルグは百萬、キヨルンは五十萬の大都市となつた。伯林の如きはナポレオン沒落の當時僅に二十萬の人口を有するに過ぎなかつたが、百年を隔てた今日は五百萬に增加して居る。日本に於ける都市膨脹の勢も亦驚くべきものである。日本の人口は内地のみにて、明治二十六年に四千百三十八萬であつたが、大正九年には五千五百九十六萬に增加したから、其割合は二割六分弱に過ぎない。然るに此三十年間に六大都市に於ける住民が如何に增加したかを示すと次の通りである。

	明治二十六年	大正九年	增加の割合
東京	一、二一四、〇〇〇	二、一七三、〇〇〇	四割五分
大阪	四八二、〇〇〇	一、二五二、〇〇〇	六割二分
京都	三一七、〇〇〇	五九一、〇〇〇	四割七分
神戸	一五三、〇〇〇	六〇八、〇〇〇	七割五分
名古屋	一九四、〇〇〇	四二九、〇〇〇	五割五分

横濱　一五二、〇〇〇　四二二、〇〇〇　六割四分

右の内增加の割合最も大なる神戸横濱の如きは全く維新後に建設せられたる新都市である。而して明治二十六年は憲法施行後數年を經たばかりの時であり、又工場工業の經營も漸く其緒に就いたばかりの時であるから、爾來大正九年に至る約三十箇年は、丁度英國の十九世紀全部、獨逸佛蘭西の十九世紀後半部と同じやうに、日本の產業革命から其發育期に相當し、前節に述べたやうな社會生活の變遷が最も活潑に行はれた時代であつたのである。此時代に右の如き都市の膨脹を見ることは固より當然である。

米國に於ても八十年以前には地理書にすら名を止めないほどの小寒村であつたシカゴ、デトロイトが今日大都市となつたのも、全く產業革命の賜物に外ならない。

總てかくの如き大都市に於ける市民の生活は、何人も自ら體驗しつゝあるが如く群集したる孤獨の生活である。相識者は千人若くは萬人中の一人に過ぎない。數箇年軒を列べてゐても隣人の面さへ辨へず、數十箇年同町內に住つてゐても朝夕の挨拶さへ交さないのが常である。街を步いても、電車に乘つても、賣店に入つても、料理屋に上つても、殆ど悉くが未知未見の人々を以て滿されてゐる。默々として相逢ひ、默々として相別れる。しかも終生再び逢ふべき機會を有するや否やさへ定かならぬ幾百千萬人の人々が雜然、紛然として群集したる孤獨の生活を營みつゝあるのが大都市の現狀である。

かくの如き大都市の生活狀態が小都市に於て賣淫の存在を難んぜしめる原因を取除くに與つて力あることは言ふまでもあるまい。何となれば人口一萬の小都市に十人の賣淫婦がゐるのと、人口百萬の大都市に千人の賣淫婦がゐるのと、割合に於ては全く同一であるけれども、彼等の風俗擧動が一般市民の注意を惹く程度、並に彼等の顧客の名譽が知己朋友

の間に低下する危險の程度には著しき相違があるからである。小都會に於ては、事件の内容は尋常茶飯の事に過ぎなくても、其演出者が市民大多數に共通の知人であるといふ關係から、忽ち一般の話柄となり易いけれども、大都會に於ては演出者が自己の知人である場合は極めて稀であるからして、事件其者の内容が特種の感興を惹くやうな場合でなければ誰も之を問題にしない。從つて大都會に於ては何人が娼家に出入しやうが、何人が賣淫婦に惑溺しやうが、そんなことは一般の市民に取つては、一瞬間の注意にも値しない平凡事に過ぎないのである。

右の如き市民相互の無感覺（インディファレンス）といふ事情の外に、大都市に賣淫の增加を來す有力な原因としては、學生、軍人の如き壯年の未婚者や、商工業の被傭者として働く年少の獨身男女が非常に多いといふこと、及び短期滯留の旅行者が絕えず出入するといふこと等を指摘しなければならぬ。同時に又半は生活難のため、半は享樂追求の便宜のため、獨身生活に甘んずる俸給生活者の次第に增加しつゝあることも、見遁すことのできぬ一因子である。

日本の大都市に於て營業的賣淫を行ふ者は主として娼妓、藝妓及私窩子の三種である。其内私窩子の數は正確に知ることができないから姑く之を措き、東京市に於ける娼妓及藝妓の數を示すと左の通りである。

明治三十六年	娼妓	五、一九三	藝妓	三、〇六〇
大正二年	同	六、一〇四	同	五、三三九
同十年	同	五、七二二	同	一〇九、五四

之によつて見ると藝妓の數は過去二十年間に約三倍し、過去十年間に約二倍してゐるけれども、娼妓の數は格別の增加を見ない。又藝娼妓を合計した數は過去二十年間に約二倍、過去十年間に約一倍半を增加して、其割合は東京市の人口增加の割合を遙に凌駕してゐる。

大體論として都會は賣淫の舞臺であり、田舍は私通の舞臺であると云ひ得る。何となれば私通は前に述べたやうに戀愛の誘引を必要とする。戀愛は相識に初まらなければならぬ。而して青年男女の相識の機會は都會に於ては特別の事情の下に於てのみ稀に之を得ることができるに拘らず、田舍に於ては一村擧つて生れながらに相識であるのが常である。しかのみならず田舍人は概して教育の程度低く、貞操の觀念に乏しい。殊に自然のランデヴーを到る處に見出すことの出來る便宜があるから、私通に陷る機會は確に都會よりも多いに相違ない。此點は日本も歐米も全く同一であるやうに思はれる。

唯かういふ私の推定を裏切るやうに見えるのは、私生兒の出産率が田舍よりも都會に多いことである。國勢院の調査に依ると、大正八年度に於ける日本全國の私生兒出産率は八分二厘であるに拘らず、大都市を有する東京府は八分九厘大阪府は一割六分三厘、京都府は一割一分六厘、兵庫縣は一割一厘、愛知縣は九分であつて何れも全體よりは多い。(市郡だけの統計ではもつと多いに相違ないが、今其數字を得難い。)唯神奈川縣の六分四厘が其例外である。一昨年米國勞働省少年局から發表せられた『兒童保護問題としての私生兒』と題する報告書によつて、歐洲各國と其首都との私生兒出産率を比較すると左の通りである。

	(總出産數に對する私生兒の割合)		(同上)
英蘭及ウェールス	% 四・〇	倫敦	% 三・五
スコットランド	% 七・〇	グラスゴウ	% 七・〇
愛蘭	〃 二・六	ダブリン	〃 三・一
佛蘭西	〃 八・九	巴里	〃 二五・五

普魯西	〃八・五	伯林	〃一八・一
ザクセン	〃一四・一	ライプチヒ	〃一九・二
バイエルン	〃一二・二	ミュンヘン	〃二七・八
墺太利	〃一二・三	ウヰーン	〃三〇・一
洪牙利	〃九・四	ブダペスト	〃二六・三
伊太利	〃五・一	羅馬	〃一六・五
丁抹	〃一一・〇	コーペンハーゲン	〃二五・五
瑞典	〃一三・三	ストツクホルム	〃三三・五
諾威	〃六・八	クリスチヤニア	〃一三・六
和蘭	〃二・一	アムステルダム	〃四・四

（備考）右は總て一九〇五年より一九〇九年に至る平均數である。

右の統計に據ると一倫敦を除くの外は大都市に於ける私生兒出産率が、全國のそれに比して頗る多いことが分る。しかも賣淫婦が私生兒を産む場合は極めて稀であるから、右の數字は都會に於て行はるゝ私通が田舍よりも遙に多い結果であると推斷できないこともないやうに見える。

併しながら都會と農村とに於ける靑年男女の性的生活の實狀に通ずる者に取つては、都會の方が農村よりも、人口に對する割合若くは靑年男女數に對する割合に於て、私通が確に少なければならない筈と思はれる。これは西洋に於ても同樣であるらしい。例へば獨逸のヴォールラーベ氏は其著『性的不道德の害毒及危險』の中で、ザクセンに於ける某々

村落に於ては十六歳以上の處女殆どなしと云ひ、一般獨逸農民の間には童貞なる觀念の全く缺けてゐることを斷定してゐる。又瑞典のヴエランデル氏がストックホルムに於ける四百五十二人の娼婦に就て調査したる所に依ると、二百九十九人即ち總數の三分の二はまだ田舍の自宅に居つた間に其純潔を失つた者であつた。

惟ふに私通の形式は之を二種類に別つことができる。一は繼續的であり、他は偶發的である。しかも妊娠の機會は繼續的の場合に多く、偶發的の場合に少い。農村及小都會に於ては、家庭に在る未婚者の男女が假令人目を忍んで私通することがあつたとしても、彼等が或期間同棲するといふやうなことは、四圍の關係上不可能である場合が多い。然るに大都會に於ては元來家庭を有たない年少血氣の男女が非常に多いのみならず、下層階級に於ては素行上何人の監督をも受けず、何人の注意にも煩はされない自由な生活を營むことのできる種類の人間が少くないのであるから、最初偶發的であつた私通も、やがて繼續的となり、いつしか同棲して所謂內緣關係を結ぶに至る場合が、農村及小都會よりも遙に多いことは爭はれない事實である。しかのみならず田舍に於ては私通の結果萬一妊娠するやうなことがあれば、双方の親族緣者が心配して、正式の結婚に落着するやうな例が屢々あるけれども、都會に於ては右の如き心配をしてくれる人もない代りに、內緣關係に對して侮蔑を受けなければならぬやうな虞れもないがために、自ら進んで法律上の手續を行はない限りは、私通はいつまでも私通として繼續される場合が多い。かういふ事情の相違が都會の私生兒出產率を多からしめる所以であつて、必ずしも之によつて田舍に私通者が少いといふ證據にはなり難いと思ふ。

五　賣淫の需要

基督教道德が結婚以外の性的交渉を罪惡視すること極めて峻嚴なるに拘らず、歐洲に於ける賣淫の需要は近代社會生

活の變遷に伴れて、次第に增加しつゝあることは爭はれない事實と認められる。『歐洲に於ける賣淫』の著者フレクスナー氏が種々なる資料から調査した所に依ると、獨逸に於ける中學校（ギムナジウム）の最高級の學生の二割は既に其童貞を失つてゐる。又同國の大學生の花柳病患者中の六割一分は、未だ大學に入學しない前に此病に冒されたものである。墺太利のフリンゲル教授がウエーンに於ける約一萬人の花柳病患者に就て取調べた所に依ると、患者の六割七分は二十五歲未滿で罹病したことが分つた。瑞典のヴエランデル氏は同國の男子五百八十二人中四百六十四人は滿十八歲に達する前に其純潔を失つたことを確めた。又同國のプラスチユコー氏は「都鄙を問はず勞働階級の間に在りては禁慾は絕無に近く、上層階級に於ても稀である」と說いてゐる。ナイセル教授が九十名の醫師に對し質問した結果に依ると、結婚前に性的交涉の經驗を有たなかつたものは唯一名に過ぎなかつた。しかも其内三割三分は中學校在學中に既に之を知つたものであつた。又或醫師の斷定した所に依ると、獨逸の男子の大部分は淋病に罹り、五人に一人は黴毒に罹つた經驗を有つて居ると。

かくの如き男子の一般的性慾無節制の原因としては、先づ第一に男子の性的生活に關する道德觀念の影響を擧げなければならぬ。歐洲中世に於ては、宗教上の會議に列席する教會の代表者を接待するために、密に一群の娼婦を會議地に差遣すやうな風習すらあつた。宗教家の仲間に於て尙且さうであつたとするならば、其時代の一般の俗人が娼家に出入することを恥としなかつたことは怪むに足らない。日本に於ても德川時代に於ては、武士町人が公然遊廓に踏入つたからといつて、餘りに其者の名譽を傷ける原因にはならなかつた。其後社會道德の變遷に伴れて、何人も公然賣淫婦に接近することを避けるやうにはなつて來たけれども、それでも男子相互の間に於ては、性慾の發動は拒むことのできないものなるがゆゑに、其對象を賣淫婦に求めたからと言つて、決してそれが其人の名譽を傷けるものとは考へず、從つて其ために友人から指彈されるやうな氣づかひは先づ絕對にないのである。現にストツクホルムに於ては一度花柳病に罹つ

た者でなければ入會を許さない陸軍將校の倶樂部があるといふことである。日本に於ても下層社會に在りては、初めて花柳病に罹つた時「これでわしも男の仲間入が出來た」と唱へる風習が今尚多少殘つてゐる。

右の如く男子相互の間に於ては、賣淫婦に接觸することが社會上の名譽毀損の原因にならないのみならず、男子間の特種道德として、友人の妻は勿論、母、姉妹其他の親族知己たる女子に對しては、決して友人の性的生活の秘密を漏洩しないといふ習慣が養成されてゐることも、見遁すべからざる事實である。從つて男子は或程度を超えて放蕩ならざる限りは、社會上に於てのみならず、家庭內に於ても其名譽を傷けずに濟む場合が多いのである。しかもかくの如き一樣の名譽保護特典は、性的交渉の相手方が職業的な婦人である場合にのみ之に浴することができるのであつて、若し相手が處女、即ち私通である場合には友人の同情は比較的乏しく、家庭內に機密を保つことも亦困難であると思はなければならぬ。上述の如き事情が現代社會生活の特質と相俟つて、賣淫の需要を增大ならしめつゝあるのである。

次に吾等の考察しなければならぬことは、女子の貞操觀念と賣淫需要との關係である。現代の女子に貞操を要請する所の道德は、大部分男子の利己的（エゴイスチツク）な動機から出たものであることは疑はれない。（『婦人公論』二月號所載拙論『性的民主主義と其限界』參照）男子は自ら種々なる方法を通じて其童貞を尊重せず、又貞操をも維持しないに拘らず、女子に對してのみ其純潔を要求することは、確に利己的であつて且論理上の矛盾である。言ふまでもなく之は多年女子を劣等動物と認め、之を抑壓して男子の便宜に服せしめることが、社會生活の上に必要であるとせられた過去の因襲の賜物である。併しながら女子貞操論の動機が何であるにせよ、女子が其純潔を失ふことが、直に彼等の生涯の不幸を誘致せしめるやうな――少くともさういふ懸念が存在するやうな現今の社會道德が存續する限りは、女子は自衞上其純潔を擁護せざるを得ないのである。何となれば右の如き社會道德の男女間に對する不公平を矯正するの方法として、差當り女子の

取らなければならない手段は、自ら男子の貞操蔑視の特權に均霑することではなくして、男子をして女子の貞操尊重の思想に均霑せしめることとであるからである。

理論はともあれ、女子教育の發達に伴れて、未婚女子の純潔擁護の觀念が次第に強まりつゝあることは明白な事實である。處女が私通するやうなことは、教育程度の低い農民か無産勞働者の仲間でなければ、今日滅多にあり得ない。從つて學生や、軍人や、獨身の俸給生活者などが性慾を放散する手段は之を賣淫に求めるより外はない。かくの如き事情が亦賣淫の需要を喚起せしめる一つの原因である。

併しながら賣淫に對する需要の原因としては、前述の如き男子側に固有の事情の外に、供給者側からの誘引手段も亦有力なる一因子であることを見逃してはならない。

本來賣淫は私通と異り、營利の目的物であつて、金錢的價値を有する。從つて其需要と供給とが大體に於て經濟學的原則によつて支配される點に於ては、普通の商品と同一である。併しながら賣淫は其給付が本人の人格と切離しては絕對に之を行ふことができないといふ點に於て、普通の商品とは其性質を異にし、寧ろ勞務の給付を目的とする雇傭契約と其性質を同じくするものである。從つて賣淫を商品と同一視することの不合理であることは、勞働を商品と同一視することの不合理であるのと同樣であると言へる。要するに賣淫婦は曩に述べた通り、其法律上の意義に於ては按摩と等しく雇傭契約に支配される一個の筋肉勞働者と看做すべきものであるけれども、唯それが普通の勞働の如く生産的でなく且其行爲が法律的にも道德的にも別の觀念に支配されなければならぬ點に於て、他の雇傭契約と區別すべきものである。

現代の産業經營法の一特色として擧ぐべきは商品に對する需要が其供給を誘發するよりも、供給が其需要を誘發する

場合が次第に多くなりつゝあることである。苟くも人の利用厚生に役立ち、趣味嗜好を滿足せしめるものである限りは、より心地良きもの、より美しきもの、より便利なるものを得たいといふ人の慾望には限りがない。而して又其慾望は創造し、育成することのできるものである。從つて如何なる商品も其形狀に、品質に、色彩に、用法に、何等か斬新にして人の慾望を刺戟するが如き特長あるものを作製して、之を市場に提供し、公衆の需要を挑發するのが今日の商工業者の最も意を致しつゝある所である。自ら起る需要を待つて、然るに後に供給の途を講ずるが如きは家內工業時代の遺風であつて、今日の活潑なる工場工業時代の狀態ではない。即ち廣告の巧拙があらゆる營業の成敗に與つて力ある所以である。

賣淫も營利の目的として行はれる以上は、供給者としては單に需要の到來を待たないで、進んで需要を挑發するの必要があることは、他の營業と全く同一であるべき筈である。殊に人が最も抵抗し難い刹那的の衝動によつて支配され易いやうな慾望に對しては、廣告が最も有効な需要挑發の手段であることは勿論である。而して又其供給が飲食の如く消費い形で行はれずして、勞務（サービス）の形で行はれる以上、なるべく供給量を増加しないで、供給力のみを增加することによつて、需要の增加に應酬することが、供給者の立場からのは有利であるに相違ない。從つて供給者一人の奉仕する需要者の數が增加すればする程、經濟的には有利であるけれども、その代り供給者の感ずる勞苦は之に比例して增加するは勿論である。若し供給者自らが營業主である場合には、勞苦と收益とは同一人に歸して、自然に報償される道理であるけれども、營業主は別に存して供給者の勞苦が其所得に比例しないやうな場合には、供給者が營業主によつてエキスプロイトされる點に於て、他の傭主及被傭者と同一の關係の下に置かれる。

今日歐米に於て普通に行はれてゐる賣淫の廣告術は凡そ四種ある。第一はマツサージ療法、看護婦、舞踏教授等の名

告によつて、需顧客には一讀して領解できるやうな廣告を新聞雜誌に掲げるもの。第二には客引を繁華な街路に立たせて、行人中から需要者を物色勸誘せしめ若くはガイド、自働車の運動手、馬車の馭者の類に心づけして乘客を案内せしめるもの。第三には賣淫婦自ら街上をさまよひ又は演藝場、カフエーの類に出入して、直接顧客を漁るもの。第四には賣淫婦自ら劇場、キヤバレー等の踊子歌手となり又は自ら料理店、酒場等の給仕人として勤務する傍ら、顧客を誘引するもの之である。殊に第三の場合は最も直接、簡單且有効な廣告術であつて、又最も一般に行はれつゝあるものである。

六 賣淫の供給

吾等が戰後の歐米の諸都市を歴遊して、最も驚かされることの一つは街上の賣淫婦、所謂Street Walkerの非常に多いことである。しかも其多寡が戰爭によつて其國が疲弊した程度に比例してゐる點に於て、一層感慨を深うするのである。米國に於ては紐育に於てもシカゴに於ても殆ど之を見かけなかつた。歐洲に於ては各國の首都に於ける夜の盛り場には到る處彼等の群を見ないことはないが、それでも巴里は倫敦より多く、伯林は更に巴里よりも多い。

聽く所に依ると、伯林のフリードリヒ街（ストラーセ）に徘徊する賣淫婦は之を五種類に別つことができる。第一種は警察署の免許を得、規定の檢徽をも受くる者で、取締規則に違反しさへしなければ、公然營業することを許されてゐる者、つまり公娼である。第二種は公娼としての手續はいろ〳〵の都合で未だ濟まして居らぬけれども、實質に於ては公娼と選む所のないもので、言はゞ準公娼である。第三種は常習的の賣淫婦たるまでには至つてゐないけれども、家庭でも、戸外でも無節制な生活をしてゐる不良少女に近い者が、一時の慰み半分、利欲半分に出かけて來るのである。第四種は女工又は下級

の事務員、商店賣子、タイピスト、交換手の類で、薄給のため自分の所得だけでは生活ができないため、一名乃至數名の情夫を拵へ、多少づゝ貢いで貰つてゐる連中が、其情夫に缺員を生じた場合に補充員を見つけるために出かけて來るのである。第五種は以前は相當の身分あり財産ある中産階級の家庭に養育せられた處女でありながら、社會の變亂、家庭の不幸其他いろ／＼な事情で飢餓に迫られ、餘儀なく之によつて一時の急を救はふとする憐むべき境遇の者である。

右の如き種別は獨り伯林のフリードリヒ街ばかりでなく、巴里のオペラ附近にも、倫敦のピカディリー曲馬場(サーカス)にも同樣に當てはまることは勿論であるけれども、殊に伯林に於ては第三種及第四種が巴里、倫敦より遙に多く、第五種に至つては倫敦には殆ど無く、巴里にも極く僅で、獨り伯林に於て之を見ると言ひ得るやうに思はれる。

何故私が右のやうな判斷をするかと言ふに、凡そ何處の國でも娼婦の扮裝には一種共通の型があつて、外國人の眼にも直にそれとわかるのが常である。しかもそれが甚だしく誇張されてゐる場合には、觀る者に性的の慾望を起させるよりは寧ろ嫌惡或は反感を催さしめ、時としては一種の哀愁を感ぜしめることとすらある。併しながら彼等としては未知の行人が一見己を娼婦だと覺つてくれるやうな扮裝をしてゐることが、營業上必要であるに相違ないから、公然賣淫婦たる看板を揭げることが、何等の羞恥も苦痛をも伴はない程に慣熟した後でなければ、かういふ扮裝はなし得ない筈である。

私の實見した所に依ると、右の如き華美な娼婦型の扮裝を凝らした賣淫婦は巴里に最も多く、倫敦に於ては遙に少く伯林に於ては寧ろ僅少であると言ひ得るのである。然るに之と反對に一見しては普通の堅氣の女子と毫も異る所なき容姿を有つた賣淫婦は、伯林に於て最も多く、倫敦之に次ぎ、巴里に於ては一番少いやうに感ぜられる。唯歐洲に於ては各國とも、良家の妻及娘は夜間決して單獨で外出しない風習があるがために夜遲く、殊に周知の賣淫市場ともいふべ

き街路を徘徊したり、或は附近のカフエーに出入したりする以上は、總て之を賣淫婦と認めて殆ど謬はないのである。

伯林に於ては第一種及第二種の娼婦の扮裝も巴里、倫敦に比べては遙に質素であるが、殊に第三種以下に屬する者に至つては單に其服裝が家庭に於ける日常服と同一の物であらうと思はるゝばかりでなく、顔に全く粉黛を施さない素面のまゝの者さへ少くないやうに見受けられる。之は或は經濟上已むを得ない結果であるかも知れないが、併し一方から言ふと、倫敦、巴里、ブラッセル等に濃厚艶冶な所謂娼婦型の扮裝に慣れた眼を以てすると、却て伯林の野暮な堅氣風な容姿が一層强い性的誘引の動機とならぬとも限らない。果してさうだとするならば、これも亦獨逸人に特有な科學的研究から出た商略の一つであるのかも知れない。

唯憐むべきは戰後の獨逸に特有とも言ふべき第五種の賣淫婦である。彼等は元來堅氣の家庭に生れ、相當の敎養ある父母に育てられ、自らも世に耻づかしからぬ淑女たらんことを期してゐたに拘らず、不慮の生活難に陷つて、涙ながらにこわ／＼出かけて來るのである。從つて彼等は第一種及第二種の者の如く、自ら行人の袖を捕へて一宵の知遇を强請するやうな勇氣は固よりない。彼等は街上に佇んで窓飾りの商品を眺めたり、カフエーの一隅に座つて默想に耽りなどしながら、男子の接近し來るのを唯待つのである。彼等は公娼等が敢てするやうに、流眄や嬌笑によつて無言の誘引を試みるやうなことはなし得ない。又男子から言ひ寄られても、半ば羞耻から半ば恐怖から、卽座に之を應諾することもなし得ない。そして竟に「必要」が、「生活の脅威」が、而して又「性の好奇心」が己を征服するまでは何事をもなし得ないのである。

併しながら此種の賣淫婦は全體から見れば極めて少數であつて、彼等の大部分が都會の下層階級から輩出するものであることは、各國を通じて爭はれない事實とせられる。獨逸ミュンヘン市に於ては賣淫婦の父の職業に就て調査した所

に依ると、公娼百七十三人中、九十五人は職人、四十六人は勞働者、十七人は農夫であり、又私娼二千五百七十四人中千百四十七人は職人、九百四十四人は勞働者、二百四十八人は農夫、百四十人は下級月給取であつた。又一八八五年から一九〇四年に至る瑞典ストックホルムの公娼二千百三人の父の職業を分類すると、百七十九人は小地主、四十二人は商人、十四人は官吏で、其他の千八百六十八人は勞働者、農夫、漁夫等であつた。

次に賣淫婦自身が曾て從事した職業に就て見ても同じ事が知れる。例へば瑞西のゼネヴに於て一九〇七年から一九一一年の間に千三百二十七人の賣淫婦に就て調べた所に依ると、五百三人は女中、二百三十六人は裁縫又は洗濯職工、百二十人は工場職工であつた。又一九一一年に於ける獨逸ミユンヘンの公娼百七十三人中、五十二人は酒場の女中、二十九人は家庭の下婢、二十九人は工場職工、十五人は裁縫職工であり、私娼二千五百七十四人中、七百二十一人は下婢、六百八人は酒場給仕女、二百五十五人は工場職工、六十人は踊子又は歌手であつた。一九〇九年から一九一〇年に於ける伯林の公娼千二百人の中、四百三十一人は下婢、四百四十五人は工場職工、四百七十九人は裁縫又は洗濯職工であつた。倫敦感化院に收容せられた賣淫婦四百二十七人中、二百七十五人は下婢、二十五人は洗濯職工、二十人は工場職工、十一人は裁縫職工、六人は酒場給仕女であつた。(上記の數字はフレクスナーの『歐洲に於ける賣淫』に依る)。

或研究者が米國紐育市の賣淫婦千百六人に對し前職業の種類を質問した結果に依ると、デパートメント・ストア百十八人、舞臺藝人八十八人、工場七十二人、速記三十一人、商店二十八人、家庭下婢二十七人、事務所二十五人、給仕女十八人、裁縫十七人、帽子十三人、看護婦十二人、電話交換手九人、旅館の下婢九人、學校教員八人、書籍行商五人、美術四人、モデル二人、飜譯一人、合計四百八十七人で、其他の六百餘名は一定の職業を有たなかつた旨を答へた。(ニーランドの『紐育市に於ける營業的賣淫』に依る)。

凡そ是等の數字は賣淫婦の大多數が社會のどん底階級に生れ且育つた者であることを證據だてゝゐる。然らば彼等は何故に賣淫婦にならなければならなかつたか。吾等は更に其處に遡ることを要する。

七　賣淫婦供給者としての無産階級

賣淫婦の大部分が無産階級から出るといふことが明白な事實である以上は、貧乏といふことが其一般的な且基礎的な原因であることは否まれない。併しながら貧乏のみが賣淫の原因でないことは、同じ境遇に在る無産階級の婦女子の一小部分のみが賣淫婦となることの事實から直に推斷されることとである。言ひかへれば賣淫婦たるには貧乏といふことの外に特種の個人的及社會的條件を必要とするのである。

普通の婦女子が賣淫婦になるまでの經路は大體三つに別つことが出來る。第一は個性、第二は感化、第三は境遇之である。

一

第一の者は生れながらに娼婦型な個性を有し、特に境遇の善導なき限りは、自然に賣淫婦たるべき宿命を有する種類の女である。所謂娼婦型とは不德義、無節制、輕佻、多情にして華美を好み、勤勞を厭ひ、殊に異性に對して放恣なる接觸を欲求する性格をいふのである。斯くの如き性格は賣淫の原因ではなくして、寧ろ其結果であるといふ見解を取つてゐる學者(例へば『賣淫』の著者ブロッホの如き)もあるけれども、又賣淫婦の多數が先天的に不健全な精神の持主であることを立證する報告も少くない。例へば一九〇九年倫敦に於て二百十九人の賣淫婦の精神狀態に就き調査した所によると、百十八人は少しく常調を缺いで居り、二十三人は甚しく常調を缺いで居り、八人は確に狂人で、頭腦健全と認むべき者に全體の三分の一に過ぎなかつた。又ボーンヘーフェル氏が獨逸ブレスラウの監獄に在る百九十人の賣淫婦に就

て研究した所によると、其約三分の二はヒステリー、癲癇、低能等の精神障害を有する血統に屬してゐた。又『生來の賣淫婦ありや』の著者ステルツネル女史の記す所によると、伯林に於ける十二歳以上二十一歳以下の賣淫婦百五十五人中、四十三人は精神異狀者、二十三人は低能者であつた。斯の如き不健全なる精神狀態を有する者は總て娼婦型であるとは速斷できないけれども、とにかく先天的に娼婦に適する個性を有する女の存在することだけは爭はれない事實と認められる。

第二の者は幼少の時代から放恣なる性的生活の感化を受けたために、全く童貞又は貞操なるものを理解せずして成長する後天的多淫性の女であつて、無產階級の仲間、殊に貧民窟などには無數にある例と思はれる。『貧窮の防止』の著者シドニー・ウエッブ氏夫妻は、歐洲の大都市に於ける下層社會の生活を描いてかう言つてゐる。「晝夜の別なく、男女、老弱、子女親疎の雜居生活は、啻に彼等の健康を傷けるのみならず、普通の人類が其家庭の純潔を保つがために必要とする特種の道德をして全く實行し得べからざるものたらしめてゐる。貧民窟の住民に伍する人たちが、何等の光明をも認め難い下層社會の有樣を、家庭の中にまで持込むことは避くべからざることである。かゝる社會の少年少女は發情期の未だ到らぬずつと前に其無邪氣さを失つてしまふ。肉體の純潔といふ事は全く知られない。そして『父親の子をはらむ』ことが滑稽なまちがひとして一笑に附される。」從つて彼等の間には私生兒や孤兒が非常に多い。殆ど何人の監視も保護も受けずに野性のまゝに成長する。彼等の多くは發情期以前に其童貞を破られ、發情期以後は自ら進んで性的の放縱に墮ちて行く。而して彼等が自分の生活費のために何等かの勤勞に服せなければならぬ時期が到來した時に、性的放縱其自身が生活の途であり得る一職業があるとするならば、それが此種の少女に強い誘惑でなくて何であらう。ジョージ・メレディスは「唯その折がなかつたといふ偶然な幸福のために、大多數の處女は危機一髮の間から、其純潔を濟はれる。」

と言つたが、かくの如き偶然は無産階級の間では、極く少數の處女をも滅多に見舞ふことはないのである。

近年歐洲の大都市に見る一つの傾向は未成年の賣淫婦が次第に増加して行くことである。殊に私娼に於て其傾向が一層著しい。而して彼等の多數が私生兒、孤兒若くは家庭に保護者を有たぬ少女に多いことも一般に認められてゐる所である。家庭の保護を有たぬ少女は自然に享樂を戸外に求める。而して最初は自分の享樂のための誘惑が、やがて利慾のための誘惑に移つて、賣淫の中央大市場たる首都へ出向いて行く。大膽なる者は長驅して他國の首都にも現はれる。巴里に於ける賣淫婦の三分の二は田舍から供給せられ、倫敦の賣淫婦の三分の一はポーランド人猶太人其他の外國種だと傳へられる。

無産階級間に於ける性的道徳の墮落が、必然的に其少女を驅つて賣淫に趣かしめると論斷することは少しく早計であるけれども、少くも家庭の保護監督が缺けてゐるといふことと、貞操尊重の觀念が乏しいといふこととの二つが、この階級から賣淫婦の大部分が供給せられる原因であることは否まれないと思ふ。

次に第三の者は生活難其他經濟上の壓迫のために、餘儀なく醜業を營まなければならないやうな境遇に立つた女子である。此種類の賣淫婦は社會政策的見地からは屢々重要視されたけれども、諸家の研究は眞に生活難のために、他に生きる途なくして醜業に陷るもの丶比較的僅少であることを立證する點に於て一致してゐる。救世軍の現總督たるブース大將の夫人が曾て百五十人の賣淫婦に就て調査した所に依ると、眞に飢餓のため餘儀なくされたものは僅に三人に過ぎなかつた。又ビンクス氏が伯林の千五百五十人の賣淫婦に就て調査した所に依ると、千三百八十九人までは自給し得るだけの生活費を得てゐた者であつた。ニーランドの「紐育市に於ける營業的賣淫」に依ると、其研究の對象となつた千百六名の賣淫婦中、自ら生活難を以て其動機と稱する　のは百三十九人、即ち總數の一割二分に過ぎなかつた。

日本の例を擧げると、曾て某氏が大阪府の私娼に就て調査したる結果は次の如くであつた。(杉田直樹氏「賣笑婦の研究」に據る)

一家の困窮を救濟するため	％	九・一六
一家の不和のため	〃	一・〇九
情夫又は他人の陷擠のため墮落	〃	一七・六二
素行不良のため求めて私娼となりたるもの	〃	七二・一一

是等の諸報告は職業的賣淫婦の大多數が生活難の壓迫に原因するものでなくして、寧ろ前述の第一及第二の部類に屬するか、さなくば寧ろ奢侈慾のために來るもの(西洋に於ては贅澤な生活を營む社交的婦人にして密に賣淫行爲を行ふ例が往々あるさうである。)であることが分る。唯吾等の注意しなければならぬことは、失業した女子勞働者が絶對的に賣淫――婦而して彼等の一部分は疑ひもなく常習的に進む――に轉職する可能性の問題である。これは統計的に調査することは困難であるが、かゝる事實の存在は何れの國に於ても既に多少認められてゐる。

惟ふに生活難の急迫が直接の動機である場合は比較的少いとしても、賣淫婦の大多數が無產階級から供給されるといふ事實が明である以上は、經濟生活の不安定といふことが、一般的且基礎的の要件であることは疑はれない。何となれば賣淫の供給の主たる原因たる家庭生活の放漫も、理智の缺乏も、道德觀念の頹廢も大部分は貧乏から胚胎する社會的害毒に外ならぬからである

併しながら賣淫問題の重要さは其供給の方面にのみ在るのではなくして、需要の方面も亦同一である。而して其需要は過去に於ける社會進化の過程上必然的に存在すべかりしものであり、又現代社會生活の特質上必然的に増加すべきも

のであるとするならば、所謂賣淫問題は社會組織の根本的改造なくしては完全に解決することのできないものであることを信じないわけには行かない。

八　次の二問題

私は本論に於てかういふことを究明しやうと試みた。賣淫なるものは過去に於ける社會進化の過程に於て、各時代に於ける社會生活の要求に應じて多少其範圍と態樣とに制限は受けながらも、常に社會的存在の必然性を有して居つたものである。しかも其必然性は十字軍以來歐洲商業都市の勃興に伴れて次第に高張せられ、更に産業革命以來激變したる社會生活の特質によつて益々煽揚せられ、今や賣淫に對する需要と供給とは抗拒すべからざる勢を以て增進しつゝある。而して其需要は主として男子の晩婚と性的道德に對する無節制から來るものであり、其供給は無産階級に於ける女子の精神的不健全肉體的墮落から來るものである。而して是等の諸現象は畢竟現社會組織の根柢に横たはる缺陷に胚胎するものと認むべきである。

勿論私の擧げた材料は不十分であり、又私の叙述は不完全ではあるけれども、假に右の如き事實を究明しやうとした私の目的が其到達點に於て誤つてゐないものとするならば、必然次の二つの問題が提起される。其第一は現在の社會制度の下に於て賣淫の根絶といふことが可能であらうか、又それが望ましいことであらうかといふこと、其第二は改造されたる將來の社會に於ては、賣淫の存在が可能であらうか、又は其存在が認容さるべきかといふことである。第一の問題を解決するがためには「賣淫の社會政策的考察」が必要であり、第二の問題を解決するがためには「社會主義と性的生活の要求」に關する研究が必要である。能ふべくんば私は他日それを試みるであらう。

戰後獨逸農業界の改造と內國植民

法學博士 農學博士 高岡熊雄

一

過般の世界戰爭が有形的に又無形的に戰敗國たりし獨逸に對して多大の打擊を被らしめたるとは今更事新しく喋々するまでもない。ボン大學の經濟學教授ジーフェル博士が頃日余に寄せられたる私信に於て獨逸は此の戰爭の爲めに一世紀丈け後返りせりと述べてありしは、一言にして能く斯國の窮狀を明示するものである。獨逸は今や恰も三十年戰爭、七年戰爭又は奈翁戰爭の後に於けるが如き悲慘なる窮狀に陷つて居る。一度は世界最强國の一と數へられたる斯國が如何にして破弊せられたる經濟的實力を恢復すべきやは現下の重大問題である。是れ實に獨り獨逸國のみの問題にあらずして世界列國の問題である。隣邦佛蘭西の如きは獨逸の復讐を恐れて出來得る丈け獨逸を困憊の域に陷れて再び起つこと能はざらしめんと努めつゝあるも、若し中歐列國にして經濟上破弊せんか其の及ぼす影響は少なからず、先づ差し當り英米諸國の如きは戰後經濟界の恢復に由々敷影響を被むるを以て寧ろ獨逸に同情を寄せんとする傾向があつて動ともすれば英佛兩國間に於て對獨政策上意思の疏通を缺ぐことなきにしもあらずである。然しながら千三百二十億金貨麻克と云ふ巨額なる賠償金を負へる獨逸の經濟的實力の恢復は決して容易なることでない。殊に鐵と石炭の主要産地を敵國に割讓し、海運業は殆んど全滅に歸したる今日に於ては戰前の如く商工業の再び發達せしむることは短歲月に能する所でない。只幸にして戰爭は國外に於て行はれ獨逸の農村へ直接之が戰禍を被らざりし爲め、假とひ戰爭中には勞力の缺乏と施肥の不充分なりしとに依りて土地の生産力は大に減退したるも、之が恢復に依りて戰爭の爲めに被れる傷痍を醫するは外國に何等の關係なく自國内に於て之を實行し得るを以て比較的容易に行はるゝ望が多い。是れ戰後斯國に於て大に農業界の改造發展の爲めに努力すべしと論議するもの多き所以である。而して此等論者の

唱道する所を見るに人によりて其說を異にすと雖も重きを內國植民に置けるもの多し。本年一月發刊の中央公論に於て余が紹介し置きたる博士パツクハウス敎授の戰後農業革新論の如きも其の論旨の中心は即ち內國植民である。余は今更玆に之を詳しく繰返すの愚をなさゞるも、敎授が獨逸國內に於て百町步以上の大農の占むる耕地約一千萬町步の內其の一割即ち百萬町步を分割して、小農四萬戶、中農七千戶及び殘餘農場一千戶計四萬八千戶を新たに移植するときは、之と相伴つて約五十萬人の人口を此等農場に收容し得可く、又荒蕪地殊に濕地泥炭地の面積は四百萬町步に上るも、其の內耕作し易き土地二百萬町步を撰び先づ之を分割して開發するときは、大農場の場合と等しく五萬の經營と五十萬人の農業者及び之と密接なる關係を有するものを移住土着せしむることを得て、約一百萬人に安全なる職業を授けて以て農村の發展を計ることが出來る。而かも斯る大規模の事業を今後僅かに十ケ年を期して成効し得る如く大に努力すべきであると論じて居る。

是は只一例を示したるに過ぎざるも斯くの如く戰後農業界の改造政策として內國植民問題に對し識者が特に注意を拂ふに至りたるは何故なるや。是には自から種々なる理由がある。即ち

一、過般の大戰爭に四ケ年有半の長きに亙り世界の强國が國力を擧げて之に從事し、精銳なる兵器等も新たに發明せられ、激烈なる戰爭行はれしかば其の慘禍は實に古今未曾有の有樣であつた。或は戰場に倒れ或は負傷して勞働に堪へざるもの頗る多く、獨逸にては死亡者の數のみにても無慮二百萬人に上れりと云ふ。されば之が爲めに獨逸の田園に於ける人口殊に壯丁の數は著しく減少し、戰時中は勿論の事戰後に於ても大に勞力の缺乏を感ずるに至り、之が供給は斯國農業界の恢復を計る上に於て一大急務となれること。

一、然しながら農業勞働者の缺乏は敢て過般の戰爭に依り初めて起りたる特殊の現象ではない。戰爭前に於ても亦然りであつた。十九世紀の末葉頃に於ては獨逸國內に於て職を求むることが出來ず、海外に移住するもの頗る多く、遂には一般社會の注目を喚起し之が防止策さへ講じられた有樣であつた。然るに其の後斯國に於ける工業界の目覺しき發展は盛んに工業勞働者を吸收した。爲めに田園に於ける農業勞働者は鋤犂を捨てゝ工場に集り來り、獨り海外移住者の減少したるのみならず農業勞働者の缺乏を來し、遂には國外就中露西亞、波蘭土、ガリチア、ピユーメン等よりして多數の出稼勞働者を招徠するの已むなきに至つた。而して年々此等の諸國より入國くるものゝ數は約一百萬人の多きに上り、其の內六七十萬人は實に獨逸農業者の工業

界に走れるもの、補充者であつた。戰後の獨逸農業をして戰前に於けるが如き程度に集約に經營せしめんとするには、戰前よりも更に一層多くの外國勞働者を招徠する必要がある。然るに戰後歐洲の事情は一變し國外よりして斯くの如く多數の勞働者を招徠することは殆んど不可能となつた。又よしや之を招徠しるとなすも之が爲めに多額の賃銀を國外に持ち去らるゝことは到底獨逸の現狀の許さゞる所であつて如何なる方法を講じても是非共之を國內よりの供給に仰がねばならぬこと。

一、平和克復して後戰場より歸休せし軍人中には幸にして戰前に從事せし職業に再び身を委することを得たるものあるも、就くに職無きものも亦頗る多數に上つた。戰後は商工業の沈衰せし爲め失業者を生じこそすれ、新たに職を求むるものは困難なる事情の下に在つた。然し彼等は國家の爲めに貴重なる生命を賭して戰場に赴きしものなれば、國家は彼等を放棄して顧みずと云ふが如きことなく、如何なる手段方法を講じても適當なる職業を與ふるの責任あり、且つ之が必要となすこと。

一、曩にも一言したる如く戰後に於ける獨逸の經濟的實力を恢復するが爲めには農業界の革新を計る必要がある。加ふるに戰爭中に國民に要する食量は自國內に於て供給すべき必要あることを極めて痛切に感じたから如何なる手段を廻らしても農業的生產の增殖を計る必要切なるものあること。

等が主なる原因である。

二

共和政府は此等の事情を能く查べ且つ輿論のある所を深く洞察して戰後の農業界を改造するが爲めには、內國植民の必要缺くとの出來ざる所以を感じたりと見へ、新政府の設立するや間もなく千九百十九年一月には取り敢へず「農業移住土着地獲得に關する法令」なるものを發布して以て此の事業を獎勵した。而して同年八月に至り正式に國民議會の協贊を經て「帝國移住土着法」なるものを制定發布した。此の法律は曩きに發布した法令と大同小異にして三十二ケ條より成り立つて居る。

此の新法律を見るに其の第一條に於て各聯邦は未だ公益的內國植民機關の設けなき地方に之を設立せしむべしと規定しあつて、新共和國が戰後に於ける內國植民事業を遂行する爲め如何なる機關の力に依らんとするかを明かに示して居る。內國植民にも其の種類多きも新共和國は主として公益的內國植民機關の力に依り所謂公益的內國植民を行はんとするものである。然しながら公益的內國植民事業は決して現政府の創案に成るものでなく從來斯國に行はれつゝある一の制度である。されば戰後の

內國植民事業として新政府の依らんとする公益的內國植民の如何なるものなるや及び新政府の之に對する施設如何等を能く了解せんとするには、從來斯國に於て行はれつゝある內國植民事業の經過の大要に先づ一瞥を與ふる必要がある。極めて簡單に先づ之を陳述せん。

三

往時に於ける獨逸の內國植民事業は今之を論ぜず。近時に於ては嘗て此事業の爲めに多大の努力を拂ひたるフリードリッヒ大王の崩去後恰も一百年即ち千八百八十六年に發布せられたる「西普魯西及びポーゼン兩州に於ける獨逸民族移住土着奬勵法」たるものに依つて始まる。此法律に基き國家は此等二州に於て自から大農場を買ひ上げ、更に之を適當の大きさに分割讓與して獨逸民族たる中小農を扶植した。所謂國家的內國植民と稱するもの即ち是である。國家が斯る大事業を自から經營するに至りし所以のものは、嘗てスタイン及びハーデンベルヒの兩宰相が千八百〇七年より千八百五十年に至る間に實行したる有名なる農政改革が普魯西の農業發展の爲めに多大の効果を奏したるも時勢の變遷と共に又種々なる弊害をも併出した。例へば農業者に完全なる土地所有權を確實にし之が處理を自由ならしめたるも、爲政家の豫期に反し目前の利益等に眩惑せられて遂には却つて土地を失ひて他の兼併する所となり、農業界の中堅たるべき中小農の階級は漸次減少する傾向となつた。加ふるに國內に於ける工業界は顯著なる勢を以て發展をなしたる爲めに、農業勞働者は競ふて之に赴き農村に於ける勞力の缺乏を來し賃銀の騰貴を促がして農業生產費を多額に上らしめた。而して又之と同時に世界經濟の變遷に伴ひて價格の低廉なる農產物は外國よりして續々と自由に輸入し來りて、國內に於ける農產物の價格を大に低落せしめた。爲めに農業經營者就中大農者は收入の減少を來し支出の增加と相俟つて益農家の經濟をして困難ならしめ遂には破產をなすの止むなきに至りたるものすらあつた。農業界は一恐慌を以て襲はれ、十九世紀の六七十年代に於ける繁榮は只槿花一朝の夢と化し去つて田園を捨てゝ都市に走り或は遠く海外に移住するもの數知れぬ程多くなつた。是に於て乎大農の經濟上の困難を救濟すると共に中小農の再び增殖する必要切なるものがあつた。是れ即ち國家的內國植民の起りたる一の動機であつて、此の制度は農業界に對する一種の社會政策と見做すことが出來る。

此等經濟上の原因の外に尙他に一の有力なる原因があつた。元來國家的內國植民の行はれしことは、ポーランド王國の一

部なりしが十八世紀に於て普魯西に割譲せられしもので、多數のポーランド民族を有して居る。普魯西の對波蘭土政策を見るに最初は所謂同化主義に則り一視同仁で獨逸民族と全然同一の取扱をなして其の間何等の差別をなさず、之を獨逸化せんと努めたものである。然るに其の効果は少しも擧らず、却つて益反獨逸化する傾向ありしかば遂に此等の地方に多數の獨逸民族を移住土着せしめて波蘭土民族の勢力を打破せんと試みた。是れ即ち國家的內國植民事業の起りたる他の一原因であつて兩民族の競爭の結果であると稱すべきである。

此くの如き二大原因より生れ出たる此の大事業を遂行する爲め普魯西王國は最初一億麻克の國費を之に投じ、成る可く經濟的に之を利用し事業經營より生ずる收入は之を一般國庫の收入となさず悉く再び此の事業に投入し得る設定を設けた。然るに事實を遂行し始むるや豫想外に多額の經費を要したるを以て後には規定の經費を二億麻克に增加し、後之を三億五千萬麻克とし、遂には五億五千萬麻克に增加した。而して又國家が必要なる土地を買ひ上るには最初は一般土地市場に於て之を行ひたるも、獨逸の政策に反對して波蘭土人自からも組合等を設け獨逸人の所有する土地を買ひ取り之を分割して波蘭土民族の增殖を計る等國家の政策を遂行する上に支障少なからざりしかば、遂には此等二州に於て內國植民事業を行ふが爲めに必要なる場合には國家は土地を收用し得べしとの法律を設るに至つた。斯くして此の二州に於ては獨逸民族と波蘭土民族との競爭は頗る激甚に行はれつゝありしが、過般の世界戰爭の結果として波蘭土國は再興し西普魯西及びポーゼン兩州も獨逸の手を離れて再興國の版圖に復歸した。爲めに三十有餘年の長きに亘れる王國の努力も全然水泡に歸し、大規模に經營せし國家的內國植民も自から撥止の已むなきに至つた。嘗ては燃ゆるが如き愛國的精神を以て此等二州に移住土着した獨逸民族の中小農は今や主客顚倒して彼等が敵視する異民族の統治の下に立ねばならぬ運命に陷つたは實に同情に耐へない次第である。

四

國家的內國植民は今や既に滅びたるも、此種の植民の起れる動機の一として論じたる經濟的原因は獨り西普魯西及びポーゼン兩州に於ける特殊なる現象にあらずして、普魯西全國に亘りて之を認むることが出來た。されば普魯西王國は千八百九十年に王國議會の協贊を經て「地代農地法」なるものを制定し、個人或は團體にして自己の計算に因り一定の地代契約に依り所有地を分割讓與し得ることゝした。是れ即ち私人的內國植民と稱す

るもので國家的内國植民に後るゝこと四ケ年であつた。然し此の法律にては内國植民の如き困難なる事業を全然當事者の行爲に任し、國家は何等之に對して直接の補助をを與へざりしかば折角の法文も只空文に留まつた。政府も亦此の間の事情を察し且つ上下議院の建議もありし故千八百九十一年には「地代農地設置奬勵に關する法案」を議會に提出し之が協贊を經て一の法律となした。此の法律に依り個人或は團體が地代農地を設置する場合に、技術上に關しては土地取扱委員會又經濟上に付きては地代銀行の助力を仰ぎ得ることゝなしたるが爲め、大に此の事業を進捗せしめた。

五

然し大農業者が自から地代農地を設けんとするには假とひ上述せし如き種々なる機關の助力を仰ぎ得るとしても實際上の責任は皆な自から之を負はねばならぬ。爲めに兎角自から進んで**この事業を起すことを躊躇する傾向がある、而して他の方面に**於ては地代契約に依りて中小農地を獲得したしとの冀望を有するものも決して少なくない。玆に於て乎此間の事情を能く利用し大地積の土地を買ひ入れ之を小地積に區分して他に販賣し、買ひ價格と賣却價格との差に依つて利益を得んとするもの相集つて一の會社を組織し内國植民事業を經營せんとするものが輩出した。此れが第三の種類で余は之を營利的内國植民と名けて居る。千八百九十五年に一千萬麻克の資金を以て伯林に設立せられたる土地銀行は實に之が嚆矢である。其の後此の種の機關が他にも設立せられた。

六

斯くて此等三種の内國植民事業が相並び行はれつゝありしが多年プロンベルヒ土地取扱委員會々長たりしメッツは千九百二年に内國植民に關し有名なる一の著述をなした。氏は此の書に於て内國植民は一の技術である、而かも極めて困難なる技術である。之を實行するに當りては非常なる熟練と不斷の忍耐とを要し且つ多額の資金を必要となすから、完全に此の事業を遂行せんとするには之を私人的事業又は營利的事業にのみ委すべきものでない。之が爲めには須らく公益的機關を組織して以て內**國植民の經濟的、政治的、及び民族的目的を貫徹する必要があ**ると論じた。此の議論は大に當時の識者の注意を喚起し、遂に千九百〇三年にはポンメルン移住土着協會なるものが組織せられ、次て千九百〇五年に東普魯西土地協會が生れた。其の後漸次各地に之に倣ふものが續出した。國家も亦此等機關の有益な

るを認め、千九百十三年には此種の事業の爲め一千萬麻克までの資金を引受け得る規定を設けしかば益之が發展を見た。會員は營利的企業と異なり、國、州、市郡町村、農業會議所、組合貯蓄金庫及び大地主等であつて一般に有限責任の會社組織である。事業の目的が公益を擧るにあるを以て企業利益の配當の如きも年五分を以て限度とし、國家監督の下に事業を經營し、何時たりとも國家は自由に會社の帳簿等を監督し得る權能を有して居る。會社の業務は官廳的弊風に流るゝことなくして能く敏活に處理せられ、而かも營利會社の如く出來得る丈け多くの利益を擧んとするものにあらざれは、能く國立機關と私設機關との得點を併せ有するものとして世の稱贊を博しつゝあつた。

以上は過般の大戰爭前まで普魯西王國に於て行はれつゝあつた內國植民の經過の大要であつて、四種の制度が並び行はれつゝあつた。而して新共和國が帝國移住土着法に依つて戰後に於ける農業界の改造政策として行はんとする公益的內國植民と稱するものは、卽ち最後に發達したる第四の種類であつて識者をして事業の前途に大に囑目しつゝあるものである。蓋し其の撰擇宜しきを得たるものと評するの外はない。

七

戰爭前までは國家が公益的內國植民事業の發展を促がすが爲めには、既に述べし如く主として會社の資金の一部を引き受けて事業を補助するに過ぎざりしが、今回戰後の農業政策として此種機關に依りて以て農業界の革新を計らんとするに當りては種々なる特權を之に附與したり或は色々の補助を加へて之が活動を促がして居る。今其の主なるものを述べん。

既に述べし如く普魯西王國に於ては此れまで種々なる機關が設置せられ官民共に內國植民の發展に力を盡したるが、動ともすれば折角の事業も遲々として進まず、充分に豫期せる如き成績を奏することが出來なかつた恨がなきにしもあらずであつた。之には幾多の原因を算へ得べきも、其の最も重要なるものは從來の機關が事業經營に必要なる土地を容易に獲得することが出來なかつたに在りと言はざるを得ない。卽ち國家的內國植民にては國家は多大の經費と非常なる決心とを以て努力したるにも拘はらず、尙且波蘭土民族の一致團結せる反抗の爲めに土地の賣買價格は甚しき騰貴をなし、遂には假とひ高價を支拂ふも尙能く之を獲得することが出來ず、土地收用法の適用を認許するの已むを得ざるに至れるを以ても、能く其の間の消息を推察す

ることが出來る。私人的內國植民は一に土地所有者の發意に基きて始から行はれ、營利的企業は一般土地市場に於て他の買望者と相競爭して土地を買ひ求めねばならぬのである。されば新政府は能く此等の事情の在る所を察し、公益的內國植民機關をして其の目的を充分に貫徹せしめんとするには容易に且つ適當なる價格を以て土地を獲得せしむるにありとし、帝國移住土着法に於て此等の機關に種々なる特權を附與した。其の主要なる點を陳述すれば

一、獨逸帝國は舊帝政時代よりして國內の處々に農耕地を所有して居る。其の面積は約六十萬町歩にも上ると云ふ。多くは之を小作人に貸與して大農的經營をなさしめ、一は以て國庫の收入を計り他は以て地方農業の模範たらしめて居る。今回國家が內國植民事業を獎勵するに當り此等國有地にして貸借期限の經過したるものあるときは公益的內國植民機關の買收に應ずべしとした。而して其の價格は土地の收益價格を限度として之を定め過般の戰爭の爲めに特に起りたる一時的の價格騰貴の如きは決して之を見込まずと法律に明記してある。

二、泥炭地其の他の荒蕪地は國內處々に存在し、殊に東北地方に多い。其の內には現在未だ耕作に利用せざるものあれば、假とひ耕作に利用するも僅かに燒畑法の如き極めて粗放的經營に依るものあり、或は只泥炭の如き自然物を採收するに過ぎざるものもある。若し公益的內國植民機關にして此等の土地を利用して植民事業を行はんとする場合には土地所有者が土地を賣拂ふ意思の有無如何に關せず之を收用し得るの權能を與へた。是れ新法律の與へたる非常なる特權と言はねばならぬ。而して收用價格は改良せざる土地の純收益を資本化したるものとする。

三、公益的內國植民機關の營業區域は地方廳が之を定むるのである。其の區域內に於て二十五町歩以上の農業用地所有者が其の土地の全部若くは一部を他に賣拂はんとする場合には公益的內國植民機關に先買權を與へ他に先買權を有するものあるも夫れに先んじて土地を買收することを得せしむる。倘地方廳の定むる規定如何に依りては二十五町歩より小面積の土地を賣買する場合に於ても此の種の特權を適用せしむることが出來る。是れ亦非常なる特權と言はざるを得ない。勿論此の種の特權の適用に關しては多少の制限が設けてあつて若し此等の土地が公法人若くは或る種の親族に賣買せらるゝときは公益機關も此の特權を行使することは出來ないのである。

四、百町歩以上の農業用地を所有する農場卽ち大農場が千九百〇七年に行はれたる農業經營調査の結果に依り公益的內國植民機關の營業區域に於ける農業用地總面積の百分の十四乃至一割以

上を占めて居る場合には彼等大農場主は相團結して一の土地供給團體なるものを組織せねばならぬ。而して公益的內國植民機關よりして要求あるときは、此の團體は內國植民を實行するに適當せる土地を大農場內より相當の價格を以て取得して之に提供する責任を負はしめられた。其の價格は大農場としての相當價格であつて、戰時中に特に騰貴したる部分の如きは無論之を含ましむべからずとしてある。

以上述べたる四種の方法に依るも尙內國植民機關にして必要とする所の土地を充分に獲得すること能はざる場合があるときは、第四に述べたる土地供給團體は相當の賠償額を支拂つて大農場の土地を收用して之を植民機關に提供し得る權能を有せしめて居る。是は非常なる特權であつて如何に國家が厚き保護を加へて以て此の事業を遂行せんと決心して居るかを知るに足る。

然しながら土地の收用權の如き重大なる權利を土地供給團體に許容するに就ては、彼等をして何れの大農場と雖も自由に之を收用し得るが如く放任するときは、或は此の權利を惡用するの弊に陷ると無きを保し難い。又等しく大農場と稱するも其の性質及び其の價値は必ずしも皆同一なるものにあらざれば、新法律は團體が土地を買收する際には如何なる種類の大農場を先づ撰ぶべきやに注意を拂つて法律中に特に規定を設けてあるは注意の行屆けるを示すものである。即ち其の規定に依れば

一、過般の大戰爭中に農業を本業となさゞるもの丶所有に歸したる農場。

一、最近二十年間に親族的關係等の場合を除き有價にて屢々所有主を變更したる農場。

一、經營其の宜しきを得ざる農場。

一、所有主が特に正當なる理由なくして一ケ年の大部分は自己の農場內に住せざるか、又は自から農業を經營せざるもの。

一、非常に大規模の農場。

等である。此等の農場は何れも皆な農場として多少の批難缺點あるものと言はざるを得ない。殊に帝國移住土着法の實施以前三十年間に大農場の依りて兼併せられたる從前獨立せる中小農及び其の一部は先づ第一に買收すべきものなりとしてある。

然しながら如何に大農場を分割して中小農を設置するは公益事業なりとは云へ、無制限に大農場をして之が爲めに土地を提供せしめ得べきものでない。然らざれば餘りに大農を抑壓する許りでなく、遂には大農が全然消滅するか或は大に其の數を減少して中小農國と化する恐れがある。中小農に種々なる得點ある如く、大農も亦經濟上、社會上、政治上及び農業技術上に於て

民所を有するもので、農業界の發展を計るが爲めには大中小農の並立を必要とするものである。故を以て新法律に於ても千九百〇七年の經濟調査に基きて定めたる大農場の有する總面積の三分の一が既に内國植民の爲めに提供せらるゝか、或は之が爲めに大農場の總面積が區域内に於ける農業用地の一割以下に下るときは、最早大農は土地提供團體を組織して土地を提供する責任を解除せらるゝものである。又經濟上及び社會上に於て他の模範たり、又は農業の發展上特に必要なるものは出來得る丈け之を買收すべからずと特に規定しあるは至當の處置と稱すべきである。

八

上來述べたる如く新法律が公益的内國植民機關に土地の先買權、收用權等の如き重大なる權能を附與して以て土地獲得の便宜を計れるも、畢竟之に依つて以て戰後の重要問題たる内國植民事業の進捗を計らんが爲めに外ならい。然るに若し此の機關にして此等の特權を行使して獲得したる土地を其の目的たる内國植民に利用せざるが如きことあるときは是れ實に法の濫用であつて決して許容すべきものにあらず、之に對しては相當の制裁を設くるの必要がある。されば公益的内國植民機關が此の法律の與へたる權能に依りて土地を獲得したる後十ケ年間其の儘之を放棄して内國植民の爲めに利用せざるが如きことあらんか、若し先買權に依りて土地を獲得したる場合には先づ之が爲めに消滅したる他の先買權を有せし者に對して其の土地を買收するや否なやを尋ね、而して後之に應ぜざる場合に於てのみ始めて其の土地を以て内國植民以外の目的の用に供することを得せしめる。若し又收用權を利用して得たる土地なれば前所有者が之を買戻し得る權利を認め、彼等が之を買戻さゞる場合に内國植民機關は自由に之を處理し得るのである。而して此等植民機關よりして土地を買入れたる中小農若くは農業勞働者も亦當然内國植民事業の目的を貫徹する責任を有するものであるから、若し彼等にして買ひ入れたる土地の全部若くは一部を他に讓渡すか或は引續き永く其の農場内に住せざるか若くは全然之を經營せざるが如きことあれば、其の責任を盡さゞるものであつて、此等植民機關は一度賣り渡したる土地も之を買ひ戻し得る權能を認めて居る。斯くの如きは實際必要にして且つ當然なる制裁であつて、其の買戻權の存續期間、買戻價格等の如きは當事者間の契約に依りて定むるのである。

帝國移住土耕法は公益的内國植民事業の進捗を促がす爲めに前陳せし如く土地を獲得する上に付きて種々なる特權を與へて

厚き保護を加へつゝある外尙此の種の事業を遂行する場合には帝國、聯邦、及び其の他の公共團體が課する手數料、印紙稅其の他の租稅は總て之を免除することゝなせるは是れ亦一大特典である。

九

新共和國は新法律に依りて斯くの如き手厚き保護を加へて以て內國植民事業の促進を計畫せるが、實際此の法律に基きて公益的內國植民機關が獲得し得可き土地の面積は大凡幾何なるかは此の事業の範圍及び必要の程度を知る上に於て知らざる可からざる點である。フレーゼ博士の調査せし結果に依れば

一、國有地	六〇〇、〇〇〇町歩
二、泥炭地荒蕪地等にして耕作し得るもの	二、〇〇〇、〇〇〇
三、二十年間に先買權に依り二十五町歩以上の農場より買收し得るもの	四、〇〇〇、〇〇〇
四、土地供給團體の手を經て買收し得るもの	一、八〇〇、〇〇〇
計	八、四〇〇、〇〇〇

なりと。而して第三の先買權に依りて買收し得べき土地四百萬町歩の內二百萬町歩が新たに移住土着をなすに利用せられ得るものとなせば、內國植民に供せらるゝものは總計的六百四十萬町歩に上るべしと。若し新たに設置すべき中小農の所要地の最高面積を十五町歩とし、之を標準として計算するときは此等六百四十萬町歩よりして少なくも四十二萬の獨立せる農場を新たに設け得る筈である。而して之に對して千九百〇七年の經營調査に依れば普魯西王國內に於ける五町歩乃至二十町歩の農場數は五十八萬三千百六十なれば、若し新たに制定せる帝國移住土着法にして充分に適用せらるゝときは中小農を增殖して戰後に於ける農業界の革新を計り、本論の初めに於て論述したる此の種施設の四大目的も能く充分に貫徹し得るであらう。

一〇

上來吾人は新共和國が戰後の農業改造策として努力しつゝある內國植民事業に關する施設の要點及事業の範圍の大概を陳述した。是に由つて之を觀るときは如何に獨逸が本問題の遂行に重きを置けるかを知るに足らん。曾て國家的內國植民に於て國家は必要なる場合には要する所の土地を收用し得可き權能を有することを法律を以て定めた。然るに是は東北兩州に於ける民族

競爭の結果已むを得ざりし最後の手段であつた。當時此法律の制定に關して波蘭土民族間には勿論の事獨逸人の中に於てすら尚反對の聲を發するものがあつた。然るに今や帝國移住土着法に於ては全然經濟的及社會的見地よりして內國植民を以て一の公益的事業なりとし、從來公益事業と見做なし種々なる保護を加へられたる鐵道を布設し道路を開鑿する場合に於けるよりも更に一層廣き程度に於て企業者に附與するに土地の先買權或は收用權を以てし或は國有地を交附して以て事業の進捗を計 に至りたるは實に內國植民事業に一新紀元を開けるものと曰はざるを得ない。私有財產權を以て絕對權なるが如き觀念を抱けるものは本制度の如き規定を喜ばざるならんも、元來私有財產權なるものが絕對權にあらず只財產の社會的効用を發揮せしむるに適する一の制度なりとして採用せるに過ぎざれば社會の變遷と共に公益を增進せしむる必要あるときは此種の權利に多少の制限を加ふるは蓋し已むを得ざる所である。新制度の如き必ずや其の効果の見るに足るべきものがあるであらう。內國植民事業に關して最も長き且つ最も重き經驗を有する獨逸に於ける事業の成績に鑑みるときは、本事業は農業界の刷新上最も緊要にして而かも之が實行は頗る困難なる施設であつて單に之を私人の任意の發起にのみ委すべきものでもなく、又之を以て營利事業との、なすべきものでもない。之を以て一の公益事業として國家が有形に將た無形に保護獎勵をなすの必要あると共に斯くしてこそ始めて能く充分に其の目的を貫徹し得べきものであることを證明し且つ他國をして其の向ふ所を知らしめつゝありと評せざるを得ない。

（大、一〇、一二、二五）

愛蘭自由國の成立

早大教授　内ケ崎作三郎

一　七百年來難問題の解決

一九二一年、十二月六日、午前二時二十分は、世界の進歩と推進と變化とに多少の注意を拂ふ者にとりては、永久に紀念すべき瞬間である。數百年來の永い軋轢、人種的、經濟的、政治的、文化的紛爭、——即ち英國政府と愛蘭人民との間に久しく結んで解けなかつた難問題が漸くその解決の曙光を示して來たからである。

ロンドンはウエストミンスターのダーニング街十番の首相官邸には連日愛蘭問題の會議が開かれてゐた。英國政府の代表者はロイド・ヂョーヂ氏、チヤンバーレン氏、バーケンヘツト卿、チヤーチル氏で、南方愛蘭政府、即ちシン・フエン政府の代者表はコリンス氏、グリツフイス氏、ダツフイ氏であつた。

協議の最初から英國首相は如何に讓歩をしても、愛蘭が大英帝國から全然分離することは承諾が出來ぬと聲明した。然るに南方愛蘭の代表者は愛蘭をして全然自主獨立の邦家たらしめよといふ注文を提出したのである。依つて會議は幾度も危險に迫つた。折角休戰狀態を享樂する愛蘭が再び殺戮の巷と化せねばならぬ心配もあつた。

然るに一種の心理的變化が生じて、急轉直下して、この紛糾を解いたといふ噂さである。それは何れの國に於ても、會議や協商をなす場合の參考となるべき事實である。それは餘の儀ではない。幾日も／＼七人の代表者が相對して相談をしてゐるうちに、時には思ひ切つた意見の陳述や、駁論などもあつたであらうが、人情の機微といふ者が不思議なもので、影で聞くと遇つて見るとは大なる相違であるといふ印象が兩側の人々に起つたらしい。シン・フエン側の委員は、英國の政治家は案外に親切らしい、これならば信頼が出來そうだ、これたらば一つの大帝國に屬してゐてもよいだらふといふやうな心持が湧いて來たらしい。同時に英國側でも、シン・フエンの代表者は中々の人物

である。これならば獨立自治の國家の經營と信頼とに耐ゆるであらうといふやうな豫感が働きかけたらしい。その結果として圓滿解決となつた。要するに寛容と忍耐とがこの會議を成功せしめた重なる要素であつた。

愛蘭はカナダ、濠洲、ニュー・ゼーランド、南阿と同一の位置を占めて、愛蘭自由國The Irish Free Stateと稱すべきことゝなつた。北部アルスターは之と合併するも、せざるも自由であると聲明せられた。七人の代表者はこの條約に署名した。

超えて十二月十六日、英國の上下兩院に於てこの條約は批准せられた。下院に於ては五十八票に對する四百一票の多數を以て、上院に於ては四十七票に對する百六十六票の多數を以て、條約は通過したのである。

グラツトストンが愛蘭自治法案を提げて再度まで敗れたのをロイド・ヂョーヂは解決した。彼の聲望は再び高くなつて、英國の生める坡大なる政治家としての彼の位地は動かすべからさるものとなつた。

しかしロイド・ヂョーヂ氏の成功には幾多の幸運なる先行事件があつた。先づ第一に考察すべきはアスキス氏に先じて自由黨内閣の首相であつたカメル・バンナマンの功績である。彼がボーア人に對して南阿自由國を附與したことがこの度の先例となつたのである。

又ロイド・ヂョーヂ氏の聯合內閣はこの問題の解決に與つて力がある。保守黨が統一黨と呼ばるゝやうになつたのは愛蘭問題のためである。即ち英愛兩國の統一を主張したのは重に保守黨であつたから、「統一(ユニオン)」といふ名が附與せられたのである。從つて自由黨中の統一論者は自由統一黨を形ち造つたのであるされぱグラツトストンの愛蘭自治法案には保守黨が全部反對すると共に自由黨の一部も之に共鳴した。又統一黨の天下ならば愛蘭自治法案は決して提出されないと見て差支ない。然るに幸にもロイド・ヂョーヂ氏は戰時內閣を繼續して聯合內閣の首班に位してゐるから自由黨、統一黨、勞働黨の重なる部分の後援と共贊とを博しえたのである。聯合內閣の存在中に之を解決せねばならぬと急いだはロイド・ヂョーヂ氏の達識なる所以である。

從つて國家の大問題を解決することは舉國一致內閣の方が分立內閣よりも遙かに利益が多い場合がある。單に政黨の習慣や理論に拘束せられるべきでない。我が國の政治家は宜しく三考すべきである。

ダブリンのデール・エーラン即ちシン・フェン議會は最初容易にこの條約を贊成すべくも見えず、秘密會を重ね、且つ數日に

亘りて議會に於て熱烈なる討論が行はれたが、結局この條約を批准したやうである。大統領デ・ワレラ氏は辭職したといふ電報があつたと記憶する。

そこで興味あるもう一つの問題は英國の政界に「統一」を看板にする政黨の存在の意義が消滅したことである。何となれば「統一」の理想が實現せられずして自治獨立の理想が勝利を博したからである。これは極めて興味ある現象である。統一黨が今更保守黨と銘を打つことも出來ぬであらふ。要するに愛蘭自由國の成立は自由主義の勝利に外ならない。聯合內閣がやゝもすれば保守的傾向を現じ過ぎて、自由主義の人々から、不評判を招いたのであるが、最近の進歩的政策のために依然として信望を回復した。しかしロイド・ジョーヂ氏の政策が再び保守的傾向を帶びることがないか、いふことは自由主義者の心配の種子である。自由主義の立場から考ふれば種々なる大懸案がある。自由貿易、上院改造、勞働黨に對する政策、埃及と印度に對する政策の如きは最も重大なるものであらふ。

ロイド・ジョーヂ氏は果して或人々の觀測するごとく、聯合內閣を基礎として新政黨、たとへば國民黨The National Party といふべきやうなものを結黨する段取となるであらうか。而して上記の自由主義の政策を如何に解決するであらうか。是れ甚だ興味ある問題である。

二　問題解決の主要なる誘因

猶茲に記して置かねばならぬことは愛蘭問題の經濟的背景である。英國政府が愛蘭に對して忍ぶべからざるを忍び、讓るべからざるを讓つたのは、英國側の批評によれば、英國の政治的天才の發露であるといふ。「タイムス」紙は曰く、『是等の條件は政治に對する英國民の天才が未だ滅びず、吾が政治家は吾が國民的偉人の古來の秘訣を失はなかつたことを證明する』と。ロイド・ジョーヂ氏の機關紙と目せらるゝ「デイリー・クロニクル」紙は『そは　くは吾人の政治的功業の最大なるものにして、恰かも最も困難なる問題の一つであつた。炬火をともしたる光榮はグラットストンに歸し、ロイド・ジョーヂには之を持ち歸れるといふより大なる光榮は與へられなければならぬ』と讃美した。英帝國はいふ迄もなく、世界の輿論は殆んど之に異論はない。然れども吾人は單に愛蘭問題の解決には經濟的理由が伴ふ、觀測する。流石に強大なる英國も戰後の經濟問題には頭痛鉢卷である。消極的方針をとつて節約に節約を重ねんとしてゐる。貿易不振の回復は容易でない。海運業も思はしくない。失業者の數は増加する一方である。さればこそ英國の輿論が軍備縮小海軍

制限に大賛成であるわけである。而して埃及と印度の不安の形勢は樂觀を許さない。そこで英國の政治家は愛蘭問題丈でも早く解決せねば、國費を消耗するのみである。現に戰後愛蘭に派遣せられたる莫大なる軍隊即ちブラック・エンド・タアン Block and Tarn と稱せらるゝ軍隊を維持するは經濟的に中々に困難なことである。而してその威力は十分に發揮せられない。この一兩年間は愛蘭は殆んど無政府の狀態であつた。官公吏は頻りに暗殺される。鐵道も、郵便も、電報も安全でない。犯罪があつても證人が現れない。警察署や派出所は燒打せられ、役所から帳簿が盜まれた。

愛蘭側からいへば、一九一六年五月から一九二〇年三月迄に英國軍隊もしくは警察隊の侵略事件は三萬五千六百三十六件で家宅侵入が二千件、殺人が四十五件、牢死七件といふ統計が擧げられた。英國側からいへば、一九二〇年八月末日迄に殺害せられたる警官が八十五名、同年七月三十日に終りたる五週間内に十七ケ所裁判所が燒かれ、八十五ケ所の巡査駐在所が破壞せられた。更に他の統計を示せば、一九二一年七月迄に愛蘭共和軍隊とその賛成者は八十六ケ所の裁判所と五百四十七ケ所の巡査駐在所を破壞し（この統計のうちに前のそれは含まれてゐるらしい）、三百九十五名の警官と百四十名の兵士を殺害した。負傷者その他の襲撃やダブリン稅關署の破壞のごときはこの以外に屬するものである。同時に一九二一年一月から六月迄の間に共和軍は戰死者五百六十七名を出した。又同年六月六日に終りたる一週間内に二十四名の英國兵及び警官が殺害せられた。

かゝる無益の內亂を繼續するは敵味方の共に苦痛とした所である。就中、英國政府が徒に多額の鎭壓費を支出して、何等の効果のない事に失望し、又愛蘭側に於ても飽迄武力を以ての反抗を繼續する意志を有せず、終に一九二一年七月十一日の正午を以て休戰條約が成立したのであつた。この後大統領デ・ヴレラは再度ロンドンに國賓の資格を以て招かれてロイド・ヂョーヂ氏と協約したが、失敗に終つたが、最後の代表者會に於て前記の成功をみたのである。

さればロイド・ヂョーヂ氏の政治家としての伎倆は驚嘆に値するが、この經濟的難局を脊景としたがために多數國民の協賛を博することが出來たのであらう。されば愛蘭問題を以て單に人道主義とか理想主義の勝利とのみ見做すことが出來ず、むしろ經濟主義が人道主義と理想主義とを鞭撻し、刺戟して、大勢にその向ふ所に走らしめたと判斷するは實際に近い考察だらうと思ふ。

三　バーナード・ショウの新自由國に對する希望

文豪バーナード・ショーは愛蘭生として愛蘭婦人と結婚した人である。彼は愛蘭問題については思想方面に絶えず論じて來た。されば愛蘭自由國の成立に對する彼の感想を聞くは興味あることに屬する。

ショーは愛蘭の將來を樂觀しない。

『私がこの論文を書いてゐるうちに、ディール・エーレアン（ダブリン議會）の決議が屆かない。しかしそれは重大なる事柄でない。條約に批准の有無に論なく、將來愛蘭は自治を行はねばならぬ、あらう。その困難は終りを告げずして、却てこれから始まるのである。』

皮肉のうちにも事實が籠つてゐる。

「共和國」とは何ぞやと題してショーは續けていふ。

『共和國とは何ぞや。そはサン・サルヴアドーア或はアンドラの共和國なりや。或は北米合衆國のそれなりや。或は六割五分の征服せられたる外人を有す佛蘭西の共和國なりや、或はペアース及びデ・ヴァレラの愛蘭共和國なりや。明白にそんなものではない。各時代の最優者によりて努力せられたる共和國の觀念は「神の都」Civitatis Dei である。これより何人も除外せらるゝものでない、英人なればとて同樣である。繰り返へしていふが、今日は英國に於ては愛蘭に於けるよりも共和主義者が多い。されば兩者の分離は、他の理由によりてそれは愛蘭共和主義者の便宜としたり、不便宜としたりすることがあるかも知れぬが、とにかく反共和主義の行動である。そうなれば、幾千人の愛蘭人は反撥的無言劇をやつて英國人に歸化して了ふかも知れない。その理由は極めて單純である。何となれば今日世界は排他的國民主義では動きがとれぬからである。共和主義の理想は出來得る丈け、隣國より隔離することでなく、却つて、自國の戸口を掃除するに十分にして自由なる行動と兩立する範圍に於て、隣國と有機的關係をつけることである。』

『獨立は奴隸からみれば結構なる標語である。されど一度自由を得れば、彼は人間は相互的關係から離るゝことの出來ぬものであることを發見する。要するに獨立は自己中心の夢に過ぎない。英國は自ら獨立と稱す、何故にいよ／＼のつぴきならぬ瀬戸際迄に愛蘭を手放しかねたか。いふ迄もなく英國は愛蘭に依賴すること多いからである。英國は獨逸を掠奪せんとした、そして結局獨逸に依賴することの多きを悟つた。英

國は露西亞の瓦解を助成した。結局英國の町々は生きんとして露西亞のために働くことを許されたいとわめく幾萬の飢えたる英人に滿たされたでないか。』

『又愛蘭の側から之を眺めんか。愛蘭はいかにして英國より獨立することが出來ようぞ。一度戰爭起らんか、英國は白耳義と希臘に進軍したやうに何等の禮儀を用ゐずして愛蘭に失敬するであらふ。兩國の商賣を中止せよ、彼等の腹帶がゆるんで、すぐに兩國は共に弱るであらふ。兩者は相互に從屬してゐるのである。現に英軍が愛蘭を引上げて了へば、愛蘭は一ケ年に六百萬磅の損害を招くといふで、抗議を呈出したものさへもあるでないか。而もその金額は主として英國軍人が居酒屋に使ふものに過ぎない。』

隨分な皮肉ではあるが、ショー一流の人道主義の閃きが見えて面白い。一體愛蘭に對しては英國は失政を重ねた。その罪は許すべからざるものがある。しかし愛蘭人は爭ひ好きで内訌が絕えず、眞に之を統一しえたものがなかつた。これが英人に乘ぜられた原因である。愛蘭自由國には北にアルスターの問題が殘つてゐるばかりでなく、内部には種々の不統一がある。過去幾世紀の壓制のために徒らに英人を恨んではならない。一度達成したる自由を基礎として努力しなければならない。流石はショーである。徒らに甘言を呈して愛蘭人の自負心をけしかけることはしない。

ショーは進んで、相互依賴 Interdependence の必要なるを力說してゐる。徒らに獨立を高調するは野蠻人のなす所である。愛蘭人のやうに文明超過の民族には不向であると述べてゐる。愛蘭人はむしろ文弱に流れんとするほど文化的民族であると誇つてゐる。

しかし彼は愛蘭の政策の成功を承認してゐる。

『愛蘭はいかにすれば謀反に成功するかを學んだ。共和政治を唱道する勿れ。單に共和政治を採用して、その内閣と議會とを任命せよ。而して實施に取りかゝれ。若し之に反對者が干涉する時は警察及び軍隊に命じて、既存の共和主義を擁護せよ。丁度相對性及び他の大發見の如く、至つて手輕である。』

ショーのいふ所には一面の眞理がある。ダブリンのシン・フエン議會の成立及びその活動は詮じ詰むればこの方法を採用したのであつた。

さて愛蘭は自由國となつたが、その前途に不安の念を懷く者もある。ショーも幾分か之れを祝した。「新政治家」The New Statesman 誌は左の如く批評してゐる。

『愛蘭人はその自由を獲た。而し之によりて、その歴史的不平のみならず、その歴史付の政治的立場を失つた。整理事業は隨分困難であらふ。愛蘭は世界に於て最も政治好きの國である。政治は農民の小屋の話題である。數週間は彼等はこの決定にてついて語り、又英國の傭兵が愛蘭の義勇兵のために破られた手柄話をやるであらふ。しかしそれにもやがて厭きが來るだらふ、蓋し愛蘭人は智的の大食者であるからである。彼等は新しい不平よりも古い不平を愛するに相違ない。されど愛蘭が「愛蘭自由國」となりゐる時、彼等は歴史譚をのみ繰へかへすことが出來ぬ。彼等の話題が何であらふか。吾々には一向見當がつかぬと自狀する。』

これは稍々同情の足らぬ觀察である。しかし愛蘭人の缺點が思ふ存分に攻擊せられてある。しかし吾人は愛蘭人の主義と之を實現し得る熱心と忍耐心とに信賴し、新しき自由國の大なる發展を祈るものである。

四　愛蘭問題の文化的背景

地理的に考察すれば愛蘭は大英國(グレートブリテン)の大きな離れ島である。固より我が國の本州と九州との如く、接近してはゐないが、稍々似通ふ所もある。地形構成の本質論からいへば亞細亞と歐羅巴は本來一大陸で、歐亞大陸(ユーレシア)と稱せられてゐる。この大陸との連鎖を失つて北海に浮び出でゝゐるのは大英國(グレートブリテン)である。そして、その大英國の中央からやゝ南方にかけて突出した大部分が更に大西洋上に分離するに至つたのは愛蘭である。若し大英國を本營とすれば愛蘭は前哨である。かくして大英國と愛蘭が相合して一王國を構成すべき先天的約束は十分に存在してゐる。しかし、江南の橘、江北の枳の譬ひもあるやうに、一河の流を以て異民族が對立し、平野を境として兩國民が敵視してゐる場合もあるから、一衣帶水を隔てゝ、愛蘭が獨立自治の邦たらんと努力して來たことは必ずしも怪しむに足らない。

地理的にかくも接近してゐる兩國民が隔離せしむるに至つた原因は一つにして足らない。第一の原因は人種の問題である。愛蘭に最初に上陸した人種は地中海人種らしい。後セルト人種が移住し、セルトの文化が濃厚となつた。ノルマン人が英國を征服してから、愛蘭をもその領土に入れることゝなつて、その後英國に對して從屬するを餘儀なくされた。後北方のアルスターに蘇國人及び英蘭人の移住が行はれた。英蘭人が地主で、資本家で、愛蘭人は小作人で勞働者であるといふ關係となつた。

而してアルスターは近代に入りて工業の發達、ことに麻織物及び造船業が發達し、ランカシヤーやヨークシヤーと同一の事

情を呈して、殆んど純粹の農業を以て立つてゐる南部愛蘭とは大に趣きを異にしてゐた。

第二の原因は宗教的である。上古の愛蘭はその當時の英蘭と同じやうに自然崇拜の宗教が行れてゐたが、紀元五世紀の中頃に聖パトリックが羅馬教會の宣教師として渡來してから、基督教が非常な勢で行はれるに至つた。愛蘭は大英國に先じて基督教化し、教育は盛大となり、宣教師は獨り英國のみならず歐洲大陸に派遣せらるゝに至つた。されば羅馬教會は愛蘭に於ては十五世紀の基礎を有するのである。

然るにヘンリー八世が宗教改革を斷行して羅馬教會から分離するに及んで、愛蘭に新教を强ゐ、殊に英國に教會を設立した。又一方にはアルスター地方の蘇國人間には蘇國の國教と稱して不可なき新教の一派長老教會が根强い本據を構へた。英國政府はあらゆる方法を以て愛蘭の羅馬教を撲滅せんとしたがその效がなかつた。

第三の原因は文化の問題である。古代愛蘭人はゲーリック語を用ゐた。今日でも西經八度の子午線の西方には英語を知らずしてゲーリック語を使用してゐる農民が少くない。又此地方から米國へ最も多數の移民を送り出したのである。

ゲーリック文學は英文學に比して神秘的で、感情的である。殊に羅馬教會の美的要素と結合して更にその特性を發揮した。十九世紀の末からその復興運動が目覺しくなつた。即ち一八九九年にはダブリンに愛蘭國民劇場が設立せられた。エドワードマーチン Edward Martyn やエーツ W. B. Yeates シンヂ J. M. Syngeのやうな劇詩家を生じた。又A. Eの雅號を以て知らるゝヂョーヂ・ラッセル George Russellは詩人、畫家、經濟學者として知られ、ヂョーヂ・モーア George Mooreは小說家として名高い。この外にエルヴイン St. John Ervine. ロビンソン、Lennox Robinsonジョーイス James Joyce のやうな有望の作家が輩出した。眞に壯觀である。是等の作家はゲーリックの傳說と近代思想との調和を企てたのである。かゝる誇るべき文藝を有する國民が自由獨立の理想にあこがれたるは當然のことである。而して英國政府は折々ゲーリック文化團體に對しても抑壓を加へた。

第四の原因は經濟的運動で、愛蘭農民の貧窮を救濟せんとする運動である。これは主としてヂョーヂ・ラッセル等によりて唱導せられ實行せられた消費組合となつて現れた。

第五の原因は勞働組合の運動である。

第六の原因は是等の誘因が當然に結果した自由と獨立とを獲得せんとする政治的運動である。

されば愛蘭問題は非常に興味が多い。殊に之に類似してゐる問題の所有者である我が國の識者にとりてその研究と考察とが肝要事に屬する。依つて愛蘭問題は他人の事でない。自分の事である。先づ自家頭上の蠅を拂ふ覺悟で、研究することが必要である。（一一、四、一三）

婦人雑誌の惡傾向

高島米峰

一　新聞と雑誌と單行本

雑誌の使命は何であるか。等しく印刷物であつて、或ものを單行本と呼び、或ものを新聞と呼び、而して或ものを雑誌と呼んで居る。此の三者を、發行度數の多いとか少いとかいふことや、若くは、その發行が定期であるとか不定期であるとかいふやうな、外的條件から區別することも、一應は出來ることであらうし、又、この三者には、各獨特の内的條件が、具備して居るべき筈でもある。しかし、今こゝでは、そうした方面の研究に費すべき、頁が與へられて居らない。たゞ、雑誌は、新聞と單行本との中間に位して、能く、雙方の長所を集めた、半永久的刊行物であると片づけて置いて、さて、そうした立場に立つて居る雑誌は、大體、知識の程度により、研究範圍の相違により、性の區別により、それ〴〵、異つた形式と内容とを以て、その向き〳〵の要求に應じて居るのであるが、今は、特に、謂はゆる婦人雑誌にのみ關して、一言を試みる。

二　女の物理學、女の代數學

婦人の宗教とか、婦人の學問とかいふ、特別なものがあつて、男子には通用のしないものであるならば格別、苟も、宗教や學問が、人類的なものである以上、そこに、男女の差別を設ける理由も必要もない。從つて、雑誌の如き、男たり女たるがために、二様の編輯を爲して、これを發賣すべき理由も必要もなく、同一の雑誌を、男も女も購讀すべきであると言へないことはな

い。しかし、日本の現在の婦人は、極めて少數の教養ある人々を除いて、他の大多數は、その知識低劣、その情操卑俗、到底、男子と同列に置かるべきものではない。勿論、男子の中にも、その知識その情操、共に、婦人の或ものよりも遙に低劣卑俗なものもある。從つて、そうした男子のためには、その要求に沿ふべき、低級卑俗の雜誌が、少からず刊行せられて居るのであつて、それと同じ意義の上に、一般の男子のために發行せられて居る雜誌の外に、特に、婦人向きの雜誌が、發行せられて居るのであると見なければならない。

公開の講演會場で、特に『婦人席』といふ札が眼につくのは婦人を尊敬して、優待するのだと解することも出來るし、考へやうに依つては、一種の侮辱とも取れないことは無い。何故に、そんな札なんぞをぶら下げて、特に、優待若くは侮辱しなければならないのか。又、これを學校に見ても、高等女學校は、中學校より、遙に低級である。それもよい、その用ゐる教科書が、殆ど悉く、女子のために、特別に編纂されたものであることなんぞは、婦人に對する大なる侮辱でなくて何であらう。否、日本の婦人は、實際まだ、その位の程度のものであり、その位に待遇されても、それを當然として、呑氣に受け容れて居る位の、實力しか持つて居ないのである。『女子物理學』『女子代數學』と言つたやうな、教科書の名稱に接する度毎に、妙な物理學があつたものだ、變な代數學があるものだと、いつも、奇異の感に堪へないのである。しかし、そうしたことさへ問題にならない現代に、婦人專門の雜誌が存在して居るといふことは、寧ろ當然過ぎることであつて、それは決して、婦人の恥辱でない。將來は兎も角、現在の狀態に於ては。

三　出版業者と投機師

出版といふ事業が、若し、文化の上に貢獻するところが無いならば、これは明に、一種の投機事業として、裁かるべき性質のものである。然るに、世の出版業者が、相場師と同架に列して論ぜられないのは、その結果が、文化の向上を啓發するからである。從つて、若し、世に、風俗を紊し秩序を壞り、趣味を傷ひ信仰を亂る底のものを出版するものがあるとするならば、此くの如きの出版業者は、當然、單なる相場師として、道德破壞の責に任じなければならぬ。否、出版業も、亦これ一個の營利事業である、利を營まむがためには、多く賣らなければならない、多く賣らむがためには、人情の弱點に乘じ、胸倉執つて無理にも買はせねばならぬ。苟も、人情の弱點に乘ぜさるべからずとせば、文化の向上を啓發するといふが如きことは、二の

次となるの已むを得ないではないか。現代の出版界は、新聞と言はず、雜誌と言はず、單行本と言はず、大體、此くの如き傾向を執つて、進みつゝあることを否む譯にはゆくまい。勿論、少數の例外はある。しかし、それは實に、少數の例外である。

賣らむがためには、有らゆる手段を講ずることを辭しない。勸業債券は、一種の富籤でないと言へやうか。福引といふ富籤類似の手段も、賣らむがためには、餘儀ないことゝされて居る。天下の耳目、社會の木鐸だと言はれて居る新聞までが、賣らむがためには、有らゆる手段を講じて居る。新聞も、亦、商品である以上、賣らねばならぬ。營利事業である以上、儲けなければならぬ。同業者が多ければ、競爭もしなければならぬ。そこで、一方が夕刊を出せば、一方は頁を增す、一方で繪附錄を添へると言へば、一方は定價を下げるといふ、一方が活動寫眞で民衆を歡ばせると、一方では海外名士の寄稿を特約して、知識階級を引きつける。一方で旬報を出すと言へば、一方では日曜附錄を無料で配付するといふ。そこらあたりまでは、だマア善いが、甚しいのになると、月極の讀者には、世界各國の金貨一個づゝを抽籤で頒つとか、寶石入の金指輪を贈呈するとか、いよ／＼實彈で讀者を射留めやうとするものさへ出て來た。これが新聞ともあらうものゝ、なすべきことであるかどうかは、僕の批判力の外である。勿論、自由競爭の是非善惡は、別に議論がある。しかし、今の場合、進步のために、一應、競爭を是認するとして、それがこゝまで激甚となれば、それは進步のための競爭ではなくて、競爭のための競爭である。このまゝで進んでゆくと、將來或は、新聞は無料で讀めて、その上に、月々手拭の一本位は貰へるやうになるかも知れない。喜ぶべきか悲しむべきか、それは讀者の頭次第である。

四　新聞の雜誌化、雜誌の新聞化

新聞が旬報を出し、週報を出すといふことは、新聞社が、雜誌社を兼業することになつたものと見てもよい。たゞさへ近時の新聞が、次第に雜誌化しつゝあるところへ、更にかうした計畫の實現せらるゝといふことは、新聞本來の意義に、累するところが無いものかどうか。これを逆にして、雜誌の新聞化といふことも、考へら ないことはない。但、某雜誌が、卷末に二頁の『新聞欄』といふものを添へたのは、新聞の旬報、週報の計畫を諷刺した、皮肉ではあらうが、あれでも、勿論、存在の意義が絶無とは言へない。しかし、それは、今の問題でない。今は、雜誌の內容が、次第に新聞化して來たことの著しいのを、婦人雜誌に發見せしめられるといふことを言ひたいのであ

る。謂はゆる新聞化といふことも、若しそれが、新聞の長所を學んで、雜誌の短所を補ふといふのならば結構であるが、新聞の最も愚劣なる方面として、識者が常に指彈して居る、人間生活の暗黑面の摘發、それを更に面白可笑しく引き延ばして、事實は小說よりも奇なりと言つたやうな廣告で、遮二無二賣りつけやうとする。新聞にしてからが、あゝした材料で、讀者を喜ばさうとするやうな卑俗な態度は、もういゝ加減に打切るべきではあるまいか。必ずしも外國の新聞を例に持つて來る必要はない、日本人は、日本人として、も少し高級にならねばならぬ。一般人を高級に導くといふことも、新聞の本務の一つであつて差支ない。否、本來さうあるべき筈のものであつたのが、近來、商品として見る方の力が强くなつた結果、導くなどゝいふ力は、全く無くなつてしまひもしたし、又、新聞に依つて導かれやうと考へて居るものも、ないかも知れないが、少くとも惡化しないだけの用意はあつて欲しい。

五　肉感挑發的の記事

僕は、元來、『惡はこれを默殺せよ』といふことを、標語として居るのであるが、新聞は、事實報道の機關でもあるといふ立場から、社會現象は、出來る限り、これを默殺せずに報道して欲しい。しかし、惡事は、紙面の片隅に、極めて小さく、極めて短く、ありのまゝを傳へて置くといふ位の程度に、とゞめて置いて欲しいと思ふ。雜誌に至つては、新聞とその立場を異にし、市井の驢事馬事、一々これを取上げて、仔細に記載せねばならぬといふ義務はない。從つて、肉感を挑發したり、闇黑的な好奇心をそゝつたりするやうな記事を載せて、母が娘に讀んで聞かせることも出來ず、娘が母の前で讀むことも出來ないやうな雜誌を編輯することは、全く以て、餘計な骨折である。勿論、かく申す僕なども、時々、婦人雜誌に意見を述べることがある。殊に、僕の立場からは、當然、默殺することを可としなければならないやうな事件に關しても、批判がましいことを言ふことが無いでもない。しかし、それは、最初に於て默殺せらるべきであり、默殺せらるゝことを冀ふべき事であつたのを、新聞まづこれを摘發し、雜誌更にこれを受賣りするといふやうに、一個の風教問題として、社會に投げ出されて仕舞つたので、今更それをどうすることも出來ない。そこで、せめてはそれを讀む人々をして、誤解若くは雷同せしめまいとする婆心から、少くとも、自己の哲學自己の信念の上に立脚して、出來るだけ、これに文化的批判を加へ、以て讀む人をして、正しく歩ましめたいとの念願を以て、筆を執るのである。しかし若

し、最初に於て、事が默殺されて居るならば、かゝる手段は、全く蛇足であつて、世は太平無事なのである。然るに、そういかないのは、即ちまづ新聞の罪であり、次に新聞化した雜誌の罪である。

六　主義の宣傳と金儲

主義の宣傳は、多くの場合、金儲けとは兩立しない。從つて營利を目的とする雜誌に向つて、多くを期待しやうとするのは、するが方が間違つて居る。しかし、せめては讀者の常識を進め、趣味を高め、心情を淸くする位の努力は、して欲しいものである。吾等の常識は、斷えず進歩させなくてはならないものである。前月までは、專門的知識であつたのが、今月は常識となり、今月の常識は、來月は舊思想とならぬと言へない。そこで、專門の學術で研究せられた結果としての新しい知識を、平易明快に記述して、以て、一般常識の促進を計るべきであり、又、吾等は、到底、娛樂なくしては、寂寞に堪へられないのであるから、或は文學、或は藝術、それ等の高尙なるものに導いて、その趣味性を美しく生長せしめらるべきであり、又、吾等は、宗敎なくしては、一日も生くることの出來ないものであるから、健全なる信仰を皷吹して、その心境を淨化せしめるといふ位のことは、雜誌共通の務めでなくてはならないのであるが、殊に、婦人雜誌に於て、最も緊切なる事項であると信ずる。然るに、現代の婦人雜誌、果して能く、此くの如き希望を滿足せしむるに足るものが、有るか無いか、有るとしても、總數の何割位有るか。これに反して、醜き男女關係　到底有り得べからざるが如き變態戀愛、殘忍なる人間の獸性、その他有らゆる低劣と有らゆる卑俗とより成つた記事を呼物として、しかも、新聞半頁、四半頁といふやうな、大きな廣告を掲げて、以て婦人の購讀を强要する。縱令、如何に誘惑されても、如何に强要されても、婦人の精神生活が高尙純潔であるならば、何等の功果はなかるべき筈であるが、そうした婦人雜誌の多くが　幾萬若くは幾十萬といふ讀者を有してゐるといふことから考へて見ると、罪は婦人雜誌にあることは明かだが、同時にまた、そうした婦人雜誌を存在せしめ、繁榮せしめて居る婦人の罪も、決して小さいものではないと言へる。

七　職業的な告白屋

婦人雜誌の最も有力なる呼物は、即ち不良少年少女輩の告白文と稱するものである。中には、不良婆不良爺も混在して居るやうだが、最も甚だしいものは、そうした低劣な告白文が人氣

に投じ、各婦人雜誌が、それを競爭的に掲載するとなると、需給の關係は、そこに職業的の告白屋といふものを産み出して來て、賣れ口の遠い自稱文學者輩は、短篇小說でも書く氣になつて、出鱈目の僞告白文を書き綴り、以て公安を害し、以て風紀を紊して居る。商賣として許されゝば、娼妓にさへなるものゝある世の中、告白屋が、それで生きて行くのに不思議はないが、しかし、そこまで墮落せずとも、何とか生きられさうなものではあるまいか。イヤ、そうした、故らに作爲せられた告白文を掲載して、儲けやうと努力して居る婦人雜誌がある以上、矢ツ張り、告白屋の存在には意義がある。イヤ、さうした告白文を讀みたがつて居る婦人が大多數である以上、婦人雜誌が、極力その要求に應じやうとするのに無理はない。娼妓になるのは怪しからぬと叫んでも、國家が貸座敷業を許して置く間は亡びやうがない。貸座敷業を全廢せよと迫つても、それを要求して居る男子が多數では、到底、實行は不可能である。低劣な告白屋を葬れと怒鳴つても、婦人雜誌が、これを歡迎して居る間は、どうすることも出來ない。婦人雜誌が覺醒して、そうした材料を退けやうとしても、大多數の購讀者たる婦人の要求が、盛んだとあつては仕方がない。それも理窟だ。しかし、各雜誌が聯盟して、斷乎として、低劣な告白文を載せないといふことにすれば、必ずしも行はれないことではない。然るに、各雜誌間には、一種の聯盟といふものがありながら、それは單に、頁數や口繪や定價の制限といふやうなことに關するものであつて、內容の純化とか向上とかいふことに關しての聯盟ではない。從つて、彼等雜誌の經營者は、販路擴張の競爭方法を、人心の弱點を利用するといふ點に求めて、まづ力めて刺戟の強烈な記事を多くし、且つこれを最も大袈裟な廣告によりて宣傳し、極力誘惑の魔の手を擴げて、以てたゞ、儲けさへすればよいのである。單に、大廣告を以て脅すだけでは不十分だと考へた雜誌社は、更に一層濃厚なる誘惑色、脅威色を、婦人の我利々々根性に差向けて、一年分の誌代前納者には、縮緬の半襟を進呈します絹の肩紗を差上げますといふ。こんなにまでして、雜誌を賣らねばならぬものであらうか。否、こんなにまでして、賣らねばならぬと考へて居る人々は、雜誌の文化的意義なんどは、全然、問題にしては居ないのだらう。こうした、雜誌本來の面目とは、毫末の關係もない事柄に誘惑されて、半襟のお作に雜誌を買はうといふやうな婦人の多い間は、婦人は到底、男子の從屬物たる位置に、甘んぜざるを得ないではないか。

八　婦人雜誌の墮落か婦人の無知か

不良の活動寫眞が、如何に多くの人の子を、不良に導いたかといふことは、あまりに明白な事實である。不良な雜誌が、人心を不良に誘ふことも、亦疑ふ餘地がない。將來の婦人雜誌は、この點に着眼して、編輯せられなければならないこと、もとより言ふまでもない。而して、次第に進歩して、遂に、婦人雜誌といふが如きもの〻不必要なる時代、……婦人の知識趣味信仰の進歩と向上とは、男女共通に、同一の雜誌を讀み得る時代を持ち來さなければならない。それは勿論、婦人雜誌經營者のみの仕事でもなく、これが購讀者たる婦人のみの仕事でもない。しかし、最も多く、現代婦人の努力と奮鬪とに待たなければならないこと、言ふまでもない。かくて僕は、大に婦人雜誌の墮落を叫ばうと思つたのであつたが、それは畢竟、現代日本の婦人の、無自覺と無反省とを罵るといふ、極めて月並の結果に到達してしまつたことを、甚しく遺憾とせざるを得ないのである。（大正十一年二月十七日）

軍備縮少と國民生活の改善

法學博士　渡邊鐵藏

黎明會が生れてから丁度滿三年になる。大正八年福田德三、吉野作造兩博士の首唱によつて十數名の學徒が參加し一、日本の國本を學理的に闡明し、世界人文の發達に於ける日本人の使命を發揮すること、二、世界の大勢に逆行する危險なる頑冥思想を撲滅すること、三、戰後世界の新趨勢に順應して國民生活の安固充實を促進すること、の三大綱領を揭げて所謂黎明運動を起した。其年一月を第一回として爾後殆毎月東京市內に於いて黎明講演會を開催し時に或ひは大阪市名古屋市等にも出張して「デモクラシー」、選擧權の擴張、軍閥の排斥、平和主義、文化主義、國民生活の改善等に關して會員諸氏の熱誠の籠つた講演があり、毎回常に聽衆堂に溢れて眞に立錐の餘地も無い程の盛況を呈した。此講演會は僅々一年の間に於いて時々開催せら

れたのに過ぎ無いのであるが、常に聽衆に對して深甚な感動を與へ、且つ其の講演速記は黎明講演集の名の下に公刊されて廣く普及し當時の人心に尠からぬ影響を與へたものと思はれる。當時此の如き黎明運動が突如として起つたことは頗る注目すべき事實であるが、私は其の原因を一言にして云へば當時の廣い意味に於ける政治に對する學者の不滿が結晶して勃發したものであると考へてをる。そして又此運動が翕然として世間の共鳴する所となり、忽にして力強い輿論の喚起されたことはやはり當時の人心に潜むでをつた政治に對する鬱然たる不平が導火を得て燎原の火の如き勢を現はしたためであると思ふてをる。學者は元來をとなしい者である、輕々に政治を誹議するものでは無い、殊に猥に團體を作つて連續的に言論を以つて直接に公衆に對して叫ぶ如きことをするものではない。當時黎明運動が起り世間が之に共鳴したことに關しては其の際直接間接に各方面に於いて政治に與かつてをつた者の中、心ある者は或程度まで此の現象を注目し、又此の勢の生じたる理由其勢の趣く所について相當の考慮を費したことゝ思ふ。想へば此黎明運動の言論は當時の紛糾した社會狀態に對する安全辮であつた。政策、政治に對する不平不滿が公平眞摯な智識階級や純朴正直な國民の間に暗流となつて磅礴鬱積することは好ましからぬ社會狀態である。此暗流が言論として噴出する間は未だ疏通の途がある。幸にして適當の時期に噴出の響に目覺むることを得れば樋を通して暗流を放射し更に其の淵源を改修することが出來る。然るにもし不敏にして之を放置し停滯渋溜あまりに久しきに亘らしむれば忽然として横溢氾濫して「ノア」の洪水の大事を惹す虞がある。

黎明會は一年にして大凡其の言ふべきことを言ひ又多少の反響を得て其の運動を休止した。其後二年黎明運動起りてより三年の今日果して如何なる程度に於いて黎明會員諸君の叫むだ主張や、理想や、要求が是認され、確立し又は實現されて居るであらうか。黎明運動の起因の一部は當時の吉野博士の言論に對する頑冥者流の壓迫に對して同じ學者としての立場から福田博士が同情して擁護の方法を講じたことにあるのであつて、大正七年の歳暮神田に於いて吉野博士と浪人組との立會演説があつたことが導火線となつてをる。當時吉野博士の一身に危害の及ばんことを虞れられた程暗雲が垂れてをつたようである。私が黎明會に參加してをる事を知つた或先輩が私に對して世間には色々な偏狹な團體があり時に陰險猛烈な手段を取らんとする者がある故愼重注意をせねばならぬと注告されたので、其の頗る意外なのに呆れた程であるから、殊に吉野博士に對しては眞

實可成りの危險が附纒つてをつたのであらう。然るに黎明運動の旺盛となるや彼の自己免許の愛國論者や偏執な國粹論者の陰險なる頑冥思想や極端に固陋なる運動は間も無く影を潜めたようであるから、此點に於いては黎明會は其の三大綱領の第二である「世界の大勢に逆行する危險なる頑迷思想を撲滅すること」には一先づ成功したものと見てよからう。

然るに最近或方面の後援によつて國粹會が組織され全國に亘つて多數の會員を包擁し各地に支部を設け某陸軍中將を會長としたとの事であるが、新聞紙の傳ふる所によれば國粹會とは多くは博徒に近い者の團體であると云ふ。成程博徒も一種の國粹に相違無からうがそんな國粹は一向有難く無い。況んやそれを糾合して團結を作り何事を爲さしめんとするか。聞く所によれば昨年大阪市に同盟罷業の頻發するや國粹會員は揃の法被を着て白襷を綾なし手に手に鳶口を携へ其柄の手元に手拭を巻付け之を水に浸して戰闘準備を整へ數十名一團となつて罷工職工を威嚇したとの事である。又昨年夏九州を旅行した際に或所で聞いた所によれば其所には國粹會の支部が盛大なる發會式を擧げそして其の國粹會員の手によつて過激なる社會主義者を抹殺せんとする計畫があるとのことであつた。此の二つの話を聞いた時には私は自ら肌に粟を生ずるを禁じ得なかつた。同盟罷工を解決するには自ら慣例のお法がある、しかも出來得る限り第三者の干渉を避けることが肝要である。不幸にして力を以つて秩序を維持する必要を生じた場合には勿論警察力に依るべきであつて、もし私的の第三者の力を借り若くは第三者をして縦に力を用ひしむる如きことがあつたならば、それこそ警察の無力を表明し秩序の破壊を來すものである。萬一我國に或産業に關して全國的罷業があつた場合に全國の國粹會員が直接に罷工職工を攻撃するとになれば正しく内亂であつて由々敷大事を惹起する虞がある。或ひは革命に點火することにもならう。危い哉。又過激なる社會主義者の行動の取締についても全然警察力に依頼すべきである。惣ひ露西亞式の抹殺主義を取る如きことあれば人心を激成すること大にして却つて反抗と復讐によつて思はさる禍根を培ひ、社會の擾亂を誘發することになる。私は國粹會が眞實如何なる目的を有するものであるかを知らぬが、もし國粹會が右一例に示されたる如き活動をなすことを其の目的の一部となすものならば是正しく我國の秩序を破壊するものであり且つ我國内に恐怖時代を現出せしめむとするものである。斯の如き團結を奬勵するものあれば其者は我國内に内亂の種子を撒布するものである。國粹會が何等明確なる積極的の目的事業無くして數萬、數十萬の會員を募つて朋黨を成すことは親和一

體なるべき我國同胞中に殊更に隔壁を設くるものである。況や前掲の如き行動をなすに於いては其の國家に及ぼす禍害は「ボルシエビズム」と擇ぶ所が無い。私は密に國粹會が黎明會の所謂頑冥思想の再び發芽したもので無いことを切望する。

當時の黎明會員は固よりあらゆる點に於いて同一意見を有した者では無い、單に或點迄共鳴する者が三大綱領に掲げたる問題の解決に關して或程度の共同的運動を爲したのに過ぎないのであるから會員各自の掲げたる問題、發表せる主張に付いて他の者が常に徹頭徹尾同一意見であつたと言ふ次第では無い。然しながら其間自ら會員全部若くは少とも大多數が合致した主張が多々ある。就中選擧權の擴張、軍閥の排斥、軍備縮少、文化主義の唱道、殖民地に於ける武人政治の撤廢、朝鮮人に對する差別的待遇の撤廢等は其の主なものである。右の內選擧權に就ては其後間も無く例の三圓案が議會を通過して不滿足乍ら幾分擴張の主張が實現したのであるが、普通選擧は大正九年の議會でも十年の議會でも一蹴せられて此の大正十一年の議會には相當に強く論議せらるゝであらうが勿論否決される運命にある。軍閥は黎明會員の總べてが毛蟲の如く賤ひ、目の敵として衆口一致して非難排斥した對象であつたが、之ばかりはあまり手答へが無く制度の上にも政策に於いても何等の改良が無かつたようである。本年に入つて軍閥の總本山山縣公爵が薨去されたので將來は軍閥は大ひに其の勢力を減殺さゝることになるであらう。然し乍ら一面に於いて朝鮮の軍人政治、憲兵政治を改良し且つ朝鮮人の差別待遇を改善するの方法の講ぜられたことは喜ぶべき事實である。而して昨年末華盛頓會議に於いて海軍縮少の議纏り今や本年の議會に於いて我國の陸軍縮少の主張が上下兩院に於いて熱心に論議せられつゝある。加之他方に國民生活の改良、文化事業の促進等の問題が眞面目に議會に於いて唱導せられ、軍備縮少による經費節減の一部を之に充當せんとするの議論が最有力なることは誠に慶賀すべき現象である。然しながら勿論私は以上の改革が總べて黎明會の主張に基いて成つたと言ふ者では無い。是等は總べて或は古くより或は數年來我國に於ける一部の進歩的政治家と公平なる言論機關と、覺醒せる國民との間に了解せられ熱望さゝ主張されてをつた事柄であつて、是等の力が自然に結合して右の如き結果を生み出したのであつて、黎明會は最切迫せる時期に於いて偶然に社會思想の安全瓣となつて同一の主張をなしたのに過ぎ無いのである。

一般の歐洲大戰終了後戰爭の慘禍に對する呪咀と、將來の戰爭の機會と影響とを減少せしめんと欲する希望が期せずして各國民及一部の政治家の腦裡に浮び國際聯盟及び軍備制限の思想

となつて現はれた。國際聯盟の方は既に曲りなりにも形式が出來上つて種々仕事をしてをるようであるが、軍備制限の方は大正十年秋米國政府の主唱による華盛頓會議に於いて海軍縮小及び制限協定の形を以つて始めて問題となり既に大體の決定を得たようである。黎明會に於いても屢軍備制限に關する意見が發表せられ私自身も大正八年三月神田青年會館に於ける黎明會第二回講演會席上に於いて一言此問題に觸れてをる。

私は此數年來種々の經濟問題、又財政上の問題に就きまして種々の弊害を見ましたが之を匡正するには矢張り選擧權の擴張といふものがなければ解決が出來ないと云ふ悟りを開いたのであります。私は我國の將來の發展に就きまして政治組織の改善、經濟生活の改良の實現することを希望するのでありますが、それに就いて私は所謂分配の公平及資本の合理的使用といふことを主張したいと思ふのであります。其他社會政策に關する種々の問題、及租稅改革、其他日本陸軍の大整理と云ふこと、是等に就いて私は強い主張を有つてをります。』云々

次いで同年六月十四日大阪每日新聞社の招待によつて黎明會の同人數名が大阪市中央公會堂で講演會を開催したが其の席上に於いて私は『軍備と文化』と云ふ演題の下に一場の講演を試みた。私がかゝる演題を擇むだ理由は當時歐洲大戰終了して國際聯盟の唱導もあり各國に平和的氣分の漲つてをる時期に際して我日本の陸軍が傍若無人の態度を以つて陸軍充實軍團組織完成を名として二十億圓といふ驚くべき巨額の經費を請求せんとしてをると云ふことが新聞紙上に傳はつたので陸軍の此の如き狂氣の沙汰に憤怒、反抗の氣分が湧立つたのが動機である。

當日私は右の『軍備と文化』といふ題下に於いて、其の內容の要點を項目的にして順次に列擧すれば一、國家の歷史的發達と其の對峙、二、民族間の感情と利害の衝突、三、軍備の必要、四、戰爭の慘害、五、國際聯盟の理想と實際の調和、六、軍備制限の必要、七、軍費負擔の重大、八、軍用地の整理、九、軍隊教育の改革、十、軍人政治の危險、十一、國際的融和心の養成、十二、文化主義、等の事項に關して簡單に論及したのであるが、其の中軍備制限に關しては次のようなことを述べた。

『……現在の狀態におきましては國際聯盟が出來ると云つて、理想は何十年何百年後に達せられるか分らぬが、現在の事實に於いては或は近き將來に於いて爭が起るかも知れぬ。或は國際聯盟のない以前と同じような狀態に於いて國民間に反感が起り、或ひは利害の衝突が起るかも知れんのでありますから、總ての國民が其の軍備を撤廢すると云ふことには贊

成しないでありませう。又參謀部の撤廢と云ふことは危險であります。併しながら軍備をあまり積極的に大きくしてをくことは所謂侵略主義軍國主義になる處があるのでありますから茲に軍備を適當なる程度に於いて制限しようと云ふ考へが起るのであります。但他方に徴兵撤廢といふ問題がありますが、其れに贊成するかと問はれますとそれは疑問でありまして、徴兵を撤廢して日本の國防が出來るかと云ふ事に就きましては私は疑を懷くのであります。併しながら幸にして世界の海軍國に於いて一樣に軍備制限の方針が取られ、英國其他の國も軍艦の數を減す或ひは一萬噸以上の軍艦は作らない、今有つてゐる軍艦を潰して了ふ、或は貿易高或ひは其の國の有してをる商船の多寡に依つて適當の海軍力を養ふやうな方法を考案して或種の妥協と一致が出來れば徴兵撤廢も問題となり得るのであります。しかし徴兵制度の無い國が徴兵撤廢をなすことは自己には何の不利益も無いことでありますが、彼等自ら軍備制限について具體的の方法を示すにあらざれば徴兵制度を有する國が直に右の主張に應じて徴兵撤廢に贊成するわけにも參りますまい。しかし先程から申します樣に軍國主義的に若くは侵略的に用ふる内心を以て軍備を致すと云ふとは平常に於いても良くないことでありますが、斯の如く世界の氣運の向いて來て居る時期に於いては更に不可であると思ふのであります。其れは爭を起す原因となるのみならず國民の負擔を無意味に重からしむるものであると考へます。』……

『此の意味に於いて私は日本の陸軍に就いて兵數減少、徴兵年限短縮といふ意見を有つて居ります、云々』(拙著、『社會問題批判』二五四―二五六頁並びに九〇頁)

右の如く當時私は簡單ながらも以上の理由によつて軍備制限の必要を說いたのであるが、内心少くとも當時陸軍の提案せんとした狂妄的な二十億圓の陸軍擴充費請求に微力ながらも取敢ず極力反抗せんとしたのが當座の目的であつた。

然るに三年を隔てたる今日昨年末の華盛頓會議に於いて海軍協定の成立したる影響を受けて今や開會中の大正十一年の帝國議會に於いては上下兩院を通じて軍備制限の問題が熱心に論議せられ、殊に下院に於いては國民黨が先鋒となりて、犬養氏自ら陣頭に立ち師團半減、兵役年限短縮を高唱し歩武堂々として勇戰してをることは誠に目覺ましく國民は眼を皿の如くにして其の成行きに囑望してをるのである。彼の軍閥盲目にして若し今尙「陸軍有つて國民無し」といふ態度を改めざるに於いては軍閥に對する國民の怨みは盡きざるものがあるであらう。政友會が突如として陸軍縮少建議案を提出したることは國民の意外と

する所であるが同時に又國民の大ひに喜悦する所である。大岡育造氏の提案說明演說は善きことを言ひたり善きことを聞きたりとして國民は皆心に銘じて忘れず、鬼は居ず大政黨の力により て容易に當然解決さるべきものとして期待して居る。曲らずに進まれよ。吉野博士も五日間に亘つて東京朝日新聞紙上に於いて帷幄上奏を辯難せられて居る。軍閥は强よし、政黨國民總懸りにあらざれば力敵ふまじ。他の問題については爭ふとも對軍閥の問題については政黨皆仲好くせられたし、力强く技ある相手なれば土俵際に打棄らるゝことは殘念之に過ぐることなく、後援に力瘤入れし國民のみじめさは此上無きことである。

私はづい分軍閥に對して惡口雜言を吐いたようである。然しながら　私は否日本國民は決して日淸、日露の戰役に於ける日本軍人の比類無き忠勇に對して感謝、崇拜の念を忘れるものではない、又平常に於ける帝國軍人の艱苦、精勵に對して同情、尊敬の感を抱かざるものではない、又國難に當つて逡巡する怯懦者でもない。しかし戰功、勤務、戰備と軍備の問題とは何等交涉無き全然別個の問題である。時機を察せず過度の軍備を保持し國民に無用の負擔を加重し、偏頗なる制度を以つて屢々政治を過らしめんとする軍閥——將校中の頑古、最高者の一部——を攻擊することは何等帝國軍人を裏切り之を侮辱するものではない。

軍備の過大なることは當然軍費の過大を意味するものである。通常の場合に於いても各强國の軍備に費す金額は豫算の大部分を占むるものである。然るに過大の軍備をなして國民に無用の經費を負擔せしむることは、軍費の負擔の重きに苦める國民をして更に馬鹿らしく感ぜしめ遂に軍費負擔を回避せんとするに至らしむるものである。最生產能力ある壯丁を兵營に割據せしめ、且つ國民の生活と文化事業に向くべき資金を軍備に費消する如きことは、成るべく最少限度の必要に止めねばならぬことは言ふまでも無いことである。制限し得べき軍備、節約し得べき軍費あらば國民のために出來得る限り之を節約することに勉めねばならぬ。それを節約せぬ返さぬと言ふならば我利、貪欲の譏を免れぬ。華盛頓會議による海軍協定の結果として我國の海軍費に當然巨額の節約を見る筈である、又今議會に於いて國民黨の主張を納るれば陸軍費に於いても巨額の節約を見る筈である。其節約額は海軍は或は一億五千萬圓と稱せられ一億圓と言はれ最近には或ひは五千萬圓と言はれて居る。陸軍は五千萬圓と稱し又僅かに千五百萬圓と言はれて居る。整理の方法及善後策によりて陸海軍共に正味節約額に多大の相違を生ずることは勿論のことであるが、第一に吾人の陸海軍に對して切に

希望する所は軍機の秘密に隠れたり、又素人の軍事智識の缺乏に付け込むかりして、正眞の節約額を示さず、國民を愚にし、國[illegible]不誠實、國家に對して不利益の所爲をなさゞることである。

偖て將に實現せむとする[illegible]によりて陸海軍費の節減によりて生ずる豫算上の餘裕は[illegible]、[illegible]之を如何なる方面に轉用すべきか。之我國に於ける當面の政治問題として又最も國民の利害に密接なる重要問題と[illegible]に考慮すべき問題である。此問題は勿論今議會に於ける貴衆兩院の論議の焦點となるべく、殊に爾今政黨の政策として堂々相戰ひ得べき中心問題となり、又國民が各方面に於いて各々其の思想と利害に基きて甲、乙の議論を交ふべき興味ある問題である。世間既に此問題に關して種々の意見が發表されたようであるが、私にも亦一個の私見がある。節約可能金額の略決定せさる間は正確なる議論をなすことは固より不可能であるが大體の方針を言へば節約金額は左の順序によつて之を充用すべきである。

一、陸海軍節約により退[illegible]の已む無きに至りたる軍人に充分なる一時的給與をなすこと。

二、廢兵を大いに優遇すること。

三、軍人遺族の待遇に足らさる點あらば改善する事。

四、現役軍人にして待遇不良なる者あらば之を改善すること。

五、右の外廣義の軍人にして特に不利益なる取扱を受け居る者あれば之を改むること。

六、地租、營業税、及び地方交通機關の交通税を漸次適宜に地方税として移讓すること。而して地方は其地方の情況及事業必[illegible]の程度に應じて是等の租税を適當なる方法及限度に於いて存續徴収し、又は更に是等の租税を改革したる類似の租税を課し、若くは全く是等の租税を課せさることを得。

大體右の如き[illegible]を以つて陸海軍費の節約によつて得たる經費を以て此節約のため特に不利益を蒙りたる、又は從來逆遇せられたる軍人を補償且優遇し、[illegible]に勿論[illegible]を生ずべきを以つて、之を以つて涸渇窮乏の極に達せる[illegible]財源に充て、地方は之を以つて其の欲する所に應じて、住民の生活に直接の便宜、幸福を與ふべき地方事業即ち國民教育其他の地方教育機關の改善、衛生、交通其他の都市改良事業の完成、都市社會事業、市民娯樂機關の設備等を漸次に成就することを得るに至るであらう。又地方の情況によつては一部の減税をも實現することが出來る。此種の地方事業の完成即ち市民生活の改良に即ち國民生

活の改善、國民文化事業の遂行其のものである。生活の改善、文化事業の設備は漸次に國家の力よりは地方の力を以てする方が有效に迅速に行はれ且つ地方の民度と要求適應するの程度に於いて理想的に且つ實際的に行はれ得るのである。要するに國民生活、市民生活の窮迫せる今日私は陸海軍當局否軍閥が大に其の襟度を廣くして國民の幸福のために又國家の利益のために國防に差支なき限度に於て徹底的に軍備制限を行ひ且つ充分の節約金額を國民の目前に拈出せむことを切望して已まないのである。（完）

四國協商并に極東協約の成立と對支經濟政策

法學博士　堀江歸一

歐洲經濟の概觀

歐洲諸國の經濟社會は今や歐洲戰爭の餘殃を受けて、疲弊困憊の極に達し、尋常一樣の手段を施したのでは、到底短日月の間に其復活を期待するを得ない。一方に北米合衆國は戰爭に關係して、自國の經濟に有利なる影響を蒙つた次第であるから、歐洲諸國とは自ら地位の異なる可き譯であるが、歐洲諸國に對して持つて居る百十億弗の債權が果して回收さるゝかどうかと云ふ瀬戸際に立ち、此點に於て甚だしき不安を感じつゝあるばかりでなく、歐洲諸國の財力の恢復しない間は、歐洲に對する合衆國の物資の輸出は自ら困難と爲り、其結果戰爭時代に擴張された産業上の規模を維持するを得ないことゝ爲る。斯る狀態であつて見れば、國際聯盟の規約に依つて、世界の平和が保障され、更に華盛頓會議の決議に依つて、海軍が縮小され、從來國際間の平和に對する一の脅威であつた武力的競爭の制限さるると云ふのは、戰後に經濟的能力に缺陷を來した關係諸國としては、當然爲す可き所を爲したものと認めなければならぬ。

既に華盛頓會議の決議に依つて、列國が海軍の實力に實質的

制限を加へ、主力艦の或るものを廢棄し、未成艦の建設を中止し、加ふるに海軍休日を實行する以上は假令ひ一方に補助艦の建造に依つて、若干の經費を要するとした所で、財政に一當の餘裕を生ずることは論を俟たない、此餘裕が諸國に於て、如何なる方面に供されるであらうか。政府が歳計上に生じた餘裕金を共債經費として、國力培養に資する事業に投入することも其一法であると共に、之を財源に充てゝ、租税殊に戰時增徵され、又は新に賦課された租税を減廢し、又は戰時發行された公債を償還し、斯くて民間資本家に事業經營に必要なる資金を與へることも、他の一法である。孰れにしても、軍備縮小に依つて、從來軍事的施設に固定し居つた資金が其方面から、解放されたならば、歐米諸國は必ず之を富源開發の用に供しなければならぬ。諸國が富源を開發するには、內國に於て土地なり、地力なりに關係ある諸種の產業を起すことも、一策たるを失はないが、歐洲諸國に於ては、今や空中から窒素を得ることを工風しなければならぬ程に、天然力に缺乏を來して居る、合衆國は從來天然力の豐富を以て、中外に稱されたが、十餘年前から如何に天然富源を保存す可きかが、當面の問題に上り、今や原料品輸出の制限を必要とする議論すら、行はれつゝある次第であつて見れば、歐米諸國が戰後の經濟を復興する爲めに、富源を開發する必要に接する場合には、必ず力を東洋の未開國殊に支那に伸張するものと想像されるのである。

經濟的帝國主義の利弊

由來一國が他國に向つて、經濟的勢力を伸張させる場合には、之を自然の發展に任せて、貿易なり、金融なりの關係を結ぶことを以つて、滿足しない。必ず(一)或る一ッの國の領土に對して、或る支配權を挾ち、(二)他諸國の其國に來つて、競爭する勢を遮斷し、自國の經濟的勢力を獨占的に、又優先的に其國に扶植することを要訣とするのである。是等の二條件を眼目として、一國の經濟を外に向つて、發展させるものは、即ち經濟的帝國主義であつて、永い間歐洲諸國の對外經濟策は此主義に依つて支配されて居り、合衆國の如きも、十九世紀末に於ける弗拉賓の領有を發端として、同樣の政策を試みるに至つた。諸國が最も露骨に此政策を實現する目的地としたのは、即ち支那であつて、日清戰爭後日本が先づ支那の領土割讓の先驅と爲り、支那の軍事上に、將た又政治上に無力である事實を暴露してから、獨逸、露西亞、佛蘭西の如きは、盛に支那に向つて、領土上の野心を逞うした。即ち諸國が支那の領土を利用しようとする場合には、先づ自國の認めて、有利であるとする或る領域を

支那から租借し、自國の政令を其處に布き、自國民の移住なり、資金の放下なり、事業の經營なりに、出來る限りの便宜を與へ、他國民の移住、放資、營業に對しては、表面上自國民に對すると同等の待遇を與へることにしながら、尙ほ裏面に於て、差別を設け、排他的政策を實現して、結局自國の權力範圍を擧げて、自國經濟的發展の獨壇場たらしめることを主眼とするのである。卽ち既往幾年の間を通じて、經濟的帝國主義の行はれつゝあつた際、諸國は專ら何を武器としたかと云へば、未開地に於ける鐵道の敷設、未開地の港灣に對する海運の聯絡、未開地に於ける鑛山の開掘、森林の採伐、未開國に對する資金の融通の如きは其重なるものであつて、其間に自國民の利益を發揚して、一方に他國民の利益を排擊することに努めたのである。

之に對抗する爲めに、英米兩國は門戶開放、機會均等を對支經濟政策の眼目とす可きことを主張し、獨露兩國の武斷、獨占並に偏私を方便とする政策に對抗しようとした。然し斯く對支經濟政策の方面にだけ、比較的公平に見へる主義を宣明する英米兩國は果して此主義を徹底して居るであらうか。英本國だけに就て見れば、聊か之に適するやにも見へるが、其殖民地は極端なる排他主義を他國に殊に東洋諸國の移住民に適用して居る。而して支那に於ては、英國經濟的勢力の根柢頗る強く、之に據つて、門戶開放、機會均等を主張するが如きは、自國に取つて、甚だ好都合の處置であつた。合衆國の如きも、既に布哇や弗拉賓に根據を持ち、殊に豐富なる資金を擁して、之を支那に放下する地位に居つて、門戶開放、機會均等を必要とするのも、亦異とするに足らない。而して英米兩國の斯る主張や、聲明だけでは、當時殺到する露獨兩國の經濟的侵略に對抗することが出來ず、露國の滿洲に於ける、獨逸の山東に於ける勢力は牢として拔く能はざるの趣を生じた。日露戰爭は露國の勢力を滿洲から排除し、續いて日獨戰爭は獨逸の勢力を山東から一掃するを得たやうなものゝ、日露戰爭の戰捷者たる日本が滿洲に於て露國の領有する權利を繼承したのであつては、諸外國や、支那の眼から見たならば、恰も門前の虎を逐うて、後門の狼を迎へた感なきを得なかつたであらう。然らば山東に對する日本の態度が支那を始め關係諸國の猜疑を惹いたことも、亦怪むに足らないのである。

對支借款と列國

近年支那に對する列國の經濟政策中、步調を一にする趣を示したものは、借款の一事であつて、六國借款團から、四國借款團に變化するやうに、內容には多少の相違を生じたとしても、

又合衆國は往年ウイルソン政府の成立と同時に、借款團との關係を絶つような變事があつたとしても、尙ほ諸國は支那に對して、借款の交渉に應じ、又資金を調達するに就て、協同の態度を取り、經濟借款を主として、政治的借款を斥けることゝ爲り、依然今日に及んで居るのである。然し是れと云つても從來歐米諸國が互に競爭して、對支借款に競爭する間に、所謂以夷制夷の策法で、對手者を操縱するに獨得の手腕を有する支那人に乘ぜられて、不利の條件を承認せざるを得ないように爲つたり、又不確實なる擔保物を受入れたり、又或る一國の利權が他國の知らぬ間に伸張したりする弊害を抑制する意に出でたものであつて、眞の協調は到底之を認められない。合衆國の借款團の外に立つことの如き、而して同國が今日世界列國を通じて、對外放資に最も有利なる地位を占めて居る如き、借款團の實効の必ずしも大ならざる事實を表明するものである。諸外國の内には、或は我國の財力に關する評價を誤算し、日本こそ借款團を脱退して、支那に大規模の放資をする計畫を持つものであると考へたかも知れないが、日本としては合衆國が何か支那に對し或る經濟的企劃を施するものではなからうとも思はれる。日本が常に滿蒙方面に於ける特殊的地位を主張したり、又高橋是清子が昨年一部に示した對支意見に於て、借款團脱退論を鼓吹したりしたことが自ら外國人に傳はり、彼等をして何か日本が支那に獨占偏私を主とする經濟政策を實現することに工風して居るものではあるまいかと云ふ疑惑を懷かしめざれば已まないであらう。日本に於てこそ、高橋子の非常識であり、又餘り賢明でないことは世間公知の事實であつて、同子の對支經濟意見の如きに重きを置く者はあるまいが、事情不案内の外國人から見れば、假に一國の首相であり、藏相である。斯人が對支借款團に對して、日本の脱退を必要とする意見を持つとあつては、外國に種々の疑惑を生ずるとは、敢て異とするに足らないのである。

斯の如く考を廻らして行くと、從來列國の對支經濟政策は一方には門戸開放、機會均等と云ふ制限を蒙り、他の一方には借款に關する態度の統一と云ふ保障を付せられ、是等の主義の下に、歩を進めるものと了解された。然し是れは表面の事であつて、實際には經濟的帝國主義を支那に施し、支那の領土に向つて、獨占偏私の政策を施さうとする趨勢の列國の間に著しかつたことは、論を俟たない。此の勢の極まる所は何であるかと云へば、必ず武力を用いて、自國經濟力の及ぶ範圍を擴大し、又之を保護しようとする一事に外ならない。斯くて一國の爲さんとする所が恰も他國の爲さんとする所と抵觸したならば、其間に戰爭の惹起されるのは、當然の勢である。支那の領土は單に地

理的に云へば、三百九十萬平方哩であつて、廣大無邊と稱さゞるを得ないが、然も諸外國が資本を放下し、又事業を經營する場所は或は開市場とか、或は開港場とか、或は鐵道沿線附近の或る場所とかに限られるのであり、一方に支那政府自身國の領土を擧げて、外國に開放することを好まない以上は、必ず支那の領土に向つて、獨占偏利の策を施さうとする國の間に、利害の衝突を來し、結局戰爭に依つて、事を決するに至るのは、睹易き所である。經濟的帝國主義は之を實行するには、領土の占領、利權の獨占、他國勢力の排斥を必要とし、結局國際間に紛爭の種子を蒔き、戰爭の端を發するに至るのである。而して今日歐洲戰爭の結果として、歐米諸國の經濟社會が甚だしく疲弊し、之を恢復するに就ては、先づ第一に原料品の供給の豐富であり、又確實であることを必要とし、此見地から自國内に產出される原料品の供給をも、自國に留保する主張さへ行はれて居るとすれば、諸國に財力に餘裕の存する限り、支那方面に向つて、經濟的帝國主義を實行し、以つて原料品の供給を確保する政策に出る可き狀況に居つたのである。

四國協商と九國條約

斯る趨勢が進む所まで、進んだならば、歐米諸國が歐洲戰爭の爲めに、財力に疲弊を感じて居る間は兎に角として、少しでも此點に餘裕を生じたならば、直に往時の經濟的帝國主義を復活し、東洋の天地をして何時修羅の巷たらしめるかも知れない。一時的か永久的か、其孰れであるを問はず、平和の思想の浸潤し來つた歐米諸國は斯の如き狀態の出現を以つて、堪へ難き所であるとし、國際聯盟に次いで、華聖頓會議を以つてし、同會議に於て、或は四國協商を生じ、支那に關する九個國條約の現はれるに至つたのである。

四國協約の規定する所は甚だ簡單であるが、要するに締約國をして各自太平洋方面に於ける其島嶼である屬地並に領地に關する權利を尊重させ、太平洋方面に起つた爭議に對しては、締約國の共同會商に依つて、之を決定し、締約國以外の國の侵略的行爲に依つて、上記の權利の脅威された場合には、締約國は之に對する措置に就て、交渉を遂げることを約定したのである。故に此約定にして誠實に遵奉され履行されたならば、或る一國が支那に對して、領土上の野心を逞うし、續いて經濟上に獨占偏私を行ふ國があつた場合には、締約國の聯合を以つて、其國を膺懲する次第と爲るものと考へなければならぬ。斯くて戰爭の勃發を未然に防ぎ、戰爭の原因を排除するに至るのである。更に四國協約を具體的にしたものが支那に關する九國條約で

あつて、支那に於ける門戸開放機會均等の主義を聲明し、其妨碍と爲る可き一切の優先權、優越權、獨占權を排斥することゝしたのである。斯る形勢と爲つたからには、日本が日露戰後なり、日獨戰後なりに於て、支那に得た特殊の權利を放棄するに至つたことを以つて、已むを得ざることゝしよう。然らば何故に日本は此機會に於て、列國殊に英國などの支那に有する一切の權利を放棄させ支那をして歐洲諸國の爲めに何等傷けられなかつた既往の狀態に復歸せしめることを主張しなかつたのであらうか。固より日本が斯る主張をするには、大なる決心と覺悟とを要する、内に高橋内閣の如き、唯十個の頭顱を雜列したに過ぎないものが政局を支配し、外に使する者が國民と沒交渉なる貴族や、軍人輩であつては、斯る望を繫ぐのは、甚だ無理であるかも知れないが、日本が斯る公明であり、又正大である主張を提げて、列國環視の間に高唱してこそ、正義を重んずる國として、他の尊敬を博するを得るであらうし、又眞實支那官民をして信頼せしせるに足る次第であるのに、我國の當局者に此信念もなければ、氣魄もなく、諸國が支那の領土を侵せば、我國も之に倣い、諸國が領土上の權利を將來放棄することを約束すれば、我國も亦之に從い、現に有するものまで、惜氣なく放棄すると云ふのは、如何なるものであらうか、私は我國の支那に於ける特權放棄を遺憾としない、唯何が故に之を機會として、他の諸國の支那に有する特權を既往に遡つて、撤廢せしめることが出來なかつたであらうか、此一事を以つて遺憾とするのである。

門戸開放、機會均等の效果

前記支那に關する九國條約は門戸開放、機會均等の何ものたるやを明にする爲めに、條約要領の第三に於て、

（イ）支那の如何なる特定の地域に於ても、商業或は經濟の發展に關して、自己の利益の爲め、何等一般的優越權を設定せんとする協定を求めず、又其人民の斯る協定を求むるを支持せさる可し。

（ロ）他國民が支那に於て、適法なる商工業を營むの權利又は其種類の如何を問はず、公共企業を支那中央政府若しくは地方官憲と共同經營する權利を奪うが如き、或は其規模期間若しくは地理的廣袤に依り、機會均等主義の實際的適用を無效に歸せしむるが如き、如何なる獨占權若しくは優先權をも求めず、又其人民の之を求むることを支持せさる可し。

と云ひ、更に其第五に於て、

支那政府は支那に於ける全鐵道を通じ、其種類の如何を問は

す、不公平の差別待遇を爲し、又は許容せざる可きことを約す。

支那國以外の締約國は前記鐵道中右諸國又は其國民が許與又は特殊協定其他に基き、支配を爲し得る地位に在るものに關し、前項と同趣旨の義務を負擔す可し。

とした。然らば此條約の履行される以上は、支那全土は眞に列國の爲めに開放され、何等の獨占、何等の偏私あることを許されない。如何なる國も支那に對しては、總て同一の地歩に立つて、自由の競爭を試みるに至るのである。斯る協定が華聖頓會議に於て成立し、殊に英米兩國の間に夙に豫備の交渉の纏まつて居つたのは、何故であらうか。之を解して斯く論じる者もある、曰く歐洲戰爭中歐米諸國が財力のあらん限りを戰爭の方面に傾注し、支那を顧みる遑のなかつた隙に乘じて、日本が支那の到る所に其勢力を擴張し、扶植した、今後之を利用して、如何に歐米既得の地位を動搖させるか、測り知る可からざる譯であるから、此氣勢を殺ぐ爲めに、斯る條約を締結したものであつて、其意の存する所は要するに日本の權勢掣肘に外ならないのであると。日本が從來滿洲方面を根據として、對支經濟の發展を謀つたり、又は滿蒙に於ける特殊的地位を高唱したり、又は山東に於ける利權に着目したりする爲めに、斯る誤解を列國の間に招いたものであるが、日本人としては、支那に於ける日本の地位が歐洲戰爭の間に上進したとも思はれないのに、外國人をして何か日本が支那を壓倒するような權勢を揮うと云ふ疑惑を懐かせるのは、日本人の言論行動に不謹愼なるの致す所であるか、孰れであるを問はず、兎に角華聖頓會議の決議が支那に及ぼす效果の最も大なるものは、列國と支那との間に結ばる可き經濟上の關係を公平無私の下に置き、又晴天白日に曝すことゝ爲つた一事である。如何なる國も支那に資本を齎し、技術を用いる以上は、支那の富源を開發し、之を世界全體の用に供する、斯く開發された富源を一國に吸收するには、其國の支那に對して結ぶ經濟上の關係に依る可きものであつて、其間に政治上の權勢を挾ましめないことゝする主義が確定したのである。即ち或る國が支那に於て或る種類の富源を開發したとした所で、其富源は如何なる國に向つて、如何なる方法に依つて、供給されるであらうか。之を純粹の經濟的法則の働く儘に任せたならば、或る一國は支那に或る物資を輸出し、或る勤勞を提供し、又は資本や、企業能力を醸出したから、其れ等に對する代償として、支那に開發された富源を輸入するに至るのであつて、何等の對價代償なくして、輸入される譯もなければ、對價代償を超越して、輸入される道理もないのである。然るに從來の如く

諸國對支經濟關係を律する場合に、政治上の權力を以つて、經濟上の關係に壓迫を加へるやうなことであつたならば、或る一國の對支企業や、對支放資は必ず其國を獨占的境遇に居らせ、又偏私的地位に立たせ結局他國の嫉視反目を招くのは勿論、自國一個の利益を擧げる爲めに、或は諸外國は勿論、時に支那自身の利益を傷けるに至る虞れなきを得ないのである。然らば支那に關する協約が此危險を一掃したことは、世界平和の爲めから云つても、支那開發の上から見ても、共に喜ぶ可き所である。斯の如く支那の富源を開發するに就て、列國の間に一切の差別や、殊遇なからしめる、而して開放された天然富源の利用に就て、列國盡く其惠に浴さうと云ふ機運は必ずしも華盛頓會議に臨んで始めて起つたものではない、其以前卽ち歐洲戰爭の終末に際し、軍閥を基礎とする偏私の政治の廢棄されなければならぬと云ふ點に就て、英米兩國識者の意見の略ぼ一致した當時に於て、其源を發したものであつて、華盛頓會議の決議の如き、偶々其れが外部に發したに過ぎないのである。果して今日我國の首相である高橋是清子が原內閣に大藏大臣として其の在職中、大正十年五、六月の頃、對支政策に關する意見書を一部の人士に配布し、其內に於て、我國の利己偏私を根據とする日支經濟同盟締結の必要を力說したと云ふが如き、何とした目先きの見へぬ話であらうか、目先き所か世界の形勢の現に動きつゝあることを辨ぜざる盲人の出鱈目と評するの外に道はないのである。（拙著、世界の經濟は如何に動くか第四章參照）

支那自身の政策如何

唯此際に私が一言しなければならないのは、支那の經濟思想が今日を機會として、一新されることを必要とする點である。私は數年前北京に客寓した際、隨分多數の支那人と會見する機會を得た。其內には權勢並ぶ者なき當時の大官もあつたし、時運の到來を覦ふ前大官もあつたし、處士橫議を敢てする民間識者もあつたが、彼等の經濟思想には殆ど一ツの共通する病弊とも見る可きものがあつた。其れは自國に産出する天然富源の外國に輸出されることを不可なりとし、寧ろ之を內國に留保することを得策であるとする考であつて、此考が根柢と爲つて、何時までも米穀の輸出に對する禁令が行はれ、更に鐵鑛の輸出や、其外國の資本並に技術に依る開掘を禁止するに至つたのである。斯る思想は若しも支那の工業が相當に發達し、外國同種の事業と競爭するやうに爲つた場合に自國に於ける原料品供給の豐富を以つて、他國に當らうとか、又は自國工業の存する缺陷を補はうとか云ふやうな必要に接したならば、或は其鼓吹さ

れることを至當とするかも知れないが、今日の支那に於て突然富源の開發や、其海外に對する搬出を禁止して、何として農業國たる長所を發揮し得られるであらうか、又他日工業國たる段階に進むに必要なる資本を吸收する道を求め得られるであらうか、支那政府が斯る反動的政策を實行したり、又政府をして此政策を敢てせしめるような反動的思想の民間に存在したりすることは、四國協商や、極東協約に依つて、支那を中心として、國際共通經濟の行はれようとする今日に於て、大なる妨碍を及ぼすものであつて、是等の協商や、協約の趣意を徹底せしめるには、支那人の經濟上に於ける知見の改新されることを必要とするのである。支那人の思想が此處まで進まない限り、四國協商や極東協約の實効は實際に之を舉げるに、困難を免かれないであらう。

日本人の反省す可き所

日本が從來動もすれば支那に獨占的偏私を主眼とする政策を行うとしたのも、必ずしも軍閥者流の僻見我慾にのみ依るものではなく、時には之に依つて、自國經濟上の弱點を補足し、經濟的立國を安全にしようとする必要に胚胎したのは、蔽ふ可からさる事實であるが、其爲めに支那人の反感を招き、歐米人の非難を受け、日本人としては事實對支經濟政策に行詰まつて來たのである。此際に四國協商や、極東協約が成立して、諸外國と共に對支經濟政策を一新しなければならぬとすれば、是れは日本に取つて誠に好都合であつて、何等悔むを要しない。唯從來或る方面に於て、獨占であり、偏私であり、又は是等に近づからとして居つた我國の政策を根本的に一新して、他國と共に自由平等の基礎に進んで行かうとするに就て、我國に之を進めるだけの成算があるであらうか。私が此點に於て第一に必要と考へるのは、我國の對支態度の飽くまでも公正なることとの一事である。從來日支兩國の關係を見ると、決して吾人の希望するが如き圓滿なるものでなく、支那人の間には、常に排日的觀念の强烈なるものがあり、其れが外部に發して、排日的所業と爲ることを失はなかつた。此點に就ては、支那人が遠交近攻の考を以つて、國際間の關係に臨むことも、與つて力あるであらうが、日本が從來の如く武力を方便として、支那に經濟的帝國主義を行はうとして已まない以上は、支那人が日本の勢力と云へば、其政治的方面のものであつては勿論、經濟的方面のものであつても、尙ほ之を排斥しようとするのは、當然の理であつて、公平に考へたならば、日本自ら支那に於て、排斥され可き理由を作爲して居つたとも見られるのである。武力を以つて他國を侵略する、

其意思に反して、他國民をして一國の政令に服從せしめる、武力を笠に他國民の手足を緊縛して、之を平和と稱するような「ミリタリズム」を背景とした政策の總て間違であると了解された今日に於ては——或は之を間違としない一部階級の人々も公然斯る武斷的主義を口外するを得ないように爲つた今日に於ては、我國の對支政策なり、又は我國民の對支觀念なり、根本的に刷新されなければならぬ時機に到達した次第である。斯の如くして日支兩國民の間に、眞實の理解が生じ、又敬愛の念の起らない限り、幾ら支那全土が諸外國に向つて、開放され、日本も亦諸國と相對し、相競うて、對支企業を計畫しても、常に支那人から猜疑の眼を以つて、眺めらるゝ結果、其成効を收めるに困難を感ぜざるを得ないであらう。

今回の華盛頓會議に際して、支那政府は治外法權の撤去や、關税權の獨立や、其他種々の要求を提出し、其多くは原則として列國の承認を得たようであつた。原則として承認したものを何時に爲つて、實行上の承認を與へるものであるか、此點に就て、列國の間に如何なる附帶の議論が行はれたか、私の知らんと欲する所であるが、日本の如きは、是等の點に就て、支那に充分の援助を與へ、一日も早く原則上の承認の實行上の承認と爲る機運を醸成することに努力す可きものであると考へる。

私は以前から列國が自國輸出貿易の利害にのみ着眼して、如何なる場合に於ても、支那の關税率引上に反對する態度を取ることを以つて、甚だしき陋態であると認めざるを得ない。支那財政の紊亂を極めつゝある現狀に對して、支那政府に責任の負う可きものゝ多きことは、私の斷言するに憚らない所であるが、一方に之を整理して、健全なる基礎の上に置かうとするには、先づ支那政府の爲めに、收入を豐にする道を與へなければならぬ。支那政府が其道として關税率の引上に依つて、關税の增收を求めようとすると、列國が直に之に反對すると云ふ有樣であつては、列國自ら支那の財政整理に對して、誠意を缺くものであると評されても、一言辯解の辭なきに苦むであらう。殊に從來の關税引上に於て、常に日本が反對の先鋒であつたとは、如何に日本が對支輸出を以つて、貿易上に重きを置くとは云ひながら、日本人の本性、卑吝であり、利己的であることを示すものとして、私の最も不快とした所であつた。私は考へる、日本の如き從來外國に關税權を束縛されて、大なる苦痛を嘗つた經驗を持つ國は自ら率先して、支那の爲めに關税權の束縛を解いて遣るのが當然であつて、斯の如くにして國際間に正義が維持されるのである。若し夫れ支那の關税增率に依つて、對支輸出が困難に爲つたとしたならば、日本の如きは、從來內地に於て能

營されて居る企業の一部を支那に移し、支那に於て產出される原料の豊富を利用し、或る程度まで賃銀の低廉なる支那人の勞働力を使役し、支那人の需要するだけの物資は支那內地に於て、產出する方針に出なければならぬ。斯う爲つてこそ、日支兩國の經濟的共存關係が成立し、一國の孤立經濟から國際間の共通經濟に進む次第と爲るのである。今度の華聖頓會議に於て、支那の輸入稅率を現實五分に引上げる協定が九國の間に成立したことの如き、年來支那の希望する所の一部分を實現したものに過ぎない。關稅收入を增加する見地から考へれば、稅率の五分に止められ可からざるは勿論であり、一方に關稅增率に就て、多くの國が活模範を示して居る今日に於て、支那をして何時までも現實五分の輸入稅の下に滿足せしめるが如き、至難の業としなければならぬ。支那輸入稅の增率を見越して、日本の實業家が之に對する政策を決定し、着々實行の機運に就かしめる時は、正に今日に於て到達したものと認められる。從來の如き外交上の壓力殊に武力を背景として壓力に依賴し、自國の便利とする所を他國に强要する、而して他國の利害如何は全然之を不問に付する非人道的政策は存立の價値を失つたのである。

國際間の平和が高唱され、軍備の制限が主張され、國際聯盟を始め種々の協約は戰爭に依つて、國際間の爭議を解決する方法を沮止することゝ爲つて來た今日、尙ほ經濟政策が國家と云ふ狹い範疇を脫することが出來ず、保護政策とか、國家自給策とか云ふ名の下に、動もすれば孤立經濟の行はれようとするのは、何たる矛盾であり、又何たる自家撞着であらうか、私の許するに言葉を知らざる所である。此際に極東に於ては、支那を中心とする國際共通經濟の行はれるに至つたのは、假令い其れが條約上の結果であつて、各國自發の意思に依るものでないとしても、吾人は經濟政策上に認め得た曙光として、之を迎へるに躊躇しないのである。

登録　鳩　商標

事務ノ澁滯ヲ來サヾル**筆**而モ縱橫酷使ニ耐フ

回梅品八斗才　壹本　廿五錢　回貮號自在　壹本　七錢

氣持ノ善キ光ト漆黑ノ**墨**而モ芬芳ノ香氣アリ

回梅印紅花墨　一丁半形　壹圓　回わか衆　一丁半形　貮拾錢

鮮カニ氣持良クのびる**繪**具而モ色彩絢爛ナリ

回十二色絞出し　壹圓拾錢　回三號六色入　廿五錢

事務ノ進捗ハ炷ノ薫**香**而モ終日執務ニ倦ズ

回梅ゐ香壹入　四拾五錢　回あかつき一把　參拾錢

熊谷鳩居堂

京都寺町　振替＝大阪六三八

東京銀座　振替＝東京二〇七〇

目錄御請次第送呈

陸軍縮少論

一、陸軍縮小の可否と其の難關

水野廣德

(一) 時代の急轉

不完全ながら、不徹底ながら、海軍の縮小制限は華府會議に於て國際的に協定せられ、今後十五年間世界に製艦競爭の脅威より免るゝことが出來た。次に解決すべきは陸軍問題である。凡そ原則として一國の軍備は外國と相對的なりとは云へ、陸軍と海軍とは其の間に多少の相違がある。即ち海軍は世界的に相對なるも陸軍は隣境的に相對である。之を以て海軍の縮小は世界的に協約を要するも、陸軍は隣國の狀勢に應じて國內的に處理することが出來るのである。佛國が對獨關係政策の爲め八十萬の大陸軍を備へゐるも、此れ佛國としての問題に過ぎずして、日本としては之を口實とし之を眞似るの必要は更に無いのである、歐洲大戰の終局と強露帝國の崩潰と支那民國の國狀とに照らし、我が陸軍は夙に整理せらるべきものであつた。海軍制限協定の成立に刺戟せられて今日遽かに陸軍の縮小を叫ぶが如きは寧ろ遲きに失するの憾がある。併し遲れたりと雖も成さゞるに勝さる。唯問題が國內的なる丈け、軍權勢力尙ほ強き日本としては之が解決は海軍以上に難問であるであらうと思ふ。現に陸軍當局者は海軍が縮小せられたる故、陸軍に依つて國防の缺陷を補はねばならぬなどゝ素人嚇しい言を弄して居る。

自覺か流行かは知らねど、陸軍縮小の叫びは今や奔流瀑下の時勢は日一日と風靡しつゝある。少くも議會を通じて政界に橫

盈せる時代の大潮流である。昨年の今頃軍備縮小案をば靴底と塵を蹂躙し去りたる帝國議會が、僅に一年を距つる今日、其の要求の程度と心理とこそ異なれ、各派提携して陸軍縮小案を提出したるが如き實に時代の急轉に驚かざるを得ない。素より議會に於ける政黨の言動は往々黨略に屬するもの多く、之を以て直に國論の反映と斷ずるは早計ならんも、比較的民論の趨勢に敏感なる政黨をして斯かる黨略に出でしむるに至りたる一事に徴するも、少くも世論の趨向を察知することが出來る。陸軍の守本尊、軍閥の大黒柱と呼ばれたる山縣公館を捐て、一杯の土未だ乾かざるに早くも陸軍縮小の聲天下に滿つるが如きは、一は時代の要求とは云へ、一は又彼の政權の上に振ひたる軍閥的權勢に對する國民の反動的反感の發露とも云ふべきである。公が官僚軍閥に依つて尊信せられたると反比例に、一般民衆に依つて如何に嫌忌せられたるやは、彼の國葬に反對したる無名の一議員が民衆の會合に於て最も大なる歡呼を以て迎へられたるを見ても知ることが出來る。事ほど軍閥に對する國民の反感は强烈なのである。

左れば今日世間に彌漫せる陸軍縮小の叫びは、素より國防上並に經濟上の見地より現在陸軍兵力を以て過大過重なりとする純政治上の要求たるに勿論なるも、其裏面に於ては軍閥多年の跋扈に對する國民の怨恨に基づく軍閥打破の一手段として利用せられあることも亦恐らく事實であると信ずる。若し然りとすれば多年陸軍の擁護者保育者たりし軍閥は、今や其の最も愛撫せし陸軍をば民怨の淵に投じつゝあるのである。陸軍たるもの國民を敵として軍閥と共に情死するか、將た軍閥と絶緣して國民と握手すべきかを決すべき時である。一葉落ちて天下の秋を知る、山縣公の死は陸軍に取りては秋風落寞孤雁鳴くの感に堪へぬであらう。

陸軍縮小は今や國民の聲である。國民の要求である。然るに軍閥は種々の口實と策略を講じて、之を阻止し之に反對せんとして居る。軍閥勝つか、國民勝つか、無論國民が勝たねばならぬ。併しながら事苟くも國防の大事に關する以上、吾人國民として濫りに感情に拘はれ流行に走ることなく、冷靜に、愼重に、合理的に、國家的に、この問題を攻究することが肝要であると思ふ。

(二)　陸軍縮小の據點

今日國内に磅礴せる陸軍縮小の要求は如何なる點に立脚して居るのであるか、一旦成立したる國防軍備を縮小せんとする以上、必ずや茲に確乎たる理由が存せねばならぬ。其等の理由に

關し世上に現はれたる意見を綜合すれば大體に於て二樣に分れて居る、即ち其の一は、現在の我が陸軍は帝政時代の露國を假想敵として計畫せられたるものである、故に露國崩潰の今日最早や大軍を擁して之に備ふるの必要なしとする兵力の點に立脚せるものである。其の二は、國防上現在兵力の必要を認むるも、經費節約の點よりして適當の方法に依り平時兵力の整理縮小を行はんとする國家經濟の上に立脚せるものである。而して兩者共に不要の軍費を節して、一は國民生活安定の爲め、民力の涵養、產業の振興を圖り、一は軍隊の能率增進の爲め、兵器の改善軍人の優遇を行ふべしと云ふ點に於ては一致して居る。

國民黨の提唱せる師團半減、一年兵役論は後者に屬するもので、一部の人に依つて主張せらるゝ師團絕對半減說の如きは前者に屬するものである。戰時得員を減ぜずして師團數を減ぜんとすれば、自ら服役期間を短縮し、在鄉兵速成の必要がある。即ち一種の多兵主義である。之に反し現在建制の儘師團數のみを減ぜんとすれば、自ら戰時得員を減ずることゝなる。即ち前者に比して一種の精兵主義である。之を以て陸軍縮小の能否を論ずるには、左の二要點に就きて攻究することが必要であると信ずる。

一、戰時得員を減じ得るや否や、

二、兵役年限を短縮し得るや否や、

若し戰時得員を減ずるを許さず、兵役年限も亦短縮し得ずとすれば、陸軍縮小は絕對に不可能となる。

又戰時得員は減じ得るも、兵役年限は短縮する能はずとすれば、師團半減に依つて每年の徵募員數と經費とを略ぼ半減し得るのである。併しながら兵役義務は益々不公平となるを免れない。

次に戰時得員は減じ得ざるも兵役年限は短縮し得るとせば、國民黨案に類似の縮小を行ふことを得、同時に現在よりも血稅負擔を輕減することが出來るのである。

最後に戰時得員も減ずることを得、兵役年限も短縮し得るとせば、最も徹底的なる陸軍縮小を行ひ得るは言ふ迄もない。假りに戰時得員を半減し兵役年限を一年に短縮するとせば、每年の徵募人員は現在の四分の一に減ずることが出來るのである。

(三) 我が陸軍の假想敵

軍備は平和の保障なりとの陳腐の說を假りに是認するとするも、軍備の窮極目的は戰爭に備へんが爲めである。戰時の用を爲さざる軍備は嚴格に言へば軍備としての價値を有せざるものである。而して同じく軍備と稱する中にも陸軍と海軍とは、其の

建制の立前に於て大に性質を異にして居る。海軍の基本戰鬪力は艦艇である。艦艇は戰時突差の場合に之を急造することも出來ねば、戰時用豫後備艦として豫め建造し置く譯にも行かない。故に海軍に在ては平時兵力が卽ち戰時兵力である。之と異なり、陸軍の基本戰鬪力は人である。然るに平時に於て多數の人間を軍隊に收容し置くことは、經濟問題社會問題等種々の關係に於て到底許されない。併しながら人間は戰時に於て必要に應じ新に徵集することも出來れば、豫後備として豫め備へ置くことも出來る。故に陸軍に在つては平時の在隊兵數よりも戰時の得員を以て兵力計算の基礎とすべきである。之を以て陸軍軍備としては當然戰時得員に重きを置かざるを得ないのである。左れば戰時得員の減少は陸軍としては最も苦痛とする處で大なる反對を唱ふるであらうと思ふ。

抑も軍備の目的が內亂に對する警備や、外國に對する威嚇の爲めにあらずして、苟くも國際の戰爭に備へんとするにある以上、之が兵力の標準を決定する爲めには兵力使用の範圍卽ち假想敵國が無くてはならぬ。假想敵國を有せざる軍備は一種の警察力若くは裝飾物に過ぎずして、國防上全然無意義なるものである。今日我が陸軍の縮小を論ずるに當りては先づ我が陸軍の兵力使用の範圍卽ち陸軍の目標に於ける假想敵國の何れなるやを研究するの必要がある。惟ふに我が陸軍の假想敵國と目做すべき國は露國にあらざれば支那である。如何に向ふ見ずの軍閥と雖ども日米戰爭を豫想し、六千海里の太平洋を越へて亞米利加進擊は夢みて居ないであらう。陸軍當局者の言に察するも我が陸軍の假想敵國は露國と支那である如く推定せらるゝ。現に陸軍當局者は現在兵力維持の必要、或は陸軍縮小反對の口實として、常に露國及支那の兵數を擧げて居る。曰く露國の過激派は今尙ほ八十個師團の軍隊を擁して居る。曰く支那には百五十萬人の兵隊があると。數字に於ては恐らく事實であらうと信ずる。併しながら爰に研究すべきは、單に兵隊の頭數にあらずして兵力としての本質如何と云ふ問題である。露國の軍隊は國內に散在する反動派の擡頭を抑へ、過激派政府を擁護する爲めの兵力である。歐亞を通して廣袤八百五十萬方哩人口一億五千萬の露國としては、政狀混沌の今日內亂に備ふるのみにても八十個師團は寧ろ尙ほ尠きに失して居る。支那の軍隊は督軍自衞の爲めの私兵に過ぎない。南北相爭ひ、隣省相鬩めぎ、百五十萬の軍隊は國內に於て全く相殺せられて居る。之を以て露國の軍隊も、支那の軍隊も、其の頭數こそ多けれ、對外兵力としては殆んど論ずるに足らない。殊に露國としても、支那としても、今日我が國に對し兵力を以て積極的挑戰の態度を執るべしとは

斷じて思はれない。平素口癖の如く兵の素質を云爲する陸軍當局者が露國及支那の軍隊の素質に關して考へざるは何故であらう。露國の八十個師團、支那の百五十萬を稱へて國民を威嚇する如きは、恰かも露國は一億五千萬、支那は四億の人口を有するが故、我も亦大に子を產まざるべからずと說くと大差はない。

(四) 大陸政策の確立

露國に若し恐るべきものありとすれば、其の八十個師團の軍隊にあらずしてペンと口とを以てする思想の宣傳である。支那に若し恐るべきものありとすれば、其百五十萬の兵員にあらずして支那全國に漲る排日の思想である。思想に對しては思想を以て對抗することが最も安全にして最も確實なる戰術たることは今更論ずる迄もない。然るに劍と銃とを以て之を防遏抑止せんとするは、益其の危險を增大激成するものである。殊に一部軍閥者の夢みる如く、日米戰爭の際兵力を以て支那の物質を强徵せんとするが如きは、白耳義の中立を蹂躙したる獨逸の軍閥よりも尚ほ一層狂愚にして、世界を敵とするのみならず其の時こそは支那百五十萬の軍隊も內に結束して我に當るであらう。我が陸軍にして世界を敵として戰はんとする以上、縱令五十個師團あるも百個師團あるも恐らく尚ほ足らぬであらう。僅に二十一個師團を以て此の暴擧を敢てせんとする無謀と大膽とに驚かざるを得ない。斯くの如きは國家を誤まらんとする恐るべき軍閥の頑夢である。是れ國民として最も嚴密なる監視を要する點である。

以上の見地に於て吾人は今日我國として露國及支那に對し、我より積極政策――或は一層率直なる言葉に於て侵略政策を――執らざる限り、陸上に於ける戰爭の對象國即ち假想敵國は無いと信ずるものである。從うて我が陸軍は內地及朝鮮の治安維持に必要なる兵力を有すれば足れりと爲すもので、師團半減の可能なるは勿論、現在に於ける戰時定員を保持するの必要をも認めざるものである。加之今後若し戰爭ありとすれば、一定數の戰時定員のみを以て足れりとすることは出來ない。必ずや眞の國民皆兵を實現するの覺悟が無くてはならぬ。陸軍當局者たるもの五十萬百萬の戰時定員に執着するよりも、更に一歩を進めて國民全體を以て戰時兵力と爲すの道を講ずることが必要であると信ずる。之に反し若し我が國にして露支に對し侵略政策を執らんと欲せば、現在の二十一個師團のみかは、國を擧げて兵と爲すの準備と覺悟とを要する。之を以て我が國としては陸軍縮小を論ずるに先ち、大陸に對する國策の大本を確定すること

が緊急問題である。即ち陸軍縮小は末にして國策の確定が本である。一方に於ては露支に對し積極政策を認容しながら、他方に於いては陸軍の縮小を唱ふるが如きは蓋し自家撞着の大なるものである。

併しながら露國及支那の軍隊を以て、我が國に取り或は危險なりと云ひ、或は危險ならずと云ふも、畢竟するに自他見解の相違に基づく水掛論に過ぎずして、今日之を論理的に立證することは不可能である。然らば此の見解の相違を裁判するものは誰なるかを、國民は考へねばならぬ。此の裁判權を國民の手に握るにあらざれば、國民の欲する如く軍備を處理することは到底望み難いのである。是れ陸軍縮小の前途に横はる最大難關である。

（五）兵役年限問題

次には兵役年限短縮の問題である。本問題は戰時得目の如き國防軍備の政治的根本問題にあらずして、軍事教育能率に關する純軍事的の問題である。從うて之に關しては軍事專門家の意見を充分に尊重するの必要があると信ずる。國民黨の提出せる一年兵役案に對して、陸軍側は條件付を以て之に反對の意を表して居る樣である。即ち條件とは、

（一）現在の國民軍事知識を以てしては一年兵役は短きに失する。

（二）兵士の雜役を廢すれば雜役夫雇傭の爲め經費を増加す。

（一）は要するに程度の問題である。理論としても實際としても、兵士の在隊期間長ければ長き程、教育の成果大なるは當然である。一年兵役よりは二年兵役、二年兵役よりは三年兵役の方が優秀なる兵士を養成し得るとは言ふまでもない。武器の進步し戰術の發達したる今日、軍事教育の完全を期せんとせば、三年兵役五年兵役を以てするも尙ほ充分でないかも知れぬ。之と反對に日露戰爭並に歐洲戰爭の實例に徵すれば、一年兵役を以て絕對に不可と爲すとも出來ない。此等の戰爭に於て步兵の如きは僅に四個月乃至六個月の教育を以て、戰場に屍を暴らさしめられて居る。吾人は此問題に關しては專門的知識を有せざるが故、必ずしも一年兵役を以て可なりと唱ふるものでない。併しながら今日民間に在る多くの陸軍專門家に依つて、一年四個月說、一年六個月說などの唱へられあるに徵すれば、軍隊に於ける教育組織の制度方法を改善すれば、服役年限短縮の道は多々あるが如く思はれる。卑近の例を擧ぐれば犬養氏が議會に於て述べたる軍隊用語の改正の如きである。僅に尋常小學卒業程度の壯丁が大多數を占むる軍隊に於て、佶倔難解なる「獨立家屋」「小

字路」などの言語を用ゐるの必要が何處にある。「一軒家」「四ツ辻」で充分ではないか。殊に砲兵工兵などの用語に至りては常識離れのしたる「穴倉」とか「經始」とか、詩經か禮記か佩文韻符でも繰らねば判らぬ様な文句が用ゐられて居る。斯かる難解の文字を用ゐることに依つて上官の威嚴と軍隊の偉さとを示さんとしたる時代は既に三十年の昔に過ぎて居る。而かも兵語教育上斯かる難解なる文字を兒童の頭に詰め込まんが爲め、國定教科書に於ける漢字の增加を要求せるを聞きては驚くの外はない。此の非社會的なる軍隊用語を平易なる常識語に改むるのみにても、少くも一ケ月位の兵役年限を短縮し得るであらうと思ふ。一事が萬事で、此の軍隊用語こそ我が陸軍の非社會的、非常識的を表示する好個の標本である。

(六) 國民的軍事訓練

次に軍事當局者に依つて屢々世間に傳へらるゝは、歐米に於ける國民的軍事訓練の旺盛なることである。我が當局者は我が國に於ける此の國民的軍事訓練の不備不振を以て、兵役年限短縮反對の一理由として居る。歐米に比して我が國に於ける國民的軍事教育の振はさるは事實である。世界より軍國主義とさへ非難せらるゝ我が國に於て、又國民として軍事に極めて熱心なるが如き我が國に於て、國民的軍事教育の甚も振はざるは大なる皮肉である。今日軍備縮小を主張せる人と雖ども、或は經濟的國防の見地より、或は國民の體育並に精神教育上より、主義として國民の軍事教育及訓練に對し表面に於て反對するものは恐らく多くはあるまいと信ずる。然るに事實に於て其の不備不振なる原因と理由とは何處に存するであらうか、惟ふに運動嫌ひの我が國民性が第一の理由であらう。輕快なる運動に適せざる服裝が第二の理由であらう。不規則なる生活の爲め時間に餘裕なきが第三の理由であらう。指導宜しきを得ざるが第四の理由であらう。適當なる場所と設備の無きが第五の理由であらう。軍閥に對する反感が第六にして而かも最も根強き理由であらうと信ずる。多年の積弊に惱まされたる結果として、官僚軍閥の施設に對して一般國民は感情的反感を有して居る。近年組織せられたる青年團に對してすら、官製青年團として多くの國民は好感を持つて居ない。純潔無垢なる青年團に對し世人をして不純の疑惑を抱かしむるは官僚的干渉の罪である。今日國民的軍事訓練の振はざるは上記の諸理由あるに依るとは云へ、要するに國民の了解と國民の後援とを得ざるが爲めである。具體的に言へば軍事訓練其ものに對する主義上の反對にあらずして、好戰的なる軍閥の跋扈に對する國民の憂慮である。軍閥者が之を

利用して自己權勢擴張の具に供せんことを恐るゝが爲めである。之を以て軍閥にして不當なる權勢慾を離れ自己專門の職掌に退却すれば、國民的軍事訓練は自ら振起するであらう。

（七） 兵士雜役問題

（二）は兵士の雜役問題である。陸軍當局者は一方に於ては教育上二年兵役の必要を唱へながら、一方に於ては故參兵士の雜役勤務を承認して居る。直接兵士と接觸せる在隊將校の言に依れば、兵士に軍事教育を施こすは最初の一年間にして第二年目は專ら被服の整頓、兵器の修覆、糧食の調達等軍隊内の雜役に從事し、演習等の外軍事教練を受くることは殆んど無いと云ふことである。左れば教育の點より論ずれば一年兵役を以て短かしと云ふことは出來ぬ譯である。素より軍隊の任務は單に戰士を養成するのみでなく、軍隊の活動に必要なる諸種の雜務の存するは勿論である。而して此等の雜務を處理整頓する爲めには多數の人員を要することも亦明らかである。唯爰に問題とすべきは、國民の義務として極めて不公平なる事情の下に軍隊に徵集せられたる同一人に對し、初めの一年は嚴酷なる軍事教育を施こし、次の一年は單に人夫を雇ふよりも經濟的なりとの理由を以て尚ほも軍隊内に拘束し、一般勞働者と大差なき雜役に驅使するが如きは、國家として正しき道であるや否やの點である。如何に國家の命とは云へ、斯くの如き不公平なる義務と負擔とを國民の一部にのみ强課することは、國民をして兵役を嫌忌せしむるのみならず、軍隊の士氣を挫損し、軍隊の效率を減耗すること極めて大なるべきを確信する。國民の柔順を宜き事とし斯の如き明白なる不公平を改善するに何等の手段を講ぜざるは、常に國防の充實と軍隊の健實とを云爲する軍事當局者の爲めに惜しまざるを得ない。

本問題は陸軍縮小と直接の關係無きが如きも、兵役年限短縮と密接なる關聯を有するが爲め、陸軍縮小と同時に解決を要する問題であると信ずる。而して之が對策としては種々あらんも、要は一面に於ては經費を甚しく增加することなく、一面に於ては國防の義務を及ぶ限り公平ならしむることである。一例として私見の概要を述ぶれば、兵役任務を分つて戰兵及雜役兵と爲し、戰兵は從來の制度に從ひ身體優秀者中より徵募して所要の期間純軍事教育のみを施こし、雜役兵は體格不合格者中より採用し、輜重輸卒の如く三個月若くは四個月の短期服役を課し、專ら雜役に從事せしむるのである。倘ほ此の間に於て雜役兵に對しても簡單なる軍事教育を施せば、或る程度に於て戰時兵員を增勢することが出來る。若し現在の如き不公平なる制度を其の儘

累積せば、軍隊の士氣は年と共に衰頽して遂には内より潰ゆるに至らんことを憂ふる。

之を要するに兵役年限の短縮は不可能にあらずして寧ろ爲さゞるの嫌がある。軍事當局者にして眞に國防に忠實ならば、兵役を以て名譽任務と心得るが如き舊夢より覺めて、現代人心の機微を洞察し、時代に適應するが如く制度を改善すべきである。平等の權利と義務とを有する國民に對し、其の一部分にのみ何等の代償を與ふることなく二年の兵役を課することの如何に不公平なるかは更めて説く迄もない。而も其の一年は無給の勞働に使役せらるゝに至りては、忠良にして温順なる國民も兵役を呪はざるを得ないであらう。軍事當局者たるもの學生に近視眼の多きを憂ふる前に、先づ自己の近視を省みるの必要があらう。

(八) 陸軍經費の半減

上述の如く我が國にして露支に對し侵略的政策を執らずとせば、最早や當分現在の戰時得員に執着するの必要はない。又徴兵制度を改むれば兵役年限の短縮も亦不可能でない。既に戰時得員を減じ得べく、兵役年限亦短縮し得るとせば、議論として陸軍縮小問題の解決は極めて容易である。而して吾人國民としては四圍の形成と國内の實情とに照らし、唯大體に於て縮小の標準を決定すれば宜いのである。部隊の編制を如何にすべきか、兵役年限を幾干に短縮すべきか、學校の存廢を如何にすべきか等の問題に至つては、軍事專門家との政治家の研究に任かすべきである。此の見地に從ひ吾人は大體に於て現在陸軍經費の半減を標準として陸軍を縮小すべしと爲すものである。斯くて節約し得たる經費の一半を以て陸軍人事の改善兵器の改良等に充當し、他の一半を以て文化事業の施設に轉用せんことを欲する。今や陸海軍人は上下を問はず經濟の壓迫に依り士氣益萎微しつゝある。各種の兵器は大戰の經驗を有せる歐米諸國に比して著しく遜色があると云ふことである。量に減じて質に良くすることが、寧ろ陸軍兵力を增進せしむるの途であると信ずる。多數精兵は素より軍備の理想とする處なるも斯くの如きは我が國力の許さざるのみならず、世界の時潮に逆行して徒に敵を作るの危險がある。併し陸軍當局者が此の問題に對して幾干程度の誠意を有するか、議會に於ける政治家が幾干程度の熱心を有するかは、今日尚ほ大なる疑問である。國民にして眞に陸軍縮小を望むならば、國民の力に依つて先づ打開すべき難關がある

(九) 陸軍縮小の難關

軍閥並に軍事當局者が軍備縮小に反對する彼等の常套語は、「若し戰爭があつたら如何する?」との質問である。今日平和の思潮は世界に横流するも、國際の關係は尙ほ未だ戰爭の絕無を斷言し得るの程度に達しない。之と同時に國民として何人も國家の危急に際し、超然として無抵抗主義を唱へ得るものはない。是れ軍閥者流が乘ずべき點にして、彼等が盾と爲し、矛と爲し　軍備縮小論に反噬する唯一の武器である。凡そ將來の戰爭を豫想し空腹を忍んで迄も尨大なる軍備を存置すべきか、或は又平和を豫察して文化生活に安んずべきかは、時勢に達觀して國民の決すべき問題である。軍事當局者は國民が是と認めて備へたる軍備をば、彼等の專門的技能を以て最強度に最高率に運用すれば宜いのである。然るに我が國の現行制度に從へば・國防の策定と軍備の案畫權は國民の手に在らずして全然軍閥の掌握に歸して居る。即ち我が國の軍閥なるものは內閣に謀らず、國民に問はず、軍事機密の陰に隱れて彼等の欲する儘に國防軍備の計畫を案定し、所謂帷幄上奏權に依りて親裁の後、之が實施を內閣と國民とに強ゆることが出來るのである。

故に國防の策定に關しては國家統治に對して最高輔弼の責に任すべき內閣も、實際國防の任に當るべき國民も、制度の上に於て一言半句の容喙の權利を有しないのである。若し之を改修せんとすれば忽ち大權干犯を以て攻擊せらるるのである。唯內閣と國民とは計畫を實施する場合に於て、僅に經費の點に依り之を拘制し得るに過ぎない。而かも經費の點に於ても亦彼等軍閥は、軍部大臣武官專任の官制を利用し、內閣にして經費の支出を拒むるに於ては、大臣非就任ストライキを以て內閣を威嚇するの武器を有して居る。現に大隈內閣當時海軍は八八艦隊の建造を以て、陸軍は朝鮮二個師團增設を以て內閣を脅威したる實例もある。今回の陸軍縮小にも彼等は或は此の手を用るかも知れぬ。

世間或は黨人黨を先にして國家を後にすると非難する。併し斯くの如きは獨り黨人のみではない、官人も亦官を先きにして國家を後にするの傾がある。海軍々人は海軍を先きにして國家を後にし　陸軍々人も鐵道の役人も各々其の屬する官を先きにして國家を後にせる形跡が明かに窺はれる。之を善意に解すれば職務に對して忠實なるあまりである。之を惡意に解すれば自己の利害に鋭敏なるが爲めである。軍閥者が常に軍備の擴張を唱ふるも、善惡兩樣の意味に解釋せられる。前記の如く國家の重要事たる國防の計畫に對しては日本國中法規上に於ける唯一人の責任者も無いのである。唯國防計畫機關たる參謀本部及海軍々令部と軍事諮詢機關たる軍事參議院とが、法規上に於て天皇に對し責任を負ふのみである。之を以て一般政治上とは

云へ軍閥が國防計畫に對して責任の衝に立つ以上、國防上萬一の過誤を避けんが爲め常に過大の計畫に走らんとするは、善意に解釋して彼等の爲めに諒とすべき點なきにしもあらずである。之を以て國防の策定權をば憲法上の責任者たる内閣に移し、國民監視の下に置くことは、軍閥の跋扈を防ぐと云ふよりも寧ろ軍閥を其の苦境より救出するものである。

今日軍閥の跋扈は其の罪素より軍閥にあるも、一は又憲法上不合理にして官制上不可解なる制度の存在を認容する國民も其の責ありと云ふべきである。此の制度にして先づ改廢せらるゝにあらざれば、國民が如何に聲を嗄して陸軍の縮小を絶叫するも、彼等軍閥は帷幄上奏權の堅砦に立て籠り、大臣輔任の官制を武器とし、國民の要望に應ぜぬであらう。之を以て陸軍縮小を行ふべきや否やを決するには、先づ大陸に對する我が國策の確立を要し次に縮小の必要ありとせば、軍閥の武器たる官制を改革し、軍閥の城砦たる帷幄奏上權を廢止することが必要である。

（一一年二月十四日）

強兵の優等代用力が必要

杉森孝次郎

人類の白人以外の部分のうちで、日本人だけが國際的に人格扱ひされるとは、内外人の口に、筆にしばしばのぼる敍述だ。バートランド・ラッセル氏の今年最初の『ザ、ニウ、レパブリック』の號に於ける一文のなかにも、その一例と見られる言句がある。支那人は馬鹿にされたり、けもの扱ひにされたりするが、日本人はさうされない。それは、日本人の陸海軍が白人の恐怖本能にうつたふるところがあるからだといふのだ。随つて、陸海軍なき日本人は、もしくは白人の恐怖心を刺激するに足るほどに強大なる陸海軍を持たなくなつた日本人は、白人から馬鹿にされ、けもの扱ひされる身の上となつた日本人だといふのだ。氏の判斷をまたずして、これは多くの人々が獨立に構成しうべき判斷だ。

日清、日露の兩役は、日本の國際進水式であつた。日清日露の兩役なくして日本人の國際獨立がありえたとは考へられない。人類は、その本質に、かなり多量の野蠻性を持つてゐる。純理性のみは稀有以上に少數だが、それは實に絶無に近い、むしろ等しい少數だが、純理性と當人も思ひ、他人からも思はれる考へそのものが、大抵は、いくらかの僻見を混じてゐる。大抵の純理性は、主觀的純理性たる意義をどれほどか帶んでゐる。人類の理想主義は、人間の本質の全部を理解して、價値の絶對的判斷を試みて、その全部に組織と統一を與ふることを一必要條件とする。武力なしではあなどられる可能が必然不可避である時代と、社會と、廣く場合があるならば、そこでは武力に道德的存在權がある。わが明治時代は要するにその一適例に屬する。

人類同志のあひだで、武力を不必要とする程度には、人類の品性がまだ進んでゐない。その近い證據は、佛國の潜航水雷艇廢止反對にもあれば、さらにいちぢるしくは、多少の縮軍が最近の國際實行と國際問題であつて、廢軍は實行としてはいふまでもなく、問題としても國際興味をさほど集めるに至らないといふ事實にもある。廢軍が理想だ。廢軍の可能は、今日の諸國民の多くが考へるほど困難ではあるまい。國際廢軍の時期は、どうしても遠からぬ將來に於いて到着せねばならん。到着させられねばならん。國際無軍備を斷行して、諸民族、全人類が、生產と文化に專ら依賴するための、いはば背水の陣を布く必要も考へられる。

從來とても、軍備は不必要に存在したわけではない。主觀的には、無論必要であつたのだが、客觀的にも、決して不必要ではなかつたのだ。鎖國封建の日本と、大正の國際的日本との中間に、過渡態としての明治の日本が介在するが、陸海軍なしの明治の日本が、一層持ちがひあるわれらの過去であつたらうとは、どうしても結論されない。問題は、今日に及んでは、軍備の必要が輕減したか、絶無に歸したかどうかにある。

日本人だけの心を改めても、兩隣の諸國民の心を改めないでは、軍備の必要は失はれない。歷史的に考察すれば、日本といへども、軍備を目的として軍備を設けたのではなかつた。のちになつては、軍備を目的として軍備を設けたやうな餘弊も多少長じたけれども、一時的、一部的に考察せずに、本質的に長い眼をむければ、道德的、文化的日本人の自衞が、明治の軍備の目的であつたのだ。一八九四年には敵としての、敵としての支那があり、一九〇四年には同じくまた敵としての、陸としての露西亞があつたが、一九二二年の今日には、敵としての、敵と

しての外的勢力は絶無か。正直のところ、絶無だとは考へられない。なぜかといふに、個々人の場合は別として、民族的には、各民族共にいまなほ甚だしく我執と私欲を持つてをる。國際心理を現在のままにして置いて、武力だけ取り除かれた日本が、はたして日本人の本質的文化力を保護する目的にかなふかどうかは、頗る疑はれる。外國の勢力に新たなる機會を與へるに過ぎないといふ危險も隨分考へられる。白人の人種的本能は否定しがたい。またかれらは、白人以外の人種の本質的文化能に多大の疑ひをもいだいてゐる。地上をば、白人だけで住みおほふ方がいいとも考へる。この際に於ける日本の位置は、實に責任の重大な、かつ實に危機線上に立つてをる。いふまでもなく、白人以外の人類のうちで、せめてもの人格的獨立を建設しえた部分は、日本人だけだからだ。日本の興廢は、掛け引なしに、白人以外の人類の興廢因たる意義をあざやかに帶ぶ。白人にむかつて、いかにかれらが愛と人道と正義と人格の信者たる基督教者であるとは假定しても、白人以外の人類の保護を望むのは無理だ。人はすべて自助しなくてはいかんからだ。自助の意思すらないやうなら、その人は他助を値ひしないともいへるのだ。白人以外の人類の自助、これは實に二十世紀の一大問題でなくてはならん。疑問としての問題ではなく、當爲としての問題だ。

無軍備の日本が、白人以外の人類の國際的自治、責任、創造を目的として達成するに有軍備の日本よりも好都合であるか。小軍備の日本が、大軍備の日本よりも同じ興味から考へて好都合であるか。これが先づ究明されねばならん。從來の日本が、國際蔑視を、その軍備のゆゑに受けたことは記憶と記録に新鮮だ。軍備なしでは道德人と文化人が迫害される必然的事情下に於いては、相當の軍備は道德人と文化人の延長だが、その意味が、現在の日本にどれほどあるか。せめては數量と形式をだけなりとも、現在の陸軍にむかつて縮小しうる限り縮小して、能率をば有名無實に歸さぬ限度に維持する方法としての整理は、目下の賢明策だ。假想敵としての露の事情もかはつたことゆゑ、師團の半減は、おとなしい進歩だらう。

しかし、四圍の國際思潮から考へても、國內の民心から考へても、純理想から考へればなほさら無論のことだが、大陸軍は育たない時代が來た。腕力の信用は日に薄れてゆく。海軍縮小は、もとより陸軍縮小の前兆だ。歐洲に於いても、佛國は今から不人望に落ち入るにきまつてゐる。內外の意思にそむいては事は成功しない。またなによりも肝腎な一點として、縮軍は、その事自身は人類の本質的目的から考へて一大善事だから、多少は自國の不便を忍んでも、大勢の進運に助力を惜まぬやうに

することは立國の一要旨でなくてはならん。人類社會を目的とし、それの利福善榮を目的として、各國は自國の對外方針を立てねばならん時代が昨今すでに到達したのだ。立國は、國際善の一因としてでなくてはいかんのだ。經濟的及び文化的生産力の一途に各國はそのいのちを集中すべき時代が始まつた。平和と生産を目的とする政治と經濟と文化、これが今世紀の旗じるしでなくてはならん。軍備をば、むしろ必要最低限以下にさげるほどの意思がなくてはいけない。それは弱國を目的としてではない。生産と創造に奇蹟的心熱とも稱すべき信仰を內外にかならず呼びおこすことを目的としてだ。

陸軍の縮少と軍事思想の改善

文學博士 三宅雪嶺

戰爭は敵あつての戰爭であつて、軍備は必ず相對的と定まる。如何に軍備を整へるかは敵次第であつて、唯敵の見積方が、人によつて幾らか違ふ。時と處とにて秘密を專にし、公然の秘密でも秘密にせねばならぬ事がある。日本で朝鮮にて支那と爭ふた時、川上參謀次長が之と戰ふの準備したけれど、其準備して居るを明言する事が出來ぬ。出來なくても、世間の心ある者が之を察して居る。日英同盟は明かに露國に對してゞあつて、軍備も之を主なる標準にし、田村參謀次長が計劃し、次いで兒玉が後任者となつたが、尙ほ露を敵とするを明言せぬ。明言しなくても。苟くも軍備を考ふる際、此處に想ひ及ばずに居れぬ。後に露と約し、獨逸に當る事になり、日英同盟が目的物を變じたやうでも、露が從來の勢力を保ち、何時如何に變ずるか知れず、獨逸と結べば忽ち勢を變ずるを免かれぬ。事によつて露獨聯合して東洋に現はれ出でぬと限らぬ。日本でそれ相應の準備するの必要があり、二十一箇師團、事實上に二十二箇を備ふるに至り、得べくんば更に增さうとした。

露獨聯合して進み來つては容易な事でなく、出來る丈けの事をせねばならぬ。ところが世界戰役で、少くとも當分露獨の陸

軍は、殆ど全く東洋に力無いと見ねばならぬ。支那が容易に安定せず、變亂で貿易上に損害を被るの惧れあり、之に備ふるを要するが、それには現に備ふる程多くを要せぬ。事あつて支那の秩序を維持するが爲め、二十一二箇師團でも足らぬと云ふが、それは考へ樣次第であつて、支那を如何にするの意か。他國との關係をも考へねばならぬ。日本一國で支那の秩序を維持するとあつては、現在でも不十分としようが、之を十分にしようとしては、別に敵國を作り、新に之を備ふるを餘儀なくされる。今は軍備擴張が敵國を作り出す事を忘れてはならぬ。新に敵國を作り出しては、何處まで擴張しても十分と思へる時が無い。

且つ軍備とは畢竟するに何物か。陸軍に於て師團の數を増すを指すか。常備軍を多くする事が國防の要點でないとは、世界戰役が教へた所でないか。該戰役は事情頗る複雜、概括して云ひ難いけれど、畢竟するに歐大陸の强國が力を減じ、英國及び米國が力を致した事になる。何故に英米は歐大陸よりも發達して居るか。地の利も與る事多いにせよ、常備軍の競爭に捲込まれなんだ事を擧げねばならぬ。常備軍に於て獨佛は模範的であり、英も之に則らうとし、米さへ之に考へ及んだ程であるが、既に軍備競爭の絶頂に達し、破裂して大戰亂となり、勝敗の決した以上、獨佛の常備軍を模範とするに及ばなくなつた。英も米も國民軍が相應に戰ひ得るを示して居る。固より初めの程英軍は重きを置かれず、常備軍の少かたつのを悔ひ、若し更に多かつたならば、獨逸で開戰を敢てしなかつたと知られるが、常備軍を多くして開戰を防止したのが可いか、常備軍を少くし、大戰亂を惹き起し、四年半の久しきを經、國民軍で勝ちを制したのが可いか、結果から見れば後者を選ぶ。露軍と戰ふには露軍以上の精兵を以てし、獨軍と戰ふに獨軍以上の精兵を以てすべしとしても、露獨と戰ふの必要なければ、さういふ精兵を作るの必要がない。必要があつても、英軍が歳月を經るに從ひ、いよ〳〵熟練し、タンクを以て驅け惱ましたが如き、一時にせよ、天晴れと云はねばならぬ。

兵器の精鋭が前よりも遙かに肝要となつて來た。軍事は軍事專門家でなければ分らぬと云ふが、陸軍大臣が議會で獨墺軍の必ず勝つを斷言したのは、何と云ふ事か。今は海軍縮小に定り、多少陸軍縮小に着手する事になつても、陸軍當局者は成るべく現狀維持に傾いて居る。露獨が彼の如き狀態になり、尚ほ何の爲めに現狀を維持するか。戰亂の惧れあるとして、獨佛の如くするが必ずしも得策でないと知れて居るでないか。軍隊は獨逸の如くでなくてはならず、英米の如き參考するに足らぬとする事、從來醫科大學出身者が獨逸の外に醫學無いかに心得たのと

同じでないか。英米に對し、目を閉ぢるのは、何物かに掩はれて居るのでないか。强ち英米に則るべきでないとし、常備軍を少くし、軍隊の觀念を變改するの必要がある。前には上より下に命じ、下が絶對服從する事になつて居つたが、之れは佛でも獨ほど甚だしくなく、英米では下より進んで上に服從しようとする傾向がある。即ち國民として同等、能力に於ても劣らぬけれど、軍事上、上に服從しようとし、嚴罰で强ひられず、自らの職分を果さうとする所よりする。悉くさうと限らぬが、其氣分が廣まつて居る。

日本でも國民間に嚴罰を以て强ひられず、自ら職分を果さうとするの意に於てするやうな習慣を作らねばならぬ。さういふ風に教育を仕向けねばならぬ。從來軍隊と云へば、命令と服從の外に何も無いやうに考へられたが、實は軍隊と云ふ特別の現象あるのでなく、國民が職分を果さうとし、戰場で上官の命令を受けようとするのである。上より强ひず、下より進んで應ずるやうにするのを順序とす。十分な事が望めなくても、此邊に考ふる處なくては事が間違ふ。國民にかゝる觀念が行き渡らば、常備軍は極めて少くして差支へない。斯かる事は忽に間に合はず、延いて現在の陸軍を大いに縮小し得ぬにせよ、大いに縮小し得るものとして新に好い習慣を作るに取掛るべきである。兵期を一年にするとか、一年半にするとか、覺悟次第であつて、當局者が是非共一年で有効にしようと思へば出來、何うしてもさう行かぬと思へば出來やうがない。先づ當局者からして何の爲めに現在の軍隊を備へて置くかを考へ、自らの勢力を抜きにして、國家の列國との關係より靜かに思慮すべきである。學術家なる醫師が拘泥するの甚だしきを以て、軍人の拘泥するのを察し得るが、中に天才の閃きある者が無からうか、軍事は專門と云ふが、英國が印度を領有したのは、何將軍の力か。會社の一手代が素人を寄集めて戰つた結果でないか。妄りに專門と云ふべきでなく、務めて虛心平氣に考へよ。自分の勢力關係を考へて居るべき時代でなく、更に一層國事が難づかしくなつて居る。



日本のいゝ所を知らしてやつた亞米利加の友人から來た手紙

佐々木指月

○月○日

デヤ　TOT

拇指の先の爪ほどの大きさに、日本にゐるおまへの生活をスケッチしてよこしたこの手紙を、あたしはあたしのお友だちと一緒に、どんなに可愛がつて見てゐるか、おまへは知つてゐるかい？

空氣のなかに住んでゐると、云ふことの云へる、おまへの、その國に於ける生活を、遠くこの紐育から考へて見ると、日本の家が、飛行機のやうな輕い材料で作られてゐると云、第一印象が、あたしたちの、あたまに一ぱいになつてしまふ。

小さくつて、輕くつて、可愛らしい日本人。光のなかへ出せば光のなかで見えなくなり、蔭のなかへ入れゝば蔭のなかへかくれてしまう日本人。ちよいとさうした空氣のなかに住んでゐると聞いてゐるシルフのやうな日本人を思ふと、なんだか日本と云ふ國がフエイリイランドのやうな氣もちがする。

それに就ては、ほんとに笑ひ話がある。それは、おまへが、よこした繪葉書。こゝにタツトがゐると、ナンネツテが云ふものだから、あたしたちは、みんなでその繪葉書を取り合つて見たのさ。なる程髮の毛の長い人が、行商に賣られる商　のやうに車に乘せられて來るではないか？　それはジンリキとは知つてゐるが、見馴れないあたしたちの目には、あれに乘つてゐる人が、なんだか賣りあるかれてゐるやうに見えていけな

い。

繪葉書の中のそのストリイトは、大きな鳥居ゲイトの方へ、その爪さき上りの坂を横たへてゐる。石で出來たランプポストがいくつも向ふに並んで、日本のどの繪葉書にでも必ずあるフジヤマは、そこのスカイラインには見えなかつた。

あたしたちは、オペラグラスの球をはづして、車の上のその人をマグニフアイドして見た。さうしてあたしたちは、そこに一つの悲劇を見出した。笑つてはいけないよ、それは一人の大變に大きな女が、小さい車のなかへ一ぱいになつて、それを坂から押し上げるのに、二人の小さな日本の男は、足が地面から離れさうになつてゐるではないか？　まあ氣の毒なと、あたしたちは、ほんとうに同情してしまつた。だが、ナンネツテは、その樣子がをかしいと云つて、長い笑ひに苦しんでゐた。

あたしは、その肥つた女が、おまへでないことをたしかめて、まあよかつたと思つたよ。若しおまへが日本へ歸つて、あんな殘酷なことをして、日本の苦力を苦しめてゐることを知つたら、あたしはほんとに、おまへのために落膽したよ。それにしても、飛行機のやうな軽い家に、あんな大きな女と一所に、おまへが住んだら、さぞ危險だらうと、あたしはあらぬ心配までしたものさ。その後、ミセスダアリングが遊びに來て、同じ繪葉書を同じマイクロスコオプで眺めて見て、その肥つた女は、女ではなくつて、日本のレスラアだと云ふことがわかつて、あたしたちはまた驚いた。取つて倒すのに都合のいゝやうに、あたまにハンドルがついてゐるのだとミセスダアリングは説明してゐた。しかし氣におしでない、あたしたちは、ミセスダアリングのいふ事を全部信じはしないから。

それから、自然の音樂と、自然の影繪とのミデアムとして、おまへは、日本のシヨオジのことを書いてよこしたねえ。して見ると、そのシヨオジは、日本の家の鼓膜であり、かつまた、網膜であると見えるねえ。何んと云ふ官能的な家に日本人は住んでゐることだらう。つまりさうした家のなかに坐つて凝つと、動いて行く外光や、それから外の音樂を聞いたり感じたりしてゐる日本人は、なんのことはない腦髓のなかの二つの松果腺のやうなものだねえ。さうして外界との交渉を保つて、宇宙的の神經組織のまんなかに、あの佛陀の像のやうに坐つたら——まあ、あたしはここまで考へて來ても、あたまのなかが、きインとするよ。タツトさんや！　もしおまへがさうして靜かにすはるのなら、ときどきは、おまへの後ろの方をふり向いてお覧よ。さうしないと、いつのまに、おまへの後ろの半分が、透明體になつて、空氣のなかへ消えてしまはないとは限らないよ。

まあ、ぞつとするねえ、ほんとうに。

空の光を、紙ひとへで遮つた日本の家は、姿のない魂が住むのにはいゝかも知れないが、血の出る肉體を持つてゐる人間の生活には、少し關係が遠すぎる。明るすぎるねえ、きつと。第一、この冬の寒空を、どうして防ぐのだらうそれがきゝたい。日本だつて氷が張るだらう？ 雪がふるだらう？ さうして日本人は、西洋のやうな火爐は、あんまり室内で幅をとるから、あれは我儘ものゝ見本だと云つて、きらうさうだねい。木でこしらえた火の箱が、遠慮がちに、家のなかのどこへでも人の行く方へついて行くのを可愛がると云ふではないか？ おまへの國にヨネと云ふ詩人がゐるだらう？ あれがそんなことを云つてゐたのを、あたしは記憶してゐるよ。だが、紙の戸に、木でこしらえた火の箱では、雪や氷の降るなかをどうして凌ぐのだらう？

おまへは日本人は、自然に近く住んでゐると云つて、それを誇りにしてゐるやうだが、西洋人は、もつと人間に近く住んでゐると云ふことにおまへは氣がつかずにゐるらしい。人間に近くと云ふいひ方は妙ないひ方だが、もつと人間らしく住んでゐると、云つても意味は同じことさ。

あたしかゝ云はせると、日本人は、ものゝなかへ這入ると云ふことをしない國民だねえ。その傾向は、日本人のすること成すこと何にでも現はれてゐるといつてもいゝくらゐ。先づ手近い例が、その木でこしらえた火の箱からはじめやう。いゝかえ！

あたしたちは、室内の正面の火爐に大きな火を燃して、一家團欒してその火のまはりへ集まつて、過去の苦樂も、未來の希望も、また現在の休息も、悉くつゝくるめて、その燃える火の夢のなかへ織り込んで、自分と云ふものゝ冷たい存在を暫し忘れる。父が話せば他の家族は、みんなその父の話のなかへ這入つて來る。母が話せば他の家族はみんなその話のなかの人となる。よしんば、赤ん坊が話し出しても、家中のものは、みんなその赤ん坊の心のなかに這入つてしまう。さうして、燃える火の溫かく赤い人間味のなかへ手を引き合つてその心を投げ込む。

ところが、日本人は、さうではないらしい。主人は主人、主婦は主婦、てんでんに、一つづゝ、小さい火の箱を持つて、しかも、それを自分のなかへ入れやうとするらしい。薄い金屬でこしらえた、極く小さいポツケツト用の火の箱のなかへ炭の粉でこしらへた火のソオセーヂを入れて、それをキモノの内側のポツケツトのなかへ入れて歩く。どうしてあたしがそれを知つてゐるかと云ふと、近頃、紐育の日本人のストアでは、みんなそれを賣つてゐる。あれを見るたびにあたしはいつもかう思ふ。

よく日本人は火を呑んでしまはないのが不思議だと。

日本人の畫いた繪の色彩をごらん。日本人の好む模樣をごらん。あたしは日本の音樂のことはよく知らないが、おまへが殘して行つた、ギダユウのレコードにしても、どれ一つとして、その藝術のなかへ、自分が這入つて調和したと云ふところは少しもない。目に見にくからうが、耳にきゝにくからうが、またそれをキモノに縫つて模樣が二つに切れやうが、そんなことにはかまはない。なんでも自然そのまゝを自分の方へ入れやうとしてゐる。おこつてはいけないよ。このいゝ證據は、あの日本のボックスガーデンをごらん。家のなかへフジヤマを持ち込まうとしてゐるだらう？　あの鉢のなかの、松の木をごらん。百年の木の壽命を、三寸の土の上にとゞめやうとしてゐるではないの？　あたしは、よくあの鉢植の木を、フエフスアヴエニウの日本雜貨店で見るが、そのたびに、なんと云ふ僭越な國民が世界のうちにはあるものだらうとほんとに日本人を憎らしいと思ふよ。

目に見せるものには目の法則により、耳に聞かせるものには、耳の法則により、體(からだ)につけるものには體(からだ)の形になぞらへて、向ふのためにこちらの形を換へると云ふことを日本の藝術家たちは知つてゐないやうだねえ。

おまへもやつぱり日本人だから、その點に於ては同じことだよ。いつまでもアメリカナイズしなくつて、ほんとにあたしたちは、まあこの人は、いつになつたらデモクラシイと云ふことがわかるのだらうと思つたよ。さうして、やつと、それがわかつたかなと思つたら、日本へ歸つて行つてしまつたぢやないの？　憎らしい！

それから、今度は、家の作り方だがねエ、おまへの云つてよこした事から押して考へると、日本の家は、たしかに、人間の體(からだ)の條件を無視して建てられてゐるよ。寒いときには寒さをどうすると云ふ設備もないらしいし。暑いときには太陽の直射をよける窓蔽ひも、またその強い光線を避ける爲の窓掛けもないらしいし。のばせば氣持のいゝ體(からだ)を、わざわざ疊んで座らなければならないし。いくら自然そのまゝが自分のものになるとは云へ。それを、人間のものにして使ふことが出來なくつては、なんにもなりはしないぢやないか？

考へてごらん。夏は電氣扇を浴びて電話をかけてアイスクリームを注文しさ。冬は、蒸氣(スチーム)のレデエータアがあつて、夜るでも毛布一枚で寢られるしさ。ちよいとひねれば湯が出るし。ちよいと押せば明りがついて戸(ドーア)があくしさ。どんなにそれが人間らしいか。早く紐育へ歸つておいでよ。

Bより

○月○日

デヤ SIGHETZ

稀なおまへの手紙は着きました。日本のシンプルライフ――簡易生活――の事を書いたその手紙。手短な書き方だと思ひました。それに就てわたしの考へてゐることを折返し書き送るとにしました。その前に例によつて少しニュースを書きましやう。

おまへがまだこちらにゐたときに市俄古に出來て評判になつた婦人喫煙室が、今度はいよいよこの紐育へも出來ました。場所はブロオドウエー。あのそらグロオブ座の這入つて右側のエレヴエタアで上つた三階目の角のフロント。大理石ですつかり裝飾して氣もちのいゝ休憩所。婦人を同伴してならば男子をも歡迎します。去る一月の九日からはじめました。おまへの知つてゐるミセスカアペンタアが、その晩開場の辭を一と口述べました。

酒は太陽、煙草は月と云ふことを支那の詩人は詠じてゐる。お酒を吞めば赤くなり、煙草を吸へば青くなるからなるほどさうかも知れないツて、アカペンタア夫人が、どこからひつぱりだして來たか知れないけれども、そんなことを云つて人を笑はわせました。さうしてその結論がたいへん。例によつて誰にもわからない支那の古學を引照して、みんなを煙に卷きました。

支那の古字では、シンプルといふ字は、日の下へ月といふ字が書いてある。つまり日月と書いてある。その日月と云ふ字はこれですといつて、その晩、夫人がわざわざ胸にさげて來た硬玉のチヤームをみんなに見せました。ゼロのなかに點が一つはひつてゐてその下に笄のあたまがくツついてゐるやうな支那の文字。次ぎから次ぎへとみんなの手に、それが渡つて眺められてゐるそのひまに、その字には、もう一つの意味があると夫人はいひました。それはイージイ――易い――と云ふ意味ださうです。

お酒を吞んだり、煙草を吸つたりするのは、そのイージイなことをイージイに實行するので、不幸にして合衆國では太陽の方は禁じられてゐますが、月の方はかうして婦人の喫煙室まで出來まして、これからますますその光を輝かすことゝ思ひます。吸ひたいから吸ふといふところに人間としてのシンプリシテーがあると思ひます。わたしたち簡易生活を行つてゐるものからは、この上もないうれしい事で、と、夫人は、あの調子で、喫煙室をうまく祝福しました。

それからもう一つのニュースは、男のおまへには關係はうすいけれども、今年の流行の話しをしましやう。

女の短かいスカーツは、おまへが日本へ行つてからあとでも、

だんだん短かくなつて、去年の秋ごろは、この上短くすれば膝を出すより外しかたがないと云ふところまで來ました。おまへがよく惡口をいつたねえ！　紐育の女の歩いてゐるところを見ると、支那料理店の、チヤツプステツキ——箸——が、歩いてゐるやうだつて。ところが今年からは、それがまただんだん長くなつてゆくらしいのです。もう、うちのマギユリートなぞは長いのをはき出しました。それはいゝがこまつたのは、スカーツの短かくなるに準じて短くぶッつりと襟で切つた髮の毛です。あれはさう急に長くはならないでしやう。長いスカーツをはいて、短かい髮ではどうしてもつり合ひがとれない。髮の毛ばかりは急げばとて、引ッぱつてのばすわけにはゆかない。年の若い人たちはおほ騷ぎです。

それにつれて着るものも帽子もかはつて來ました。若い人たちの着るブルージーズなぞも、前にはあのちよつきりした。ピイタアパンカラーズと云ふ、胸明きのないカラーが流行しましたが、今年は、胸にV字形の明きのある反りのながいタキシードーと云ふカラーのがはやります。色は、やつぱり淡い影の色で、ネーヴイ、タアプ、パアプル、ピーコツクブルー、ワウシポールテイントなぞです。おやおや、わたしは何を書いてゐるのでしやう？　お氣の毒さま、こんなことを話したつて、おまへは面白くはないでしやう。

流行の女帽子のことは書くのはやめましやうが、それにつけても思ひ出すのは、日本の女の髷。簡易生活を誇りとしてゐる日本人が、どうして女には、あんな髷を結はしてゐるのか、それがわたしにはわかりません。尤も、令孃には令孃の髷があり、奥様には奥様の髷があり、女優には女優の髷、ブルースタツキングにはブルースタツキングの髷、ゲイシヤガアルスにも、手品師にも、女工にも、みんなてんでんに、特有の髷の結び方があると云ふから、日本の往來はさぞ奇觀を呈するだらうと思ひます。しかし、どの女を見ても一目でこれは何、あれは何と云ふことがわかつてさぞ便利だらうと思はれます。

それを見ても、物質的に簡易な生活をしてゐる日本人は、精神的には、お話しにならない程、複雜な生活をしてゐるのだと云ふことがうかがへて、さうしてそれがわたしたちには何んとなくうるさいものになつて見えるのです。わたしが若し日本へ行つたと假りに考へて見ます。わたしは今、おまへから聞いた話や、繪や、活動寫眞で見た日本や、本で讀んだ日本や、さうした材料によつて一つの想像の日本と云ふものをこしらへて、その日本へ上陸したと、まあ思つて見ます。

わたしの第一に驚かなければならないものは、この往來でし

やう？ 髷の往來！ 違つた髷の往來！ 色々な女の髷が、日本の女にばかり見出されるその不思議な微笑を盛つた額の上へ飾られて、その驚くべき小刻みな歩き方で、あの活動寫眞で見るやうにみんなが肩で入れ違ひに横に歩いてくるあの往來へまざつて歩いて來られたら、わたしはもう目まぐるしくつて、一歩も前へ出ることができないかと思はれます。

凡そ、コンプリケーテッドしてゐるものはといへば、日本の往來ぐらゐコンプリケーテッドしてゐるものは世界にないかとわたしには思はれます。おまへがこれは劇場の幟だと云つて覺えた、あの劇場町の寫眞は、いまだにわたしのデスクの引き出しにあります。馬も車も人もみんな一つところを歩いてゐる。さうして小さな露店がそのわきに出てゐる、樹がある、消火栓がある、電信柱がある。そこへ幟が立ち並んでゐる。何と云ふいそがしい通りをわたしはその小さな寫眞のなかに見たでしやう？ コンプリケートしてゐると云ふことは統一のないと云ふことでしやう。統一のないと云ふことはシンプルでない證據でしやう。わたしは日本人の生活から、シンプリシテイを見出すことの出來るおまへを天才だと思ひます。

それから今度は、わたしが若しおまへの家へ行くとするでしやう。なる程おまへの云つたやうに、日本の家の入口には、西洋の家の入口のやうに飾り立てたファニチュアーズの展覽會はないかも知れない。それはまことにシンプルなものでしやう？ だが、そこには、その飾り立てた家具類のかはりに、おまへ自身には氣のつかない複雜なものがある。それをおまへは何んだか氣がついてゐるかい？

それは、なんでもない。日本人の丁寧な御挨拶であります。あの活動寫眞で見てゐると、上り口で一度あの複雜な儀式があつて、そこで靴をぬがせられて、上つてそこへ座つて、今度は本式の儀式によつて長い長い挨拶をしながら、日本人は衞生のためにはごく惡いフロアの上の、しかもみんながスタツキングのまんまで歩いた、そこの塵を吸つてゐる。あれだけの長い儀式の間に來訪の用むきを云ふ事は失禮で、それはまた、奥の座敷へ案内をされてから、茶をこれも儀式によつて呑みながら、そろそろその用事を話しだすのだと云ふから、このくらゐコンプリケートした事は、先づこれも世界にはないと、わたしは考へます。

それがどうです、亞米利加ならば、フロントドーアのベルを押して、『ハラオ！』『ハワユー？』『カミイン』『サンキユー』『テーキユアセングスオフ』外套でもおぬぎなさい。『イズンザットコオルドアウト？』そとは寒いぢやありませんか？ と云ひながら、上のものを脱ぎながら、要談がもしあれば、そろそろその

要談から先に話す。それはおまへが知つてゐるとほり。どうです、どちらがシンプルだと思ひます。

わたしに云はせると、日本のシンプリーネッスと云ふ事は無秩序と云ふことらしい。おこつてはいけませんよ。西洋の家は入口が一つあるのに、日本の家は、四方に澤山入口があつてどこからでも這入たり出たりできるでしやう? 來るのにも、室のなかの、どこの隅でもまんなかでもかまはない。ここは寐臺を置くところと云ふ定まつたところはないと云ふではありませんか?

食事の時には、御馳走は、みんな一度に並べられて、どれからでも食べて食べられないことはないでしやう、西洋の食事は、順序がきまつてゐて、追々にテーブルの上へ運ばれる、茶やコーヒーは一番あとから出て來るでしやう。どんな友人の間でも、一つのお皿からみんながすぐに食べると云ふことは先づないのに、日本では、ときどき、みんなしてお鍋をつツつくと云ふことがあるさうですねえ?

ことにそれをよく代表してゐるのは、あのお茶碗です。西洋の珈琲カツプには持つところがちやんと右にきまつてゐて、唇のあたるところも従つて一つところにきまつてゐます。それにひきかへ日本のお茶碗は、ぐるぐるまはしてどこからでも吞めるやうになつてゐる。おまへは、今晩、お茶碗のどこへ唇をあてたか覺へておいでかい?

可愛さうに、あたしは、なんだか、おまへがいぢめたやうになつてしまひました。

MRS Fより

○月○日

デヤ SASKY

日本の近代的特長を帶びた美人のことについて恐ろしくそれを褒めた手紙を君がよこしたので、それに就て、自分の考へをも書いて見たくなつた。君の送つたと云ふ他の寫眞はまだ屆かないが、同封してよこした分は、たしかに珍らしいものとして拜見した。

君はなるほど日本の女と云ふものを見るのに、歌麿や、豐國や、北齋のもつてゐたセンスの外に新らしい見方を見出したかも知れないが、然し、君はやつぱり、女と云ふものを見るのにどこ迄もその耽美的の態度から離れることが出來ないらしい。酒呑みが酒を見るときにどうしてもその醉ひ心地をとり除いて見ることが出來ないやうに、君が女に對すると、どうしてもそれから起る第一念をとり去る事が出來ないのは、まだ眞に女を批評する態度を吞み込んでゐないと云へる。

君が見て美しいとした日本のフアーメレシーズ――百姓女――は、まだそれを見た事のない自分にも、その美の價値は疑はれる。自分は合衆國のテンネツシイに生れたものであるが、そこにも所謂フアーメレシーズがゐない事はない。ケンタツキイや、ヴアヂニヤ州の娘たちがよく田園の働きをする事は君も知つての通りであるが、彼の女たちの體軀は健康ではあるだらうが、決して美とは云へない。それは勞働をする女は、いや女にはかゝはらず男でも、體軀の全體が統一した發達をしてゐない。殊に、君の云ふやうに、その腰の筋肉が力を持つてゐて、『見てゐてとてもたまらない』なぞと云ふに至つては、キリスト教徒が聞いたら靑くなつて怒る一言だ。女を見て内心色情を起すものは、その心すでに姦淫したるなりと云ふ、あれを君は知つてゐるだらう? 彫刻的繪畫的の美は眼にあるんだ。見ただけのところにとゞまつてゐないと、その美は純粹のものではなくなる。『とてもたまらない』と云ふ一言は、それは情感の問題だ。尤も情感も一つのフアンクションに過ぎないぢやないかと云はれゝば、内心の姦淫なんかいくらしたつて砂の上の文字と同樣なものになるのだが、のみならずキリストは所作の上に現はれた姦淫までも砂の上の文字にしてしまつたが、然し、物が一度感の埒内にはひると、美醜と云ふことがすぐ性愛の念に變つてしまふからなア。さうするとそれは、その美に惚れた態度で、つまり耽美的態度になる。それだと批評眼と云ふものは立たなくなる。惚れるのは批評家には禁物と云ふぐらゐは君も知つてゐるはずだ。君の書いた日本のフアメレシーズを讃嘆した手紙は、實は危險で讀んでゐられなかつた。汝等のうち罪なきものその女を石にて打つべし――全く、自分たちだつて女を見て第二念を起さないわけではないけれども。いや、第三念、第四念に亙ることも往々あるが、君のやうに、亙り過ぎるのは古來稀れだ。

君が手紙によつて與へてくれた、そのフアーメレシーズの幻影に對して。自分は何んの美感をも起すことが出來なかつた。その代りに自分は、日本の國力の貧にして且つ弱なることを思はせられた。なぜならばだ、女が働き得る程度の農園ならばさう廣くないと云ふことがわかる。さうして農園が廣くなければモータアのついた械機を用ひて耕作することが出來ないと云ふことも自然わかつて來る。さうすると。日本の農業はハンドヲルク卽ち手先の農業だ。手先の農業だから女が働いて間に合ふ。つまり靴下のつくろひをするやうなもので女で結構間に合ふ。要するに、日本の農業は、靴下のつくろひをする程度の勞働であると云ふことがわかる。

廣重の書いた東海道フエフテースリーポスタルタウンスの風

景畫を見ると、フジヴオルケーノーを背景にした一面の田園に、例の君の云ふファーメレシーズが、赤いペテコートを出して、ハンドヲルクの野良仕事をやつてゐる、それが如何にも遅さうに見える。實際、百エーカーの麥を、機械鎌で一日に刈り倒すのを見てゐる自分たちの目には、あゝした日本の暢氣なやり方を見ると、たとへばそれが繪の上にしたところで、まどろッくさくなつてくる。尤も、廣重の活きてゐた頃は、まだ日本も、から開けなくつて、サムライが、刀をぬいて、ハンドヲルクの戰爭をやつてゐた頃だ。だからハンドヲルクの農業をやつて、丁度、需用供給がいゝ加減に行つたのだらう。だが君、現代は、もう電氣と瓦斯と石油と石炭とダイナマイトの時代だ。ハンドヲルクの戰爭は、シエーキスピーアの劇と共に舞臺からすら忘れられやうとしてゐる。况んや、活社會に於て、そんなものが殘存してゐるはずはない。日本だつて、もうそんな夢は見てゐないだらう。それにつれて、農業だつて工業だつてみんなさうだ。今、云つたとほり、電氣と瓦斯と石油と石炭とダイナマイトの農業だ、工業だ、また商業だ。さうしなければ、需用に對して供給が追ひついて行かないではないか？　それをどうだ、日本では、農業だけは、いまだにハンドヲルクか？　おいおい冗談ぢやないぜ。それでは日本が貧乏するのはあたりまいだ。[illegible]女相手のハンドヲルクでこの忙はしい世の中に一本づゝ稻を植えたり、一粒づゝ米を選つたりしてゐたのでは遠からず日本は亡國だ。さうして國民の大部分がそんなことをして居るとしたら、一たい、何人の日本人が、近代的の電氣と瓦斯と石油と石炭とダイナマイトの活動をしてゐるのだい？　君の前の手紙によると、東京市は、まだ自働車の時代ではない。丁度いま、自轉車の時代であると書いてあつたのを覺えてゐるが、して見ると、日本は、今や、ハンドヲルクの、つまり手先の生活をはなれて、漸くフイートヲルクの、云はゞ足先の生活に移つて來たところなんだね。東洋の一等國も、莫迦に歩みが遲いぢやないか？

ハンドヲルクに最も縁の深い工業ですら、亞米利加では出來るだけ機械の力によろうとしてゐる。たゞ、その或る部分を、職工の手そのものに待ち、また手そのものに待たなければならない大部分を女工の細い指先に待つてゐる。だから、亞米利加に女工は多い。それは恐らく日本の遠く及ばないところであらう。だが、農園に、ファーメレシーズの影は殆んど絕えてしまつた。仕事がだんだん荒く忙がしく速かになつて女では間に合はなくなつたのが一つの原因と、國がだんだん富んで來て、女にまで働いて貰ふ必要がなくなつたのが他の原因となつてゐる。日本に、然もその都會の[illegible]に、お前のファーメレシーズ

がゐると云ふことは、これは何んでもない。その國の貧しさの程度を證明してゐるのでなくて何んであらう。ことにそれが、その勞働服のまゝで都會の市街をうろうろするに至つては、都會にさへ、その女勞働者の手に待つ仕事があると云ふことを語るもので、日本が電氣と瓦斯と石油と石炭と、ダイナマイトの文明から、まだまだ離れてゐるその距離の遠さをそこに現はしてゐるのである。聲を大きくして君の國民に告げろよ、日本はまだ駄目だつて。

君が送つてよこした寫眞のなかの娘は、全く自分たちには、不思議なものに見えた。それは實際、皮袋(かはぶくろ)のところどころをくびつたとしか思はれない。それは君の云はれる通り見るものではなくして抱くものに過ぎまい。それは事實であらう、然し、それも、首(くび)のついてゐる方が上で、足のついてゐる方が下だと云ふことが、その首が上の方につき、その足が下の方についてゐるがために辛うじて分(わか)るくらゐなもので、實際、抱いてゐる時には、ことによつたら上と下とを間違へることもあらうと思はれる。要するにクッションの代用に過ぎまい。

よくあのベービイが、上も下もないベローや、クッションを、人形のかはりにして、抱いてゐるのを、見る事があるがあゝしたクッションのやうなものを、抱いてゐられる日本の男の官覺は、やつぱりベービイのやうなもので、甚だ幼稚なものであらうと思はれる。どうだい、自分の口(くち)の惡いのには驚いたらう？

それに就て思ひ出したことがあるが、君の知つてゐる、ロン、サン、ターイ——紐育にある支那雜貨店——に、日本の浮世繪で見る、川の岸の崩れをとめるために、石を入れて沈めて置く、あの長い竹の籠。君にその名を多いたらば、スネーキクーブだと云つたあれがあつた。繪では見てゐたが實物を見るのははじめてだから面白いと思つて、これはなんと云ふものだときくと、あすこの支那人が、それは、バンブーレーデーと云ふものだと云ふ。はてな、スネーキクーブと、バンブーレーデーとの間には、だいぶ隔たりがあるが、日本と支那では、かうも名がちがふものかと思つて『これは、エンバンクメント——築堤——に使ふものだらう？』と云ふと、支那人が妙な顏をして『いや、エンブレースメント——抱擁——に使ふものだ』と云ふ。はて不思議だと思つた。エンバンクメントと、エンブレースメントとの距離は、たしかにスネーキクーブと、バンブーレーデーだけの距離はある。これを夫婦の間へ置けば、エンバンクメントにはなるけれども、然しエンブレースメントにはならない。またこれを、夫婦の間から取つてしまへばエンブレースメントにはなるけれども、エンバンクメントにはならない。どうもその使用

法がとんと分らない。しばらく自分は、エンバンクメントとエンブレースメントの間へ、その疑問の竹の籠を置いて考へたが、結局、支那人に聞いて見ると、それは夏の暑い夜に抱いて寝れば涼しさを増すものと分つて、なる程と合點がいつた。あの、バンブーレーデー――竹夫人――は、日本にもあるかい?。あれはたしかに好いものだと自分は思つた。

MRDより

○月○日

デヤ、YEITA

おまへから來た、前の手紙の返事をまだ出さないうちに、今日はまた、その後の手紙を受けとつて、おまへが亞米利加へ歸りつゝあると云ふことを知りました。二十年も立つたら歸つて來るだらうと云つて出發したおまへが二年たらずのうちに歸つてくる。こんなうれしいことはない。さうして今度はもうこゝで死ぬつもりだと云つておよこしだが、その方がいい。おまへのやうな調子のはづれた男は、やつぱりあたしたちのなかで暮す方が、いいよ。

タエルタエーズ、フラワーズ、エツキストラクト。
ゼー、パアーフユーム、アイデール、エツキストラクト。
エープリル、アイオーンデイ。ガーデニヤ、ヴアイオレツト。ロオズ、ポムボン、
ジエスミーン、エツキストラクト。ステイツクス、エツキストラクト。サイプレーズ、エツキストラクト。

これだけの香水を、クリスマスのプレゼントとして、丁度昨日おまへに送つたところでした。

去年、送つた、あのフアンタシテイツクな、香水の名は、チヤンプス、エリイシーズ、ナンバア、トウ、二分の一と云ふのです。一名あれを、パアーフユーム、リユー、デ、ラ、パーイとも云ひます。俗に、佛蘭西で、さう云ふ名をつけたのです。

おまへも知つてゐるとほり、あたしは、エヂープトで生れたのですから、ほかの誰よりも強ひ嗅覺を持つてゐます。暑い國に生れたあたしは、小さいときから澤山な物の臭を嗅いで自然にその臭ひの世界の驚くべきものであることを知つてゐます。

父親に香水を作ることを習つて、小さいときから廿年、それを仕事としてゐますが、チヤンプス、エリイシーズを作るだけで、あたしはもう、近頃ではあせらずに暮らせるやうになりました。おまへが歸つて來たら以前よりはゆつくりと遊びまはることが出來るだらうと思つてゐます。

ここにはあるが、ほかにはないと云ふ臭ひが、どこにでもあ

ります。おまへの手紙にあるヨシワラの、オイランタウンの、どぶの臭ひと云ふのもたしかにさうした特殊なものに違ひない。異なつた國へ行つて、今迄に自分が全く知らなかつた臭ひを嗅ぎ出したならば、それは、あたしたちに取つては一つの發見です。素人の云ふ好い臭ひも惡い臭ひも、あたしたちに取つては、それが決して好い臭ひでも、惡い臭いでもない。またしたちは、あらゆる臭ひそのものに興味を持つてゐます。

また臭ひの哲學かと、おまへが笑ふかも知れないが、その後あたしが考へたところを少し話さしておくれ。全く、亞米利加の男は、不風流で、かう云ふ話を聞く耳を持つてゐないし また亞米利加の女たちは、香水と云へば、アルカホールのはひつた、一哩四方へひろがるやうな、テンペラメンタルな臭ひだとばかり思つてゐて、毎日毎日の暮しの上で、自分たちの鼻が色々な臭ひを嗅いで樂しんでゐることにはさつぱり氣がつかない。若しそんなことを話さうものなら、みんな顏を赤くしてしまひます。

人間の五官のうちで純粹に受動的の感官と云ふのは、耳と鼻だけで、他動物のうちではあんまり耳の敏感な動物は、强い音は避けられるやうなしかけになつてゐるけれども、鼻だけは、さういふわけにゆかない。あたしたちにしても、あまり强い臭ひの時には息をつかずにゐるけれども、それも長くは續かない。いやでも應でもその臭ひを嗅がなければならない。だから嗅覺だけは、人間の意志の力の外にあつて、すぐに魂と、外界との接觸がそこで行はれてゐるわけです。臭ひの世界は、ほんとうに人間にとつては無意識の世界です。ですからそれを意識することにすると、他の人には氣がつかない面白い事がそこにころがつてゐます。鼻と咽とは兄弟で、咽をもしお婿さんだとすると、耳は丁度そのお嫁さんにあたつてゐる、咽で聲を出して耳で聞くでしやう。しかし、若し鼻をお婿さんとしたならば、お嫁さんは何でせう。お嫁さんの居どころは離れてゐます。お嫁さんはきまり惡がつてかくれてゐます。

他動物にしても人間にしても、そのかくされてゐる部分の臭ひによつて、殆んどその時の破水狀態なり性情なりを知ることが出來るのは誰れでも知つてゐることでしやう？　あたしのやうな强い嗅覺をもつてゐるものゝ前では、誰でも、その人のその方面の生活をかくす事は出來ません。往來で通りすがつたりするはずみに、それの臭ひによつて、然もかなり饒舌に、その人のたつた十分前の出來事を、あたしに聞かせることがあります。あたしは氣の毒に思つて顏を染めますの。

目に見えて、をかしいものは衣服でかくすでしやう。けれど

も誰も鼻に臭つてをかしいものをかくす事をしない。尤もこれは衣服ではかくせない。衣服はそれらの臭ひを吸ひ込んで置くとも、消しはしません。だからこれをごまかすより仕方がない。それには香水を用ふることです。あんまり、ぷんぷん臭はせないで、なるたけその人の持ちまへの臭ひを活かして、好い感じを人に與へるやうにしたい。つまりその人の肌の臭ひを一滴の香水の匂によつて美化するのです。それが何より奥ゆかしい、ことに女はそれをしないと恥をかきます。尤も、ある種の香水の臭ひを借りて男を迷はすなぞと云ふのは、それは香水を用ふる上の邪道です。

＊

おまへがよく話したぢやないか、日本では男が香水なぞ用ひると、人に笑はれると云つて。しかしそれは、日本には男の用ふる香水がないせいでしやう。亞米利加の紳士なぞがよく用ひる、そら、あのハンキイパンキイと俗に云ふ、あのキヤロリナ、スウイート、ニコタイン、エツキストラクトと。あの好い調子の臭ひのする香水さ。あれなぞは、どちらかと云ふと、下品なものだが、男の用ひる香水にだつて色々あるからね。少し日本の紳士にも香水を用ひることを敎へるといいねエ。チヤンプス、エリイシーズ、ナンバア、トウは、冬の香水ではないけれども、あれは、若い男が、下宿にほんの一滴たらして置いたら、[illegible]

ではなからうと思ひます。

おまへのなかよしの、レオがこの間ワシントンデーシーから歸つて來ての話には、軍備縮少會議のために、わざわざ日本から來た貴族たちは、夜會に燕尾服を着て出たのはいいが、その燕尾服にナフタリンの臭ひがしてゐたさうだよ。古着屋の倉からでも出して來た燕尾服ではあるまいし、日本の貴族ともあるべきものが、世界の紳士淑女の集まる會場で、臭はせるのに事を缺いて、ナフタリンの臭ひとはどうでしやう？ 日本人に、色彩と音樂のセンスがないと云ふことは聞いてゐたが、お鼻のセンスもないとは、ほんとうにあきれ返へつた國民ですねえ。おまへは雜誌になにか書いてゐると云ふから、少しそんなことでも書いて、日本人のお鼻も、それ相應に役に立つやうに警告しておあげよ。亞米利加では酒場の化粧所にしたところで、氣のきいた化粧所では、ナフタリンの臭ひなんかさせてゐはしなかつたぢやないか。

あたしはいつでもさう思ひます。若しブッディズムと云ふ宗敎が、熱帶地方で出來た宗敎でなかつたならば、恐らくは祭壇で香は焚かなかつたらうと。さすがに印度は香料の國ですねえ。今でもいいパアーフユームの原料は大抵印度地方から來ます。麝香の猫から取る有名なマスク。これからエヂプトの木乃伊か

ら取ると云はれてゐる一種の動物性の香水の原料。あれも實はマスクの類なのです。西洋の宗教でも、オーソドツクスではみんな香を焚きます。あれは、羅馬が、キリスト教を帝國の宗教と定めた時に、コンスタンチノープルにゐた、佛教徒をみんな改宗させました。その時佛教の僧侶も改宗して、それで佛教の儀式がそのまゝ羅馬教の儀式となつて傳はつたのださうですが、近頃の紐育あたりの羅馬教の會堂では、それはいゝマスクを焚くのですよ。たぶん昔は印度では悪臭を拂ふためにイーグルウツドを焚いたり、サンダアルウツドを焚いたり、みんな植物性のインセンスを焚いたものでしやうが、今の羅馬教では動物性のインセンスを焚きます。そのくらゐ強い臭ひでないと紐育の人たちの鼻には神聖な感じを與へないものと見えます。あたしなぞはあれをかゞされると、猫の肉を燒くと云ふ聯想が起つて目がまはつて來ます。

それは、さうと、丁度思ひ出したから、おまへに聞いて見やうと思ふのだが、日本に、エー、ローマンス、オブ、ゼー、フランクインセンス——物語、戀の乳香——と云ふ戯曲があるだらう？。サムライのムスメが、香を焚いて、死んだスウイートハートの魂を呼び戻さうと云ふ筋の劇さ。それを例のプロヴイデンスタウン、プレーハウスで上場しやうとして、ミス、ゴートンたちが一度稽古をはじめたことがあつたがね。その時に、おまへの友人のミチヲ、イトウ——伊藤道郎——が來て、そのあゝ場面をパントマイムのやうにして演じて見せたがね。彼れの仕草はともかくとして、あたしは一つ不思議なことを見出しました、と云ふのは外でもない、そのムスメが長いスリーヴイズのキモノを着て、悶えるやうに泣きながら、その袂を絞つてゐるではありませんか？　どう云ふわけです？と聞くと、それは涙が袂をぬらしたから、それを絞つてゐるのだと云ふことでしたが、そこです。日本の悲劇と云ふものは、なかに喜劇が含まれてゐると思ひましたよ。なぜならば、いくら袂がぬれたつて、それを絞ると云ふのでは。もう悲劇は通り越してゐる。日本の悲劇にはみんなあゝした誇張があるのですか？

あたしは、その時、イトウにもそれを聞きましたら、彼れの云ふには、それは、この劇ばかりではない、ベンケイの使ひと云ふドラマにも、四人の涙が八つの袂にたまつて、それを絞つたら瀧のやうな雨が降つたと云ふのがある。日本人は、それを喜劇とは思はずに、眞面目な悲劇としてやつぱり泣いて見てゐると云ひましたが、ほんとうですか？　もしそれがほんとうだとすると、日本の悲劇と云ふものは、たいそう滑稽なものですねえ。

Rより

棄老養老譚

藤澤衛彦

世にも變つた話がある。

山の、深山の木客か山精か、けゝけゝけゝと黄昏を呪咀すると、夕陽に春く國境を行交ひの雲間から、面妖な入道雲が顔を出して、わゝわゝわゝと下界に相應ずる。と、それが、峯幾つ、谿々の彭侯に眞似られて、二度三度氣味惡く繰返される。最初は高くして物凄く、中なるは低くして打顫ひ、終なるは細くして嘲笑ふかの如く、幽かなる餘韻いと長き繋りは、憂鬱な日本アルプス一帶の天地に、響の永久の迷ひを以て、洞を這ひ、嶺を掠め、神秘に閉づる森の扉に闇を縫ふて漂ふ。凄涼の氣に蠱惑された妖魔の群は忽ち其處に現はれて、光を嫌ふ山都山𤢖の輩先づ踊り狂ひ、山𤢖、山𤢖、巨蟒、蝦蟆、山𤢖、悟獸、䗍䗍、猫股一味の怪屬、擧つて活躍の舞臺に出やうとする。天狗は空を翔り、河伯は水を渉く、小豆洗ひは關東を指し、魑魅は北陸を指し、犬神は山陰を指し、牛打坊は四國を指し、とうひやういゝかいゝかは安藝に、すいかつらは備前に、一齊に妖魔が刻の旅を急げば、幻術の如き其魅力に、行く先々通路の家畜家禽は慄き、赤ン坊は蟲封じの護符など握つて怯える。東海道を走る鎌鼬は、五十三次往還出鱈目の人達に鎌形の疵を負せ、房總の山路を辿る女化は、しやきしやきと白歯に怪音を嚼鳴らして平和の村里を脅かし、若い女達に、しかゝつた小便桶を屋内の土間などに持込ませたりする。

唯ひとり、白玉の白さを誇る雪女ばかりは、それら多くの山怪から全く懸離れた性情の持主のやう傳へらるゝ。永劫に亙つて雪融けぬ北國に、新しい雪は舊雪の融けぬ間と彌が上に積む。或は兀突と白く聳え立つ怪しい銀の巖座に、或は白皚々水晶に彫む美しい氷の城に、希代の神聖を惠まれて雪の精は生れる。今も今、太古の秘密を疊む大雪渓の奥に、日本の雪女は永久に老知らぬ若さの身を横へて微睡む。見るからに端麗な彼女の姿は、雪の降る夜の明け方に飛騨の高山などに現はれる一つ目一本足の雪入道や、雪夜に飛びあるく一本脚の紀伊の雪坊のやう

な小童の形でない美しい一人の處女の、雪を掠く裸體の儘に千年の雪の褥に眠る態。腰より纏ふ衣も劣らじと白く、裳裾は曳いて大地の雪ある何處までもと續く。かうした本來の雪女には、越後に雪卷く雪女郎の凄味、雪積む宵小兒を呪ふ伊豫の雪婆の妖味も無ければ、彼女は何時の夜も安らかな傳統の夢を見てゐる。それは、ほんのりと暖かい、春の香の芬とする、紅い紅い雪の降る時代に廻合つたと喜ぶ憧れの夢で、彼女は、そぞろに儚い未來の幸福にほゝゑむ。ところへ、例の彭侯の異樣な音樂、けゝけゝけゝ、わゝわゝわゝ、雪女は驚はれて、そつと重い眼瞼の目を細め、物怖げに清らな肌の雪を拂ふ。それでも何時となく亂れざる曙光の恍惚と、段々人間世界の方を見やると、峽の狹間に蜿蜒と引かれた遙かの鐵路に、中央本線の汽車が走つて、そこの煙筒から、三等炭の醜い斑の火の粉を、さながら彼女の慕へる紅の雪の如くに吐き飛ばして過ぎ去るのが見えた、といふこと。

まこと、國境あたり山怪頻りに、海拔高く、級坂多く、たゞ見る影面背面の郡郡、日の縱日の横の鄉鄉では、文化に遠い、武田の落武者など言はれる子孫後裔の手合が、夜々爐邊に集つて、世に疎い昔昔の話に耽るといふ。

さうした地方の古傳說によると、雪女は、日本に於ける處女より女への表象で、絕對の純潔そのものゝやうにも見られたが、紅い雪見る瞬間にそれを裏切る。昔、雪女は、少女の時代に、野女の垂乳と月水とを笑つて、そのため、神に、此世に紅い紅い雪の降り積む日まで、性の目覺を封ぜられた。不幸にして、それから、青春に近い時代が惠まれ、ともすれば湧き出でやうとする紅い血の生々を感じても、雪女は、われから自然にそれを凍らせねばならないといふ、定められた運命の約束に惱まされねばならなかつた。さうした處女の時代は、來し方行末の果もない永遠のやうに續いて行く。雪女は、せめてもの慷慨に、紅の雪を懷しみ夢まうとしたけれど、現實に催さうとするけはひを待設けはしなかつた。さうして百年たち、二百年たつ。日本記錄によると、紀元一千四百二年（天平十四年）に一遍、千七百六十五年（長治二年）六月に一遍、二千百三十七年（文明九年）に一遍、都合三度紅い雪の降つた先例があるけれど、わが雪女のそれを記憶しやう筈もない。

文明九年春の紅雪が大地を埋めた說話は、時代が新しいだけに最も有名で、その現象を、時の陰陽博士は、此年に平定した應仁の亂に、戰士の流した十年間の血汐の變化であらうと占つたが、只管に傳說を信ずる愚しい人達は、たゞ雪女が御享樂の日であるとのみ考へた。其時、紅い雪は信濃にも甲斐にも降つ

た。加賀能登若狹越前越中越後等、等、それら北國には就中巴に降りしきつた。貞操の權化は一變して邪淫に墮落する。加賀の雪女は豺を見て孕んだ、能登の雪女は狼を見て姙んだ。若狹の雪女は蟒蛇に孕み、越の雪女は白兎に姙る、甲斐信濃の雪女は、たつた一人の人間を兩方から見て共に姙つた。それで雪女は國境が本場となつてゐる。禽獸蟲魚介、その種を見て孕る雪女は流産して自らも融け失せる、人間に姙る雪女は紅い雪降り續く間を性慾の女であり得る。かくて雪女は第一を産み第二を姙り第二を産み第三を姙り、第四第五第六第七……と姙り續け産みつゞける間に聽て紅の吹雪は霽れる。刹那に死の運命がやつて來て、母雪女は自らの垂乳を抱きながら融け失せる。殘された雪女の兒は温かい乳を慕ふて泣く、乳は與へられないで代りに冷い雪が投げられる、それが曾て雪女の祖先が野女の垂乳を嘲笑つた永久の罰だといふのである。文明九年から大正十年までの四百四十四年間には、恐らく日本の何處にも紅い雪の降つた例はあるまいから、室町時代の雪女は、傳說のまゝの、まだ世づかぬ少女の姿に生きてゞあらう。

先ふるは雪女もや北のかた、（俳諧懷子）
見られぬや山のおく樣雪女（積山井）
ありといへど見ぬは貞女か雪女。（積五元集）

貞節の司神ダイアナにでも孕まれたやうな紅雪前の雪女の處女時代は、之を要するに長生不老の八百姫傳說に軌を等しくし、紅雪後の雪女は、重仙女の傳說と形式を同じくしてゐる。そして、日本の棄老養老兩傳說は、それら傳說の錯[illegible]から胚胎される。

雪女の貞操淫蕩を分界する紅い雪を、紅雪交接に通ずと言ふの響ひ附會であらうとも、雪女に紅と足跡の附隨する事は故なき事でない。紀州熊野地方などで、雪の朝樹木の下などに出來る圓形の窪みを以て、一本だゝらの足跡だと言ふのは、明かにだいだらぼち巨人足跡傳說の影響であらう。昔、ゼルマンの傳說的英雄ディートリッヒは、巨人ジゲノットを捕して山路を彷徨ふた時、ヴァジナル（處女を意味す）といふ雪の精の女王に廻り遇つたことがある。ディートリッヒは、其頃まだ若き騎士であつて、一度ヴァジナルを見て其美しさに心を惱ました。幸にして巨人を退治た後、侏儒の報知によつてヴァジナルを魔法師の許より救うて、遂に夫婦の契を結ぶ。ヴァジナルは、雪の精の女王たる印の冠を戴いてゐる。美しい冠には幼兒の拳ほどの紅玉が嵌飾されてある。輝く紅玉には靈があつて、大地自然を支配する。日本の場合には、この紅玉が雪女の紅の雪と現はれ、侏儒は雪坊と現はれ、巨人に雪入道となり一本だゝらとなつて足

跡傳說に交渉するのである。かくて雪の精の女王は、若き騎士に導かれて雪の領土を去り、漸く綠の草繁き人の世に住むのであるが、軈て又雪の國が戀しくなり、密かに男を捨てゝ氷の城に歸る。日出で鳥鳴く定めのやうに、ヴァジナルは、天から雪の降る間、氷の城に雪の國を治めねばならぬ運命にあるといふ。日本に於ても、在原業平は、交野の狩に雪に降られ、『いかにせむ交野のみのゝ狩衣濡れぬ宿かす人しなければ』と口すさんで、一人の女に出逢ひ、その宿に一夜假寐の草枕、契をこめた緣で都に伴ふたところ、春になると、其女、心なやましくなり、萎める花の色褪せ匂の失せるやうに、しほしほとなりはて、遂に日影に消え失せたといふ雪鬼の物語がある。そして、『それ雪鬼といつぱ、本來惡心の鬼にもあらず、年ふる雪の高根、高根、深谷の岩間に凝固つて、自ら他生の人體となる、其姿は女なり、云云』と、謠曲雪鬼の略筋が、地方口碑の雪女である事もある。

雪中の足跡傳說については、もう一つ、クリストに呪はれた猶太人ジューセス（アルメニヤ大僧正說話のカータフイラス、ボヘミヤ說話のコーコト、東方諸國のエライジヤ、獨逸說話のアハスフェルス、其他世界の致る處に出現の、呪はれた猶太人。）が、磔刑の極地の事に、靴底の七つの釘で、十字架の跡を印して行くといふ說話がある、勿論、この說話は、聖書に『誠に、爾曹に告げん、人の子その國を以て來るを見るまでは、此處に立つものゝ中に死なざるものあるべし。』（馬太傳第十六章第二十八節）などあるに胚胎した傳說で、不幸な生活を永久に續けるより、寧ろ自然の死の靜寂を享くるの勝れる道理を示したもので、永世不死に對する一種の古典的皮肉である。そして、その呪はれの猶太人は、クリストの刑に處せられた時三十歲であつたので、彼が百歲に達すれば、又もとの三十歲に若返るといふ傳說、若返る時、同一人間が幾人か出來るといふ傳說は、日本の雪女が紅い雪に貞操を破り、邪淫に死すると、後繼の雪女が幾人か殘される傳說と共通の思想に生れたものと見ることが出來やう。

生命と性慾、これぞ人間を支配する二大衝動で、人間萬事この二大衝動から生動する。功成り名あらはれ福祿身に餘つて壽を願ふ、人間本來的の欲求である。古來、その爲に生命の泉を求め、不死の藥を搜した者は、東西軌を合したやうに多くの失敗說話を遺してゐる。玆に古今の長壽者を閱するに、支那太古の天皇氏地皇氏兄弟おのおの十二人、皆一萬八千歲といふけれど、蛇身人首以前の怪物である故これを措く。西洋ではアダムの一千歲、メッザレムの九百歲、東洋で彭組の八百歲といふも、

その頃の年暦三ヶ月を以て一年と解されると、概算して二百歳前後に過ぎない。日本では、倭姫命の五百歳、武内宿禰の三百七歳が有名だが、近世に於ける奥州白石近在の農夫段平の長壽は更に有名だ。彼は紀元二千四百八十九年(文政十二年)の春、六百七十二歳で、尼ケ崎廣德寺に滞留し、京攝の名所舊蹟を見物して歩き、大阪では博勞町一丁目の大喜に止宿したといふ。因州松原村の百姓仙右衛門は二千四百七十四年(文化十一年)に百八十三歳、三河國寶飯郡水泉村の百姓滿平は二千四百五十六年(寛政八年)に百九十四歳で猶生存などいふものでも、近代の西歐長壽者、西暦千七百二十四年に匈牙利ケーフレッシュで百八十五歳で死んだツァールテン、千六百七十年に英國ヨークシーアで百六十九歳で逝いたエンキンス、千七百七十三年に百四十六歳で倒れた丁抹のドラーケンベルヒ等よりも長壽だ。かうして、東西にかゝはらず長壽者の體驗は時代人の模倣を流行せしめた事もあつたが、未だ眞似得て其眞諦に達した者は無い。その人間の壽命も最高僅々二百歳、普通では必ず六七十歳に限らるべきであるか、若くは無限に延長せらるゝものであるかの疑問に刺戟されて、われわれの祖先も隨分と埒ちない好奇心を挑發したものだが、絕えて不死法の成功を生物學的に據つた者も無い。英國のジョン・ハンターは、氷結した動物は一時生活現象が止つて死の狀態にあるが、やがて氷が溶けると又生活を始めるといふ事實を人間の上に當嵌めて不死の狀態を解決しやうとし、獨逸のブルーメン・バツハは、一二の昆蟲動物の仔蟲が冬期は假死の狀態にあり、夏期に至ると再び生活を開始する事實を認めて不死論を證明しやうとしたが、こんな考へは三千年前の埃及人も抱いてゐたところで、彼等は、人死すれば其靈魂一度天に昇るが、二千年經てば又戾つて來る、それで夫迄身體を保存して置けば蘇生する事が出來ると信じてミイラを發明し、之をピラミツト中に貯藏して置いたが、三千年後の今日に至るも未だに唯一人死より蘇つた話を聞かない。そこで、最後に不死論の上に細胞論を展開するものがあつて、動物學者のワイズマンなど、死は複細胞のものばかりに見られる現象で、單細胞動物に於ては之が無い、彼等には分裂はあるが死は無い。即ち一個の細胞が分裂して二個の細胞となるが其處に死體殘らないなどと言つて世間を騷がした事もある。無論これらには反對の議論が多くあるが、人間としての傳說に、例の呪はれたる漂泊の猶太人があり、似て非な妖女に日本の雪女の傳說が潤かれてある事はおもしろい事だ。更に日本の小話に『或人、不老不死の術を知つてをる者がをると聞いて、遠きを辭せず、これを學ばうものをと、或日術者の家を訪れたところ、旣に其

前日死んだと聞き、たつた一日遲くなつたばかりに、その秘術を學ぶことが出來なかつた口惜さよと悔い歎いた。』とあるなぞは、全般を穿ち得て一層おもしろい。又、われわれは、幾々の方士神仙が不死不老法に關しての怪奇な傳說を、山に聞いてをるが、『予にも不老長生の法あり、元より秘術なれども、善人だけに敎ゆべし。節分に豆を食はぬことなり。』と喝破した「とはずがたり」の比喩以上のものを敎へられた事はない。これを要するに、われわれは長壽者ではありうるが、決して不死者ではあり得ない證左は目前にある。不老の長壽者といふものも共通りで、譬へ異例の傳說はあらうとも、不老は仙界の專有物で、人間の此恩惠に浴する者も、現實界に歸れば、タンホイゼルの如く浦島子の如く悲慘であらねばならぬ約束にある。仙鄕に若くある間、彼等の身には種々の快樂が纏りつく。性的對照としては、タンホイゼルに戀の女神ヴィーナスがあり、浦島子には龍宮の乙姬があつて、共に艷麗高雅の美女である。かくて歡樂幾年かの後、彼等は朦朧たる精神上の不安、人の世に對する憧憬を生じて結局仙鄕に別れを告げる、換言すれば、それは老が歡樂から自然に離されたのだとも言ふ事が出來る。歡樂に精氣を消耗し過ぎた、それが玉手箱に秘められてある秘密だ。かうして一朝に老耄する。老人は若い者にもてない。それが爲、人の世に於て、性慾は古來多數の英主英傑をも苦しめて來たが、一人だも滿足を得た者は無い。のみならず性慾と壽命とは何時でも反對の方向に歩いてゐる。申すまでもなく、例の婦女が、處女時代に不老長壽的であつたものが、性的淫蕩の時代に移ると忽ち死に至るといふ共通程には、多分の眞理が含まれてゐると解されたい。人皆は長壽を欲するけれど老ゆる事を欲しない、老いたるものは愚にかへる、老幼は常に一直線下に置かれる、それは勞はらるべきであるか、蔑しまるべきであるか、其邊の兩極にわが棄老と養老譚の影は潛んでゐる。そして、どちらにも孝子孝女などが附隨するが、不老說話には、その不老者が童貞の保持者であるないに關らず多くはそれが無い。

唯一の、日本不老長生傳說の保持者である八百姬（やほひめ）（また、八百比丘尼（はつぴくに）とも、白比丘尼（しらびくに）とも呼ばれる。）は、また美しい童貞の持主であつたと傳へられてゐる。

昔昔、ある地方の村人の四五人が、或時不思議な異人に招ばれて、妙な、怪しげな御馳走にあづかつた。然し、同席の人は、誰も、その御馳走を氣味悪がつて、箸さへも付けなかつたが、歸りしなに、何と思つたか其中の一人の男が、その御馳走の少しばかりを、そつと、布に包んで持つて歸つた。『今歸つたよ、さあ、これが珍らしいおみやげだ。』と、其男は、歸るなり、留

守の者に出してやらうと思つたが、やつぱり、食あたりでもすると面倒だと思ひ直して、ぽーんと其儘棚に投げ上げて置いた。朝になつて其家の小娘が、それを見付け出し、何だかおいしさうな物だと一口食べてみると、ほんとに甘かつたので、少しも殘さずに食べてしまつた。ところが、その知らずに食べた物といふのは、人魚の肉だつたので、それから、其小娘は少しも年を取らず、二百歳の老年になつても、常に若々しく、何時でも十五六の小娘でをつた。そして、其人魚の肉を食べた功德は、若々しい少女のまゝ千歳の壽命を保つことが出來る筈であつたが、八百歳の時、あと二百年の壽命をその國の領主に讓つて、彼女は、不思議なおのれの命を絶つた。八百歳まで少女の容でゐられたといふので、少女は、その後、八百姫明神と祭られ、八百比丘尼と稱へられてゐるといふことで、今でも、若狹國には其遺跡といふものを存してゐるといふのである「若狹郡縣志」によると、小濱町字男山町後瀨山空印寺の總門を入つて進みたる突當りの山麓に、巖石絶壁赤褐色の巖根に、一洞窟があるのを、八百比丘尼が起臥して長壽を保つた址だと言ひ傳へてをるといふ事で、寺には其御影をも存してをるといふ。「諸國里人談」の記錄によると、當寺五六世以前の住持、此穴に入つて其奧をはかるに、三日を經て丹波の山中に出たといふ事である。一説によると、八百姫は、雄略天皇の十二年に遠敷で生れ、八百歳の長壽を保つたので八百比丘尼と言はれたが、彼女の身體は雪のやうに純白であつたので、また若狹の白比丘尼とも稱へられたといふこと、空印寺の洞窟は彼女が入定の巖洞で、その洞口を八百比丘尼入定の山と呼ぶとある。八百比丘尼は、其入定に當つて、椿の枝を巖口に突き立て、此樹の死せざる間は、おのれも決して死せないと言つたところ、其後、その椿芽を生じ、能く榮へたとの言ひ傳へもある。「若狹國志」は又別説をなして、八百比丘尼は、西津村大字小松原の漁人の女で、父を道滿と言ひ、根來村勢川の邊に住つてをつた。此尼八百の壽を保つたによつて、俗に八百比丘尼と言ひ、又、肌膚顏面の色白かつた故に、一に白比丘尼とも稱へたと傳へてゐる、巖口の椿については、その白椿が八百比丘尼の所緣といふので、後瀨山を一に白椿山といふさうであるが、白椿の遺蹟は能登國にもあり、別に武藏國足立郡水波田村慈眼寺仁王門の傍、榎の伐株めぐり二丈あまり莚六疊も敷かるるものを、もと若狹の八百比丘の栽ゑた樹だと傳へるものもある。其誕生地についても、佐渡では、羽茂村大字大石出生の者としてお國自慢の一つに數へ、彼女の父が、異人の饗應を受け持ち歸つた人魚の肉を食べて長壽を保ち、後、若狹に移り住み、爲に祀られて八百姫明神といふ

由に傳へてゐる。これに就て、益軒の「西北紀行」は、『八百比丘尼の事、世俗の語り傳へに曰く、古へ、此邊に六人の富徳者あり、時々參會して寶物を競べ、食膳も亦珍奇盡くす、或時、人魚を料理す、五人の者は人魚を知らず、怪しきものとて食はず、そのうちの一人、人魚の肉五六片を懐にして家に歸り、妻子に見せて捨てんと思ひ、隠し置きけるを、一人の女子、人魚は藥なる由を聞きて、竊に取りて食しける、これより長命にて、八百年生きて、此所に住せしといへり。』と言ひ、かつ、此傳説の荒唐なるを罵つてゐるが、これ、羅山の「神社考」に、『若狹國有下號二白比丘尼一者上、其父一旦入レ山、遇二異人一、與俱到二一處一、殆一天地別世界也、其人與二一物一、是人魚也、食レ之延レ年不レ老、父携歸レ家、其女子迎歡、而取二衣帶一、因得二人魚于袖裏一、食レ之、女子壽四百餘歲、所レ謂白比丘尼是也。』とある傳説と同系のもので、平田篤胤も、此種の傳説を、總て佛家の捏造と斷じ『希には强いて勉めて、一生不犯なるもありけめど、ただ愼みたるばかりにては、蘊魔、煩惱魔を免れず。』と、この美しい童貞の保持者を笑つてゐる。私は、日本に於けるたつた一人の不老處女を好んで墜墮したくはないが、少くも彼女の上に、緣起作者の作爲の加はつてゐる事を否む事が出來ない。一體、佛家は、『女人は煩惱の源なり、一度も犯せば、五百世の間、彼に隨ひて六趣に輪廻す、毒蛇は見るとも、女人をば見るべからず。』とか『一たび女人を見れば三惡道を離れず、永く三途の業を結ぶ、何ぞ況んや一度犯すに於ては、定りて無間獄に墮つ。』とか、又は『若し婬を斷ぜずして禪定を修せん者は、砂石を蒸して飯と成さんと欲するが如し、百千劫を經るとも祇く熱砂と名けむ、何を以ての故ぞ、これ飯は本砂石の成るに非ざるが故なり。』などある經文に拘泥し過ぎて、婬欲心のいさゝかもあらん限りは決して佛道を成さずとの誡を楔とせられ、俗人の邪婬戒に對して、僧尼はそのはじめ不婬戒を守らせられたので、次第に彼等は表面的に禁欲を飾り衒つた。緣起に所謂高僧が不犯にして出生せしめる奇蹟の類は多く此矛盾の糊塗の上に成立されたもので、決してあらゆる神聖を意味するものでない。彼等は、『三千世界にあらゆる男子の諸煩惱合集して、一人の女人の業障を爲す、女人は地獄の使能く佛種子を斷ず、外面菩薩に似て内心は夜叉の如し。』など誦しながら、猶甚しきは和泉僧正の如き高位に上りながら大惡罪の名を立て、明逹律師は母を犯し、順源法師は知りながら娘に嫁いでゐる。八百比丘尼の上は知らないが、昔南都に一生不犯の尼があつて、今日し美しき臨終といふので、善知識の爲に小僧を一人請じた。僧即ち念佛を勸めたところ、童貞の尼は、念佛は申さず、『魔羅の來るぞや魘

羅の來るぞや。』と言つて息絶えたといふ話もある。殊に「著聞集」正月八日持佛堂に不淨行の一生不犯の尼の物語などは、「宇治拾遺物語」に、京極の源大納言雅俊卿が一生不犯の僧を擇んで佛事供養の折、禮盤の上から一人の法師の逃出したといふ話などと共に、如何に僧尼の生涯に誤魔化しの多かつたかゞわかる。教義や信條の上に重きを置いた佛教は、時に其上に苦しめらるゝ事が多かつたが、奇蹟事實の上に基礎した基督教は最初から未婚處女の受胎を聖靈に感じたものとして許してある。陰陽の交觸作用なくして獨生するといふ開闢未曾有の奇蹟は、西にマリヤに姙まれたクリストあり、東に雪女に姙まれた雪兒あるばかりだ。佛家の緣起や高僧傳に聖靈的誤魔化しのあるのは佛教の教義から懸離れた僞物で、基督教の奇蹟肯定の如き歴史あるものでない。そこで、八百比丘尼は、聖靈も受けず、受胎もなく緣起されてゐるので、其長壽不老、一生處女・不犯は、緣起作者の理想で、その肯定は、八百比丘尼の住居する寺院の神聖と、其寺院の僧侶の淸淨とを意味せしめたものである。此場合、八百といふ數は、實數であらうと、重なり多きを指したものであらうと、そんな事にはおかまひないのである、それが證據には、足利義政の將軍に任じた年、八百比丘尼が、京洛中に現はれ出たといふ記錄がある。即ち「中原康富家記」といふものに、寶德元年五月、若狹の白比丘尼が入洛して、東國比丘尼と偶會相語るなど見えてゐる。寶德元年は後花園天皇御即位の二十一年(紀元二千百九年)に當り、八百比丘尼の生年雄略天皇十二年(紀元千百二十八年)からは九百八十年後になつてゐる。すると、彼女の壽命一千歳のうち其の二百歳を領主の殿に讓り八百歳で死んだといふ傳説からは百八十年の差が食出る。一說に、若狹小濱町字石垣町と富田町との間に架かる轉橋を渡つた時白比丘尼は轉み倒れた、それが原因で死んだので轉橋の名があるが、其時丁度正八百歳であつたの、青井白玉椿山の邊で死んだ時正八百歳であつたのと言はるゝ歿年の明德元年(紀元二千五十年)も、白比丘尼が傳説の生年からは百三十二年の餘分がある。殊に、明德元年に死んだものが、それから五十八年も後の寶德元年に京都に現はれてをることは頗る怪しい。記錄口碑のよい加減か、カータフイラスの類人か。「日件錄」にも確かに八百比丘尼が京都に現はれた傳說が見える、それは寶德元年己巳七月二十六日の事であつた、八百比丘尼が、淸水定水菴に赴いたところ、洛中の者、爭つて尼を觀やうとして集つて來た。其時、尼は、居るところの門を堅く閉ぢて容易に他人をして見せしめなかつたが、貴者百錢を出し、貧者十錢を出すに於て、漸く門に入る事を得せしめたといふのである。

同じ頃に、八百比丘尼は、播磨國寺前村大字比延にも住つてゐた。もう餘程の歳で、誰も彼女の歳を知つてゐる者は無かつた。それだのに、彼女は、どう見たつて十六七歳の若い若い比丘尼さんとしか思はれない艶々しさの少婦であつたさうだ。「播磨鑑」などによると、彼女はかうして彼女の壽命の八百歳に達した時、身を投げて死んだといふ事で、今に其遺跡を存してをるといふのである。

大化元年には又、八百比丘尼は、武藏國にも居つた。そして、足立郡の慈眼寺に榎を栽ゑたり、地藏を奉納したりした。

八百比丘尼の容貌に就ては、「和漢三才圖會」にも、『其齡八百歳而容貌壯美可二十五六歳一仍稱二八百比丘尼一。』と見え、世俗概ね之に随つてゐる。「若狹紀行」には、人魚を食べたのは十七歳の時で、夫より容貌の變らなかつた由に見え、『八百歳まで、いにしへの姿にてありしゆゑにや、仙女とやいふべきにと、神に祟め、八百姫の宮といふ。』など記されてある。何れも、女子陰道の通じる十四歳を經過してゐる。昔、女子が十五歳になると謂ゆる笄するの禮を行ふて、髮を處女らしく結び直したものは、即ち月水の潮來して成女期に達した事の標識で、八百比丘尼の不老期は、その成女期に始められたやうである。この觀察は頗る重大な事で、これで、彼女が先天的の童貞保持者であつたか、後天的の童貞保持者であつたかが決定するので、後者であることが、教義保守派の、最も理想に合致するところなのである。

以上の不老處女傳說に、全く反對なのは、靈緣仙女の傳說で、仙女は第一の夫に死別れて第二に嫁し、又死別れて第三に嫁し、其先々、第四第五と限りがない。八百比丘尼傳說とは、丁度雪女の紅雪降下の刻後を分つて對立するやうな相違であるが、長壽に於ては彼我甲乙ないものである。

筑前國遠賀郡芦屋の産、その後錢の島稲荷丸の乘組であつた若者、同じ浦人幾人かと同國伊萬里の瀨戸物を船に積んで、海國の津々浦々に賣り廻つた。天明二年（紀元二千四百四十二年）壬寅の五月、奥州津輕に廻船して、船宿に滯留し、乘組の者共と、日々四方に別れ別れて、各自の荷を擔ぎまはり、てんでの運に市中村落を徘徊ひ鬻ぎ歩いたが、彼は、とある日山路に踏み迷ひ、そこはかとなくさまよひ行いた。折からの夏の野山、新緑の果もなく、行人絶えたる物靜かさを異禽鳴けども影は見えない。聽て何處にか水の音するを尋ねあてれば清らな谷川の水、流に從つてそくばく行くと、水に野菜の屑の浮び來るを見る。さては此水上に人里のあらうと、川ぞひに行く事數十町、そこの川邊に洗濯の女房を見付けて、『もし、里へ出ますにはど

うまゐつたらよろしいでせう。』と尋ねると、女房は不思議さうに、『此やうな深山がくれに、どうして迷ひ來られましたか、これから里まで出ますには頓て日も暮れるでせうが。』と心配さうにいふ言葉にすがり、『賤のうちでさへふみまよふ山路を、日が落ちましたらどうなりませう、狼なども恐ろしうございます、どうか一夜のお宿をお借し下されまし。』と男は只管に賴み込んだ。『さあ、したがまあ、商人さんは何處の方で。』と女房の問に『はい、九州筑前の者でござります。』と答へると、女は大層驚いた樣子、やがて、『それはおなつかしい。』とうち涙ぐむばかり。男もいぶかしく、『五百里も離れた筑紫の者を。』とあやしむ。女は鼻うちかみ、『されば、私も元は筑前の者、庄の浦の生れですが、めぐりめぐつて此國にまゐりました。それには不思議の因緣がござります。やがてお物語も致しませう。』と宿をうけあひ先に立つて案內しくれた。家といふはさのみ住みわびた體でもない。折から主人は他行のやうで、他に男女二三人をり、食事萬端取りまかなつてくれる。『さあ、ゆつたりとおくつろぎの體、お國への土產話を聞いて下され。』と、女房は一しほなつかしさうに、灯火かゝげ膝立て直して語るを聞けば、『商人さんは、山鹿の郡の庄の浦を御存じでせう、私は其浦の郷士の子です。私の居りました頃は、其邊一帶山鹿刑部左殿の御領地でした。壽永でしたか、年は忘れましたが、安德天皇樣が西海に落ちさせられました時、この刑部樣をお賴みなされ、山鹿の東山奥に假の御所を構へおはした事がありました。私も、生活の海女の手なれた業であつたので、磯のものなど取つて御所にまゐらせた事もござりました。其後、ふとわづらひつきまして、食事もつやつやまゐりませなんだ事がありましたが、或日、孝心深い息子と娘、磯で漁つたといふ貝を料つて進めくれましたので、箸をつけますと其味のよさ、それから少しづつ食慾も出ましたので、二三日の間その貝をお茶にしました。それが昔に聞く不老不死の藥枝尾螺といふ貝であつたかして、それで命をとりとめましてから無病息災、それに幾々秋を重ねましても、それからは年も老いませず、今ははや六百餘年の年月を經ましてござりますが、……』といふに、男は驚いた。『いえいえ、まあお聞き下さゐ。』と女は制めて、『限りある人の命に、其後夫も逝き、子も死し、孫も彥もみまかりましたが、私ばかりは生き長らへる物憂さに、海川に身を投げやうとした事もござりましたが、或時は人にさゝへられ慰められて、生き續けて見やうの心も起りました。百年經ち、二百年經つうちに、淵瀨もかはり、海山の景色もかはり、世の亂れなどにも逢ひました、何時のほどにか又故郷にも住み憂くおぼえましたので、國々の

宮々寺々の參拜を思ひ立ち、子孫の者、土地の人々にも暇をこひ、先づ豐前の國をめぐり、豐後より四國に渡り、八十八ヶ所寺々まはり、それより舟路を長門にとり、山陰道を因幡に出た時、法美郡の御社にて行逢ふた農家の主人の親切に、すゝめられて其地に留り、緣あつて妹脊の語ひを致しましたが、夫は年に老へども私は更に老いませぬので、化生の者と怪しまれてとゞまり難く、密かに逃れて都に出で、あづまの國々をめぐりめぐり、さいつ頃より、この津輕の郡にまゐりましたを、又もや人々のわりなく申したまふにいなみがたく、此家の主人に嫁ぎました。思へば曾て命の親とあがめた螺貝の殼、國を出る時形見ともと、小き祠のありしに納め殘してまゐりましたが、今いかゞなりましたやら、其祠のわたりには、船留の松といふがありましたが、松は千年のものといふこと、或は朽木ともならでありませう、これを印に、私ども子孫のものゝあるを知られました折には、只今までの物語をお聞かせ下され。』といふ一部始終であつた。彼は暫くあつて歸國したが、印の松のあるを尋ねあてゝ、彼女の子孫傳次郎といへるに逢ひ、彼女との約束を果したといふ事であるが、貝が螺の貝だけに、例の八百比丘尼の說話と共に、作者の嘘八百だらう、駄螺だらうといはれる恐れもあらうので、蛇足ながら、數ある資料のうちから「寛政九年遠賀郡乙丸村庄屋儀平申上る口上覺」といふものを書き添へて、それが、日本に於ける或地方の民間說話である事を明確にして置く。然しながら、さうした說話が、或は佛教思想或は支那神仙思想の影響された作爲では絕對にないとも私は言はない。

一當村枝鄕庄之浦へ、古來より持傳へ候螺貝、此節、御上御用に付、御役所へ差出候樣被仰付、則ち螺貝主傳次へ爲持差上申候、右ほら貝持傳へ候次第、申上候樣に被仰付候へども、何さへ、村方へ慥なる書付等無御座候、併往古右ほら貝肉喰ひ候女、今以て遠國致し長壽居申候由、六十年以來の風說有之、老人の咄に承及候處、又候三十年以前同樣の風說御座候得共、村方へ趣意存じ候儀少しも無御座候、尤も村中流行病又は牛馬相煩ひ候節など、次第は存じ不申候得共、右ほら貝持廻り來り申し候、其後、天明壬寅年、同樣の風說專ら御座候間、世上より取り取り咄仕り候に付、咄之趣寫し留め所持仕り候者隣村に御座候、是れを以て、御役所へ難差上奉存候へ共、御內見之爲ほら貝に相添へ差上候、何れとも、御奉行樣御前宜しく被仰上可被下候、偏に奉願上候以上。

乙丸村庄屋

儀平

寛政九年十二月
坂田新五郎様
御役所

此棲尾螺貝（庄の浦では、其後永く壽命貝と呼ばれてゐた。）の肉と、人魚の肉の効驗は自ら一致してをつて、この重縁仙女も、かの八百比丘尼も、其食した年齢のまゝに若さが止つてゐる。八百比丘尼は少婦の折に食した故處女のまゝでをり、庄の浦仙女は女房の折に味つたので何時までもそれがついてまはる。不老の藥は、かうして、何時も、若がへすのでなくて、其年齢の若さを保たしむる約束に置かれる。不老は同じく不老であらうが、八百姫の若さは敬るところに騒がれて憧憬の的となれるに、重縁仙女の場合は、不縁又不縁の憂目が附隨して世の辛酸の下に置かれる。記録によると、彼女は、庄の浦へ二十五歳にして重嫁する以前にも、十七歳で博多へ縁付いて不縁となり、其後鞍手郡八尋村に縁付いて再び不縁となつた苦い經驗を舐めてゐる。たまたま此不老説話に孝子孝女の結び付いた事は、其形式の上に養老譚的の素因があるからで、其色彩からいふと、重縁仙女式は養老型に近い。

庄の浦仙女が、幾回となき重縁に、また幾回となく不縁になつた事には、それが年齢ばかりの関係でないこと、十七歳から二十五歳までの八年間に三度夫を替へてゐるのでも知られる。多くの離別のうちには、死別もあり、生別には、彼女からして去つたもあらうが、概して棄てられる素質の彼女の方にあつた事は確かで、漂泊のうちには豐後國三穂の浦などをもすべつた形跡がある。この夫に棄てられるといふことと、子が親に棄てられ、親が子に棄てられる説話の素因と同じ形式にあるが普通で、第一の場合には、(一)夫が不運である事、(二)妻が不貞であるか不治の病人である事、第二の場合には、(一)親が繼父であるか繼母である事、(二)親身ではあるが家庭の都合がゆるさぬため、又は難治の病人であるため、第三の場合には、(一)親が病人であるため、(二)子が不運であるため、(三)他よりの壓迫のため、かうした種々の理由で棄てられるもので、第二の場合の(一)は多くは棄てられ子の年齢が幼年者又は少年者である事を普通とするが其(二)は年齢を限らない。そして、民間説話に現はれて一つの形式を成すものは、第二の場合に於て、(一)の棄てられ子は多く成功の後日譚を有し、(二)の棄てられ子には多くそれがない。

昔昔、土佐の三助といふ少年が、後父さんと一緒に船に乗つて、沖へ釣りに出てゐたところ、大變に強い風が吹き起つて、何處ともなしに流されて行つた。漸く佐渡の海岸に船を寄せて、順風を待つてゐた時、後父さんに、三助に薪を採つて來い

と山にやつた。ところが、三助が歸らないうちに、三助を憎んでゐた後父さんは、勝手に船を出して行つてしまつた。やがて薪を脊負つて山から戻つて來た三助は、ひどく驚いて、船を歸して下さいと聲を限りに呼んだけれど、後父さんは聞えないふりで見返りもせずに漕いで行つてしまつた。三助は、あまりの悲しさに、高い處に登つて、船の見える限り眺めてをつたが、段々に其　が消えて行つてしまふと、急に悲しくなつて其處に打倒れ、絶え入るばかりに咲き悲しんだ。日も入相の頃、三助は、思ひ返して起きあがり、東の方を眺めながら「故郷が戀しい、なつかしい。」と泣きながら、ふと、ある池の汀に立つて、身を投げて死なうと袂をかゝげると、不思議にも、着てゐた着物の小褄から、何やらぼろぼろと零れ出たものがある。驚き取上げて見ると、正しくこれは故郷の米の種である。自分で身に付けた覺えはない、それでは生母さんが、かほどにまでお思ひになつて、もし何處かで捨てられたならば、これを作つて葬せよといふ、ありがたいありがたい御志でありませう、親はかほどに子を思はれるのに、その思ひをよそにして、今自分が死んでしまつたなら、親の賜つた形見の此籾も、たれ植ゑ殘す者もなく、生母さんの御志もむだにならうと、思ひ返して命を長らへ、それより、池の水淺に畦を附け、籾を蒔いて、心から農事に勵みいそしんだ甲斐あつて、やがて稔秋廻り來た時、嬉しや其處には二種の稻が出來た。そこで、少年は、早いのを土佐、晩いのを三助と呼んで、それからは一層農作に精を出した。今でも、佐渡國に、その名で呼ぶ早稻と晩稻のあるのは、これが始めだといふこと（「佐渡風土記」「家風農書」等）で、今に彼は、農業の開祖として、佐渡郡松ケ崎村大字多田の北方に峙つ男神山に祭られてゐる。

これが其棄てられ子の(一)の例で、類似の傳説は諸國に段々あり、民間説話の轉じて史的傳説に取扱はるゝものもあるが、例へば俗説中將姫が繼母の讒に遭つて雲雀山に捨てられ、後當麻寺に蓮の曼陀羅を織るなどの成功譚などは、姫の母の貞節賢良の傳説を無視した後世の僞作に過ぎない。

昔また大汝命は、御子の火明命を、日達神山にお棄てなさらうと、その山に行かれた時、大汝命は、火明命に水を汲ませに遣はした留守の間に、船を出してしまはれた。火明命は、戻つて來てこれを知り、大變に憤つて、風波を起して父命の船に追ひ迫らさうとした。そのため父命の船は進み行く事が出來ない。そればかりでなく、たうとう船は打破られてしまつた。「播磨風土記」によると、其時、波風の激く立つたところを波丘、船の破れたところを船丘といふやうに見えてゐるが、漸くにして

歸られた大汝命は、沙弩都比賣にむかはれて、『惡しき子を追うて、かへつて風波に遇ひ、太く辛められて苦し』とおほせられた。

かうした類例は、東西神話の軌を等しくするところである。日本の民間說話になると、材料は神話より豐富でも、之が文獻を整理し、殊に首尾一貫的の物語を示さう爲には、種々標準のむづかしいものがあつて相當苦心を要するものだ。棄老說話などでも、これをお伽物に取扱ふに當つては、今も、姨捨山傳說と蟻通說話とを結びつくるところに內容の變化を求めてゐる。棄てられる老母が、棄てられの途中に、小枝を手折つては道に捨てゝ、われを捨てに行く我子を、歸途に迷はせぬようの用心をしてやると、子はその情に感じて母を連れ戾るといふ筋で、グリム童話のヘンゼルとグレーテルのヘンゼルの、棄てられの山路に光る小石を投げながら步く條が想はれて、誰の發明か頗るおもしろいが、其組織は、もとより、單純な姨捨山棄老說話の形式內容のうちに生れ出たものではない。

そこで愈々姨捨山だが、諸君はどつちから行かれる。われわれは、そのはじめ、中央本線を甲信の國境に出で、雪女に逢つてから、若狹に行く、筑前に行く、八百比丘尼や重株仙女に附いて、日本國中も粗方うろついたが、汽車は相變らず國境に捨てゝある。乘りかへる必要もない唯聯想の旅なら戾つてやれ。などと旅客のつもりで語る傳說譚も、美篶刈る信濃路に入ると、甲斐の話題も何時となく諏訪法性の兜に移る。魂かへす反魂香、名張に泣き語るゝ八重垣姬や勝賴の花作りが、諏訪湖に絡む淨瑠璃譚に、觸り入りの牛耳は誰か。と見る窓外の廣袤も幾里に開けて、諏訪湖にはもう神の御渡りもあつたさうな。その印の氷脈も模型のやうに現はれて、はや閉された氷の破るゝ事もない。往來安全を五里の湖畔の村々に報知せる昔ながらの狐の群も、二三日前の夜の間に啼き連れて氷上を通つたと、下諏訪から乘り合した人のまことしやかな物語もおもしろい。この諏訪平から、松本平、長野平の平原地方は、しるき戰跡の點綴するところ、野山に、森に、泉に、殊に武田上杉兩家の纏綿する美人英雄の俤を夢幻せしめる。天文十六年（日本紀元二千二百七年）に、埴科郡椎尾の城が落ちて、村上義淸は越後に寄る、それから、甲越軍記に風流兒謙信出馬の段取となるので、甲信の山水は、かうした戰國時代の人間流動の間に、一段と詩の匂ひを芳醇ならしめた感がある。

例へば沒落の遽さに、千曲川を力石に渡す坂城の渡場に佇迷の義淸夫人は、それでも忠實な渡守が心づかひに無事渡船の嬉しく、御髮に挿された笄を拔かれて『心ばかりの渡賃の代』と

強いて彼に取らせた。泪ぐましく船頭はおし戴き、汀に默然と何時までも見送る。落ち行く人々の志す彼方更科の空には、八月二十四日の夕陽が映えて、美しい夕燒雲は二度三度渡守の眼に虹む。風蕭々と痛ましい宇和平の路、秋草を分けて一直線に落人は急ぐ。悵然として遠人を憶ふ坂城の人達は、とりわけ心優しい夫人の上を偲んで、其日から永く坂城（刈屋原）の渡を笄の渡と記念の名に改め呼ぶといふ。

夕燒け、小燒け、お城が燒けた。
雁々渡れ、後の雁な前になりや笄とらしよ。

童謠小唄の斷片も、今は古を偲ぶよすがと知る人は少いなど、村老の語り次ぐは是か否か。南村北村の千曲河畔に、此種の口碑傳說の花は、碌々として河原眞砂の數めき群り咲いてゐる。

懷しの森よ、泉よ、丘よ、流よ、お前の影に傳說の種々相はあらう。野を行き河を涉るわれわれの足跡も、顧れば、昔、麗人も踏み巨人も践み魍魎も蹂躙つた同じ地上にある。大自然の神秘も、此世の奇蹟も、美しき傳說の陰に渦を畫いて、山岳地の峯々淡々に續く、杣人に問へ、樵夫に聞け、山の靈や水の精に、われが祖先は同化されて、民族性の、或は潜み、或は表はれ、或は濃く、或は影しく、山村水廓の隨處を、千容萬態の姿に圍繞する、時代時代に特異なる民間說話のゆかしさを。就中此土の衆愚が、武人に操縱され獲物に刺戟されて、戰ひへ戰ひへ誘惑された川中島、折掛の纏に、獨尊の旌に、名も無く朽ちた幾百人の名殘りの烽火の明滅の、昔ふらりふらりした迹のものわびしさ。謙信の陣地は妻女山、信玄の陣地は茶臼山、激戰は最もこの八幡原に行はれた。永祿四年秋九月十日の曉方、甲軍の參謀山本勘助は拳を握つて、『兩軍干戈を交へてから殆んど十五年、戰を挑むこと十餘度、未だ一回も敵の軍機を見誤つた事はなかつたが、今、河霧のために大軍の近づいたを知らず、これわが運命の盡くる時である。』と悲憤し、突進奮鬪討死したといふが、來て見れば展望濶く、西遙に姨捨山は、冠の巾子の如くに眺められる。

それで、姨捨山は、一名を冠着山とも呼ばれる。山は更級東筑摩二郡に亘りて嶺まで凡そ六十町、更級郡中の高山でもあつたので、昔は又、土地の名の更級山の代表ともなつてをつたであらうと言はれる。山に抱兒巖といふがある。此巖、川中島より望むに、山の東の方に突き出でて、さながら姥の兒を抱ける狀があるので共名があるといふ。後世、八幡山の半腹に姥捨山といふを仕立て、そこの石に姨石などいふ緣起をつけ、怪しい附會の說を成すものは似非法師等の捏ち上げた僞物で、冠着山

の姨捨山とは全く違ふ。證左の歴然たるものあるばかりか、風光の上にも雲泥の差がある。眞の姨捨山は山嶺平かに、冠着神社鎮座まします。東の方四阿山と淺間が嶽との間、鏡臺に似たる狀のところ（鏡臺山）より月が昇る。中秋の夜であれば、千曲川の流と共に、關崎、篠崎、屋代、八幡あたり川中島の戰蹟一望の間にあつて、晴れたる日なれば、『其身雖ㇾ沒有二不沒者一其身雖ㇾ朽有二不朽者一嗚呼道鬼也哉』と碑銘にある芝村高畑の道鬼塚（山本勘助入道道鬼の塚）あたりから、七太刀三太刀の地、勘助の首と胴とが出會つた胴合橋など、二本の老梻の目標となるものがあつて、其處と頷かれる。遙か離れて南東に蓼科山、富士山、西の方には駒ケ嶽、有明山、北は戸隠、飯綱諸山を始め越の妙高山も幽に、上田長野の市街一目の下に置かれる。登山の路三つのうち、一本松の路が、姨捨の甥の通つた道で、麻績郷が其人々の住ひしたところであらうとも言はれてゐる。

この姨捨山棄老說話の最も古く記錄に見えてをるのは「大和物語」で、それにはかうある。

信濃國さらしなといふ所に、男住みけり。若き時に、親は死にければ、をばなむ親の如くに、若くよりあひ添ひてあるに、この妻の心、いと心憂き事多くて、この姑の老いかゞまりて居たるを、常に惛みつゝ、男にも、此をばのみ心のさがなく悪しきことを言ひ聞かせければ、昔の如くにもあらず、おろかなる事多く、此れをばのためになりゆきけり。此をば、いといたう老いて、ふたへにて居たり。これを、猶、この妻、ところ狭がりて、今までしなぬ事と思ひて、よからぬ事をいひつゝ、もていまして、深き山に捨てたうびよとのみ責めてければ、責められ侘びて、さしてんと思ひなり、月のいと明き夜、嫗どもいざたまへ、寺に尊き業すなる、見せ奉らんと言ひければ、かぎりなく喜びて、負はれにけり、高き山の麓に住みければ、その山に、はるばると入りて、高き山の嶺の、下りて來べくもあらぬに、置きて逃げて來ぬ、やゝといへど、答もせで、家に來て思ひ居るに、言ひ腹立てけるをり、腹立ちて、かくしつれど、年比親のごと養ひつゝ、あひ添ひにければ、いと悲しく覺えけり、この山のかひより、月もいと限なく明くて出でたるを、夜一夜いもねられず悲しく覺えければ、かく詠みたりける。

わが心なぐさめかねつさらしなや、姨捨山にてる

月を見て。

とよみてなん、又往きて迎へもて來にける。それより後なん、姨捨山といひける。慰めがたしとは、これがよしに

なんありける。

「大和物語」は、紀元一千六百餘年、村上天皇の天暦の頃より、一千六百四十餘年、花山天皇の寛和永延頃にかけてのものであるが、そこに詠み入れられたわがこゝろの和歌は、それより五八十年以前の「古今和歌集」に、讀人知らずとして出てゐる。

「小野小町集」に、

あやしくも慰めがたき心かな、をばすて山の月も見なくに。

「凡河内躬恒集」に、

見つゝわれ慰めかねつさらしなの、をばすて山にてりし月かも。

などいふ歌が見えるから、古今の歌は、當時有名のものであつたやうに思はれる。

いづれにせよ、姨捨の物語を詠みたるものの、「古今集」に入れられた事より、一層世に聞えて人口に膾炙し　次では其歌に據りて昔を忍ぶ説話の記錄せらるゝ時代に進んだもので、「源氏物語」も、「枕草子」も、この山の事を記し、「大和物語」の後の「今昔物語」にも、大同小異の物語を傳へてゐる。更に、「大和物語」より百年乃至百五十年後の源俊頼の「俊秘抄」(無名抄)物語は、の甥を姪とし、迎へて歸つたといふ筋を捨てゝやみた

るやうに改めてゐる。其後、「袖中抄」「八雲御抄」「大塔物語」「古今榮雅抄」以下數十の記錄があるが、多くは物語と抄とに就ての略畧か比較か考證かで、異説あるものでない。たゞ姨捨即ち棄老といふ事に致ると、意見が一致しないで、(一)姨捨は、麻績の里も近く、苧池といふ處もあれば、麻葉捨山であらう(「姨捨山考」の一説)の、(二)姨捨は、信禮の國俗、夫死すれば婦を以て殉とするの、いとあがれる世の風俗に思へば、老を捨つるも習俗であらう。(「信濃地名考」)の、(三)をばすては、姨すたべであらう。すたべは、下部(すとしとは通音)葬地をいふのであらう。姨を葬てたる山に、月の澄めるを見て昔を偲んだ歌を、「大和物語」がちらぬ物語に作爲したのであらう、(「信濃漫錄」「信濃奇勝錄」)の、(四)姨捨の物語は、「大和物語」のまゝに見るがよいであらう。(「姨捨山所在考」)の、(五)棄老國その他の外來の故事を、此方に移して、物語に作爲したものであらう。(「倭訓栞」其他)の、(六)姑捨は、實は小長谷の山名に係けて、棄母の舊事を語り、其物語の言葉の中の語縁を以て、小長谷を姑捨山と轉じて、説明を試みたものであるから、説明は構架に過ぎないであらう。(吉田博士「地名辭書」)の、其他種々の説(例へば「姥捨山由來記」などの怪説)があり、「國學」雑誌」の萬吉刀氏などは吉田博士の説を得たるものとされてをる。芳賀博士は

又曾て其著「國文學歷代選」の序論に於て、『儒佛の二教が、わが國民の思想界を一變せしめしはいふまでもなきところなるが、これとともに、各種の傳說童話も亦輸入し來り、僅に其人と其處との名を改めて日本化せるもの甚だ尠からず、大和物語に入れる姨捨山の話は、印度棄老國の話にして、支那には原谷の話となり、日本に入りて姨捨傳說となり、蟻通明神となれること、その經過歷々徵すべし。云云』といはれてをるが、支那に於ける棄老の傳說も、單に原谷の說話ばかりでなく、「風俗通」既に越の東、駭沐の國に老人を棄つる陋風のあつた事を傳へてをるなど、かの地に於てもこの事の決して架空の傳說でなかつた事が知られるのである。卽ち印度棄老國の傳說が、やがて日本に於ける棄老傳說の根元であつたとするには、姨捨傳說の內容は、あまりに其系統を異にしすぎてゐる。

按ずるに、「職員令義解」四、彈正臺の條下、肅清風俗とある註に『假信濃國俗夫死者、卽以婦爲殉、若有此類者、卽正之以禮教、是以爲肅清風俗也、云云』とある。「姨捨山考」の著者は、疑ふらくは此文 信濃國の風土記を引くものであらうが、「信濃國風土記」は世に傳はらない故、たしかにも決めがたいと云つて、類似の傳說を原谷說話に假りてゐる。原谷說話は「孝子傳」「風俗通」に見えたものを、一[illegible]引くところの「賦役令抄」の記錄と、「令義解」時代以前から行はれてゐる。昔、楚に原谷（一に原穀に作る）といへる者があつた。原谷の父は甚しい不孝者で、父の死の甚だ遲いのを厭ひ、一つの轝を作つて之に老いたる父を乘せ、原谷と共に之を舁いて深山に棄てた。歸らうとする時、原谷が其轝を持歸らうとするので、原谷の父は、怒つて、何のために此凶物を持歸らうとするのかと咎めた。原谷は、言下に、わが父も軈て老ゆるでせうが其時更めて作るのは無駄ですと答へる。父これを聞いて甚く怖れ、過を悟つて更に山中の父を迎へ還り、更めて孝養に努めたと言ふ筋で、大差ないが、「先賢傳」載するところの記事は、十歲の原穀が父を切諫して、『唯悲大人年老、穀之棄於大人』と言つて涕泣悲慟する筋に作られてある。「孝子傳」「風俗篇」によつて傳へられた原谷說話は、夙く奈良朝時代に傳唱せられたものと見えて、「萬葉集」卷十六、有由緣雜歌の第三竹取の翁の作歌中に、『古部之、賢人藻、後之世之、堅監將爲迹、老人矣 送爲車 持還來、』と歌ひ、その反歌の一つに、『白髮して子等も生きなば斯のこと若けむ子等に罵えかねめや』と教へられてゐる、原穀の故事は、かうして夙く、萬葉時代、民間に流布された說話であるのに、兩立して、[illegible]て姨捨棄老說話の行はれた事に、思想の共通なるものがあつたので、文

…なる多くの實例があつたとしても、本然の模倣でない事も確かであらう。「令義解」引くところの「風俗篇」にも、『風者氣也、俗者習也、土地水泉、氣有緩急、聲有高下、謂之風焉、人居此地、習以成性、謂之俗焉、』と見えて、人類の遺した遺物の中で、一番の表層に散布されてをるものは、其地方特異の民俗であり風習ではあるが、表層であるが爲に攪亂せられ易く、時代を重ね、文化を輸入して、然も其表層を完全に保持する事は出來ない。佐渡國では、昔、家を建てる時、正式の祟には、必ず親隱しといつて、穴を明けて置くべきであつたさうで、明治に至るまで其建築物の名殘があつたさうだが、それについて、確かではないが往古官より老人を尋ねて殺さした事があつたので、此建築が生れたといふのである。どれだけが其古き表層であるかは不明だが、何れにせよそれが棄老傳説の系統に置かるべき傳説であるには異論もあるまい。

かうして、日本に於ける棄老の傳説は、ひとり、信濃國に於ける姨捨山の姨捨傳説ばかりでなく、佐渡國にも近き過去に現に其形跡を存してをつたといふことは、われわれをして、老人を棄つるの陋俗の、或は我國に於ても存在した事のあつたのではあるまいかと疑はさせられざるを得ないのである。私に考ふるに、嵯峨天皇の弘仁四年（紀元一千四百七十三年）六月一日の

「太政官符」に、「應禁斷京畿百姓出棄病人事」とあつて、その文に、

右右大臣奏偁、念舊酬勞、賢哲遺訓、重生愛命、貴賤無殊、今天下之人、各有僕隷、平生之日、既役其身、病患之時、即出路邊、無人看養、遂致餓死、此之爲弊、不可勝言、伏望、仰告京畿、早從停止、庶令路傍無夭枉之鬼、天下多中修命之人上者、被中納言從三位藤原朝臣縄主宣偁、奉勅宜早下知令加禁制、如下違改、猶致違犯者、五位以上注名申送、六位已下、不論蔭贖、決杖一百、莫及職國知而不糺、及條令坊長、郡司隣保、相隱不告、並與同罪、自今以後、永加禁斷、仍牓示要路、分明告知。

とあるは、決して此期を以て起原された棄病人の陋風ではなく、病人を其儘家に置くと其家が穢れるといふ思想から來たところの古代觸穢を忌むの風と、流行病に對する時代人の畏怖から來た棄病人の風とが、一致して傳統されたものであらう。更に「續日本後紀」仁明天皇の承和九年（紀元一千五百二年）十月の條に、「勅左右京職東西悲田、並給料物、令燒斂島田及鴨河原等髑髏、總五千五百餘頭、」などあるものは、平安朝初期に於て、このやうに京洛の地にあつてさへ、路頭に死ぬ者の斂葬營まるゝこと無くうちすてられてあつたといふことは、かゝる折

の邊土の地にあつても同様の慘狀を呈したであらうことをわれわれに想像せしめるのである。

かうした病人を棄つるの思想は、やがて又老人を棄つるの思想と並べるもので、かの姨捨山の傳說、親隱しの傳說の、決して偶然に起つたものでない事が知らるゝであらう。殊に、殉死の風の、夙く垂仁天皇の二十八年(紀元一千九百十二年)に禁ぜられたにかゝはらず、民俗間に於ては、大化の革新(紀元一千三百五年)後に於ても行はれた事實があつて、其邊に姨捨山棄老の傳說は生れたのであらう。疑ふものは「大和物語」の記錄の歌について、『棄てたる後よりなれば、をばすて山といふべきを、物語の棄てたる子が、山に上る月をみて、をばすて山と自ら詠むは、此物語の作爲の證である。』と、一概に退くるけれど、これは大秦の顯照も七百四十年前「袖中抄」で言つたやうに『すべて、物語は、由緖ばかり書いては詮なければ、さもたよりある古歌を書き加ふる定めなり。』で「大和物語」の作者も、さうした事で「古今集」の歌を假りたのであらう。一說に、物語の作者は古今を敷衍して事實を飾らしめたのであらうとも思はれぬではないが、小長谷といふ土地の名の語緣によつて棄母の事を語るものとした吉田東伍博士の說明にも一理ある。曾て顯昭には、これを、この人なこの夜に出でたる人の、この山の麓の里に、姨を殘し置きて、役終へて歸りて見れば、その姨は、既くうせたりしを、悲みのあまり、心をなぐさめんとて、この山の月を見て、いやまし忍びかてち、をばを殘し置きたりしを悔いて、たゞ何となく、姨捨山とはよめるか、その歌のすぐれてめでたかりければ、山の名にもなれるなるべし。さる事は、他にも例ある事ぞかし。』と考へたが、これは記錄傳說を全然無視したもので、公論と云ふべきではない。そこで、佐藤寛氏も之を駁して『姨を捨てたりといふこと、いといと忌まはしく、聞くだに、耳は汚るゝ心地はすれど、さはいへど、こは一の傳說なり。いにしへは、さやうなる不孝の子もありけんを、強て其跡を掩はんとていろいろに附會せんは、なかなかに、をこのわざならずや。』と罵つてゐる。

この間に於て、ひとり蟻通傳說の棄老說話のみは、その傳說の形式を、全く印度棄老國(後改めて養老國)の傳說に取つたものであるがやうに思はれる。

所謂棄老國の傳說といふものは、もと「雜寶藏經」に出で、日本に於ては、契沖阿闍梨の「河社」(第二)これを引き、稻垣[illegible]軒の「東湖隨筆」(卷二)等を以て最も通俗に行はれたるものであるが、その[illegible]泉南郡長瀧村なる蟻通明神の「緣起」となつた事も、[illegible]「[illegible]」にも[illegible]あり

…し明神　貫之が馬のわづらひけるに、此明神のやませ給ふとて、歌よみて奉りけんに、やめ給ひけんいとをかし。このありどほしとつけたる心は、誠にやあらん、昔おはしましける帝の、ただ若き人をのみおぼしめして、四十になりぬるをばうしなはせ給ひければ、人の國のとほきに生き隱れなどして、更に、都のうちに、さるものなかりけるに、中將なりける人のいみじき時の人にて、心なども賢かりけるが、七そぢ近き親ふたりをもたりけるが、かく、四十をだに制あるに、ましていとおそろしとおぢ騷ぐを、いみじうけうある人にて、遠き所には更に住ませじ、一日に一度見では、えあるまじとて、みそかに、よるよる家の內の土を掘りて、其うちに屋をたてゝ、それにこめすゑて、いきつゝ見る。おほやけにも、人にも、うせかくれたるよしを知らせてあり。などてか、家に入りゐたらん人をば、しらでもおはせかしうたてありける世にこそ。親は、上達部などにやありけん、中將など、子にてもたりけんは、いと心かしこく、萬の事知りたりければ、この中將、わかけれどざえあり、いたう賢くして、時の人におぼすなりけり。云云」と書かれ、さて、唐より此國に難題かくるを、此老人の一々に解いて國難を救ふといふ、蟻通明神の來の緣起を說いてゐるが、その大要はかうである。

或時、唐土の帝、わが國の帝を謀りて、此國をうち取らんと企て、常に、こゝろみあらがひ事をして、送り來たのは、つやつやと圓く美しげに削つた木の、二尺ばかりのもので、これが本末は何方ぞと問ふて來たのであつた。何人も知るべきやうなかつたが、中將は、家の內に隱しつかふまつる老たる父の智惠により、流早き川に立ちながら、橫樣に投入れ、その翻りて流れる方を末と印してつかはしたるに、まことにその通りであつた。すると、其次に又、二尺ばかりの蛇の、同じやうなものを送つて、これは、いづれが雄、いづれが雌かと問ふて來た。これにも、中將は、老たる父の智惠によつて、その蛇二つを比べて、尾の方を細い木の枝の先にて突き、尾を動かす方を雌としてかへしたところ、それも其通りであつた。程久しうして、又もや、彼の國から、七曲に曲つた玉中に穴ありて其右左に口ある物を送り來して、之に緒を貫いてとの註文であつた。何人にも出來なかつたが、中將は、此度も亦、老たる父の智惠で、大きめな蟻二匹を捕へ、この蟻の腰に細い絲をつけ、又、それに、今少し太い絲を中繼にして玉の穴に入れ、彼方の出口の端に蜜を塗つてをいたところ、蟻は、その蜜を嗅ぎ慕つて、思つたやうに一方の口に出た。それで、絲は、七曲の玉に貫かれた。それを唐土の帝に返し遣はしたところ、かの帝いたく感じて、

日本は賢い國柄であると、その後は、さうした心見事をせぬやうになつた。されば、わが帝は、中將を、この上ない人におばして、何事をし、どのやうな位につけたならばよいか、汝が請にまかすといふ仰せであつたが、中將は、いえいえ、さる官位は望むところでありませぬ、唯、世間の老いたる父母を、都に招き住はせんことを許させ給へと申し上げた。帝は、いみじく易い事であるとて、これを許されたので、萬の人の父母、これを聞いて喜ぶ事限りがなかつた。一方、又、かの中將は、大臣にまで成り上つたが、さて、其人の、神になりたるものであらう、或時、此明神のもとにまうでた人に、夜あらはれてのたまひけるには、『七わだに曲れる玉の緒をぬきてありとほしとも知らずやあるらん』と宣ふたと人の物語に聞いた。

とかういふので、「明神緣起」には、古くから中將の父を祭れるものであつたのであらう。本社は東向、拜殿朱の鳥居がある。末社は五社の明神で、住吉、多賀、愛宕を本社の左に祭つてをるが、本社の祭神については舊記を存せず、その後、大巳貴命、少彥名命を祭るといつてをるのは、全く古傳說を無視して、格式を主んじた時代の作爲であらう。「枕草紙」にも見える通り、和泉守紀貫之が、馬上を神に咎められたといふ和泉國の傳說は、「紀貫之家集」に見える、「紀の國に入りて、かへりのぼる道にて、俄に馬の死ぬべくわづらふ所にて、道ゆく人、たちとまりていふやう、これは、こゝにゐますがる神のしたまふならん、年頃、社もなく、しるしも見えねど、いとかしこくてゐましける神なり、さまざまかやうにわづらふ人々あるところなり、祈り申し給へよといふに、みてぐらも無ければ、何わざすべくもあらず、たゞ手を洗ひ、ひざまづき伏し拜むに、神おはしげも無しや、そもそも何の神とかいふといへば、ありどほしの神となん申すといふを聞きて、詠みて奉りける、馬の心地やみにけり。かき曇りあやめも知らぬ大空にありとほしをば思ふべしやは。云云。』と言へる文獻に胚胎するもので、後世、往來の旅人に神祟があるといふので、本社は、街道の→に東向に建てられてをるのだといふことである。

神の道步く人を咎められるといふことは、神の森嚴と崇敬の間に生れた思想で、神は決して故なく人間を咎めるでなく、神あるに聊も拜せぬ輩に祟罰ありといふので、土地の者は社前を下馬下乘に拜し過ぐるが、旅人は神ありとも知らず通る故咎めらるゝので、その過失に咎めらるゝ事多いといふので、社殿が向を變へ改建さるゝ事は、社殿なき小祠の造營に附隨される約束である。佐野（泉南郡佐野町）の寺に、帆下松といふがあるが、淺海の錯　前に此松を馬[illegible]目[illegible]標として、[illegible]を

下して通るからの名で、これらによつても往時敬神の風の美しさが知られる。

おもしろいのは貫之自身が、自詠の歌を神に奉ると、なやめる馬の心地がやんだと記してをる事で　これはかれの心からの祈が神に通じたといふの一面に、和歌の功徳の表はれを自信してをる態にも見られる。謡曲の「蟻通」は、ここを覗つて、『されば今の歌、わが身をなさざれば、などかは神も納受の、心にかなふ宮人も、かゝる奇特に逢坂の、關の清水に影見ゆる、月毛の此駒を、引き立て見れば不思議やな、もとの如くに歩み行く。越鳥南枝に巣をかけ、胡馬北風にいばえたり。歌に和らぐ神心、誰か神慮の、まことを仰がざるべき。』などと、筋の中心材料たらしめてゐる。

この蟻通大明神の「縁起」の、「襍寶藏經」に因を發しておるといふ事は、争はれぬ事實ではあるが、縁起は、其處に少しばかり手加減して、日本にふさはしくない内容を變へたので、「縁起」それ全體が、「襍寶藏經」の儘といふまでには模倣されてをらない。此處で「襍寶藏經」を引徴する事は略くとし　、どこが「縁起」と異ふかといふのに、筋は全く同じいが、心見事に於て、印度の傳説は、蛇と大白象と一掬の水と騲馬と栴檀木とであるのに、蟻通縁起では、削り木と蛇と七曲の玉といふ事になつてゐる。削り木の心見は、栴檀木の心見と等しいもの故、殘るところ彼には七曲の玉なく、これには大白象と騲馬と一掬の水とが缺けてゐる。大白象の試事は、大白象の斤兩いくばくあるといふもので、これには象を船に乘せ、大池に泛べ、象の重みに船の水に沈んだ處までに印を刻け、今度は象の代に石を積んで斤兩を計るといふ考へでうまくいく。騲馬の心見は、白き騲馬の毛色同じきもの二匹の何れが母何れが子かといふもので、これは、草を與へて母の子にゆづるを査べてうまくいく。一掬の水の心見といふのは、一掬の水を以て大海より多しと、誰か能くこれを知るかといふ難題、これには　若し人、信心清淨にして一掬の水を以て佛僧を呼び父母又は困窮の病人に施すに、此功徳を以て福をうること極りない。爰を以て一掬の水は大海の水よりも多いと答へる事で埒が明く。此三つの蟻通明神縁起に無いのは、大白象と騲馬は日本に無く、一掬の水の功徳は明神縁起にふさはしくないので、さてこそ其三つを略いて、蟻通の説話に替へたものである。『蟻通の故事は、佛典に出づ、法苑珠林不老篇棄父部、引㆓襍寶經㆒云、世尊曰、我於㆓過去㆒久遠有㆑國、名㆓棄老國㆒、彼國中有㆓老人者㆒、遠驅棄去、有㆓一大臣㆒(中略)又、祖庭事苑云、世傳、孔子厄㆓於陳㆒、穿㆓九曲珠㆒、遇㆓桑間女子㆒、授㆑之以㆑訣、孔子谿曉、乃以㆑絲繫㆑蟻、引㆑之以㆑蜜、而穿㆑之、

ともあり。云云と、井澤長秀の「俗說辨」は言ひ、林羅山も指示したやうに、聞くが如くばもと「祖庭事苑」の說である。「蟻通明神緣起」の作者は、何時の頃か以上の二說を手際よく混和さして澄してゐたものである。舊記（神宮寺古傳）に見えるといふ、蟻通明神の鎭座、開化天皇の御宇といふことも何れは出鱈目で、それらも蟻通の緣起作成時代の揑造であらうが、其緣起作成の何時頃だといふ事だけは、「祖庭事苑」の作者善鄕禪師は宋の代の人、蟻通明神緣起の文獻を傳へた淸少納言も同時代の人であるといふところから略見當がつく。たとへ、「祖庭事苑」以前、蟻通の故事の傳來したといふ事實が發見されたところで、之が、蟻通緣起に影響した年代にそれ程の差も來すまい。

それは兎に角、蟻通明神緣起の、印度棄老國說話に系統を引ける、支那蟻通說話影響の傳說であるといふことは、それらの結論として得らるゝところのものであるに間違ひあるまいと思はれる。

これを、日本古來の棄老傳說と思はれる姨捨山說話と比較するに、各自全く系統を異にし、「大和物語」「今昔物語」などの文獻は、共に、支那原谷說話とも無交涉に、日本在來の風習の上に獨立し得る、日本特異の棄老傳說であるべく思はれるのでこ

る。

同じ棄老傳說でありながら、姨捨山傳說、親隱しの說話等は、日本的の匂ひの流露せるもの、蟻通明神の緣起となれる棄老傳說は、異國的匂ひの充滿せるものであると言ふことが出來る。

これを要するに、日本に於ける棄老譚は、次の如き傳說的系統を以て、日本に存してをるといふべきである。

日本民俗說話┬親隱し棄老傳說（佐渡）
　　　　　　└姨捨山棄老傳說（信濃）

支那傳說┬原谷棄老說話
　　　　└孔子蟻通說話┐
印度傳說─棄老國說話┴蟻通明神緣起（和泉）

これら棄老傳說の裏に、多く孝子（原谷說に於ては孝孫）の精神が結びついてゐるのは、棄老が子として衷情に出たのでなかつた證左で、其本來は總て孝子說話と言はるべきであるかも知れない。よつて印度の棄老國も忽ち養老國と改められ。

靈龜三年（紀元一千三百七十七年）、元正天皇、美濃國に行幸、九月十八、十九兩日不破行宮に停りまし、二十日の發、多藝に輿を枉げられ、二十七日までの八日間を、今の白石村字行宮なる行宮に御座まして、土地の靈泉に行幸せられた。前日本

紀」卷第七載するところの天皇の詔に、『以二朕今年九月一、致二美濃國不破行宮一、留連數日、因覽二當耆郡多度山美泉一、自盥二手面一、皮膚如レ滑、亦洗二痛所一、無レ不二除愈一、在二朕之躬一甚有二其驗一、又就而飲二浴之一者、或白髮反レ黑、或頽髮更生、或闇目如レ明、自餘痼疾咸皆平愈、昔聞後漢光武時、醴泉出、飲レ之者痼疾皆愈、符瑞書曰、醴泉美泉、可二以養一レ老、蓋水之精也、寔惟美泉、即合二大瑞一、朕雖二庸虚一、何違二天貺一、可下大赦二天下一、改二靈龜三年一、爲中養老元年上』と見え、御大詔には、天下の老人、年八十以上の者には位一階を授け、孝子順孫、義夫節婦は、其門閭に表し、身を終るまで事なからしめよと恩命を下された。これは當時瑞祥の事などに當つて行はれた慣例であるが、一面、日本朝廷の老人に對する態度、民間風尚に就ての善導に努力の跡とも見られる。姨捨棄老説話を傳ふる天暦後の記錄よりも二百五十年も前、姨捨民間歌謠の流布より百五十年も前に、然も信濃の隣國へ行幸の女帝によつて、長壽者に位一階を授けたまふ事の棄老説話に對する矛盾を思はしめぬでもないが、かの殉死の俗の、禁後六百五十年の久しきを隔て丶猶行はれた事のあるを思へば、民俗風習の時に一朝に改め得られないものもあつたと見ねばならない。「日本紀」によると、これより二十五年前の持統女帝の七年にも、近江國益須郡都賀山に醴泉涌くことが傳へられ、その十

一月、沙門法貝、善往、眞義等をして往いて試に飲ましめられた。と、其後、諸の疾病人、諸方より益須寺に集り、停留これを飲んで、癒えた者が多かつたといふ。

死の穢、病の穢などいふことを、病的に執固く忌んだ時代に、觸穢を嫌つた根本思想と相離反した病人が、持統天皇の御世にせよ、元正天皇の御世にせよ、天惠の鑛泉が民庶に隨喜された事は、全く想像の外であつたに相違ない。靈藥に代る靈泉の効驗が、奇蹟の如く諸國に喧傳されたのはそれが死に對する生の對照で丶もあつたからである。「本草綱目」に、『醴泉味如レ醴、故名出無二常處一、王者德至二淵泉一、時代昇平、即醴泉出、可二以養一レ老、飲レ之令二人多壽一』と其希なるが當然とされた醴泉が、其後、養老孝子の傳説を混じて諸國に傳播されたものも、一には又、回生の靈藥たる醴泉への憧憬を具體化せしめたものでもあつたか知れぬ。

醴泉は、忽ち其靈驗を諸國に語り次がれた。「延喜式」治部省祥瑞の條にも、醴泉は美泉なり味美甘にして狀醴酒の如しとあるだけであつたのに、何時の間にかそれは芳烈なるまことの美酒と變つて傳承さる丶やうになつた。斯の如き靈泉のたゞひよつくりと涌いて出たでは勿體なさが足らない。其處で至誠に感じて天の惠みたるものだなどいふ話の胚胎から、いつとなく養

老孝子が誕生する。昔、後漢の姜詩は、母に事へて至孝であつた。妻の龐氏も姑に奉ずること極めて恭謹であつた。姜詩の母は性来江水でなければ飲まない習慣であつたので、龐氏は出でて遠く江水の水を汲んで姑にすゝめた。それに辛苦を厭ふ風がない。母また鮮魚の膾を嗜好した。姜詩は常に生魚を求めて膾に料理し母にまゐらした。かうして孝養に年を重ぬるうち、不思議や或日家の側に忽然として甘泉を生じた。味ふに江水と異らない。かつ其處より日に日に双つの鯉躍り出でて姜詩の膾に應じた。これ姜詩夫婦の至孝至誠天に通じて然るのであると時の帝の御聽に達して、大孝を表せられ、其泉も孝魚泉と名けられたといふ。二十四孝姜詩の泉は、やがて祥瑞を喜び、奇蹟を信ずる時代の思想に同化されて、養老の美泉も、其後、孝子の至誠に出現の起原を持たせらるゝやうになつた。それの文獻は、「十訓抄」「古今著聞集」などが初めのやうで、「古今著聞集」にはかうある。

昔、元正天皇の御時、美濃國に、貧しく賤しき男ありけり。老いたる父をもちたりけるを、この男、山の木草をとりて、そのあたひを得て、父を養ひけり。この父、朝夕、あながちに酒を愛しほしがりければ、なりひさごといふ物を腰につけて、酒賣る家にのぞみて、常にこれをこひて父を養ふ。ある時、山に入りて薪をとらむとするに、苔ふかき石にすべりて、うつぶしに轉びたりけるに、酒の香のしければ、思はずに怪しくて、そのあたりを見るに、石の中より、水ながれ出づる所あり。その色、酒に似たりければ、汲みてなむるに、めでたき酒なり。うれしく覺えて、その後、日々にこれを汲みて、あくまで父を養ふ。時に、帝この事を聞し召して、靈龜三年九月日、その所へ行幸ありて、叡覽ありけり。『これ則ち至孝の故に、天神地祇あはれびて、その徳をあらはす。』と感ぜさせ給ひて、美濃守になされにけり。家ゆたかになりて、いよいよ孝養の心ふかゝりけり。その酒の出づる所を、養老の瀧と名づけられけり。これによりて、おなじき十一月に、年號を養老と改められけるとぞ。

「古今著聞集」は建長六年(紀元二千二百六十年)橘成季の著、時代から言へば御深草天皇の御宇北條時頼執權時代の產物だが、民俗口碑を本として、古來の思想を傳へてをるもの、あながちに、この養老孝子譚を以て、僅々三百數十年前の所產であると退けるわけにも行かないであらう。然し、何と言つても、それが後世の作り譚であるといふことは疑ひないことで、この泉も、こゝで俄になつてをるので、後代に枯渇したと見れば

る鑛泉の邊にある瀧の上に話を持つて行つたのであらうと古くから解されてもゐるが、泉と瀧と全然違ふものとも思はなれない節もある。慶長四年の「十訓鈔」には、それが酒泉となつてをり、降つて「本朝故事因緣集」などは、孝子の親を老母として、これは瀧の酒に作つてある。大體の趣向は皆同じであるが、「本朝故事因緣集」には、天正年中に、この瀧に五人の老翁が來て、頻りに白髮を洗つてゐたところ、其中の一人だけが忽ち黑髮に變じた。これはやはり、此男が母親に孝行の志厚い者であつたからだといふ、養老の詔に附會した說話を添へてゐる。謠曲の「養老」は、もと「十訓抄」や「著聞集」に據つて作られたものであらうが、時代と處とを更めて、雄畧帝の御時、濃州本巢郡と作つてある。これは、本巢郡生津村より多藝郡（今、養老郡）に移つて養老寺と呼ばれる瀧壽山元正院の緣起によるものか、或は又緣起の謠曲に因つたものか否かは不明だが、「養老寺緣起」は、孝子其名を原丞內と言ひ、其子孫、白山權現の靈夢によつて養老寺を建立すと言つてゐるが、「美濃奇觀」によると、原丞內は元正帝の附會であるらしいからおもしろい。「美濃古蹟考」の說明をまたなくとも、緣起がかうして近代好事家の怪しい小才工に捏ち上げられたものである事が知られよう。更に、養老の美泉が、醴酒と變遷するについて、もう一つの原因となるものは、養老改元の十一月、美濃の國司をして、美泉を汲み取らしめ、供御の醴酒を造らせたといふことで、詮索家の手は此處に伸び、諸國孝子泉の話を、清水を用ひて神に捧ぐべき神酒を醸す習ひの、變じて清水が酒となるといふ傳說を生じたのであらうなどとも疑はれて來た。

元正天皇は、養老二年にも、その二月七日御發輦にて、再び醴泉に行幸、伊勢に廻られて三月三日に還御遊ばされた。この再度の行幸の跡によりて、聖武天皇も、天平十二年（紀元一千四百年）に行幸、十一月二十六日より十二月六日に至る十日間、鑾輿を停められ給ふた。その折の大作宿禰東人と同じく家持の歌、

從古、人之言來流、老人之、變若云水曾、名爾負瀧之瀨。

（大作宿禰東人）

田跡河之、瀧乎清美香、從古、宮仕兼、多藝乃野之上爾。

（大作宿禰家持）

養老の瀧は、田跡山にあるので、田跡川の瀧と詠まれたので、今では田跡川の稱はなく、下流は津屋川と呼ばれてゐる。天平十二年には、先帝でおはした元正天皇には、御寶算六十一歲にて御恙もなくおはした時であつたので、美泉は養老のまゝであつたと思はれる。然れば、泉と瀧とは別物であつたかと

いふ話に「坂上の獣窟から併発して、さうとも思はれないものがある。それで、古は、瀧の一部分に靈液の流れ込んでゐたのではないかとも考へられた。謡曲「養老」には、『眞清水の、絶えずも老を養ふ故に、養老の瀧と申すなり。げにげに聞けばありがたや、さてさて今の藥の水、此瀧川のうちにても、とりわき在所のあるやらん。御覽候へ此瀧壺の、少し此方の岩間より、出で來る水の泉なり。さてはこれかと立ちより見れば、實に潔き山の井の、底すみわたるさゞれ石の、巖となりて苔のむす、千代に八千代のためしをも、まのあたりなる藥の水、誠に老を養ふなり。』とあつて、明に、瀧と養老泉とを區別してゐるやうであるが、明徳四年（紀元二千五十三年）に、足利義滿が養老の瀧見物に出かけたといふ謡曲時代には、なほ其靈泉に、瀧との區利が認められてゐたものか。

大垣停車場より約三里、養老郡白石村養老山中に、明治十三年來公園に設備された遊覽地の西部に、今も懸る養老の瀧は、高さ九丈餘、幅九尺餘、一條の素練絶壁にかゝつて亂れざる態、その瀧津瀬の岩間に落ちて、霧となり、雲となる姿、皆昔に變らざるやうではあるが、靈泉の名殘も絶えて、名物養老酒の名漸く高く、諸國に段々に傳はれる老子酒泉の傳説も、一刻にうち消子は清水』の物語も、[illegible]て、[illegible]所より、いよいよ民俗代謝の豫行に移らうとしてゐる。

一飲一浴不老不死、衰老再盛癃痃可起、そゞろに近藤篤が養老泉碑銘の句を咏みながら、森樹翁欝のあたりを行けば、嫋々たる水聲の樹葉に響を搖がし來るものがある。美濃三勝の一として、有名なるその養老の瀧の音、見上げ見下す瀑下は淵を成さずして、岩石一枚を張りつめたるがやう、水は淸冽、深さ僅に膝を沒するばかり。昔、元正天皇は、輝く御身に、運步を此あたりに運ばせられ、美しの御手に此處の靈泉に掬はれ浴せられた。『朕が身にあつて驗あり』と、養老の詔にあるもめでたく、何事か輕き御疾痛も、この靈泉に治せられたればこそ、二度の禍を狂げられたのでもあつたらう。

言ひ傳ふ、醴泉涌き出づるは昇平の象と、『寔に惟ふに美泉は即ち大瑞』と、詔あらせられた陰に、養老孝子傳説の結び付いた事は、譬へ夫が外來思想の影響によつて成るものとの譏に甘んじても、酒泉孝子の傳説は、其雛形である子也清水傳説と共に、今、一つの立派たる本傳説の形式に置かれてあると主張せねばならぬ。天和四年（紀元二千三百四十四年）伊藤子著すところの「本朝孝子傳」士庶第一に掲ぐるところの養老孝子の許に、『老父性也、有ゝ酎ゝ無ゝ醴、何以ゝ慰ゝ哉、老經之不ゝ說ニ誰猶、醴以ゝ此賜、後世孝子之[illegible]

及我養老之泉一是也、蓋皆覺言耳矣、是編何取レ之、貽二詒レ怪之譏一乎、曰天之於二斯民一也、休咎各以レ類應、洪範之庶徵可二以見一矣、例孝子之心誠莫レ不レ至、誠之至者可レ開二金石一、故曰至誠如レ神、孝經亦曰、孝悌之至通二神明一、孝經援神契曰、孝道行則地湧用、漢時醴泉屢涌、人以爲二使人在レ官之應一、使人在レ官亦猶如レ此、何疑三孝子之有二此瑞一、然孝子豈甞有レ意二於其間一、只是自然之感應爾、云云』とある思想の、自然の感應と相俟つて、日本の養老譚は、靈しき傳統の光りを投げてゐる。

之を要するに、棄老譚養老譚は、右と左に別々に杖を突いて歩けるが如くに見えるが、實は、何れも一人の孝子に兩方から手を引かれてゐる。『禮記』に、『有虞氏、貴レ德而尚レ齒、』と、一國の政治が、未熟の若年者を對手とせずして、世故に通じ經驗を重ねた老成人に委ねらるべき運命は、それは棄老國傳說の思想で、日本の棄老傳說なり、養老孝子傳說なりは、若い者が老幼を背に、生々の道に躍動すべきを暗示してゐる。(をはり)

上野公園名木『秋色櫻』物語

澤田撫松

一

上野は花の盛りであつた。山門の左、穴稲荷から大佛殿、其所から五條稲荷へかけて、若樹老樹の櫻が、互に研を爭ふて居た。中堂の後、御本坊の前から、竹の臺へ行く道も、兩側の櫻は咲き揃ふて、清水堂あたりは、薄紅の霞か棚引いて居た。

『吹きも殘らず、散りも始めず、全く見ごろですな』

十徳を着た老人が、瓢簞を提げたつれの男を振り向いた。

「花も見ごろだが、人も出ましたなア」

唐棧の羽織を着た町人ふうの男は、あがつて來た石段の下を眺めた。

「風はなし、天氣はよし、人も出ますね。が然し、二十年前

の花見とは、大分花見が變りました。元祿時分は、花見に着て來る着物が、男も女も、まるで歌舞伎役者の樣だやつたが、將軍樣が吉宗公にかはつてから、おかみが御質素なもんぢやで、下々の着物萬端、がらりと變つて、見さつしい、この大勢の人の中に、綾や縮緬を着て居る者が一人も居ませんね。結構なことぢや』

老人は木彫の鳩を頭につけた竹の杖を突いて、歩きながら若い方の男に話をして居た。

『御質素は結構なことですが、私達の樣な刀屋渡世をして居る者は、あがつたりやじや、刀に金銀の飾をつける者はなくなるし、柄には鮫をまかなくなつたし、これじや刀屋も立ち行きませんて』

若い方の男は、老人と並んで歩きながら、かうした愚痴を零して居た。二人が歩いて居る花の下には、木柄で赤銅作りの大小を差した侍や、木綿の着物に小倉の袴をつけた侍が幾人も通る。若黨を供につれた屋敷の女や、揃ひの手拭を首に卷いた町の娘達が、綺麗に着飾つて歩いて居る。色や縞柄は元祿の名殘りを受けてかなり派手であつたが、地質は太織か紬か、高々が郡内で、綾や縮緬なぞを着て居る者はなかつた。三橋の方から黑門へ入つて來る人と、池の端から穴稻荷の方へあがつて來る人とで、東叡山はえらい賑ひであつた。春の陽が、人の頭から肩へかけて、暖い光線を投げてゐる花の山を、春慶塗の笠を冠つた旗本侍や、菅笠を冠つた陪臣らしい侍が、花を見ながら歩いて居ると、加賀笠を冠つた女や、麥藁笠を冠つた町人等も、緩やかな足どりでその中にまさつて居た。と、大きな櫻の樹の下に、赤い毛氈を敷いて、その上へ金砂子銀砂子雲形なぞの、色紙短冊を並べて、『筆御貸し申上候』と書いた木札が立てゝあつた。かうした短冊店は、觀音堂の裏にも、吉祥閣の前にもあつた。そこらの櫻の枝に、色紙や短冊のさがつて居るのは、短冊店に足を止めた雅客の風流たることは言ふまでもない。やわらかい風が吹くと、あちこちの櫻の枝にさがつた短冊がひら／＼と動いて居るのが見えたりした。黑門口の方から、太織の綿入れの裾を尻からげして居る爺と並んで、美しい小袖を着た娘が、竹の臺へあがつて來た。その後から、着流しに大小差した品のよい侍が、謡をうたひながら石段を登つて來た。登りつめると、覺束ない千鳥足で歩き出した。酒に醉つて居ることは一目で分つた。

「花守の、住むや嵐の山櫻、雲も上なき梢かな……」

右の手に持つた扇子で左の掌を叩きながら、あぶない足つきで、觀音堂の方へ歩いた。觀音堂の裏手に井戸があつて、井戸

の傍に枝ぶりの面白い櫻があつた。件の侍は綺麗に咲いた櫻の梢を見あげた。

『治まる御代の春の空、さも妙なれや九重の、さも妙なれや九重の、うちとに通ふ花車、轍も西にめぐる日の、影わく雲の嵐山、戸無瀬に落つる白波も、散るかと見ゆる花の瀧、盛り久しき景色かな、盛り久しき景色かな』

謠をうたひながら、花に見とれて居た侍は、横へまがらうとして足もとに氣がつかなかつた。其所には井戸があつて、井桁も低かつたから、一歩で落ち込むところであつた。

『あぶない』

其所に立つて居た親子づれの、娘が小さい聲を出した。それが耳に入つたのか、侍は井戸のあるのに氣がついたらしかつた。娘の方を振り向いた侍は默禮すると、又謠をうたひながら歩き出した。

『花に戯れ、梢に翔けて、さながらこゝも黄金の峰の、光も輝く千本の櫻、榮ゆく春こそ久しけれ』

侍の聲は雑沓の中へ消えて行つた。

『短冊召せ、色紙召せ』

色のくつきりと白い女が、加賀笠で顔を半分かくして、赤い毛氈の上に坐つて居た。

『色紙召せ、短冊召せ』

優しい聲がまた聞えた。娘は立ち止まつて父親の袖を引いた。父親は娘が袖を引いた譯を知つて居たから、默つて懐中の紙入を娘に渡した。娘は腰をかゞめて、加賀笠の女と一言二言ことばを交すと、紙入の中から鳥目を出して渡した。女は銀砂子の短冊を前へ出した。娘は其所にあつた筆に墨を含ますと、左の手に砂子の短冊を取りあげた。そして美事な筆蹟で十七文字を走らすと、短冊に紙縒をつけた。父親は娘が返へした紙入を懐中へ入れて、嬉しさうな顔をして居た。娘は井戸の傍へ行つて、櫻の枝に短冊を結びつけた。娘は短冊のさがつた枝を暫く眺めて居たが、吉祥閣の方へ歩いた。

『欽彌』

短冊屋に並んだ茶店の床几に腰をかけて居た立派な侍が、前髪の小姓に聲をかけた。小姓は前へ進むで兩手を突いた。

『近かう』

小姓を傍近く呼んで、何事か命令したと思ふと、

『ハツ、心得ました』

小姓は兩手を袴の中へ入れて、腰をかゞめたまゝ、あとすさりをして一間ばかり退くと、くるりと右を向いた。袴から兩手を出して袴の襞を叩いて、井戸端へ近寄り、櫻の枝から今娘が

吊した短冊を取つた。腰に差した扇子を抜いて、さつとひろげると其の上へ短冊を載せた。そしてさきの様な謙遜な態度で、扇子に載せたまゝ短冊を侍の前へ出した。侍は右の手で其を取つて左の手に持ちかへ、短冊の文字を讀むだ。

『井戸端の、櫻あぶなし、酒の醉』

侍は繰返へして又讀むだ。

『ウム』

侍は獨で頷いた。

『欽彌』

小姓を呼び呼んだ侍は、又何か小聲で囁いた。小姓は急いで侍の前を去つて、群集の中を掻き分ける様にして吉祥閣の方へ駈け出した。本覺院を右へ曲らうとする角で短冊を書いた娘に追ひついた。小姓は娘に何か言つた様であつたが、娘は顔を赤くして俯向いてしまつたので、小姓は父親の方へ向いた、父親は驚いて、續けさまに頭を下げて居た。小姓は又駈け出して侍の前へ歸へつて來た。そして何やら復命して居た様だつたが、傍に居た者にもそれは聞えなかつた。侍が立ちあがると、三十人ばかりの供の侍がその後についた。侍は太布の着物の上に同じ太布の羽織を着込み、棧留縞の袴を短かく着けて、木綿の脚半に裁付を穿いて居た。供の侍は日本木綿の着物に小倉の袴を短かく着けて、脚半草鞋ばきの、皆同じ姿であつた。小姓だけは木綿ではあつたが水浅黄の紋附を着て、袴も縞柄のあらいのを着け、右の手に鷹を据えて居た。鷹の足に紫の緋紐がついてあつた。侍の一行が歩き出すと、花見の群集はさつと道を開いた。中には土下座をする者もあつた。侍はさうした人達の中を歩いた。花がチラ〱と散つて、花瓣が侍の肩に止まつたりした。

二

大奥よりの俄の御召しと言ふので、菓子屋の女房お由は、一時は驚いたけれど、十七年前には大奥に勤めて居た身でもあるし、それに吉宗公の明君と言ふことを知つて居たので、悪いことではなからうと思ふと、動悸がやつと靜まつた。十七年前の昔、自分が大奥に居た時のことが胸に浮んで來た。お由が大奥に勤めて居た時のことであつた、八才の幼主、七代將軍家繼公の病篤しとて、水戸の綱條、尾張の綱友、紀州の吉宗三家打ち揃ふて、登城になつた。吉宗は紀伊大納言光貞の三男で、家康の曾孫に當るのであるが、妾腹であつたが爲めに、江戸青山の別邸に居た、その頃、有馬中務則維が從者あまた召しつれて行くのを見て、

「我れもあれ位の身分になりたい」

と言つたのを、傍に居た傅役豐嶋半之丞が聞きとがめ、

『勿體ないことを仰せあるな、君は正しく東照宮の御曾孫に亘らせ給へば、場合に依つては將軍家に入らせ給ふやも知れざる御身であるものを』

と涙を流したことさへあつた。それが長兄綱教、次兄賴職相次で病死したので、紀州家を繼いで從三位中納言になつたのであつた。その日、家綱薨去になつたので、三家の中より後繼者を求めねばならぬことになつたが、六代將軍家宣の遺言に依つて、後繼は紀伊中納言と言ふことに決つた。吉宗はその晩から二の丸に住むことになつたが、紀州家からついて來た家臣は、何となく不安でならなかつたので、吉宗の周圍を取り卷いて、夜の明けるまで眠らないで警護した。その翌日、吉宗は群臣を召して、

『我れ、天下の政務を攝することになつた以上は、深宮に手をつかねて居ることはしない。總ての形式を撤廢して、何事も直接申し出でよ』

と政務簡潔の申渡しをした。天英院殿（家宣の御臺所）より吉宗に本丸へ移る樣との沙汰があつたが、吉宗は本丸へ移らうとはしなかつた。自ら粗食粗服を厲行して、元祿以後の華美の風を一掃しやうと企てた。かうして政治の弛緩を緊縮せんと努めて居た吉宗も、趣味や學問の方面には積極的であつた。吹上の御苑に櫻と楓の苗を澤山植えさして、それが四五尺になると、向嶋の土手や、飛鳥山や、小金井堤などへ移植さして、江戸に櫻の名所をこしらへた。吉宗が將軍職に就いて間もない時のことであつた。吉宗は老女を召して、

『大奥の腰元どもの中で、みめ麗はしき美女を選むでつれてまいれ』

と言ひつけた。老女はかうした君命の下ることを當然のこと〻思つて居た。大奥の方では斯る御沙汰のあるのを待つて居たので、その時の用意と、老女の方ではちやんと二十名の美しい女が選むであつた。このことを豫期して居た連中のなかには、烈しい運動をした者さへあつた。かうして豫め選まれてあつた二十名の美人を、老女は誇り顏に吉宗の前へつれて出た。吉宗は、自分の面前にずらりと並んだ美しい女の顏を見渡した。

『そち達は美しう生れたのう』

裝ひを凝した若い女性を目の前に置いて、ぢつと見詰めて居た吉宗は、

『今日限り、そち達に暇をつかはす。親元へ立ち歸り、夫を選むで仕合せな一生を送れ』

と、嚴かに言ひ渡した。これを聞いた女連は固より、つれて來

た老女も開いた口がふさがらなかつた。大奥の腰元の中より容貌すぐれた者を選めとあるからには、きつと御傍勤めを仰せつかることゝ思つて居た女達は、案に相違した申渡しで、互に顔を見合すばかりであつた。美しい女を選つて來たことを誇つて居た老女は、御褒めの御言葉でも戴けることゝ思つて居たのに、つれて來た女を悉くお暇が出るとは何事ぞと、呆れかへつて居た。然しかうしてお暇が出た上は長居は出來ぬと、老女は腰元どもをつれて御前をさがらうとすると、

『待て〳〵』

吉宗は立つて行く人々を呼び止めた。腰元達は再び其所へかしこまる。

『今日暇をつかはすのは、そち達におちどがあつての故ではない。大奥に姿かたちの美しい女ある時は、政道紊るゝもとゝもなれば、不憫ながら暇をつかはすのじや、けしうは思ふまいぞ』

吉宗の言葉には情が籠つて居た。その時の二十人の一人であつたお由は、大奥へ行く仕度をしながら、お暇の出た時のことを思ひ出して、くすぐつたい様な氣持になつて居た。

三

十七年ぶりで二の丸へあがつたお由は、知らない所へ來た様な氣がしたが、それでも金地に墨繪の龍の衝立や、腰元部屋の大きな眞鍮の火鉢や、さうした馴染のある物を見ると、まんざら他國へ來た様な氣もしなかつた。自分と同じ部屋に居た磯野と言ふ腰元が、餘り顔が綺麗でなかつたので、美人組に入らなかつた爲め、お暇も出ないで、今では老女格になつて居た。磯野に逢つてお召しの御用を聞いた。

『うへ様お鷹狩りのお歸へりに、上野へお廻り遊ばしたところ、觀音堂の裏にて、年若い娘が櫻の枝に短冊をつけたのを御覧になり、その短冊に書きつけた俳句が殊のほか御意にかなひ、小姓に娘の身元をお聞かしになりましたら、まあ、その娘がそなたの娘御であつたさうな。うへ様御感なゝめならず、さいはひ、紅葉山の茶席開きもあれば、娘を呼んで一句書かせよとの難有き御意でござる』

上意を傳へる磯野の態度には犯し難い威厳があつた。元は同格であつたお由も、菓子屋の女房となつた今では、老女の前には自然に頭が下るのであつた。

『不束な娘、うへ様の御眼にとまり、お恥しう存じます』

お由はお受けをして大奥を出たが、どうも心配でならなかつた。娘はやつと十六になつたばかり、俳句は好きで常に詠むで

は居るが、さうした晴れの場所で俳句が詠めるかどうか、若しも不調法でもあつては申譯がないと、さう心配が胸に起ると、うへ様の御意に從ふてよいやら惡いやら、自分では判斷がつかなくなつた。かう言ふことは宗匠に相談するより外に道がないと思つて、大奥からの歸りに、吳服橋を渡つて、茅場町の寶井其角の草菴を訪ふた。鎧の渡場の少し手前に、番小屋の様な小さい家があつた。それが其角の草菴で、障子を開け放した四疊半の緣側に坐つて、空を眺めて居た其角の顏を見ると、お由は上り口に兩手を突いて挨拶した。其角にあがれと言はれて、古疊の上に行儀よく坐ると、今しがた磯野から聞いたいきさつを語つた。そしてどうしたものかと其角の意見を聞いた。

『秋色さんは俺の弟子じや、將軍の前であらうが、どこであらうが、心配無用じや』

其角は快心の笑みを漏して居た。宗匠にかう言はれたので、お由はやつと安心したから、其角に禮を述べて表へ出た。渡船が丁度岸へ着いたところであつたので、その船に乘つて鎧の渡しを渡つた。(その當時は今の鎧橋の所に橋がなかつたから船で渡して居た)。

小網町の家へ歸へつて來たお由は、大奥で磯野から聞いたこと、其角に相談して來たことなどを、夫と娘に話をすると、夫は不安な顏つきをして腕を組むで居たが、娘のお秋は嬉しさうな顏をして居た。お秋は十歳の時から其角の弟子となつて、秋色と言ふ雅號まで貰つて居た女であつたから、貴人の前だと言つて俳句の詠めない様な、そんな自信のない女ではなかつた。それで母親の話を聞いて、思はず笑顏を見せたのであつた、ところが父親はさうではなかつた。將軍様の前へ娘が出ると言ふだけでも恐しい様な氣がするのに、德川様の大奥で俳句を詠まねばならぬと言ふことが、娘の身に取つて一大事の様に思はれて何としても心配でならなかつた。さうした心配で、父親の善右衛門は、その晚眠ることが出來なかつた。

四

翌朝になると、お由はお秋を風呂に入れたり、化粧をしてやつたり、まるでお嫁にでもやる様な騷ぎをして居たが、うへ様の氣質を知つて居たお由は、着物や帶は質素な物を選むだ。お由はかうして娘の仕度にやきもきして居ると、俄に頭痛がして起きて居られなくなつた。時刻は段々迫つて來たが、お由の頭痛は容易に治まらなかつた。お秋の仕度はちやんと出來て、これからお由の仕度をしやうと思つて居るところへ俄に頭痛がしたので、お由はお秋に附添ふて行くことが出來なくなつた。か

うなると父親の善右衛門がついて行くより外はなかつた。

『俺はさう言ふ所へ行つたことがないから、若し縮尻でもあつては申譯がない。いつそ親と言はずに、供の者だと言つてゐた方がよからう』

町人の善右衛門はわざと下男の樣な服裝をして、親と名のらずについて行つた。未の刻少し前に二の丸へ着いたお秋は、

『母病氣に附き、秋一人で參上いたしました』

と申入れると、これへと言つて大奥へ通された。磯野は直ぐ出て來た。

『うへ樣は一藝一能に秀でた者を賞し給ふ御心にて、破格の御召し、難有く心得てよからう』

かう言ふと、磯野はお秋を吉宗の前へつれて行つた、二の丸は本丸と違つて、室内の模樣から總ての調度までが質素であつた。正面、褥の上に、紬の着物に袴を着けず、同じ紬の羽織を着て、ゆつたりと坐つた八代將軍吉宗の左側には長い佩刀が置かれてあつた。上野の花見に隊を据えて居た前髮の小姓は、上段の間を下りた右手に控えて居た。吉宗は直截簡樸を尚んで居たので、老臣進見の折でも袴は着けなかつた。只京都のことを議す時と、日光のことを議す時だけは正服を着けることにして居た。この日も、老臣等と普通の政務を議したあとであつたから、毎の通り着流しで居たのであつた。

『井戸端の句は感服いたした。今一句、何なりと詠むで見よ』

吉宗はかう言つて小姓に眴せした。小姓は用意の硯箱と短冊とをお秋の前へ置いた。お秋は吉宗に默禮して筆を執ると、一寸首を傾けたが、直ぐ短冊に筆を走らした。そして其を前に坐つて居た小姓に寄すと、小姓はその短冊を吉宗の前へ持つて行つた。短冊には、

『そも我は鍬に用なき櫻かな』

と書いてあつた。二三度讀みかへして居た吉宗は、句の下に小さく書いてある秋色の二字に眼をつけた。

『そちの雅名は秋色と申すのか』

吉宗に聲をかけられて、お秋は兩手を突いて頭をさげた。

『師の其角がつけました名でござります』

小聲で、然しながらはつきりした言葉でお秋は答へた。

『上野で、きのう見た、井戸端の櫻は、何か名でもついてあつたか』

吉宗は小姓の方を振り向いて、かうしたことを問いて見た。

小姓は二膝ばかり進むで、

『たしか、大般若と申す札が立つてあつたかに心得まする』

若々しい聲で答へた。吉宗は暫らく考へて居たが、

『その大般若と言ふ櫻の樹を、以後、秋色櫻と改める樣取りはからへと、小納戸松下當恒に申し傳へ』

小姓に櫻樹改名のことを命令した。お秋は自分の雅名が櫻の名になると聞いて驚いたが、うへ樣の御諚であつたから默つて居た。御前を下つたお秋は、かずかずの土産物を頂戴して歸へることになつたが、俄に雨が降つて來たので、磯野は駕輿の用意をさした。供待に待つて居た父親の善右衛門は、雨合羽と竹子笠とを借つて駕輿のあとについた。親を歩かして、自分一人駕輿に乘ることをお秋は心苦しく思つたけれど、その場合、これは我が父だと言ふ譯にも行かなかつたから、父親の方を一寸見たきりで、だまつて駕輿に乘つた。和田倉門を出ると、雨はしたゝかに降つて來た。お秋は駕輿の中で氣を揉むで居た。父は疝氣の持病があつて、軀が冷えると腰が痛むのが常であつたから、かうした雨の中を歩かしては、きつと持病が起るであらうと思ふと、駕輿の中にじつとして居ることが出來なかつた。雨は段々烈しくなるばかりでなく、風さへ加はつて來たので、お秋は駕輿の中から父の方を見ると、父は竹子笠に兩手をかけて、苦しさうに歩いて居た。さうした父の姿を見ると、お秋はもう堪らなくなつたので、間部下總守の屋敷を左へ曲らうとした時、お秋は銀の平打の簪を頭から抜くと、それを駕輿の窓からそこへ投げた。西の刻を過ぎて、あたりが暗くなつて居たから、駕輿かきも、親も、それには氣がつかなかつた。常盤橋を駕輿が渡らうとした時、

『一寸、駕輿かくお方、待つてくだされ』

お秋は駕輿の中から駕輿かきを呼び止めた。駕輿かきは息杖を入れて立ち止つた。

『あのう、其所の御屋敷を曲る時、私、簪を駕輿のそとへ落したのです、すみませんが、取つて來てくださいませんか』

駕輿の中から、お秋は駕輿かきに頼むのであつた。駕輿かきは駕輿を其所へおろして、先棒の駕輿かきが、油紙をかけた小田原提燈を提げてあとへ引きかへした。あと棒を擔いで居た駕輿かきは其所に立つて居た。お秋は窓を少しあけて、

『お氣の毒ですが、あなたも見に行つてくださいませんか、雨の中では、一人では分らんかも知れませんから』

あと棒にも頼むで居た。お秋にかう言はれると、あと棒も亦駈け出して行つた。そのあとでお秋は駕輿の中から出た。

『おとつさん、あなたは病人ですから、私と代つてください、早く』

お秋は父親の傍へ寄ると、合羽を脱がしかけた。

『俺はよい、お前こそ着物が濡れる』

善右衞門は合羽をぬがうとしなかつた。

『何でもよろしい、私の言ふ通りになつて居てくだされ。早くせぬと、駕輿かきが來ます』

無理無體に合羽をぬがして、竹子笠を取ると、お秋は父親を駕輿の中へ入れた。そして自分は裾を高くからげて、父親の着て居た合羽を着ると、竹子笠を冠つて駕輿の脇に立つた。

『やつと見つかりました』

駕輿かき二人は戾つて來た。一人の駕輿かきが䈎を駕輿の中へ入れた時、駕輿の脇に立つて居たお秋は

『どうも濟みません』

と小聲で禮を言つた。駕輿先に小田原提燈がぼんやりと弱い光を出して居るだけで、風の音、雨のしぶきで、お秋の聲が駕輿の中にしたのか、そとであつたか、そんなことは駕輿かきに氣がつかなかつた。駕輿かきは小田原提燈をたよりにして、暗い雨の道を本町通りへ出て、大傳馬町を小舟町へ折れ、小網町の菓子屋の前へ駕輿をおろした。駕輿の扉を開けた二人の駕輿かきは、駕輿の中の女が、いつの間にか男に變つて居たのに呆れて居た。

このことが吉宗の耳に入ると、羽二重の小袖一重ねに金一包を添へ『孝子秋色』と書いた御[illegible]をつきさせて附けて、お秋にくだされたのであつた。

筆者曰く、秋色櫻は今も尚ほ上野公園竹の臺清水堂の裏に、年々美しい花を見せて居るが、孝子秋色の事蹟を傳へたものは頗る乏しい。それで山東京傳の『近世奇跡考』柳亭種彦の『還魂紙料』岩瀨醒の『骨董集』竹窓玄玄一の『俳家奇人談』その他の諸書に依つてこれだけのことを纏めたのである。

禁酒してから

松崎天民

×

「眼と身體のため、禁酒いたしました。
薄志弱行の私ですから、
何うか、此の決心を遂行し得るやう、
御同情を願ひ上げます」

と、今年の年始狀には、特に此の一項を書き加へた。耶蘇教信者の人や、所謂志操堅固の人から見れば、何でも無い家常茶飯の事であるかも知れぬが、二十年この方といふもの、『酒興』に依つて生きて來た私にとつては、決して『何でもない』生活の一轉換ではなかつた。

それでも今日まで、足掛け二年……と云つても、やつと四ケ月目ではあるが、日數にすれば、僅に百十餘日を過ぎたばかりであるが、私は兎にも角にも、酒を止めた酒の氣の無い月日を送つて來たのであつた。若し禁酒黨と云ふやうなものが、此の世の中にあるならば、私は其の仲間入をしたばかりのホヤ〳〵なので、時には「一杯ぐらゐは……」と思ふこともあつたし、また「飲みたいなア」と欲しがつたこともあつた。それを何うやら此うやら、「禁酒した」の一天張で、今日まで辛抱して來たのは、何と云つても「私」と云ふものが、可愛からであつた、私の「眼」が大切なからであつた。「信仰に依つて……」とか「大に悟つたから……」とか云ふやうな、人前だけは立派らしい世間體の好い「理由」から、決して禁酒したのではなかつた。

然し此の「斷然、禁酒しやう」との餘儀ない決心は、別に悲壯と云ふほどの生活革命では無いにしても、酒興の中に「人生の姿」と云ふものや、「世相の心」と云つたものを、若々しい感傷的の氣持で眺めて來た私にとつては、何としても「心淋しい生活の一轉換」には違ひ無いのであつた。

×

それは大正十年十一月、一日も午後三時を過ぎた頃であつた。勤めて居るN新報社を出て、元氣の好い政治部長のY君と一緒

に、神田の通りを須田町の方へ向つて、歩いて居る時であつた。

「あ、妙なものが見えますよ。硝子に墨汁を塗つたやうな色の蝙蝠狀をした雲片が、私の眼前にチラ付いて居る。Yさん、あなたには何も見えませんか……」

「そんなもの、何も見えませんよ。君の眼の疲勞なんでせう。一杯、飲めば治りますよ……河内山へでも行つて……」

「さうかなア、私たけかなア。……すると眼の調子が變つて來たんです。一二日、樣子を見ることにしませう……」

私達はこんな話をしながら步いて、下谷二長町の鳥料理籌へ行き、二人で晩飯の御馳走に差向ひになつたのであつた。籌と云ふ鳥屋は、その昔、芝居や講談で知られて居る河内山宗俊が、棲で居た跡に、留して居る家で 庭の泉水に面した六疊の一室は、宗俊が世に在りし頃その儘の床柱や天井ださうで、如何にも古色を帶びた結構に見えた。

何時もは若いY君にもけずに、飲ではしやぐ私であつたが、その夜は、「眼前の雲翳」が氣にかゝつて、私は幾ら飲んでも、醉つた氣分にはなれなかつた。一二三日で治つてしまへば宜いが、若し此のまゝ不治の症狀と云ふことになつたら、何うしたら宜いであらう」さう思ふと、若い美しい女中連を相手にして、盃を廻して居ても、心持は暗い方へ／＼と、滅入り込んでしまうのであつた。

「失明の前徵ではないか知らん……」

私はさう思ふばかりでも、重苦しい一種の恐怖に襲はれるのであつた。

×

社の方では、N編輯局長を初め、M編輯長も心配して、「快くなるまで休んで靜養したら何うか」と、親切に言つてくれるのであつた。けれども、一二ケ月休んで治療しても、容易に全快するやうな、そんな輕い症狀ではなかつた。

早速、二本榎に居る親友の醫師K君に、何うしたものかと相談したが、「眼の方は專門でないから……」と云つて、白金三光坂に開業して居る河本博士の門下の、E醫師に電話で紹介してくれたのであつた。そのE醫師は私の同鄕の竹馬の友で、夭折した眼科醫泉君と同窓であつた因緣に依り、親切に時間を惜しまず診察してくれた。その結果は、極度の近眼弱視の者に好くある水晶體の混濁で、輕い人に早くて一二ケ月、症狀に依つては一二三年を要しても、容易に雲翳は取れないと云ふことであつた。

眼球に細い針を注刺して注射治療をする他は、その雲翳を吸縮させるために、內服藥と□藥と水藥とを、食事の前後に服する他に、□面の治療の方法は無い、と云はれてしまつた。それでも雲

液膜が少し崩壊して居るのみで、網膜出血をして居ないのが、見つけものらしく、

「氣を長く治療なさるのですね。此のために失明する心配はありませんが、重い物を持つたり、過激の運動をしたり、唐辛子のやうな刺戟の強い物は、第一に禁物ですね。それに、酒は不可ませんよ。熱い風呂も悪いのですが、酒だけは斷然、止めないと困りますね。讀書は、日本の物なら、大して悪くもありますまいが、酒だけは何うぞ……」

とE君は宣告を下したのであつた。そして、「止められますか……」と念を押された時には、「え、眼には代へられませんから……」と、きつぱり答へ得た私なのであつた。

×

それから今日まで、百餘日の間に、思へば幾度、私は危い瀬戸際に踏込んだことであらう。

「へえ、君が禁酒した。ほんとかね。けれども一杯ぐらゐは宜いだらう……」

と云つて、勸めてくれる友達もあつた。

「大酒さへしなければ、一二合と云ふ分量は、全くその……藥ですぜ」

など〻云つて、美味さうに飲で見せる紳士もあつた。

「洋酒や日本酒が不可ないと云つても、ベルモットや葡萄酒なら宜いでせう」

さう云つて、私の心持を引立てくれる知人もあつた。私も亦た一二杯ぐらゐは……と思つて、危く盃を手にしたこともあつたが、猪口に二三杯を傾けたところで、それは水を飲むよりも味氣ない、佗しいものに過ぎなかつた。

去年の十一月、武相平野の大演習に、陪觀記者として特派された時にも、私の周圍には酒の香が漲つて居た。横濱のグランドホテルへ、神奈川縣知事の招待會に列した時にも　和洋とり〴〵の色と香とに、私は危く禁制を破らうとした程であつた。横濱小學校の大講堂で、市長の招宴があつた折にも、陪觀記者總代として、拙い答辭を述べ終つた刹那に、危く一杯の日本酒を飲み乾したりした。多摩河畔で露營の一夜を過した時にも、あたゝかい豚汁に隣して、正宗の二合瓶が美味さうに林立して居た。木挽町の萬安で、陪觀記者の慰勞を兼ね、陸軍省の新聞班を招待した時にも、誘惑の強い酒の香は、私の身近く漲り流れて居た。

さうした場合には、昆布湯か茶を徳利に入れさせて、酒のつもりで飲で見たが、氣分だけは四邊の空氣に同化して、上面だけは陽性になつても、胸の底深く巣ふ一脈の佗しさは、何うす

ることも出來ぬのであつた。

×

酒の氣の無い正月も、私には生れて最初であるやうな、淋しい果敢いものであつた。

社では毎年の吉例に依り、元日の正午頃、全社員に冷酒の饗應があつて、五分間づゝの指名演説に興じたが、酒氣の無い私は、たゞ蜜柑を食べたのみであつた。平和村の三島彌吉、三宅重也、高山襲坪その他の人々は、特に私のために一宴を催し、元日の夕を築地の待合とんぼに興じたが、藝妓の踊を見ても、美しい女の姿を見ても、何處やらに物忘れしたやうな、足りなさと佗しさとが、私の心持を滅入らせるのみであつた。

「皇祖の榮まさんこと天壤と倶に窮り無かるべし……。信念一つで何んな病氣でも治るのぢや。僕が氣合を懸けると、君は無念無想の沒我の境に入る……。君の信念一つぢやよ、眼の雲翳なんか何でも無いさ」

Ｋ新聞の社會部長職を退いてから、新に精神治療の靈幸社を創めた親友渡邊利松君は、斯う云つて、二度も三度も氣合を懸けてくれたりした。私も其の刹那には好い心持になつて彼の命ずる儘に、手も足も動くけれど、現實と夢現との境界線は、刹那に現れて刹那に失せて果敢いものであつた。

「そうら……眼を開いて見給へ。變なものは、次第に見えなくなる、遂に無くなつてしまう……」

親切な友の施術も、三度や五度では、眼前の蟠りを綺麗に拭い去ることは出來なかつた。「心の持やう一つで、信念の力一つで、何んな悪癖も疾病も全治して見せる」と云ふ、渡邊君の強い信仰に、心から縋り付いて行くことの出來ぬ私は、矢張り醫師の治療に信頼して明るい世の中を待ち望む他はないのであつた。

そこへ樣々の形を變へて「酒」が私を「歡樂の世界」の方へ誘ひ寄せるのであつた。

×

原稿を口述して、長男に書かせて見たのも、それから後の事であつた。電車の乘降や、歩行や、一個の動作には、何の差支へも無いけれど、讀書と原稿を書く場合とだけは、厄介至極に「水晶體の混濁」ないであつた。

ジッと一ケ所を凝視して居ると、尾を引いた串形の雲翳が、そこに掩ひかぶさつて來て、方二寸ばかりを薄くボカすのであつた。眼鏡に塵一つ着いて居ても、それが神經を刺戟して、不愉快になるのが例であるのに、たゞ雲影が見えるやうになつてからは、文章を書く達力が、三分の一も遲鈍になつたやうであ

つた。それに極度の近眼弱視のために、字は殆ど形を成さず、印刷所の文選達から、「蟹の甲羅を取り潰したやうな悪原稿」と云ふ定評を受けて居る私は、斯うして此の原稿を書いて居ても、思ふやうにペンが運ばないので、徒らにジリジリするのみである。

國から出て來て居る友達のKは、

「君に酒を飲で貰はねば、世の中が淋しうて困る。一つ注射をやりんさらんか」

と云つて、私を四谷永住町三の醫師堀民三君に紹介してくれたのであつた。堀君は生殖器病専門の醫師であるが、傍ら日本國産製藥所と云ふを興して、消炎注射新藥アンチカロリンと云ふを創製し、醫學に一貢献をして居る篤學の士であつた。その注射新藥は肋膜炎、腎臓炎、睾丸炎など、何でも炎の字の附く病氣に數回の靜脈注射で卓効があると共に、脚氣、心臓、レウマチス、花柳病などにも、不思議の効果があると云ふ、臨床報告を澤山に得て居るのであつた。

そのアンチカロリンの注射で、私の眼の水晶體混濁が、治るか治らぬかの試験に、私は十日間も通うて見たのであつた。けれども折角の水藥も、眼の方には格段の効果が、容易に顯れさうにも思はれぬのであつた。

もう今日此の頃になつては、酒が飲めぬことの佗しさよりも、本を讀むことの不自由さと、原稿を書くことの難澁さとに、平氣では居られぬ私になつたのであつた。

「三人の子供達が世に出るまで、少くともまだ十年間は、不自由な此の眼をして、せつせと稼がねばならぬのだ……」さう思ふと、ほんとに大事な私の身體であり、私の眼なのであつた。今から十餘年前、澁川玄耳翁の紹介で、井上通泰博士に診て貰つた時にも、「君の眼は一年に二度は診ないと、危險ですよ」と云はれたのであつたが、「酒は少しぐらゐなら」との事に、その方のみを勝手に考へて、碌に診て貰はうとはせずに、今日まで過したのであつた。一つには、三度の近眼位で、十餘年間も事足りて居たのと、また一つには醫師に診て貰ふことに依つて、何だか怖しい戰慄すべき「最後の宣告」を下されはせぬかと云ふ、その氣味悪さと不安とから、今日までは強て「眼」の事を考へやうとはせずに、呑氣らしく打過して居たのであつた。

「大切な眼の事を考へると、酒が飲めない位のことは、何の苦痛でも無いのです」

今では心からさう思ふと共に、電車の中などで、熱柿臭い呼吸を吹いだり、醉どれがへゞレケて居る姿などを見ると、毆つて遣りたいやうな氣持になる私になつたのであつた。そして「捲

莨さへ喫めれば、口腹の樂みに、當分は事缺かぬ」と、酒の方は、酒の味の方は、酒の興の方は、諦めてしまつた私でありながら、兎もすれば頭を擡げるのは、酒のない今日此の頃の生活の佗しさなのであつた。

「お父さん、これで捲莨を止めると、尙ほえらいのに、ね」など云ふ妻の言葉は、私の身を思つてくれる好意からにもせよ、私には何だか思ひ遣りのない殘酷な言葉に響くのであつた。

×

(前略)私のためには、殆ど死命を制するとも云つて宜い「眼」のために、私は斷然、禁酒を實行しました。その大切な眼のためには、何んな犠牲を拂つても、私には少しの悔るところが無い筈であります。捲莨も廢めねばならぬのなら、私は直ぐにでも止めることが出來ませう。一日一回の入浴を、三日に一度にせよと云はれるなら、それも實行が出來ぬことはありません。三度の飯を二度に減らせよと云はれても、私は否とは云ひ得ない心持で居るほどです。

その私が、何うして「酒」に未練があるのでせうか、自分でも、實に不思議に思つて居るのです。それに私は、酒好きと云ふ類の男ではなく、宅で晩酌などは、一度も飲んだことはありません。夏の七八月と云ふ暑い盛りには、冷たいビールを飲でも、暑くて苦しむほどの私ですもの、たゞ春と秋と冬と、それも友達次第に依つて、酒を飲で居たのでした。飲でも宜し、飲まなくても宜し、たゞ氣が向いたら飲む、心の合つた友達となら、何時までも飲む……私はさうした飲酒家なのでありました。

その私が、今度と云ふ今度は、眼のために酒が飲めぬことになりました。飲でも飲まなくても宜かつた酒を、斷然、止めてしまうことは、さう難かしいことではない筈です。從つて、禁酒してしまつたところで、私の生活に、心持に、さう大きな影響は無い筈でありました。反つて、頭髪は脱けなくなる、頭腦は輕くなる、脂肪は少し減つて來る、御飯はいよ〱美味くなると云ふ風に、この身體には、善い影響のみが、ボツ〱見えるやうになりました。

それであるのに、此の私は、何うして斯んなに淋しい頼りない、佗しい氣持になつたのでせうか……

×

私はこんな手紙を、或る先輩へ宛て送つたのであつた。飲でも差支への無い時には、飲でも飲まなくても、我儘勝手にして宜かつたものを、いざ飲めぬと云ふ事になると、今更のやうに未練と執着とが、此うした「酒」の上にも、感じられるのであつた。

思へば若かつた二十歳の夏、村井兄弟商會大阪分工場に居て、厚司を着て働いた頃に、無理に强られて覺えた「酒の味」なのであつた。それから今日まで約二十五年の間と云ふもの、旅にも、遊びにも、喜びにも、悲しみにも、戀にも死にも、私の生活の場面には、何時も影のやうに從いて居た酒なのであつた。新聞記者生活二十三年間にも「酒」を一つの道具立にして、私は樣々の世い中を眺めたり、いろ〳〵の人の姿と云ふものをも、心ゆくばかり觀ることが出來たのであつた。

歡樂の場面にのみ、底力と闊太さとを加へてくれる「酒」ではないのであつた。私のやうな弱い性格の男には、酒の醉に乘じなくては、何うにも此うにも始末の附かぬやうな問題や事件が、長い月日の間には、かなり多く橫はつて居た。美味くも無いのにガブ〳〵飲で、醉ふと云ふ唯その事にのみ依つて、悶えを忘れたこともあつた。當面の悲しさにぶつ突かつても、それをジツと堪え忍ぶことの苦しさを、酒に依つて慰められた事もあつた。兎もすれば世帶染みやうとしたり、老込でしまいさうな心持に、若さと元氣とを盛るために强て陶醉の氣分に浸つた事もあつた。「酒の醉を怖がるやうな弱さで何うならう」と、一方の心では騒いて居ながら、最も近い容易な道は、何時も酒にゆくことであつた。

その酒を止めてから、今日で百十餘日になるが、淺い春の雨、シト〳〵と降る夕にして、殊に佗しさと味氣なさとが、私の心を滅入らすいであつた。

×

自分ではまだ若いつもりで居ても、四十を過ぎた男の上には、「歡樂の世界」も、次第に其の影が薄うなつてゆくのであつた。

「酒を飲まない方(かた)、わたし、好きさ……」

などゝ云はれても、何だかくすぐつたいやうで、覺めた心で眺める色香の世界には、ヒタ押に押し行く快樂の根强さが、脆いものになつてしまうのであつた。「酒を止めたばかりではない、一つには齡なんだ」と、さう思つてみても、そこにはお銚子と猪口(ちよく)とが無くては、何うにも決闘の取れぬものになるのであつた。

カフエーへ行つても、料理屋へ行つても、四邊の氣分に同化し得ぬ眞面目さには、何の興趣も伴ふものではなかつた。酒を飲む友達と、酒の座に何時までも交る諸は、少しの苦痛も感ぜぬだけの經驗と思ひ遣とが、私の表面には流れて居ても、心の底には名狀し難いツマラ無さが、やがて深い佗しさを漲らせるのであつた。「私も酒を飲で居た時代には、あんな風であつたか」と、淺間しい事に感ずる一面には、「あんなに醉ふたら愉快であらう」との羨しさが、何時も不覺に、頭を擡げるのであつた。

「酒を止めたから、捲莨でも上等のを喫め」と、さう思つて、近頃では敷島の他に不二や國華や、クロノースやオツクスフオードや、ウエストミンスターや、いろんな捲莨を喫むやうになつた、形の好いマドロスパイプを購つたり、軟かい革の刻莨入を買つたりして、それを樂しみの一つにせねばならぬ程に、私の口腹の世の中は、心淋しいものになつて行くのであつた。

大切な「眼」と「禁酒」と、自分でも合點して居ながら、そこには諦められぬ大きな矛盾があることを、弱い私の力では、何うすることも出來ぬのであつた。

×

夜遲く歸る場合があつても、酒の氣をプン〳〵させて居た頃は、妻の機嫌も好い方ではなかつた。「今まで何處をぶらついて、飲み歩いて居たのです」など〻、一つには女に持前の邪推も伴つて、手ひどくこづかれたことも、一度や二度のことではなかつた。

それが禁酒してからは、稀に遲く歸宅する場合があつても、女房の心持は、極めて平靜であるやうに見受けられた、反つて「お父さん、葡萄酒ぐらゐは宜いのでせう、[illegible]に使ふほどですもの……ホツト何とかにしてあげませうか」など〻、勸めてくれるやうな事になつて來た。世の中の良人の細君と云ふものは、良人がキチンと出勤して、キチンと歸宅しさへすれば、それを無上の幸福に心得るやうな傾向が見えるのであつた。そして何んな階級の夫人、奧樣、細君、女房、カヽアにしても、酒飲みの良人や旦那や亭主を有つ事よりも酒を飲まぬ良人の方が、眞面目であり善良であると、心得て居る樣子であつた。

私も今度の禁酒に依つて「酒を飲まぬ良い良人」になるのかと思ふと、「神樣も隨分いたづらものだなア」と、心から苦笑せずには居られぬのであつた。酒を飲まないと云ふ事に依つて、飲食の仲間から外れると共に、その機會も少くなると、自然、他へ寄り道する場合も、飲酒時代よりは少くなるのであつた。良人の心持が何んなに佗しくても、淋しくても、「禁酒」その事の上に、遮二無二、好い意味を附加しやうとするのが、細君氣質のやうに思はれるのであつた。

私もさうして、「酒を止めた良人」にはなつたけれど、今までのやうな浮かれ心と、若やかさとから、見放されてしまうことは何としても淋しい變轉なのであつた。

×

――斯うは云ふものゝ、これもこゝ二三ヶ月のことで、いよ〳〵禁酒に馴れてしまへば、自分でも後悔しなかつた幸福を、感ずるやうにも想像されるのであつた。

今の忙しい淋しい心持も、過ぎ行く時の力に陶冶されて、反つて眞の健康が齎す若々しさ、溌溂さに、微笑むことが出來るかも知れぬのであつた。今の私は、たゞ其の事のみを期待しつゝ、根強い「味氣なさ」と戰つて居る戰場の第一線に、立つて居るに等しいものゝやうにも、考へられるのであつた。

青島から久し振に上京した瀧川玄耳翁と、與謝野寛氏の宅で逢つた時にも、話の端緒は「禁酒」と云ふことであつた。

「齢をとつて、僕ぐらゐになると、誰でも禁酒と云ふことは、考へる問題なんだよ。けれども淋しいなア、おい、一杯やらう！　と云ふ工合に、いかんからなア――」

と、玄耳翁もシミ／＼と云ふのであつた。急ぐ場合には冷酒を、そのまゝグビリ／＼と遣つて居た玄耳翁も、酒を止めることの善さと、また其の淋しさとに、門外漢では居られぬらしい樣子が見えるのであつた。

「禁酒しましたか。それはえらいですなア。君のやうに肥つて居ては、第一、腦溢血の心配がありますからね。眼も大事でせうが、生命の方がモツと大切だから……」

斯う云つて、私の決心に力づけてくれる人も、一人や二人ではなかつた。

「歡樂など云ふことは、酒を飲まなくても得やうと思へば得られるのだ。ほんとの人間の歡樂は、徹底た生活の中に生れる……」

斯うも云つて、激勵してくれる人もあつた。餘儀ない事情からにもせよ、酒を止めると云ふことには、善い意味の方が强いのであつた。

×

この頃では、雲翳が濃く見えたり、薄く見えたり、日に依つて違ふこともあるが、先づ同じ程度の分量で、私の視覺を邪魔して居るのである。この分では半年や一年經つても、少しの雲片もない晴天白日を仰ぐやうな爽快な氣持は、望まれさうにも思はれない。

たとへ此の眼が、昔のやうにハツキリ見えるやうになつても、私は二度と盃を手にすまいと、決心して居るのである。友達との會合にも、家庭の慶弔にも、旅にも、遊樂にも、もう彼の「酒」が無いのかと思ふと、又しても淡い味氣なさが、頭を擡げるけれど、それは「ホンの今の間だ」と、自分で自分を慰めるより他には、何うする事も出來ぬのであつた。

朝起きて、勤務に出て、宅へ歸る、飯を喰ふ、本を讀む、原稿を書く――たゞそれだけの生活だと思ふと、そこに忘れたものがあるやうな、物足り無さは感ずるのであつた。けれども今

度の禁酒に依つて、私の外的生活が、少しでも敬虔なものに變つて行くことが出來れば、私はそれを何よりの副産物として、心から感謝せねばならぬのであつた。四十の坂を越えた年齢であつても、私の新しい生活は、今度の禁酒から、出發せねばならぬのであつた。そこに私の新しい生命が、孕くまれて居ることを、私は信ぜねばならぬのであつた。

「今晩あたり、ちりか何かで、一杯やるに宜いのだが……」と、それも過ぎ去つた日の、口腹の樂みなのであつたかと思ふと、私は別な心持から、別な新しい歡樂の世界と云ふものを、私の世の中に發見せねばならぬのであつた。酒を止めたことに未練は無くても、たゞ矛盾の悶えから、私は一刻も早く脱け出ねばならぬのである。

×

「野暮な事を云ふなよ。一杯や二杯飲だつて、眼がつぶれて堪るものか。そんな事を云はずに、一二杯飲み給へよ……」

などゝ、天下の知己だ人達よ、何うぞ私に酒を勸めないやうに、折角の此の決心を、美事に遂行し得るやう、督援していたゞきたいのである。今でこそ僅に自問自答して、自ら慰めて居るけれど、やがては「完全に酒の香い失せた私」の中に、新しい別な私の存在を、發見する日が來るであらうと、私は心からさう思ふのである。

それにしても、思へば長い「酒の生活」であつた。ビール、日本酒、ウヰスキーと、血肉の中に漲ろ醉に、樣々の痴態を盡して來た事が、走馬燈のやうに、思ひ起されもするのであつた。世の暗がりに泣く女の群に、私を引張つて行つたのも、一つには醉の力が手傳つて居た。醉が深くなつて行くにつれて底から〳〵と哀愁がコミ上げて來て、盃をふくみながら咽び泣いた月日の姿にも、もう別れてしまはねばならぬ私になつたのであつた。

「德利も盃も、盃洗も、禁酒の儀禮に壞してしまはう。人には遣るな、必らず壞せ」

斯うは云つたものゝ、今日までソツと其の儘にして居たのは、夢さら〳〵未練とか執着とか云ふのではない。たゞ若い日の私の哀樂が、色濃くしみ附いて居たからであつた。

こゝに私は重ねて云ふ。天下の知己友人達よ、私の「生活轉換」を祝福して下さい――と。

「眼と身體のため、禁酒いたしました。

薄志弱行の私ですから、

何うか、此の決心を遂行し得るやう、

御督援を願ひ上げます」

（大正十一年二月十六日夜十時記す）

山縣公の政治的功過の總決算

山縣公一代の政治的功過

文學博士 三宅雪嶺

◇

山縣公八十五歳の生涯は、幕末から明治大正を通じ、有數の人物の一つたるを示して居る。狂介の名が傳はつてから約六十年に及ぶ。然し維新の元勳と稱せられながら、當時の功に於いて重きを置かれず、西鄕二千石、大久保木戸廣澤千八百石、板垣後藤千石に對し、六百石に止まる。石高通りに考へる事出來ぬが、餘り重きを置かれなんだのを認めねばならぬ。後に鹿兒島縣令を勤め死刑に處せられた大山綱も八百石、山縣公はそれよりも下つて居る。新政府成立以來、軍事の衝に膺つたのが大村、之に次いで前原、山縣は其下に居る。大村が變死し、前原が隱退し、西鄕を引出し、山縣は其下に就かうとし、謂はゞ次官になる譯であつたが、西鄕は元帥とか大將とかいふ名を得、參議の肩書になり、山縣が兵部少輔から大輔、次いで陸軍卿となり、兵制の整備に努めた。大村の頃から徵兵令を施くの計劃であつたが、之れを施き、兎も角も形を整へたのは、山縣公頗る與つて力がある。必ず才能が秀でたのでなく、其秀でた連中は、かゝる質實で、小面倒な事を好まず、更に面白い方面に出ようとし、さりとて隨分複雜な仕事であつて、才能無くて出來る事でなく、そこで山縣が側目も振らず鎭臺を作り上げ、自らの立脚地を築くを得た。

◇

山縣が兵制の整備に重きを置いたのは、戰役に臨み、何より組織が第一と認めたのであるが、自ら實戰に何程の能力ある

としたか。凡に戰場に出て、實戰に堪へ得ずか信じても、特別に長ずるとしたか、何うか。佐賀の役に自ら兵を率ゐて臨まうとし、いよく西南戰役が開け、有栖川宮總督に參軍として出征した。當時陸軍卿か軍事上第一の要職であつて、參謀總長をも兼ねるが如き姿であり、勢ひ首腦となつたところがある。政府で大久保内務卿が事實的首相であるが、其下で伊藤と山縣が働くところ、聊か普魯西國のビスマルクとモルトケといふ關係がある。長州側から觀れば、此機會を以て薩摩の勢力を殺し全國統一の實を擧げようとするのである。大久保が自ら西鄕と談判しようと云ひ出した時、伊藤が之を押止めた。柱石たる人に若しもの事があれば、國家が如何になるか知れぬと云ふのであつたが、一面から觀れば、西鄕大久保の間に話が纏まれば、長州側が頗る面白くない事になる譯で、何でも兵力で鎭壓せねばならず、政府には臺灣役に關聯し淸國と葛藤を生じ、外國から新式の兵器を買込んだのがあり、薩摩を叩きつけるに左程難しい事ないとした。ところで山縣が戰場に出で、熊本城に向はうとするに臨んで、薩兵に遮ぎられ、急に破る事が出來ず、城中で次第に糧食に窮する事になつた。黑田が別軍に參軍とし、敵の背後を衝いて城に連絡をつけ、形勢が定まつたが、山縣軍で猛烈に攻擊し、敵が全力を以て防ぎ、それで背後が空虛になつたといふものの、他に全く方法なかつたと斷言し得るか。官軍は兵器彈藥の缺乏に困んだと云ふが、薩軍は更に遙かに困しみ、官軍の十發に對し一發の割合である。田原の樹木は彈丸で悉く枯れたと云ふので、激戰の狀態を察し得るとし、其彈丸は主に官軍からである。當時初めて徵兵令に依る軍隊を大規模に動したのであつて、事の已むを得ぬところあるにせよ、山縣公が實戰に長ずるを證明したと云へぬ。力づくの戰爭ならば野津兄弟が顯はれ、智惠づくの戰爭で山田が著はれて居る。山縣が首腦となつて居るので、征討の殊勳は之に歸せねばならず又其勤勉努力の一通りでないのを認めるが、將才として何れ位のものであらうか。後に參謀本部を置き、自ら總長となつたのは、猶ほモルトケにあやかるところあつたのか何うか。後に絕えず軍職を帶び、二十七八年役に自ら出征し、三十七八年役にも與つて居るが、眞に自ら力を出さねばならなんだものであらうか。前役には第一軍司令官となり、野津軍先づ出發し、平壤を攻めようとする。司令官から自分の行くまで攻擊を待てと云ひ、野津から待たれぬと云ひ、共儘攻略して陷れた。後に司令官が滿州に進み、寒氣に屈せず、病氣に屈せず、死を決したのは、覺悟が好いとしても、戰略上何の力を現はしたか。後役には留守を預り、戰場に出でず、只總司令部に用懸け、永く戰役を

細纈するの不利を認めたのが、講和會議に關係あると云へば、地位が地位丈けに功がある、

◇

自ら一介の武辨と稱し、軍職に最も重きを置いたやうであるて、兵制を整備した外に、他將に優るを證明したるところあるか。時として軍人間に不平が起り、動搖した時、能く之を鎭靜し、將校の選任に於ても大いに錯らなんだとするが、其處に功あるとせば、長の陸軍を作つたのを何と觀るべきか。強ち長閥に拘はつたのでなく、眞に人材を登用したのであつても、多くの人が人材と認めたので斥けられたのゝ少くないのを否定する事が出來まい。山縣公直接の關係なからうが、斥けられて怨みを呑んだ者も可也にある。不平將軍の一人、井上男が、伊藤山縣等の列坐する席で、聲を高くして曰ふ、ビスマルクが居つても、モルトケが居らなくては仕方がないでないかと。坐に氣色ばんだ者があるを見、更に曰ふ、モルトケは居らう、斯く云ふ自分でも敢て任ずる、ビスマルクの居らぬのを何うするかと。實に當時伊藤が歐洲より歸り、首相となつて東洋のビスマルクと渾名されたのである。之に對し山縣がモルトケたる譯であつてさうならなんだのは、內務卿となり內務大臣となり、內政に力を致し、特に自治制に意を用ひ、軍事の方は他人が掌つて居る。陸軍は大山が擔任するのみならず、種々分擔を要し、川上が參謀本部で一意黽勉し、將來のモルトケを以て目される。

山縣公は外國人であやかるべきものを擧げる時、普魯西の宰相職を勤めたスタイン男であり、內務省でスタイン傳を發行した事もある。憲法發布の際、伊藤は樞相として演說した內、ビスマルクの名を擧げず、カヴールの名を擧げた。ビスマルク氣取りと云はれるのを嫌つたところもあらう。之と同じと云へぬけれど、山縣公は何かと云へばスタイン傳を引く。當時墺國にスタインといふ教授が居り、日本の官吏が必ず教を受けたが、其外に大スタインが居るのであつて、何でも、スタイン流行りと云ふ事になつた。

◇

山縣公が內務を擔任するや、地方官に對する事、各鎭臺の將校に對するが如くし、順序を正し、自づと皆畏まるやうにする。大久保が既に下木を作つたところもあるけれど、更に首尾關聯するといふ事にした。自由民權者流に對する事、西南戰役に臨むの勢を以てし、明治二十年不平連が帝都に集り、不穩の企ありと聞えるや、三島警視總監をして保安條令の下、之を三里以外に放逐した。總監は素知らぬ顏で警察官を集め、不意に命令を傳へ、即刻條令を施行せしめたところ、眞にクーデタ

そつくりである。事によつて軍隊をも繰出すの用意があつた。時に斯くするの已むを得ぬ事情あつたか　何うか。十三歳の少年が退去を命ぜられるなど、如何に用意周到に似て粗漏であつたかを示すでないか。山縣公自ら如何に考へたか、旨く行つたとするか、餘計な事をしたとするか。後に議會で保安條令廢止の議の出でた時、政府で急に同意しなかつたのは、之を必要としての事であるが、再び彼の如き事を敢てしなかつたのは、事件が無かつたのか、不穏當としての事か、何にしても餘り賞めた事でない。

◇

山縣公はスタインにあやかり、内政を整へ、自治制を完成しようとしたが、現在の自治制に善い事あれば公の功、悪い事あれば其過ちとせねばならぬ。今日後藤男が東京市長として府知事へ伺ひ立てるところなど、自治として奇妙なものと云はずに居れまい。公自ら滿足せず、何とか改めたいと思つたらうが、適當の方法を得ず、其儘になつたのであらう。公がスタインにあやかつたのは、保守的であつて頑固でなく、自由を重んじ、特に自治を重んじ、それで破壊的の事を好まず、專制者流に嫌はれ、過激黨に嫌はれ、板挾みになりながら、能く國力を増進し、獨立を全くせしめ得たにある。薩摩一味に對して進步的、板垣大隈等の政黨に對して保守的にすべきものとしたらう。ところで薩摩の勢力が除かれた後、板垣大隈等の政黨に對するのが主になり、伊藤が政黨と妥協し、或は政黨内閣を是認しさうに見えるところで、自由主義の正反對に立つの状態となつた。

◇

山縣公は軍事に專らな間、政治に意無く、伊藤始めそれ〴〵政治に適任なのがあるとし、自ら伊藤に次いで内務卿となつても、政治上で伊藤と爭はうとしなかつた。何うしても政治は伊藤のものとし、之に任かさうとする。官制改革にしても、憲法取調べにしても、初めて首相を置き、初めて樞相を置くにしても、伊藤の爲すが儘である。ところが伊藤内閣仆れ、黒田内閣仆れては、順番が廻り來り、已むなく御受けするといふので首相の權限を減じ、連帶責任の如くしたりした。其うちに樞相にもなり、伊藤の擔任する官職は殆悉く山縣が擔任し、軍職を帶びて居る丈け、政府に重きをなさうといふやうなことがある。伊藤は文官で通して居つても、山縣元帥に屈せず、戰爭にかけて山縣と何れだらうと云ふ調子である。山縣は直接に伊藤と甚だしく爭はぬけれど、周圍の連中が爭ひ、特に軍備擴張し、二大戰役の功で軍人が頗る重きを爲し、山縣に從ふけれど、伊藤に從はうとせぬ。山縣も何時しか自らの勢力の大たるを感せす

に居れぬ。伊藤が大隈板垣に内閣を明け渡したり、隈板内閣が獵官運動で亂雜を極めたりするのを見、伊藤も當てにならず、何とかせねばならぬと考へ、伊藤が自ら自由黨を引受け、政友會を組織するに及び、いよ〳〵距離が出來た。一方が困難に陷れば、他で救はうとするけれど、平素隨分烈しく爭うを厭はぬ。伊藤は先帝の御親任最も厚かつたけれど、山縣が漸く之に劣らぬやうになり、動もすれば實際政治に於て伊藤を凌ぐの勢がある。伊藤が哈爾賓で禍に遭はなんだなら、如何になつたらうか其後山縣一人舞臺の形を呈し、大御所が渾名のみでなく、事實であるかに見え、そこで官僚が之を守本尊とするは勿論、政府黨も反對黨も馳せ參じ、誠に全盛を極めるに至つた。

◇

然し其大御所となり得たところのものは、果して眞に賞すべきであるか何うか。世界戰役で獨墺露三帝國が破滅すると共に、前に判斷の標準となつて居るものが變つた。如何に人は勢に支配せられるであらうか。內務省でスタイン傳を發刊した頃は、まだ好い。露國のポビエドノスチエフの意見書を刊行するものあるに至つては、既に健康狀態を外れて居る。それで依然山縣公を奥の院として、大黑柱とするのは、政治がさういふものと定めての事である。官僚反對の聲の漸く起つたけれど、失意者の不平に過ぎぬとせられる。肝腎の獨逸が仆れ、意外に英米が兵力で頭を擡げるに至り、山縣を頂て居る連中が何とも見當がつかず、日本が第二普魯西として咎められては、殆ど立ち瀬が無い。官僚も軍閥も好くない、既に海軍を縮小し、陸軍も縮小せねばならぬとあつては、恰かも進水式まで漕ぎつけた戰艦を解體せねばならぬが如く、山縣公の下に築かれた官僚軍閥も、取毀たねばならぬ。別段に山縣が野心あつて築いたのでなく、獨りでに築かれ、彼自ら豪くなつたのであるが、其反對に取毀たれる運命になつた。今は獨逸でもビスマルク及びモルトケの功名を何處に見出すか分らなくなつて居り、日本は之と類を異にするものの、官僚軍閥が多少之に似るところ無いとせぬ、今少しく早く此邊に氣付き、何とか改めて置けば、狼狽するに及ばぬと思はれるが其邊が人間の力の及ばぬところであらうか。

伊藤公は或る期間ビスマルクにあやかつても、後に政黨を組織し、異なる態度に出でた。山縣公は官僚軍閥の頭梁とし、モルトケの爲さぬところに出で、公爵たる事モルトケの伯爵で終つたのに優る。然しモルトケは年齡九十二、參謀總長たる事三十年、八十八歲で之を辭し、世界戰役が開けてから、大モルトケが居つたならばと思はれるところ、一個の人としての力を現はすに餘りがある。凡ゆる榮職を帶びた山縣公は、後に何の點で追懷せらるゝか、

歴史眼に映ずる山縣公

——公の唯一の功績は徴兵制度の確立——

法學博士　吉野作造

○

山縣公を維新以來の元勳として其功績をならべ立てる事や、又は官僚軍閥の大頭目として近代新機運の發展を阻止した罪過を數へ上げる事やは、既に可なり多くの人々から試みられて居る所だから、今更僕までが此のやり方に追隨するまでもなからう。僕は茲に一つ公平なる歴史家として漫りに阿らず徒らに誹らず百年も後になつて現代の歴史を講く積りになつて、山縣公の業績を冷やかに考へて見やうと思ふ。

どうせ永い一生の事だ、善いにも惡いにも色々の仕事を殘して往くのだが、此中に我々は自ら二つの區別あることを考へねばならぬ。一つは必ず其人で無ければ出來ぬ仕事で、他は誰れでもあれ位の事はやれるのだが偶々此人が其地位に置かれた爲に此人の仕事となつて居るといふ種類のもの是である。後者に其地位に置かれゝば誰れでもやれる底のもので、所謂地位がさせる仕事だ。現内閣のやつて居る仕事などは其地位にさへ置いて吳れるなら僕にだつて出來さうだ。是非とも高橋是清氏を待たねばならぬ程の事はない。が例へば先年のシーメンス事件に於ける山本内閣の糺彈の如きになるとさうはいかぬ。島田三郎氏を煩はさでは一寸あれ丈には出來ぬと思ふ。前者は卽ち斯う云ふ類の「人格其ものと密接なる關係に立つ仕事」を謂ふのである。而して人は斯かる仕事を成就することに依て始めて歴史上に不滅の足跡を殘すことが出來るのである。

かゝる立場から山縣公の功罪を考へて見る。其の罪過の方からいふと、彼の立場は取も直さず時代相當の尋常の立場であつて、特にとり立てゝいふ程の事はないやうだ。同じ頑迷でも彼のメテルニヒの樣な人格的の强みもなければ、其の思想にも之といふ特異な何ものもない。誰だつてあの地位に置かれたらまあ あの程度のものであらうと思ふ。

功績の方から云つても大體同じ事がいへるらしい。長く樞府議長として勤勞があつたといふ。併し近代の日本は彼を此地位に見なくとも些も困りはしなかつた。元帥たり議定官たること、又曾て首相たり參謀總長たりしこと亦同樣である。若し強て彼の特に力をこめた仕事を探すなら、自治制の施行といふがあるが、之とても彼なしに出來なかつた事業ではない。當時自治制施行の必要は何人も之を認めて居つた。彼がやらねば誰か必ず外にやる人が探し出されたに相違ない。偶々其地位に置かれて彼は此事のために成程格別心血を注いだことは事實だ。が併し彼れなかりせば容易に出來なかつたと云ふ程の事はない。否外の人がやつたら或はもつと手際よく出來はしなかつたかとさへ疑はるゝ。さうすると之亦彼の人格と不可離の仕事と謂ふことは出來ぬ。

斯くて遂に殘る所は徵兵制度一つとなる。是れ丈は彼の人格と離すことは出來ない。山縣公が若し百年の後も日本國民に感謝さるゝものありとせば、實は唯此一事あるのみである。併し此一事だけでも彼は實に優に吾人の感謝に値する人物と謂はねばならぬ。

○

維新の當時軍制確立の必要なるは言ふまでもなく、軍制の確立は徵兵制度の創設と伴はねばならぬことも今より考へれば明白だが、當時の政治家は十分此點に眼を開いて居なかつた。元勳の多くは他の文治に忙しく、軍事に志あるものも各藩に遠慮して思ひ切つた事が云へなかつた。加之當時士族の勢力尙強く、徵兵制を布くといへば、之を我が常職を奪ふものとして士族が騷ぎ立つること、今日軍人が軍備縮小を欣ばざるの比ではなかつた。現に徵兵制反對を標榜して所在亂を爲すものさへあつた。之にも拘らず斷乎として徵兵制を主張するといふことは、決して容易の事ではない。

啻に之ればかりではない。政府部內に於ても徵兵制度には當初餘り同情がなかつた。百姓町人に武器を持たしたつて何になるといふのが大多數の人々の考であつた。其間に勸說して自說を容れしむるは一ト通りの骨折ではない。此點に於て當年の山縣公は元老の異見を說得するに根氣強かつた故小村侯にも比すべく、或は猶一層の熱心と勇氣とを有つた人であつたかと想像さるゝ。山縣公の熱誠には西鄕隆盛と雖も常に動かされたと傳へられて居る。

徵兵制度の確立は國家の大事だ、之を說かれて動かない筈はあるまいと、今から考へれば簡單の様だが、封建から王政に復つたばかりの當時の事としては、さう手輕には往かない。徵兵制

度に出て天下の兵力を中央に統一するといふことの結果は、時として自分の藩主に弓引く事もあるといふを先づ覺悟させねばならぬ。明治三年山縣公が鹿兒島に西郷隆盛を訪うて中央親兵組織の事を談合した事があるが、其時彼は「三藩ヨリ獻兵シテ御親兵ト爲ストキハ、最早ヤ何レモ藩臣ニアラザルニ因リ、薩州ヨリ出デシ兵ト雖モ、一朝事アルノ秋ニハ薩摩守ニ向ヒテ弓ヲ彎クノ決心アルヲ要スベク、長土兩藩ヨリ出デシ兵モ、長土ノ藩主ニシテ若シ其ノ嚮背ヲ誤リタル時ハ、大義ニ仗リ藩主ニ向ヒテ銃ヲ執ルノ覺悟ナカルベカラズ。否ラザレバ御親兵ノ名アリテ其ノ實ナカラム」と言つたとやら。流石に西郷は大局を見るの識量あり、言下に「固ヨリ然リ」と答へたので、大に安心したといふ話もある。(明治憲政經濟史論三七九―三八〇頁)

其他數へ立てればまだ色々の事があるが、要するに山縣公がなかつたら、あの時代徵兵制度はあゝ早くは出來なかつたに相違ない。若し徵兵制度の樹立がもつと後れて居つたら、日本は果して如何なつたであらうか。之を考へると山縣公の功は何としても蔽ふことが出來ない。而かも之れ山縣公あつて始めて出來た事だけに、彼は此一事に於て永く日本の歷史に活き、日本國民は少くとも此一事に於て彼に大に感謝するの理由があると思ふ。

○

山縣公と帝國軍制との關係は、明治三年彼が歐洲より歸れる時から始まる。八月初め歸朝早々御召によりて西郷從道と共に參內し、彼は專ら露西亞のこと西郷は佛蘭西のことを奏上に及んだのが出仕の端緒、二三日の後三條右大臣より兵部少輔に任ずべきの恩命に接した。當時兵部卿としては有栖川宮殿下を戴けるも、大輔前原一誠は辭して首腦者を缺いて居つた。山縣をして新に軍政の振興を圖らしめんとしたのであつたらしい。彼は一旦辭した。其理由は山縣自らの語る所に依れば三つある。一は中央政府の兵力編成の實擧らざることである。薩長土三藩の兵を以て中央の兵力を編成するの規制なりしも、太政官に不平ありとて薩土の兵は國に歸りて出て來ない。西郷隆盛の如きも鹿兒島に引つ込んで仕舞ひ、柳原が往つても大久保が勸めても頑として出廬を肯ぜぬといふ有樣であつた。二は兵部省の不振である。三は兵制の區々として統一のつけ難き事である。大阪兵學寮は幕府の舊制によりて佛式を取るに、薩藩は英式、紀藩は普式、其他蘭式あり長沼流あり頗る紛雜を極め、且つ夫れ〳〵歷史あり之を單一の制に統轄するは容易のことでない。[illegible]く一山縣は到底思ふ通りの改革は出來まいと見越して固辭したのだといふ。然るに朝議之を許さず岩倉をして更に大に勸說

せしむる所があつた。遂に次の二條件につき岩倉の了解を得て就任することになつたのである。一は兵制統一を決行することで、二は西郷隆盛を軍政の首班たらしむること是である。蓋し彼には當時既に兵制についての略一定の見識があつた。而して西郷の威望を藉りて極力之を遂行せんと決心したものと思はる る。

兵部大輔就任後の彼の主たる仕事は二つある。一は新兵制の大綱を定むる事である。二は西郷の出盧を促す事である。前者に就ては十月二日陸海軍編成の方針を定め、十一月十三日徴兵規則の發布を見た。年齢滿二十以上三十以下の身體強壯なる者を、士庶の別なく、一萬石につき五人宛の割合で大坂兵部省に徴し、四ケ年の兵役に服せしむるといふ定めで、先づ試みに畿內五ケ國に實施したのだが豫期の功を收むることが出來ずしてやめた。西郷出廬の勸說については次に日を改めて說かう。

○

一旦斯うと云ひ出したら容易に動かぬ。西郷を引き出す事は新政府に取つて殆んど絶望であつた。獨り山縣には自信があつたらしい。是れ彼に兵制に關する卓越の見識あり、又之に伴ふ深い確信があつたからであらう。明治三年晩秋偶々事を以て岩倉を薩長に差遣するの議あり。乃ち西郷勸說の好機となし、十月先づ從道を先發せしめ、十二月いよ〳〵岩倉の出發となつた。此時山縣も大久保・川村等と隨行したのである。斯くて鹿兒島にて西郷と會し、具さに中央の兵力を編成し以て國家の統一を鞏むるの急務を說き、以て遂に西郷を動かすに成功したのである。玆處に我々は山縣の誠意と熱情とを認めない譯には往かぬ。

但し中央兵力編成の方針については、西郷の主張に讓り所謂三藩親兵說を取る事に決めた。山縣の當初の腹案は、各藩より將士一人を選拔して大坂兵學寮の教練に托し、之を基礎として御親兵を組織するといふに在つたが、一時西郷の說によることが實際の捷徑たるべしとて直に之に同意したといふ。一旦親兵となつた以上は、異圖ある者は藩主といへども之が討伐を辭せざるの覺悟を要すと說いたのも此時の話だ。斯くて大體の話がつき、愈々西郷も再び中央に乘り出し自ら軍制改革の重責に當らんとすることになる。

西郷の鹿兒島を出發したのは明治四年一月三日である。岩倉も同伴であつた。途長州を過りて木戸に諮り、又土佐に赴いて藩主及板垣の了解を求め、二月二日入京した。其間に多少のいきさつあるも、斯くして所謂中央の御親兵は出來たのである。薩長土の献兵約壹萬人に過ぎなかつたけれども、之にて中央政

府の威力は大に振つたのである。同年七月廢藩置縣の斷行の出來たのも畢竟その御陰であると謂はねばならぬ。

○

山縣の軍制に於ける功勞は之れ丈ではない。西鄕の威望を藉りてやつと親衞隊は出來たけれども、之れ丈けではまだ本當に國家的兵備にはなつて居ない。其上まだ各藩には夫れ〳〵藩兵が居る。國家的兵備を完成するが爲には、先づ藩兵をやめなければならぬ。於是即ち廢藩置縣の必要があるのだ。

明治二年六月所謂版籍奉還といふ事はあつたが、藩主は依然知事として民衆に臨み、收稅兵馬の實權を擁して割據の勢を改めない。故に新日本の國家的統一は、四年七月十四日の廢藩置縣の斷行に依つて始めて出來るのだが、之に就ては山縣の力與つて大なるものあるは看逃すことが出來ぬ。之等の點はこゝに詳しく說く必要もなからう。只直接軍制に關するものを云へば、その結果として八月二十日全國の城郭や大小砲銃其他一切の武器を舉げて兵部省の所管に收め、各藩の藩兵に解隊を命じ、鎭臺を增設して全國一途の制に依らしめたことが著しい。

斯くして同年十二月二十四日には、彼を筆頭とし少輔川村純義・西鄕從道の連署を以て軍備要實の建議を提出した。五年二月兵部省を分つて陸海軍の二省となし、山縣は新に陸軍大輔として徵兵令の制定に從事したのである。明治五年十一月二十八日の發布に係る徵兵令は其結果として出來たもので、我國今日の兵制は實に玆に其端を發するものである。

○

こゝに一寸徵兵令のことを手短く說いて置かう。當時の法律は概してまだ經驗した事のない新奇の事物を定むるものだけに一風變つた體裁のものであつた。中に發令の主意や心得方や甚しきは敎訓めいたことまでも書き込んである。今日のとは餘程趣を異にする。徵兵令も亦其例に洩れず、始めに緖言といふがあつて凡そ古來の兵制に壯兵賦兵の二種あり、壯兵の制には弊害あるに依り賦兵の制度に依つたといふ樣なことが述べてある。夫れから徵兵編成幷概則といふ一編ありて、常備軍・後備軍・國民軍の說明が書いてある。愈々本文に入ると前後六章に分つて徵兵官員幷職掌、徵兵使巡行幷檢查前事務、常備兵免役概則、徵兵檢查、抽籤幷筭鑑試驗及徵兵雜則幷扱方が規定されて居る。

條文は簡單だけれども、痒い所に手の屆く樣な親切を極めたものだ。從つて中には說明もあれば理由もあり、手續も示され、細目の取扱までも挿まれてある。大要は今日の制度と變る所はないが、一寸我々から意外に思はれるのは、兵役免除の特典を

有する者の中に「官省府縣ニ奉職ノ者」「一家ノ主人タル者」「嗣子幷ニ承祖ノ孫」「獨子獨孫」「徴兵在役中ノ兄弟タル者」あるの外、「徴兵ニ當リ自己ノ便宜ニ由リ代人料金二百七十圓上納願出ル者」が常備後備の兎役を得ることなどである。

○

明治政府に於て最も早く徴兵制度の必要に眼を開いた者に、山縣よりも先きに大村益次郎がある。明治二年彼は參與を以て兵部大輔を兼ね、歐西の制に倣つて全國皆兵の新制を布かんとしたが、不幸兇刄に斃れて其志を果さなかつた。山縣は或る意味に於て大村の遺志を嗣いだものといへるが、併し此兩者の間に思想上の連絡ありしや否やは明白でない。

僕の觀る所では、山縣の徴兵制に關する見識は、大村と沒交渉に養ひ得たものと思ふ。換言すれば山縣の徴兵制に鋭意せるは大村の先蹤に拘らないのではないかと考へらる。然らば山縣は何によりて當時としては卓越なる這の見識を養ひ得たかと云ふに、その直接主要の動因は歐洲諸國の視察であらう。彼は其巡遊に於て最も強く普西亞の武力膨脹に感激したらしい。現に歸朝早々の陛下の御下問に對しても普亞西の形勢を以て奉答し、又四年十二月の建議の中にも、或は『古昔伯得大帝其國ヲ興サントシ、自ラ海外ニ學ビ、歸國ノ後數百萬ノ陸軍ヲ備ヘ、強國ト抗衡シ、內國ノ事ハ之ヲ婦人ニ委ネタリシガ、遂ニ內訌ヲ撲滅シテ今日ノ盛大ヲ致セリ』と云ひ、或は『今ヤ魯國セバストポールノ盟約ヲ破リ益々南進セントス。皇國ハ宜シク常備精兵ヲ備へ、無數ノ豫備兵ヲ設ケ、戰艦ヲ造リ砲臺ヲ築キ、將士ヲ育シ器械彈藥ヲ製造貯蓄スルハ必要ノ大事、止メント欲シテ止ムベカラサルナリ』と述べて居る。而して露の如くなるには是非とも皆兵主義に由らなければならない。彼が曾て長州に於て騎兵隊を組織し、一般國民の間に募れる壯丁を以て仍ほよく勇敢なる精兵を作りたるの經驗は、また圖らずも徴兵制度に對する其の確信を强めたらしい。孰れにしても日本今日の軍制は、山縣獨特の見識に負ふ所が多いのである。彼は之と共に一種の侵略的思想をも扶植したとは云へ兎に角其の功勞は之を認めい譯には往かない。

兵農合一を非とするに輿論の一致せる當時に於て、而かも殺伐を極むる士族の反抗の裡に在て、山縣公が敢然として皆兵主義を主張せしに就ては、も一つ隱れたる而かも極めて有力なる原因を看逃すことが出來ぬ。そは彼が士族中でも足輕といふ極めて微賤の出身であつたといふことである。民主思想が平民の間から出易い樣に、身分の低かつたことが士族在來の常識に格別の執着を有たなかつた原因である。否彼は却つて士族に對し

ては一種の反感をさへ有つて居た樣だ。彼は八年十二月七日士族帶刀の禁を建議し、其中に士族を評して『此輩ハ皆頑固無識ニシテ時態ノ變遷ト兵制ノ更革トヲ曉ラズ。自カラ以爲ラク、敵ヲ防グハ猶ホ己レ其一部ニ任ジ、身ヲ護ルハ必ズ刀劍ヲ要スト。而シテ其究極スル所、劫略ノ兇器ヲ帶ブル者、國家ニ於テ絲毫ノ益ナキノミナラズ、徒ニ其武門武士ノ虚號ト殺伐ノ餘風トヲ存スルヲ見ルノミ』と云つて居る。明治五年十一月徵兵令發布に伴へる太政官告諭の中にも『後世ノ雙刀ヲ帶ビ武士ト稱シ抗顏坐食シ甚シキニ至テハ人ヲ殺シ官其罪ヲ問ハザル者』云々の文字が見へるが、皆以て士族に對する一種強烈の反感を語るものではないか。斯かる反感が主たる誘因となつて徵兵制を案出したと云ふのではないが、山縣公の一派が比較的に易々と徵兵制度に傾きしことの心理的說明としては、右の樣な事情も亦考察の中に加ふる必要ありと信ずるものである。

山縣公が徵兵制の創設者だといふを理由として、古くからのデモクラシーの信者だと云ふのは、恐らく失當の過褒であらう。貪慾な金持でも、死んで了へば、生前少許の公益寄附でもしたことを據り所として、慈善心に富みなどゝ賞めるを例とする。が、歷史の裁斷としては何處までも正直に物言ふことが肝要だ。兵農を合一して國防の義務を均一に頒つは、其形デモクラシーに似て而かも其精神は全く同一ではない。尤も前記の太政官告諭の中には『世襲坐食ノ士ハ其祿ヲ減ジ刀劍ヲ脫スルヲ許シ、四民漸ク自由ノ權ヲ得セシメントス。是レ上下ヲ平均シ人權ヲ齊一ニスル道ニシテ則チ兵農ヲ合一ニスル基ナリ』の文字あるも、是れ偶々當時流行の天賦人權の謬論にかぶれたるの結果にして、固より內心の確信に發せるものと觀ることが出來ない。何れにしても山縣公は斷じてデモクラシーの信者ではなかつた。恐らく死なるゝまで之に對する些の理解さへもなかつたらう。されぱと云つて彼の徵兵令に於て國家に致せる貢獻は決して其光を失ふものではない。只此事以上に公の功績を吹聽して其光を大ならしめんとするのは、幾多門下生の衷情としては或は恕すべけんも、公に取つては寧ろ難有迷惑とする所であらう。公の功績は徵兵制度の確立にある。其以外にはない。ありと見ゆるのは、そは必しも彼を待つて始めて出來たといふ仕事ではないのだ。

現代藝術家餘技集

歌百五十首

平福百穗

富士登山　明治三十九年

甲斐が嶺に北斗傾き天の原顧みすれば夜は明けむとす

巖根搖り岩屋岩戸も飛びぬべく荒雲どよもす風のかしこさ

國見峠　四十年

ここにして岩鷲山の東の岩手の國は傾きて見ゆ

釧路行　四十一年

天さかる釧路の國に並び立つ雌阿寒の山雄阿寒の山

谷地原の釧路の國ははろはろに葦原が上に雲垂りて居り

豐葦原なびかふ雲に藍を引く阿寒の山は見えのさやけし

馬に乘りて遠野が丘ゆ見はるかす國の葦原海につづけり
寒き雲の沈めるが上に燒山の雌阿寒岳は烟立つ見ゆ
嚴かに默(もだ)に立ちつつ神さびし雄阿寒岳は湖にのぞめり
はるはるに天さかり來てここに見る草木末枯(すが)れて寒き色充つ
赤々と干裂(ひさ)き干したる草小舍を筆にはとめつ明日山を下らむ　姫鱒を割きて干せるものを干裂きと稱す
明日の日は里に下らむ湖の上の秋寂ぶる山を飽かず眺めつ
この淺夜耳そばだてつ背戸川に水音立てて下るる鱗あり　耕路

有明月　四十二年

鰍瀬河瀬の音(と)も立たず向つ尾もうまい橫臥し有明月夜
窓の外の古杉が枝のかげに澄む月の天路に雲あらずけり
枕べの疊に落つる月の光木影もさやにめさめつつ居り
打なびき妹が寢夜着の山形のその袖のべに月赤く落つ
有明の月のかたむきゆらゆらに大き力に移りゆくかも
眠りたる土にしきりに風をおろす山かげくろく夜明けむとすらし

孕猫　大正四年

さ庭べの土のくぼみの溜り水朝けの雨にあふれつつ見ゆ
くれなゐの色は愛(かな)しも玉ぬぬれ葉のかげにふふみけるかも

枇杷の木に雨ふりそそぎこの朝け濡れ葉の光春未だ淺し

身ごもれる猫ひとつ來て春寒きまひるの雨に濡れて居るなり

雨はれし庭石の上にはらみ猫ひとたび吾をかへり見にけり

はらみ猫ひそかに來りわが庭の垣の邊りを歩めるが見ゆ

生垣をくぐりていゆく孕みねこ土に腹すりくぐりけるかも

二本の芭蕉の株はみふゆ月春立つ雨にぬれつつ立てり

乞食

さくらだの洋館につづく草原に草は秀でて乞食居にけり

さくらだの家なき原に乞食らの焚きてゐる火を見て通るかも

くろぐろと溝に泡立つ芝口の石垣の上に乞食居にけり

一人の乞食つくづく靜かなり石垣の上に鏡もてあそぶ

芝口の土管置場の日のひかり乞食集ひてものいひて居たり

酒庫

夜ふかみ酒ぐらに入ると友と二人藁の草履を穿きて入りたり

灯とり酒庫に入りぬくらの中の堅土をふみ足音はせず

桶のもろみ泡立てる音幽かなりこの夜のうちに熟らんとすらし

庫内に寒の空氣の澄み徹れり灯かかげて酒を見んとす

とうしみの灯の焔まろく立ち並び浮き見ゆもろみの大桶
桶べりに醪櫂とりもろみかく蔵人に灯ほのかなるかも
大桶に泡立ち満ふる寒のもろみいつくしみつつ酌みにけるかも
麹室の扉に灯かかげてすがすがし白き布衿の張られたる見ゆ
酒ぐらを外にいづれば闇ながら川瀬瀬鳴り鳴く川千鳥
ゐろりべに灯を立ててにひしぼり我が呑み居れば鶏鳴く聞ゆ

金剛山　　大正六年

金剛の一萬二千峯まさやかに青葉の上に眺めつるかも
さがさがし向つ長嶺のいただきの草おしなびき疾風吹く見ゆ
向つ峯の山襞ふかくかかる瀧こもりて白く落ちたぎつ瀧
削り断つ向つ巌峯ゆ落つる瀧谿ふかくしてたき壺は見えず
夕闇は渓にひろごり迫れども明るくし見ゆ山のいただき

京城

おのづから直裸山の岩面より滲みいづる水は照りつつ見ゆれ
街上を電車は走る然れども岩山をつたふ水は照り見ゆ

蕗の薹

雪の下の蕗のたうを[illegible]るあら[illegible]の匂[illegible]高しも[illegible]の雪の[illegible]に

ふきのたうを鉢にうつして吾が室の明るみに置き見れば樂しも
さみどりの鉢のふきのたう南の日向に置きて見つつたぬしも
さ庭べの鉢の蕗のたう今朝みれば白雪積めり傾けるままに
鉢うゑのふきのたうにつむ淡雪は消えゆくものか眞日に照りつつ
蕗の薹を日向にむけてぬぬくしたまたま動く蠅一つ居り
蕗のたうをこごた描きたりさみどりにさす紅色のしみてをかしも
ふきのたうを縁の日向に目守り居つ今年はよき繪かかむと思ふ

鷽　鳥

春來れば吾がふるさとの木の梢に來啼く鷽鳥をわれ飼ひにけり
山桂の芽赤く吹きいづる上枝にはうそ鳥來啼く春は來にけり
鷽鳥の頰赤しわれ繪に描かば高き上枝に眞向きにかかむ
籠鳥の餌を啄む音すなり春立つ今日を人の訪はなく
とまり木に動き移りつ籠鳥の終日止まず春立ちにけり
水壺に一羽の小鳥下り來りかがまりのむゝその關水を

松　嶋　行

見はるかす藻草水草眞日に照り潮汐とほく退きつつあらむ
ふなべりに寄りゆる汐に眞手浸せば愛なし藻草の花もかかれり

打ちなびく藻ぐさ入海漕ぎたみてたまたまさ魚飛ぶ音幽けし

海原にさ霧這ひ寄せ遠き島も近きしま根も浮びたり見ゆ

帆足疾みつぶさには見む群鴎はみな吾が前に展きめぐるも

小さき舟に心安けし陸の上の青山ふかく啼く時鳥

春水

高嶺の駒場目黒をつらぬけるいささ小川の水ゆたに充つ

春さればいささ小川のうす濁り早瀬をなして今日もかも流る

目のもとの川水低く涸れぬれば崖の水跡いちじろく見ゆ

水涸れし用水べりの土の膚滑らかにして幾日經にたる

山の宿　大正七年

たびやどり目覺めて未だ起きなくにあかとき蜩鳴きつぎ遠ぞく

あかときの枕に近く蜩の鳴きとよみつつうつつともなし

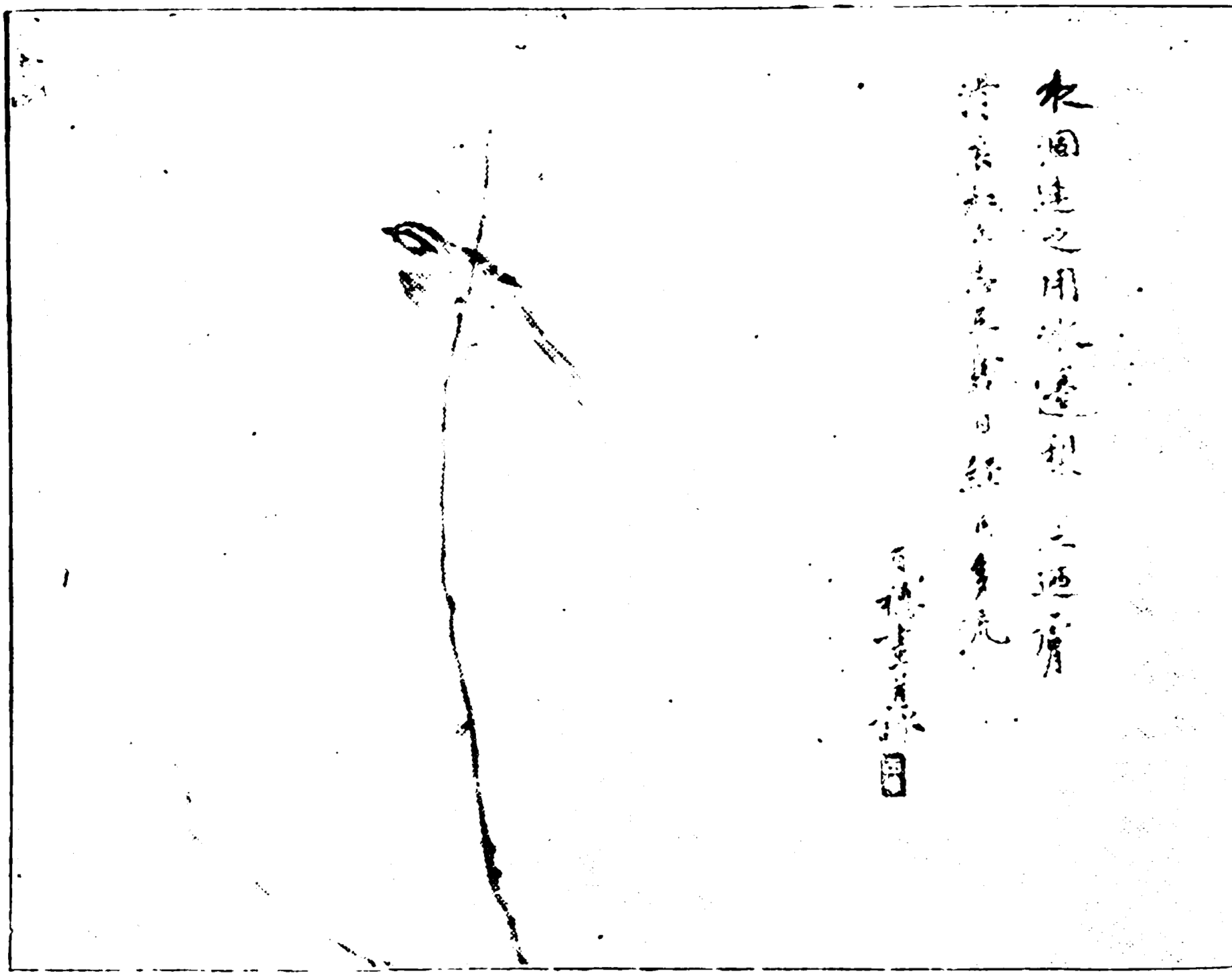
室の内はまだを暗きに鳴きとよむ蜩の聲を聞きて我が居り

蜩はみなひとときに鳴きとよみ天霧ふ夜は未だ明け切らず

朝明の霧こむる中より蜩はつれ鳴きとよむ端山裏山に

一とところ山の蜩鳴くなべにつぎ鳴き遠ぞくこの朝曉を

山の峡の蜩鳴けどあかときのさ霧はふかし尾上見えなくに



蜩のこゑにはかに止みて山がひの夜明けむとする霧の
ただすまひ

ひぐらしの鳴きて夜あくれば草鞋穿きはや商人は旅立
ちにけり

はるはると山の峡來て岩蔭のしめれる宿に夕着きたり

夕未だ合歡咲く宿にあゆみ着きふるき草鞋をぬぎ棄て
にけり

はろはろと家を思はすかにかくに水を含みて草鞋を濕
めす

かがまりて草鞋を結ぶ朝立の草戸はぬれて霧雫すも

萱の宿の瓜の花黄に咲きたるをかへり見につつ朝立つ
吾は

おもての坂

朝霧ふ庭の木の間ゆ灯影洩りほのかに窓のあかき家見
ゆ

向う家の窓の障子のあかりかげさ霧にあかく浮びたり
見ゆ

向う家の窘のままなるあかりかげさぎりにあかし人起きなくに
朝市の荷車ならむ響き重く表の坂を押しのぼる聞ゆ
宵蚊帳にさ霧流るるも暢びのびし今日の爲事をいまだ思はず
近き家の飼鶏かも霧ふかきこの朝あけを高鳴く聞ゆ

冬日閑居

日ひと日かげりてさむきわが庭の池の金魚をうつしつるかも
庭の池の水は冷き光ゆれり金魚を掬ひうつさむとす吾は
泉水に飼魚はゐず冬さりてつばらかに見ゆ水漬く落葉は
島中の日向に瓶を傾け据え金魚籠らせむと水を入れつも
霜むしろ除くれば瓶にこもらへる金魚あかるく日のさしにけり
おのつから涸れのこる池の溜り水いたくも澄みて冬さりにけり
さ庭べの冬木の籬に小禽來て羽音かそけくうつり去にけり
日あしうとき冬木の庭にくれなゐの山茶花咲きて散りにけるかも

病室にて 大正八年

たまきはる命ひと夜と思はねど妻子離りて寝につく我は
病室に明日の手術をおもひつつ電燈を敵ひ寝につきにけり
わがいのち全けむものと思ひつつも麻薬のしびれに落ちゆく今は

麻酔より醒めたるならむ白壁のほのぼのとして人の顔見ゆ
眼ひらき物言はむ心もてるとき近づき寄り來友と妻の顔
吸呑瓶の氷の番茶少くなけばうち眺めつつ呑みにけるかも
手術していく日か經ぬれやうやくにいま身動きし得たる樂しさ
麻酔よりさめし枕べに人は居り懐中時計見しならむ鎖さやる音
仰臥にすべなきものか瘡口をしぬびこらへて氷を含む
赤き帽子眉深にかぶり入り來る吾子は常より大きくし見ゆ
手を伸べて吾子の帽子を脱がせたりやはらかにのびし毛並はそろひ
眼やけく我は思ほゆ吾子二人ベットにかけし手袋赤し
つぶらなる眼をみはりくち重に大き吾子の言とひにけり
枕べの鉢うゑの梅の日かず經れや枝見えぬまでひらき滿ちにけり
しら梅はさかり過ぐべく蕋ながし枕べに咲きていく日經にけり
寢ねながら咲き匂ふ鉢の梅見れば花はおしなべてま向きに咲くも
まくらべにこぼれ散りたる梅の花蕚くれなゐに手にとりて見し

相模　藤

船のにほひいたくこもりて夜ふかに外のもは雨のふりしぶく音
船室を一人いつれば雨しぶく夜ふけに黑き陸つづき見ゆ

荒海の鳴潮を早み船のゆるぎ母を励まし言葉少なし
濤のむた船は大きく傾くに灯火見つめて居ずまひなほす
ぬば玉の闇夜の潮のうへにしてエンヂンの音し船ゆきなづむ
わたつみの雨の夜あけぬ雲よどむ磯根にちかく温泉の街見えつ
朝あけの海の氣すがしきぞの夜のしけにぬれたるこの船をしたしむ

雪の夜　大正九年

このごろになり家族は多しさ夜床に耳そばだてて磁鐘を聽き居り
降りさかる雪空こがしたちなびく火炎大いなり遠くあらざらむ
いちじるく曇り夜あかき火事見ると外にいづれば稀にふかき雪なり
眞夜中の火事の火ちかし雪ふかき門にしだるる樹をくぐりいづ
門に見れば丘下の火事稍や遠し下駄の齒につく雪はたき落す
ふりしきる雪夜あきらけし燃えあがる丘下の炎は兵舎にかあらむ
暗き空にかぎろひなびく火かげ弱しほのほくづれてはや下火なり
近き家の二階家ならむものいひてきしる戸さしぬ夜のくだちに

柩車

坂下の低き家並み乏しくも軒燈ともりて柩車ゆく
雨霽いま衛門の前を過ぐるなり喇叭の音おこる夕闇のなかに
雨霽の兵士のお[illegible]にる柩車とどろと砲車[illegible]横ぎる

闇ながら砲車の上に横はる柩にしるし立ち止まり見つ
立ちとまり夕闇の葬り見送りつ寒き巷に知らぬ人をいたむ
うら悲ししるしの旗は街燈にさだかに讀めねゆき過ぎにけり
夕やみの兵士のはふり過しやり足駄重たく坂路をのぼる

餘寒

がけしたの水車小屋の片屋根に凝りのこる雪は少なくなりぬ
水の音こもる野川の枯やぶの梢くれなゐに春立つらしも
ぬかるみちいまだ凍てねど下駄にかたし今宵は寒さきびしくあらむ
からび風まだ吹きやまずもの音に恐づる子を抱き早寢せりけり

おどろき

女やす子自動車にはねとばされたるも幸ひ擦過傷に止りて大事なし。

疑ひもちて仰ぎかへれば愛なし子よ床につきゐてものをいひたり
氷嚢あてて寢いる子のいきしつかなれや檢溫器を脇にはさみたりけり
あつくるしこの幾宵を縁さきのかごの山鳩のしばたたく羽音
たまきはるいのちにせまりし昨日のことを聞くにしぬべや縦さめしよきに
たまゆらのあやふきいのちのがれえし子の幸おもひひたにありがたし
いとし子の足の繃帶まきかへしかくも育ちし吾が子なるかも
ただにうれしき心湧きみちてこの日ごろ家にこもりて過したりけり

我鬼抄

芥川龍之介

ひと籠の暑さ照りけり巴旦杏
炎天に上りて消えぬ箕の埃

洛陽

麥埃かぶる童子の眠りかな
五月雨や玉菜買ひ去る人暗し
白南風の夕浪高うなりにけり
夏葱にかそけき土の乾きかな
炎天やまむし生きゐる壜の中
竹林や夜寒の路の右ひだり
秋の日や竹の實垂るる垣の外
秋の日や榎の梢の片なびき
野茨にからまる萩の盛りかな
桐の葉は枝の向き々々枯れにけり

句三十句

元日や手を洗ひをる夕心
お降りや竹ふかぶかと町の空
荒々し霞の中の山の襞
殘雪や小笹にまじる龍の髯
白桃の莟うるめる立ち枝かな

一游亭來る

草の家の柱半ばに春日かな
春の夜や小暗き風呂に沈みゐる
草萠ゆる土手の枯草日かげかな
薄曇る水動かずよ芹の中



病中

赤ときや蟬鳴きやむ屋根のうら

寢てゐれば夜長の疊匂ふかな

木枯や東京の日のありどころ

癆咳の頬うつくしや冬帽子

伯母の云ふ

薄綿はのばし兼ねたる霜夜かな

蠟梅や枝まばらなる時雨ぞら

霜解けに葉を垂らしたる八つ手かな

風落つる枯藪高し冬日影

風澄むや小松片照る山のかげ

歌十六首

山住み

枝蛙木ぬれひそかに鳴く聲のきよらなるかも夕月はさし

吉井勇に戯る

末の世のくどきの歌の歌ひじり吉井勇に酒たてまつる

赤寺の南京寺の痩せ女餓鬼まぎはまぐとも酒なたちそね

丸善の二階

しぐれふる町を幽(かそ)けみここにして海彼(かいひ)の本をめでにけるかも

小澤碧童に

窓のへにいささむら竹軒のへに糸瓜ある宿は忠兵衛が宿

きみが家の軒の糸瓜はけふの雨に腑腐れしやあるひはいまだ

即景

平水坏の水にいささか濁り立ち南天の花は咲きすぎにけり

上海

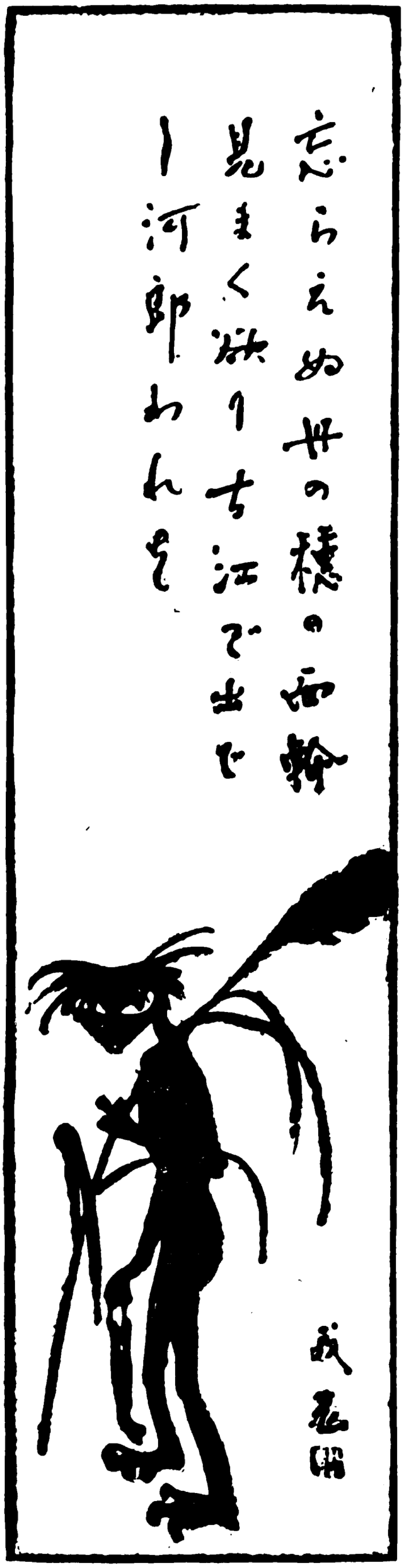
うす曇るちまたを見つつ時疫の玉子食ひをれば風吹きにけり

戯れに河郎の圖を作りて

橋の上ゆ胡瓜なぐれば水ひびきすなはち見ゆる禿(かぶろ)のあたま
荔枝なすうるはし妻を戀ふゆゑにあたまの皿の水干るらむか

湯河原

おぼろかに栗の垂り花見えそむるこのあかつきは靜かなるかも



閑庭

秋ふくる晝ほのぼのと朝顔は花ひらきたりくれ竹のうらに
朝顔のひとつはさける竹のうらともしきものは命なるかな

「となりのいもじ」秀眞先生に

冬心の竹の書見に來、ひさかたの雪茶を煮つつわが待つらくに

椎の木

さ庭べに冬立ち來らし椎の木の葉うらの乾きしるくなりけり

霜坐るさ庭を見れば椎の木の葉かげの土も荒れてゐにけり

歌二十八首

安田靫彦

雪

吾子を抱き玻璃戸にたてば久方のあまぎる雪はいま盛りなり

一心にふる雪をみる吾子が息の玻璃戸のくもり小さくありけり

こゑあげて吾子が仰げば繚亂と天の白雪ふりきたるなり

久方のあまぎる雪はこまやかにわが裏山に音もなくなる

池の面にちらふ白雪うしろでにならべる鴨の足の麗しさ

庭の隅のいさゝむら竹み雪ふり夕べに見れば重げなるかも

閑として雪ふりゐたり夕ぐれの宵める雪のつもりゆく見ゆ

星

宵あがり長雨のあとの遠天に星ひとつづゝあらはれきたる

雨もよふ霧かもほのにながれつゝ消えあらはるる天つ星かげ

幽かなる天つ星かも霧ながらとほき光はまなこにきたれり

しづかなる霧の夜空にあらはれし星影をみつみつつさぶしも

天のはらをちこちかたに雲ゐれば月はゆくゆく照しけるかも　（十五夜の夜に）

國上山に五合庵趾を訪ねて

この庵の杉の下蔭一本のつりがね草はたをりかねつも
竹むらにそよ風わたり竹の與陽の洩りくれば庵の道見ゆ
くかみ山み寺の流ちひさなる唐橋ふめば高鳴る木立
しめやかに人らのぼれば山寺のから松の葉ははらはらちりぬ
もの言はずこの一むれはくだりゆく國上の山の松の葉をふみ

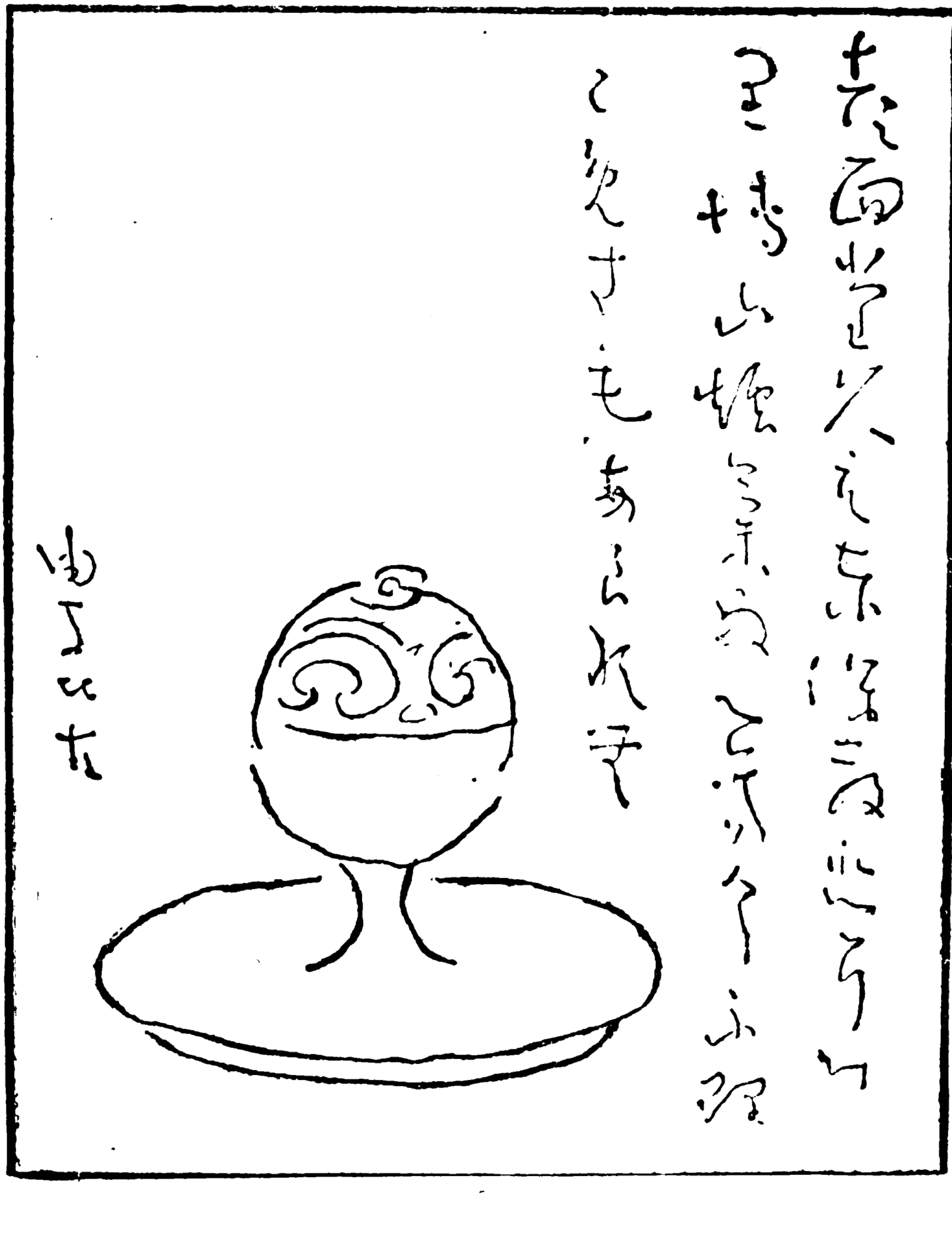
富士が秀

くれわたる天と地とにひまはありて銀流る不二の高嶺は
不二が秀に風はたつらし白雲をい吹きに吹きて逆立てりみゆ
西の光沈まむとする底ひよりさし射るひかり不二が秀を射る
ひたふるに射る夕光おとろへて神寂びにたり不二が姿は
夕裾野地ゆ秀にひく一線はとほしはろけし神の山影
夕光不二より放つ白光に天地の間にしづかなるかも

螢のうた

われも螢をこのあたりこのごろ佐藤博士の螢の話をよみよろこびて

流人の墟のふる螢光あさゝすうつろなまゝに[illegible]遊びつゝ

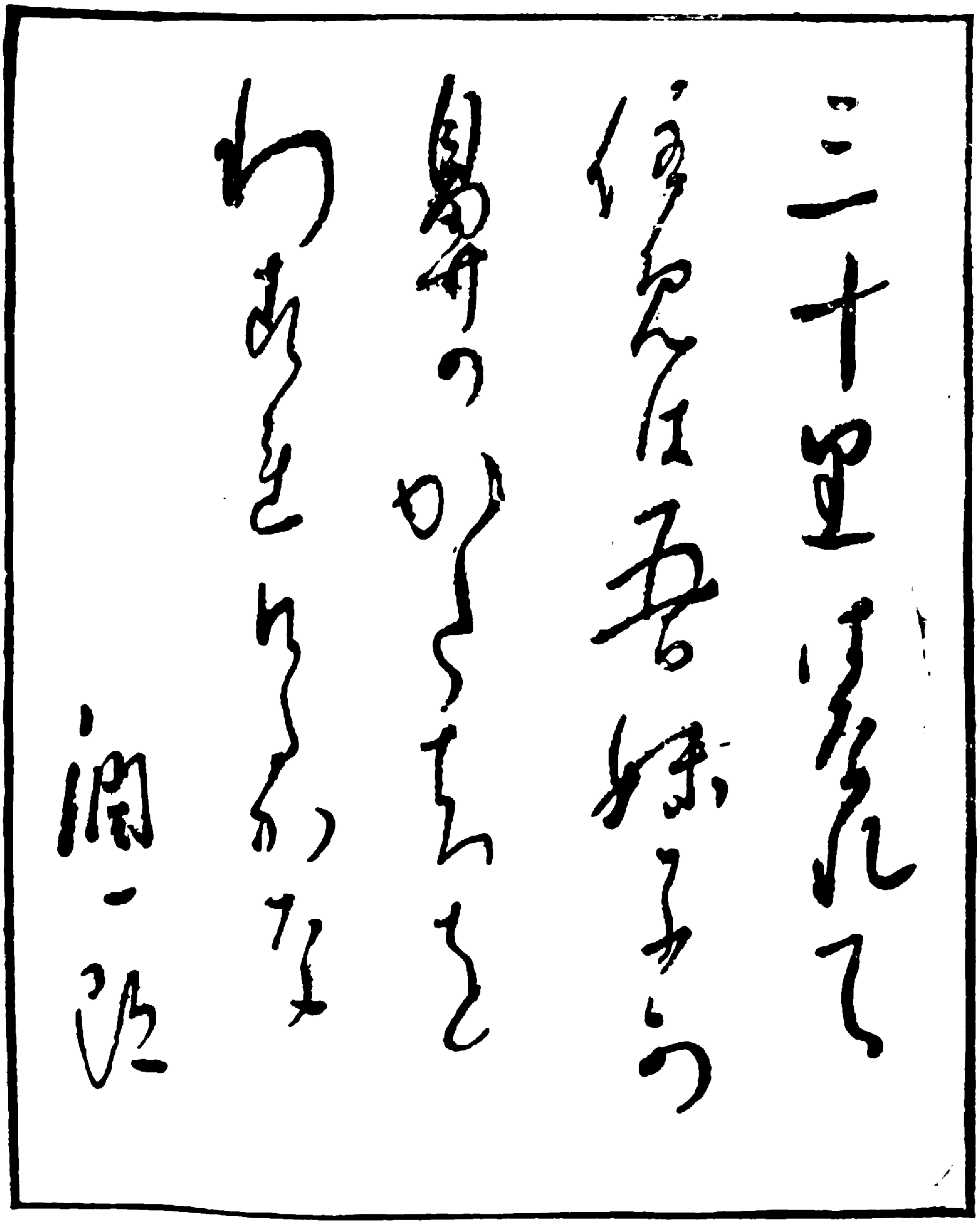


遠つ世ははろけしかもよ埴古
りしうつろの壺のいまこゝに
あり

うつろ壺はうつろぞよろし遠
つ世の神みる人の魂凝ればこ
そ

古埴の壺よりはなつほのあか
り面のふくらみのとことはの
いろ

古埴の持たるふくらみよろし
みてかい撫でつ居らむ埴のふ
る壺



歌四首

谷崎潤一郎

箱根路をゆふこえくれば吾妹子が黒髪洗ふ湯のけふりみゆ

みちのくの三箱の御湯にゆあみしてかゞやく肌を妹にほこらむ

三十里はなれて住めば吾妹子が姊のかたちを忘れけるかな

[illegible]葬に悲しされども縮緬の晴着の[illegible][illegible]肌によきかな

冬と春と

久保田万太郎

□

さる方よりの状

文言のみじかきほどの寒さかな

菊次郎を思ふこといよいよ切なり（二句）

絹すべるうちかけなれば寒さかな
かたはづしうつれる顔の寒さかな

鮫洲川崎屋にて（二句）

川崎屋海のさむさを閉しけり
まのあたり滿ちくる汐の寒さかな

短日や見附（みつけ）をゆけば水のいろ

冬の夜や星ふるばかり瓦屋

根岸

日暮里へ師走のみちのつゞきけり

もり鹽にさす日のありぬ年の暮

水戸さまの裏の小梅や年の暮

喜多村緑郎に與ふ

力杖にしてもおつたにしても時雨かな

「瀧の白絲」の欣彌を
みたるが名殘なり

襟卷や亡秋月の人となり

人にこたふ

炭つぎながら趣向をつけるなり

百花園にて

せめてもの日かげたのみや池に鴛鴦

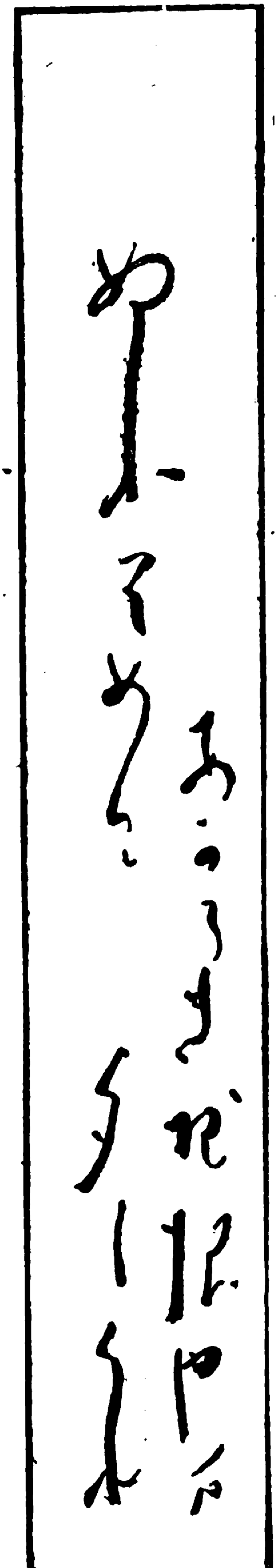
水鳥や夕日きえゆく風の中

わが好きは「歌行燈」なり

志摩鳥羽の廓にそだち千鳥かな

山茶花にあかつき闇のありにけり

假越(かごし)のまゝ住みつきぬ石蕗の花



□

根岸

年立つや音無川は闇の中

七草や夕(ゆふ)かたまけて雪となり

双六をひろげて淋し賽一つ

闇の梅ばけものがうたはやりけり

またしても今朝(けさ)雪ぞや初不動

正月の末のさむさや初不動

初不動梅咲くとしもなかりけり

□

吉井勇におくる

春淺き九華仙館詩草かな

大阪

巡遊船春めく水に消げりけり

屋根〳〵を餘寒の雨の濡らしけり

[illegible]のあるうちにて

この庭に汐さすときの[illegible]かな

俚俗食傷新道

おぼろ夜の紅提灯をともしけり

守田勘彌

川だちの川に立てたるおぼろかな

春の靄ほのかに空の淺黄かな

春の靄帝釋みちにありにけり

春の靄初天神を聽きにけり

買ひありく世帶道具や花ぐもり

腰ぬけになりし小せんや花ぐもり

たちぎれになりし線香や花曇

仲見世金田にて

ふきあげの音ある庭や花曇

釣枝の花のけしきや二の替

「春は櫻の賑ひよりかけてなき玉菊の燈籠のころ……朝夕の秋風身にしみ渡りて上清が店の蚊遣香懷爐灰に座をゆづり、石橋の田村やが粉挽く臼の音さびしく、角海老の時計の響きもそゞろ哀れを傳へるやうになれば、四季絶間なき日暮里の火の光りもあれが人を燒く烟かとうら悲しく……このほどのこと書かんもくだ〳〵しや、大音寺前にてめづらしきこと、盲目按摩の二十ばかりなる娘、かなはぬ戀に不自由なる身をうらみて水の谷の池に入水したるを……」

（たけくらべ）

水の谷の池うめられつ空に凧

和歌七十六首

小杉未醒

○舊稿抄出二十八首

山の雪小川の氷兒等が手のしもやけすべき頃にもあるかな　（ロヤの冬に）

越前のつるが港に船つきて先づ呑む酒を思ひ唾走(つばし)る　（同）

マドリドの小間物店に賣られ來て只一人居る日本人形よ　（スペエンの旅にて）

いさゝかの病なれども初夏の日の照るまゝに國思する　（同）

八月や風吹けば雲海に入る海見て居ればわれはさびしも　（同）

皮ながら林檎を喰へばいと澁しぴよぴよ小禽(ことり)聞けばさびしら　（同）

いと遠く干潟(ひがた)を人の歩む見ゆ見て居る窓に秋の風吹く　（同）

草山に人一人居て草刈ると見つゝ過ぎしがさびしくなりぬ

那珂川の鰻賣人村を出て又村に入る油蟬鳴く

瓦焼く烟眞直ぐに立上る秋暖き東山かな

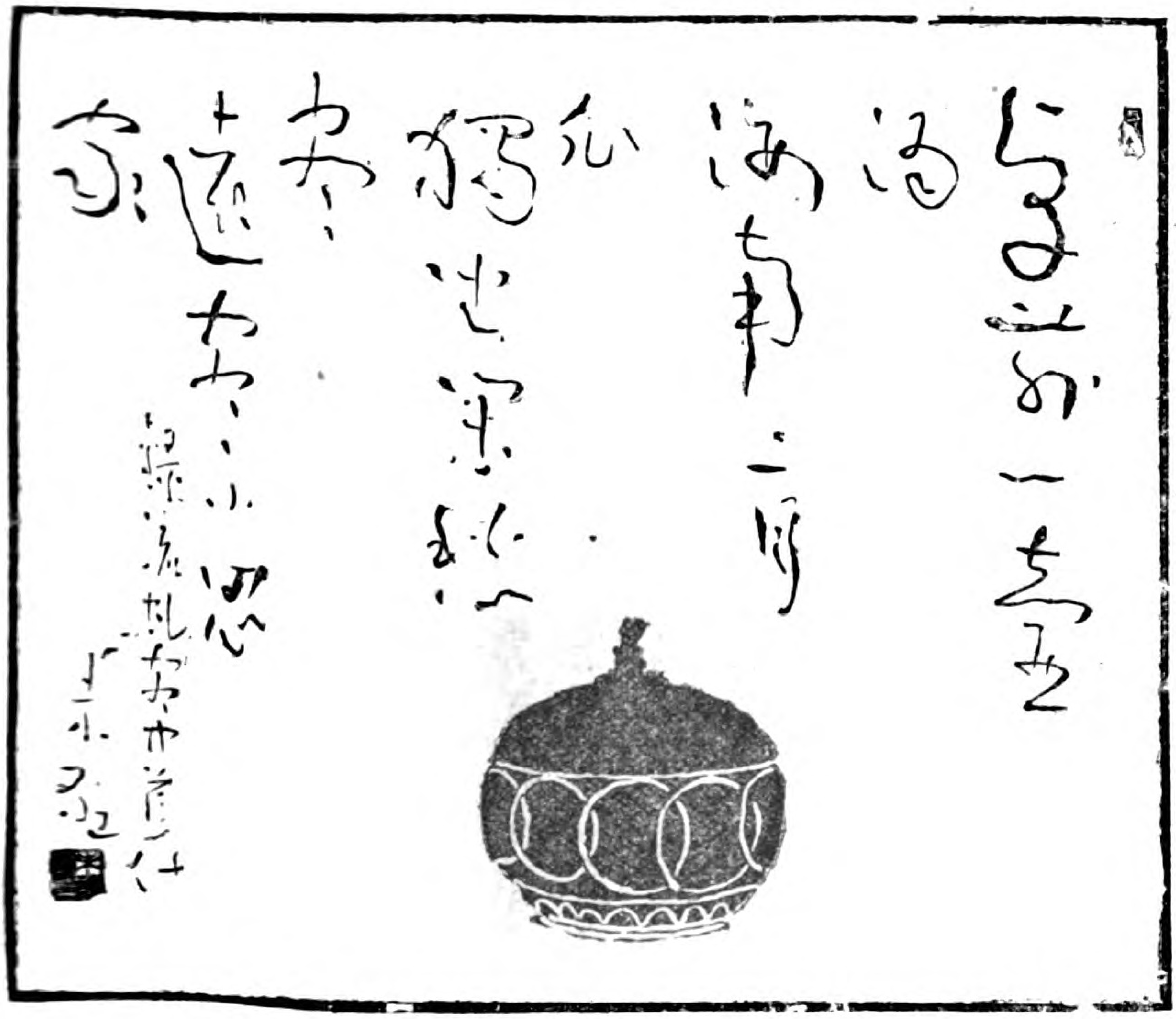
ことことと水車の小屋のことと　ととと喚き居りて秋の谷暮る

夏山[illegible]人て思へば[illegible]たりき　[illegible]ろ心に泣き[illegible]出る

古船に釘を打ち居る沙原や越の海には秋來る早し
網糸に澁塗る海士のむかひ居てもの云はで居てさびし磯の香
土用あけ二日風なきひたち路の馬車の立場の冷し瓜かな
雨七日堤潰ゆるとあはたゞし鐘鳴りわたる刀根のたそかれ
芋の葉は如何なる愚ものなれば獨り點頭きかぶり振りて居るや
上毛や屋根に石置く山里の唐黍の穂に日はうすれ行く
行々子まだきにきこゆ水近き宿の二階の木綿蚊帳かな
下毛の茂木へ越すと云ふ山路わが越し行けば日ぐらしの鳴く
母の國へ母と行きたる五つなる兒を思ひやる物の紛れに
南風吹く日の若葉見て居つゝふと覺えたる旅心かな
丘の上の一本松よふればうし登ればかなし照ればさびしも
錦手の盃洗の中の女官達おかしと見つゝ獨り酒のむ
一つ船沖へ消え行くはる／＼にものうき日なり暑き日なるかな
常陸路や蟬の聲々あはたゞし明日越す山に夕燒けすなり
桐の木や蟬はしば鳴く十ばかり家ある村を我はすぎ行く

○水郷十二首

人と魚と泥りて棲める下ふさのかすみが浦のなつかしきかな



蘆の葉に俄雨すれさわさわとさはらの宿に晝
の酒飲む
天の原妻おき兒おきあづまなる霞が浦に神も
來にけん
水多き里をわがごとよろこびて香取の神も此
處に居にけん
いくさ神此處に鎭まる津の宮の鳥居をめぐる
秋の水かな
おぼつかな香取の神や渡るかと夜半立つ波を
枕に聞くも
大利根の鯉を喰はすと網提げて翁は行きつた
そがれにけり
ねむの花に雨ふる宿の朝あけは先づ瓜揉みに
酒を召さしめ
眞菰草潮來出嶋の色街の晝靜にも通り雨すれ
けしからず持て來る遲しなまづ鍋晝の數のさ
すこも覲立ちや

板の橋十二ありてふありやと一數へて見しか加藤洲の舟

湖や常陸の丘も下總の村の烟もたそがれにけり

○北越雪賦

大御空眞白になりて雪ふりく限りも知らずひたもの降りく

旅衣着つゝ越路の雪をふかみ家なる兒等を思ふ朝かな

靱彦がかきし牡丹の大いなる紅を見る雪の夜かな　(寄大[illegible]安田君)

わが爲に一たびは笑め雪の下に紅梅咲かば君が唇　(題雪中美人圖)

○熊野路の旅の歌

朝さむみよべのとまりの芳野山杉の梢にふりかへり見る

あわたゞしよべのあかりをかき立てゝ朝の飯喰ふ十津川の宿

秋の山の狹霧迫り來くありとある草木にそゝぐ雨の音かな

湯の宿の燗りぬさめの行燈の細きあかりは忘れずてあり

熊野川落鮎とると日ねもすを水にひたりて居る斧かなし

渡し守居ずやと呼べは赤松の夕日の下に出で來ぬ翁

朝の雲谷を離るゝ谷の底に木を打つ音のこだまするかも

杉の木を刳りて作れる山里の筧に掬ぶ秋の水かな

熊野浦童女を連れて今もかも唐土人や來べき秋晴れ

○秋色山水長卷に題する五首

草山をひとりし行けばいと細き瀧ありて落つなれもさびしき

峠茶屋軒の煙の立ち別れいなばかたみに忘れはつべき

丘ごとに段に作れるちさき畠いくつも見ゆる秋の風吹く

いつしかに草屋の影のかたぶきてちさき湊に秋の日は落つ

行き暮らし浦わに立てばたそがれの沖遙かなる吾思ひかな

○中房浴泉賦

おぼつかなあしたの雨のけぶれるに小舟漕ぎ行く諏訪の湖

朝の雲ひくゝも垂るゝ鹽尻の峠の松よ見ればさびしき

臨川が夜毎に醉ひし松本の酒をわが飲む臨川あらず（松本の客舎に亡友を思うて）

大なる山共は彼の秋の雲の深きがなかに立ち並ぶらん

秋の雲の深きを分きて行く野路に細々となく聲の蟲かな

楢林しめぢ採る子に路問へばみちは數へでそむける　のか

吊橋の袂の茶屋に恒友がうましとえらぐ盛切りの酒

道のべの小さき祠のつぶつぶと何呟きて日を暮すらん

一　星野くれ山くれ山坂の木下闇こそすべなかりけれ

山の木魂谷のすだまよ夜の山の人急にすな戯れをすな

秋の山あまりにさびし生きながらましらと人のなるべうさびし

岩の上に高安坐して招きなばよりても來べき秋の雲かな

わびしらに谷の向ひの岩の面人の面にしつらつらに見る

うつし世の人の言葉を谷の奥のこだまにかへし聞けば恐ろし

岩の間の出湯にひたるまろはだか秋の雲見るわが心よし

峯々をいかなる物の過ぎ行くと驚かれぬる山颪かな

人の世は雲にかくれぬ雲の上なほはるかなる鎗の峯かな

峯杉重雲にまがへて越中の雪の山こそ遙かなりけれ

夕霧や白樺の木のほの白く見えかくろひて小雨ふるなり

牧唄句抄

久米三汀

春

争ひ唱ふ二兒あり家門春日滿つ

春蟬の宿は日影に楠暗し

橋に下りし鷺に日弱り田打人

刀根に近く中學の畑花菜かな

流れ椰子も祀られて椨や汐干人

簀戸辷る疾き鳥に汐干日和なる

藤吹いて溪豁らけたり鳥光る

瀨を見ても醉ふ人の旅に藤垂れて

圖書館の藤淋し傘疊む人

濱漕人が買ふ勝達摩飛ぶ燕

離宮ほとり住む伶人や落ち椿

雛も苞にして便船す南風

弟を征服しつ雛の女王なる

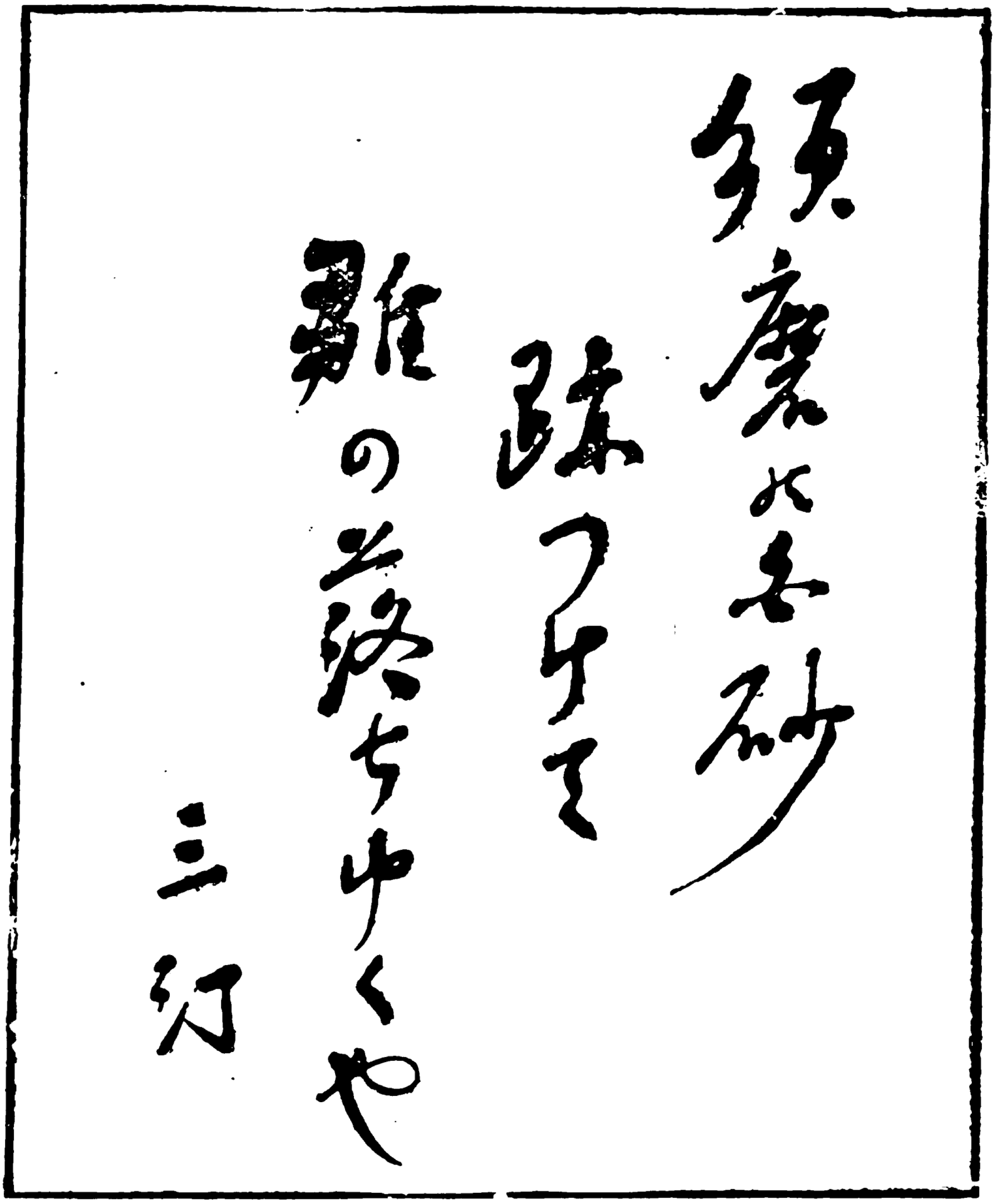
小簞笥に雛ぽちとある叔母訪へり

町は名古屋城見通しに雛賣りて

雛の日の洗濯や母を淋しうす

須磨の白砂跡つけて雛の落ちゆくや

蛙鳴けば雲赤し江尻風車家



哄笑に春盡きつ二人やがて去ぬ

寃罪を泣き足れば瞳うら〻澄む

汐踏みて貝殼賭博うら〻なる

五色饅頭青は色濃き春の風

綾取りの戻り綾變し春の雨

涅槃鐘鳴る時茶種浸に入る

涅槃參らぬ婆は蛙に鳴かれけり

殘肴に青き茶のあり歸雁啼く

乘合と賭はすまじよ歸雁啼く

鏡蔽へばまこと雨あり歸雁鳴く

娶る賑ひ獨活も二番芽堀られけり

夏

運河却つて國を亡ぼしぬ雲の峯

島廳は眞白し日傘人松に

樂屋團欒して鮓壓せり夏朧

利根へ七つ運河の茶屋の帆掛鮓

孑孑の長揖や今日の日和雨

口三味に孑孑が浮く溝となり

内郭夕立つや四門十二橋

薫風に紫蘇摘みしよりの遂なる

送る灯に君が寝明し時鳥

時鳥御山内藤玉や垂る

時鳥衣架こる風の白き夜や

時鳥艾所の一季雨

ふためかすは朧か蝙蝠か舟日覆

非人頭住む松高し蚊喰鳥

追放の徒の大音や蚊喰鳥

蝙蝠や工場の塀に壓され住む

蝙蝠や出水明りに書く手紙

港人が皆持つ眼鏡蚊喰鳥

蝙蝠や囚屋にもかゝる時計臺

南蠻の綸に垂れ下る蓮の首

泳ぎ出てゝ日本遠し不二の山

夏の月弟妹多き散歩かな

秋

朝顔に煤が降る月島に住む
鷄鳴きぬ朝顔に滋き雨となり
寄席小路に遊ぶ兒や溝の三日の月
二百十日の鬼子母神森の夕星や
屋臺餝もすゑ早やに歸る河燕
瀑に對す簀戸や初秋の日の光り
戰袍裕かなり秋雲は野を泳ぐ
閉店の昨を船出の秋雲に
水上保險せし秋雲の驅る日や
迂回兵の出沒柿の暮色かな
盜伐默許よりの巡査や柿の秋

戲曲脫稿を出て柿買ひぬ早稻田の夜
昨日今日烟筒掃除夫の雲の秋
堤走る人數あり秋晴るゝ里
觀察官來て吃る民秋晴るゝ
軍用に伐る竹かほど秋晴れて
日間に自畫像成りぬ秋晴れて
學問に挽く木の屑や秋晴るゝ
女客もある日の茶器が秋晴れて
陶場者が滅多嗅ぐ土秋晴れて
笑めばかほど童顏の君に秋晴るゝ
蘂を染む夕霧や柿も染まりそむ
隅作りゆく霧や牧の小屋々々に

霧に明けて輕うも軋る湯宿の戸
並木頭ら霧飛べり驛に鳩鳴いて
花野丘も高う濱鳥閃めかす
佛光も花野明りの七ツ山
双棲の年火難あり秋扇
橋畔居嵩に鳴かるゝや蚊帳仕舞
櫃に湧く蟲にして甲ふ蚊帳の秋
産衣裁ちしが紅に醉ふ蚊帳の秋
畫同窓を怖る勵精蚊帳の秋
蚊帳は秋にして佛具磨ぐ美妙音
非時除隊の君泊めし蚊帳が別れなる
暖來るゝ白きに插める料理菊

~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~

史蹟說くに背くは紅葉見て立つや
貝搗く音夜長の汐に響きけり

冬

魚城移るにや寒月の波さゞら
黨人の寒月や此處に悲歌の橋
魚頭會々石ありて厨裡月寒し
千鳥鳴くやかほどの華奢の箙箭鍵
千鳥來るや紅濃うす島蕪のあり
原本の寫本の更に誤字寒し
牡の牛ひた啼いて時雨滿山に
犬來てし子心に雪ひそと積む
雪の中[illegible]や[illegible]去る狐かな
~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~

斯人斯地に避寒して這般著作あり

牡蠣船に寄らずの水の關所なる

新年

漆弟子に朱使ひ許りぬ今朝の春

初東風や筒祝ぎもすみし烽火臺

行燈に初日の句品川の海

御降りや佛師に箔を貰ふ事

鹿は奈良の若水の灯に啼くもよし



和歌五十首・漢詩廿六首

田山花袋

たづね來しわかふるさとの淺茅沼(あさぢぬま)月夜になくは雁(かり)ばかりかは

山路ゆくわか檜木(ひのき)笠夕立の雨にぬれさる日はなかりけり

朝な〳〵おく霜しろき山里は大根の葉さへかれはてにけり

まつ原につゝく萱原すゝき原そゞろにこひしいにし昔の

打ちつゝく赤松林あかあかと朝日のかけのさしとほりけり

午すきの町をすきゆく獅子舞の笛わかまとの紙にひゞけり

田とすかれ畠と打たれてよしきりもすますなりたる沼そさひしき

山はみな夜になりゆく大空にふしかねのみぞ暮れのこりける

杉村のをくらき中も一もとのこの梅ゆゑに春めきにけり

春なれどまた風寒き月の瀬はさえても梅の香こそ匂へれ

梅はわがこひしき人にあらねとも別れづらくもおもほゆるかな

こえて行く人もあらぬをうくひすは日ねもす長く誰を呼ふらし

山ごしに見えこそわたれこよひわかやとる庵の是はしらの影

いかにして種はおひけんと思ふまで高きたかねに花の咲くかな

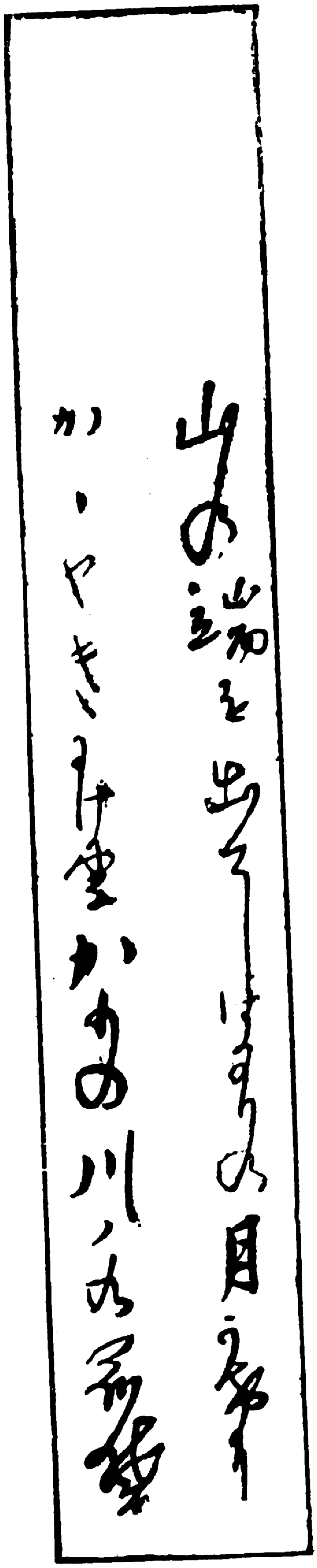
雨にぬれ山路になやむ時しもぞしみ〴〵家はこひしかりける

白雲のいく重のおくになりつらん山より山に日を重ねつゝ

雲深きくまのゝおくに入りしより雨に衣のぬれぬ日もなし

うつくしき舞子か濱は春かすみよそはふ時そ見るへかりける

よしの山むかしいゆめのあととへは花はかりこそ散りみたれけれ



花多きにしのみやこの寺めぐり一日はあめもうれしかりけり

わけて來て露にぬれたる旅衣たきのしぶきに又かゝりけり

きぬ川の流にかけし繩つるへくみてむすはん旅のすさひに

行けとゆけとおのかふみゆく木の葉よりほかに音なき此旅路かな

おく山は六月に咲く石楠化の花ばかりとも思ひしものを

はるはると二荒高原那須がねにふりつもりたる雪そさやけき

野に來れはあとも形もなかりけりゆめかとそおもふ山の上の雪
梓弓八槻のさとにわか見つるをとめの栄裾今もわすれす
あさな夕なおもかけにこそ見ゆるなれわれに添ふらし妹の心は
橋立のきれ戸をわたる苫舟に小雨そほふるわひしさや妹
山中の夕日しら壁やすらかに君かゐまさんことをのみこそ
大川の水にのそめるともし火の影さやかな　初秋にして
夜半の雪にまた春浅き山合のいて湯の烟埋れたるかな
川そひの土手のさゝ原さやさやに夜半にふりにし雪そのこれる
いそかしきもすの鳴音にさそはれてあわたゝしくも冬は來るらし
この冬の寒さしられていつよりも去ること早しもりの小鳥は
わかやとは楢の林のかけなれは家のうちまて木の葉みたるゝ
わか葉みなけふるかことく見ゆるかなむかひの山に雲のたつ日は
錆ひはてし沼のおもてに大空のひろくうつるかさひしかりけり
山の端を出てしはかりの月影にかゝやきにけりかもの河水
中々に松ふく風も波のおともきこえぬ里そさひしかりける
松島や雄島の松のひなをあらみかきろひやすし冬の日影は
松島のわかれ難くて旅枕けふのやとりのおくれたるかな

みそ萩の里川つたひ咲くみれは魂まつる日ゝ近つきにけり

路のへのをとめの椿たひ人をなくさめかほに咲き出てにけり

垣越しに見ゆるとなりの梅の花早咲なるからうれしかりけり

利根川のはしの袂の二階屋のをはしまにてる紅葉美し

きちかうの花のゆかりの色に出てゝ妹をそおもふ山にしをれは

今年生のいさゝむら竹いさゝかの音もすゝしき夏にはなりぬ

山口のいて湯のさとの春雨のしづかたる夜をわかれゆくかな

わかやとの前の林に夕日さしさひしきころをもすぞ鳴なる

山居

避世山居欲學仙、不將萬象置眸前、任他鳥語來窗戸、盡日幽窓企足眠、

江村暮雪

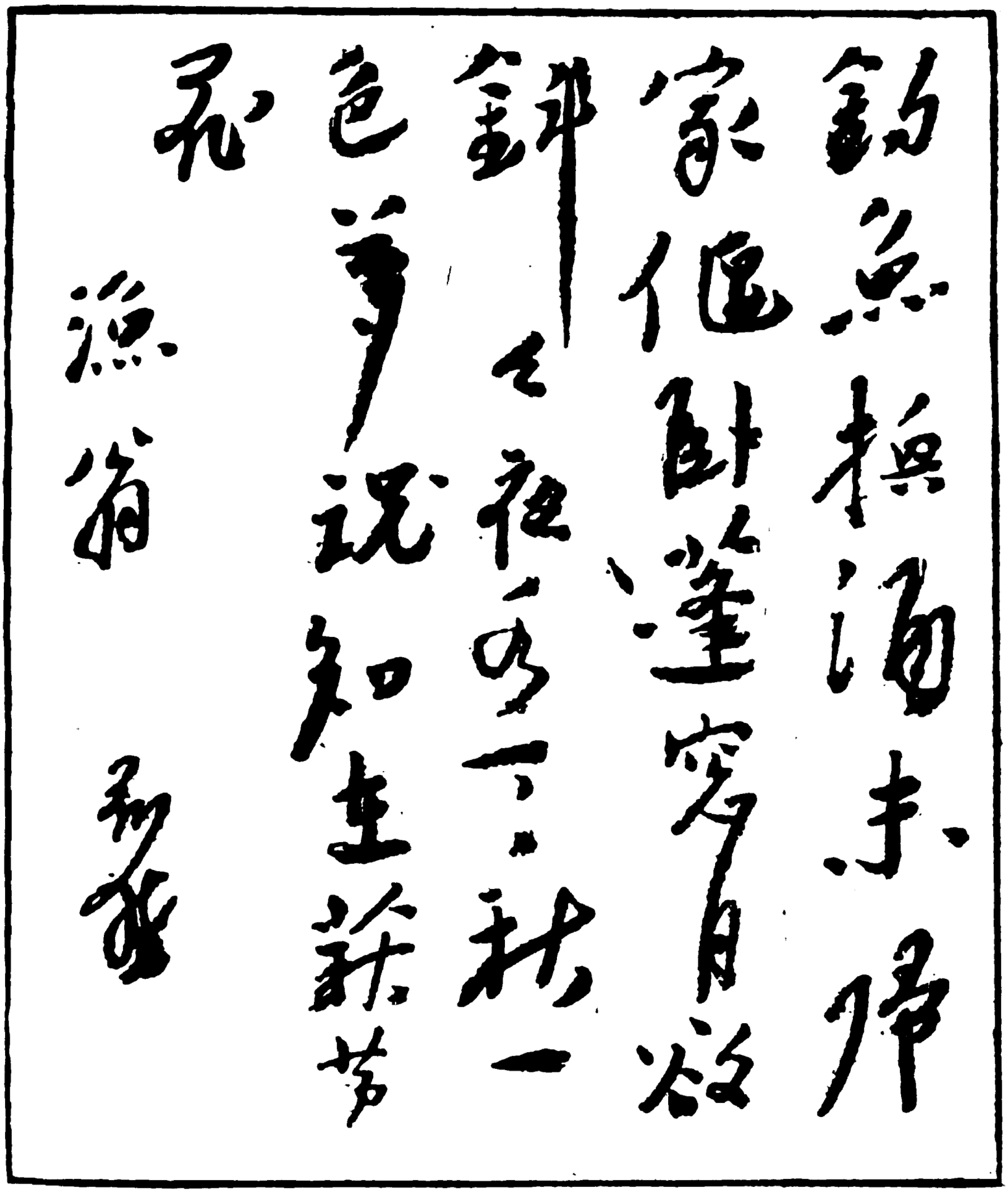
釣磯繫纜水聲收、簌々雪花來撲舟、滿眼風威銳於刄、瀟々芦荻齊低頭、

志賀懷古

志賀都荒往事灰、何人駐馬唱悲哉、櫻花不換當年色、爛熳上枝照眼開、

曉起看花

纔看𤎞影到庭櫻、一半糢糊一半明、好是曉鶯知我意、嬌喉呼夢報春晴、



一痕殘月似蛾眉、曉起川邊香霧滋、花影模糊看叵辨、黃鶯鳴在最高枝、

初夏幽莊

殘紅剩紫送春華、新綠陰々映碧紗、日永幽亭無一事。睡餘漫啜半甌茶、

綿衣換得夏衣輕、枕邊無塵夢亦清、滿地薰風涼意動、綠槐門巷賣餅聲、

訪友人

一杖陟千嶺、雲烟脚下生、高門無錯誤、認得讀書聲、

夏　曉

正是東方欲白時、起來滅燭捲書帷、一群林鳥驚飛散、弓樣月懸新樹枝、

山行

青山到處欲無家、鴉影歸林夕照斜　料得深溪春已老、隨流點々泛飛花、

春初偶作

怯寒困臥草廬中、不識番々花信風、今日東郊偶閑步、早梅已見二分紅、

夜歸

索詩郊外路、月上轉清幽、休怪歸來晚、風光引我留、

秋日過墨水

墨川如帶水漫々、芦白稻黃秋欲闌、踏遍長堤一百里、滿江風雨櫓聲寒、

詠形懷古

襟帶山河好、雄視關八州、古城跡空在、一水尙東流、

晃山雜詩懷國木田獨步

故人今已亡、往事總悠々、唯有空山月、夜深照枕頭、

又

一溪傍古刹、終夜枕邊鳴、曉近山颸起、風聲壓水聲主、

又

飛泉懸樹間、蕭寺在何處　一路柱節問、唄音雜水語、

又

過竹穿林縱又橫、土工半日筧纔成、偸房欲覺午時夢、忽聽涓々細々聲。

秩父途上

倩車出山驛、雲湧曉猶寒、籬落兩三里、揺々酒未醒、
鷄犬聲歷落、宛是武陵源、溪水生溪水、一村開一村、

信州富士見歸去來莊有作次韻

嵐翠幾峰翻、山花綴幽徑、鳥聲兼水聲、細々隔林聽、

又

一輪明月照長塘、徐步閑々興味長、醉袖不堪久佇立、滿畦蕎麥冷如霜、

漁翁

釣魚換酒未歸家、偃臥蓬窓月欲斜、今夜水天秋一色、夢魂知在荻芦花、

田園雜興

朝來偏怕雨兼風、李落桃飛歸一空、唯有薔薇花最後、斜欄放出滿籬紅、

望嶽

星岡祠下倦花容、茶店呼牀日正春、扶醉當年阿虎涙、蒼天盡處見芙蓉、

偶成

緑樹梢梢過頂天、匝々剪紋晴[illegible]帳、[illegible]族風雨護因歩、剪取窓前一二枝、

想華

西班牙遊記

柳澤健

ピレネーを越えて――バルセローナの町（闘牛と萬靈祭）――サラゴッサを過ぎて――マドリッド滯在――トレド行（グレコ巡禮）――アンダルシアの旅

ピレネーを越えて

十月廿九日

……アヴィニオンを出た汽車はドーデーの小說で有名なタラスコンや羅馬時代の古い橋があるので有名なニームやを經てセツトといふのに着いた。辨當を求めて冷たい肉や小さなフロマージユやを口にしてゐるうちに、再び汽車は動き

出す。氣が付くと空はすつかり曇つて來た。鞄のなかに入れて來たエドガー・キネの『西班牙の旅』を讀み出すと、開卷早々大雨を冒して馬車でピレネーを越えたことが書いてある。自分の旅も、若しかしたら同じことになるまいものでもないと一人旅の心細さにやゝ氣を腐らせる。空の模樣は刻々に惡くなつてくる。それに、辨當についてゐた葡萄酒の質の惡かつたせいか、何とはなしに頭がづき〳〵してくる。手にした本も捨てて、窓に頭を凭せかけたまゝ、寂しい旅の心をしみ〳〵と感じる。

ナルボンヌ。この停車場に着くと、西班牙行の客は乘換だといふことを聽かせられる。慌てて車室を出て、側に立つてゐる驛夫に、その汽車は何時にこゝを出るのかと尋ねると、もう三時間程間があるといふ。三時間！　この時間をこの寒驛でこの天氣の下でそしてこの沈鬱な氣持で如何して過さうといふのだらう。

止むを得ないので驛前の小さなキヤツフェにはいつて休まして貰ふ。眞逆に珈琲一杯ではと思つて欲しくもないのにコニヤツクなどを註文して唇に當てるでもなく當てぬでもなくうつ〳〵と時を過す。雨が烈しい風に亂されながら遣つて來た。枯れた樹の葉が硝子戸のまへを採れて飛んでゆく。頭の具合は益々いけない。あゝ何といふ寂しさだ……

暮れかゝる五時頃になつて漸とのことで汽車に乘ることが能きた。疲れてうと〳〵するうちに、間もなくペルピニアンといふのに着く。山一つ越せばもう西班牙のポール・ブーであるが、そこには泊るホテルもないと聽いたので、このペルピニアンで今夜を明すことに極める。

暗い夜、雨の音——

十月三十日

外へ出て見ると、眼のまへに河が黄濁の波を湧き立たせながら流れてゐる。昨夜の烈しい雨の跡をとゞめて、道もひどい泥であつた。汽車の出る時間にやゝ間があるので、暫くこの泥濘の町を歩く。思ひ掛けなく古い城（カスチユ）が行手に聳えてゐた。朱色をした亞剌比亞式の四角い大きな建物は、如何にも怪奇な中世紀らしい面影を示してゐた。西班牙の匂ひが、これでももう感ぜられる氣がした。

汽車に身を托すると間もなくまた雨が遣つて來た。その荒い烈しい雨は、我等から全然遠望を奪つてしまつた。巴里にゐたとき宿の主人のR氏が『西班牙へ！　光（デユ・ソレーユ）を求めに出掛ける譯ですね、いいですね』と言つて呉れた言葉をそれとなく思ひ起した。光ではなくて、かうした雨を求めに出掛けたやうなものだ。何といふドマージユ！

漸次にピレネーの山の姿が車窓に迫つてくる。同時に海が濁つた色を帶びたまゝ左手に現はれてくる。密雲は空を山を、また海をも閉ぢ罩めてゐる。光（デユ・ソレーユ）は何處にも無かつた！

セルベールを出てトンネルを越すと、愈々西班牙にはいる。その最初の停車場が、漁村のポール・ブーであつた。こゝで我々は佛蘭西の汽車と別れて、別仕立の汽車に乘り換へバルセローナに向ふ譯である。然しながら此處でもまた三時間ほど待たなければその汽車が出ないといふことであつた。

雨は風を交へて慘憺たる模樣である。小さな汚い停車場の待合室には、何れもこのピレネーの山地に住む者たちであらう、みすぼらしい姿をして各自（めいめい）に木靴を穿いた男や女やが甲高い言葉を交し合つてさわめき立つてゐる。西班牙の言葉のこととて、最早自分には解し得べくもない、自分は唯眼を見張つてこの喧騷な奇異な光景を眺めてゐる計りであつた。

然しこの薄汚い荒い人達のなかに立ち交つて、まるで『天使のやうに』淨らかさと美くしさとに充ちた一人の女性が

あつた！その人は自分と同じペルピニオンから乘つて來た尼であつて、ほかに年老いた尼の連れがあつた。純白な帛布を澄き通るやうに淸らかな面容の周圍に卷いて、更にそのうへを眞黑な帛布でつゝんでゐた。未だ十七八と見られた。淸らかな額、淑やかな頰、形のいい鼻、眞紅な脣、——眼は黑い眼鏡でかくしてあつたが、澄んだ美くしい眼がそこに感じられた。純潔な白百合にもたとへうるべき淸らかな美くしい尼であつた。自分は、周圍が汚なく騷々しくあればあるほどこの世にも淨らかな女性の美くしくさを感じないではゐられなかつた。……

漸とのことで切符口が開いた。早速馳け寄つてバルセローナまでの切符をと言ふと、何やら判らぬ言葉で出した金を突き返す。言葉は判らないが、バルセローナまでは賣れぬといふことらしい。先程讀んだ新聞にバルセローナの同盟罷業のことが出てゐたので、そのためかとも考へられる。が何せ切符係はまるで佛蘭西語が話せぬこととて如何とも施くすべがない。困却し切つてゐると、掲示が出た。判じながら讀み下すと、フワゲーラといふ邊の線路が不通になつたといふことであつた！

日は暮れかけてゐる。雨は頻りと降りつゞけてゐる、戾らうにも行かうにもそれを聽きたゞす人もゐない。自分は行き暮れた旅人の絕望を霽と味ひながら、プラツトフオームの眞中に立ち續けた。

不圖十四五位の少年が、自分の困惑した顏を眺めてゐるのに氣が付いた。二三步その方に近寄りながら、自分はゆつくりと佛蘭西語で問いかけた。

『おまへさんは佛蘭西語が話せるかい？』

『え（ウイ）、すこし許り（アン・プー・ムシユウ）！』

この返事に、自分を飛び上らせた。自分にこの時ほど言葉といふものに、別けて佛蘭西語といふものに強い感謝の念

を感じたことはなかつたと言つていい——

何時頃になつたら開通するのか、容易に開通せぬとしたら何處へ行つて泊つたらいいものか知ら、かうしたことを聽いて呉れとその少年に言い含めて札符口までやると、間もなく取つて返して、『バルセローナまで切符を賣りますよ』と言ふ。少年の指さした方を見ると、成程先刻貼り付けた掲示が取り去つてある。

特急（エクスプレス）の切符を買つて、今は心も輕々とした。その少年と覺束ない言葉で話し交してゐると、友達と見える同じ年配の少年がまた二人ほど側にやつて來て、話に交る。『僕を何處の國の者と思ふかね』と聽いて見ると、先程からの少年が、苦も無ささうに『ペルーでせう』と答へる。日本だと言つて遣ると、何日かそんな國の名を學校で教はつたことがあるといふやうな表情をして三人が肯きあつてゐるのも面白かつた——

汽車が着いた。少年はわざ〳〵荷を持つて車室まで運んで呉れる。『御機嫌よう（ボン・ボヤージユ）！』かう言つて小さな手を差出す。もう再びとこの世で逢ふこともあるまいこのピレネーの少年の手をしつかりと握つてやる。汽車は動き出した。……

車室には自分のほかに三人ほど西班牙人が乘つてゐた。優しい言葉で話し合ふ佛蘭西邊から遣つて來ると、びつくりする程話し聲も高いし、笑ひ聲も爆發するやうに激しい。それにRの音をいやに卷舌で響かせるので、耳がかなりに疲れる。

ポール・ブーを出ると、薄綠のなか亂雨のなかを陰慘な色合に湧き立つてゐる海洋の景色が、言ひ樣なく凄慘な感じを與へる。然しそれも何時しか山影に隔てられて視界から消え失せる。そして時々薄紫いろをした稻妻の閃光が山と雲とを照し出すのが見られた。

ヘエローナといふ聲に氣が付いて窓の外へ顏を出して見ると、土が白く乾いてゐる。おやと思つて空を見上げると、

眞黒な空に星がきら〳〵燦いてゐた。何時の間に晴れたのか、それとも雨はピレネー地方だけだつたのか、何れにもせよ、星のある西班牙の夜が自分を迎へることになつたのである！

やがて月がでた。窓をあけると、遠くまた近く起伏する山脈は折柄の月の光と匂ひのやうな霧の流とのために或は黒く或は白く或は水色に泛び出てゐる。車窓に近く飛び交ふ樹木が、折々その山影を翳らすのも風情を添へた。月は朱かつた。微風は花と果實の匂を含んで顔に當つた。あゝ、到頭自分は西班牙の土地に來たのであつた。

バルセローナに着いたのは九時であつた。切符を渡して停車場の外に出ると、煌々した電燈に照された群集が自分の眼のまへに現はれた。眞赤な衣裳の娘が、黒い髪の毛と黒い眼の娘が、それから美々しく盛裝してゐる巡査や軍人やが、その眞黒な群集のなかに燦びやかに動いてゐた。抑揚(アクサン)の強いそれでゐて滑らかなこの國の言葉が鳥の飛び交ふやうに自分の耳に集まつてきた。大きな椰子樹(パルミエ)が聳えてゐた。月がその葉にきら〳〵してゐた。

オテル・マリーナといふのに赴く。帳場(ビュロー)にゐる男が佛蘭西語を口にするだけで、ギヤルソンも女中も荷持ち(ポルテール)も一切この國の言葉以外に解しない。寂しいながらに興味も深く、寛ろいだ氣持で食堂にはいつた。

料理は味の濃いものが多かつた。米を用ゐた皿が二つもあつた。一體に皿數が多い計りではなくその量までが多いのは、この國の生活の享樂的であることが明白と判る氣がした。葡萄酒は味が荒かつたがそれだけ醉ふやうに出來てゐた。もう秋も終りに近いのにメロンが未だあつた。

食後しばらく町を歩く。中世紀の騎士の姿を思ひ浮べるやうな美事な服裝の巡査やら兵士やらがあちこちに見える。かと思ふと、大きな建物の窓口なぞに近く薄暗りのなかを蠢めくものを見付けて近付いて見ると、貧しい姿をした者が何人となく見榮もない形をして寝込んでゐるのだつた。……

バルセローナの町（鬪牛と萬靈祭）

十月卅一日

……爽やかな寺鐘が眠り足らぬ耳許に落ちて來る。日曜日だつた。

案內記に依るとこのバルセローナの鬪牛(コリダ)は十月の最後の日曜日で終りを告げるといふ。今日が正しくその日に當つてゐる。パンと珈琲とで朝餐をすまして、帳場(ビュロー)でそのことを尋ねると、如何にも今日で今年の鬪牛は終りだと言ふ。珍らしく好都合に行つたものと心も輕やかに外へ出た。

空は晴れてゐたが、朝霧がそこはかとなく街上に漂ふてゐた。然しその霧もラムブラ・デル・セントロの大通りに出た時分にはすつかりと消え去つて、燦ゆい陽(ひ)の光が、眞蒼な大空一面にかゞやいて、流石に南方の國に來たことを思はせた。未だ朝間(ま)もないのに通りにある飲料水賣り(みづうり)の露店(キオスク)のまへに立つて、冷たい硝杯(コップ)を唇にあてゝゐる者も尠くなかつた。……

椰子樹の並木が美くしく立ち並んでゐるパセオ・デ・コロンの通りをずつと行くと、正面に例のコロムブスの銅像が蒼空にのつきと聳立してゐる。強い陽の下をさんらんと燦めき渡る海洋をば指呼しながら直立してゐるその姿は、見る者の心をそゝらずには措かなかつた。自分も今更らしくその指の差し示す「海の彼方」を眺めやつたのであつた。

直ぐ下は港だ。コロムブスが新大陸に向けて船出したのはこの港だ。遙かジエノア及び馬耳塞の兩港に對峙して地中海の商權を固めてゐるのはこの港だ。大きな船小さな船が狹い許りに押し合つて並んでゐる。港越しに、碧玉よりももつと蒼い太洋は燦ゆい陽の下に搖れ動いてゐる。その先は不思議な夢に充ちてゐる阿弗利加の大陸である。……

不意に景氣のよい喇叭の音に續いて賑やかな太鼓の響きが、海港に心を奪はれた自分を後ろに振返らせた。それは兵士の進行であつた。陽氣な音樂に派出な軍服、――それは、巴里のオペラ・コミツクでお馴染の『キヤルメン』に出てくる兵士たちの姿であつた。おゝ、氣取つた可愛らし 西班牙の兵隊たち！そう言へば銅像の側に立つてゐる薄朱い建物にはありありと Guartel de Atarazanas と刻んであつた。

空はあくまで澄み渡つてゐる。日曜日のこととて町は人の出盛りであつた。佛蘭西あたりと比べると寧ろ遙かに意氣に見える服を身に着けて歩いてゐる若いまた老いた紳士たち。黒い瞳と睫毛と髮の毛とを持つてあのマドンナの像のごとくに澄した美くしい女たち。眞黒な帽子を斜かひに冠つたのは闘牛士の群か。華やかな服を着けた巡査に兵士。つゝましやかな修道士。――かうした人々がぞろ／＼とあのラムブラ・デル・ヤントラからラムブラ・デ・サン・ホセの大通りを歩いてゐる。通りの兩側いずつと並んでゐるのは花屋だ。黄金色の金盞花、長壽花、菊の花、濃い紫の龍膽に紫羅欄花、火のやうな矢車草にダブリアの花。その花屋が數町で盡きると、今度は小鳥屋が並んでゐる。細い針金の小さな鳥籠が道の上に三十も五十も並んで、そのうへの Canarias flautas といふ看板の黄金文字と一緒に明るい陽の光を一杯に浴びてゐる。その合間々々には氷や果實の汁やを飲ませるキオスク。

何といふ快活な樂しげな日曜日！

プラツア・デ・カタルニアの小やかなキヤツフエでショコラを一杯啜にして、さて間もなく右へと折れるラス・コルテスの通をどこまでも歩いて行くと、やがて左の方に阿剌比亞風の大きな奇異な建物が眼に這入る。その上に際いてゐる赤と黄の旗で、おゝこゝが闘牛場であると直ぐに知られた。

空はますます青く、陽の光はますます鮮かで、空を見る[illegible]は痛いほどである。自分に日影になつてゐる席へこれに

優等の席になつてゐる）を求めて、汗ばむだ顔を拭きながら腰を下した――
物の本でさては綺麗で歌劇で幾度となく眼に親しんだ光景がそれからそれへと展開しはじめた。鐘が鳴る。管弦樂（オルケストラ）が始まる。高い棧敷には、今日の司會者である市長夫妻が古風な西班牙獨自の服裝をつけて現はれてくる。滿場の烈しい喝采を浴びながら、金と紅とで美裝した鬪牛士の群が騎馬で現はれる。鬪牛士の群は、挨拶をする爲めに司會者のまへにと進んで行つて、その手からこれも黄金色と紅色とのリボンで飾つた鍵を投げて貰ふ。大きな帽子で見ン事それを受け止める。その鍵で、牛の潜んでゐる場所の扉を開ける。――
暗い場所から急に明るい廣々した圓舞場へ、まるで嵐のやうに激しい勢をもつて牛が現はれて來た！ 槍を手にした騎馬の鬪士を目がけて突き進んで來るその勢は！ あといふ間もなく人諸共馬は一溜りもなく轉覆した。ぴく／＼と痙攣してゐるその腹と、どく／＼とその邊から流れ出る眞紅な血汐と。それが鋭いほどに燦やかしい陽の光を浴びながら直ぐと自分の眼のまへにあつた！

血汐をその尖つた角に附けた牛は、背の肉を破つた槍の痛みに一しほ狂ほしげに猛りながら、それからそれへと騎士の姿を目掛けて突き進んでくる。瞬く間にあちにもこちにも馬の屍骸が、薄紫いろした土のうへに無慘にも並ぶやうになつた。

數萬の觀客は、そうした馬が轉覆される毎に歡呼の聲を湧き立たせる。圓舞場内の空氣はまるで焔のやうになる。

この騎士と牛との鬪爭が終ると今度は、左手に赤い蔽布を翻し右手に尖劍をきらめかした鬪牛士が徒歩で牛に立ち向ふのである。見る見るうちに牛の背には數本の尖劍が刺される。血はたら／＼と毛膚にそふて流れきらめく。口からも涎のやうに粘つた血汐が垂れ下つてゐる。よろめく。よろめく。遂に一本の尖劍が發止とばかりに頸骨の髓をつらぬく。

牛は地響きを立てて倒れる……

觀客の熱狂は刻々に加はつて行くに反して自分はもう居溜らなかつた。誰一人立たうともしないのに自分は孤り立ちあがつて闘牛場の外に出た。

自分は西班牙人の性情のことを今更のやうに思ひ廻らした。眼をそむけずにはゐられないこの慘酷な殺戮を斯くも熱狂して見てゐるといふことは、何と言つても血を欣ぶ性質がこれ等の人々のなかに存在してゐることを否むわけには行かないであらう。自分はこの國の國旗が持つてゐる黄と赤とは一は黄金を示し一は血を示し、結局血をもつて黄金を探したこの國の舊時の歴史の精神を現はしてゐると聽いたことをも思ひ浮べて、この國民の性情を決して愛すべきものであるとなすことが能きぬ氣がした。

然しながら、何代となくそれも小兒の自分からしてこの闘牛に親しみ續けて來たことを考へて見れば、彼等にとつてその興味は決して牛を屠るといふ點にあるのではなく、たゞ闘牛士の技術の巧さ如何の點にあるのだとも想像せられる。血を欣ぶのではなくて、唯血を見ることに止むなく無關心になつてゐるのだとも想像せられる。――

遙かを見ると小山が美くしく横はつて、一團の家を抱いてゐる。その姿は中世紀の城を思ひ起させる。すぐ手前には奇怪な姿を持つた亞剌比亞風の寺院が聳えてゐた。さうだ！あの闘牛だとて、かうした古い建物の一つに過ぎないのだ。古い歴史の跡に過ぎないのだ！

こう思ふと、自分の西班牙人に對する感じは稍明るくなるのだつた。――

……午後にはいつて、雨が烈しく逼つて來た。然し間もなくさや〳〵と澄み渡つた夕暮になつた。英吉利風の庭園を

持つた廣々した公園のなかにこの爽やかな夕暮を樂しみながら漫歩してゐると、思ひ掛けなく遠い山脈と海岸の眺望が眼のなかへ落ちて來た。清々しい青緑の氣に充ちた夕暮の光のなかに劃然した山影と薄紫いろに陰つた蒼洋とが明澄な夕空の下に引率いて泛んでゐる風物はろゞろに西班牙の古畫の背景を思ひ起させるのであつた。自分は、何時までもこの眺めのまへに立ち續けた。……

近くに美術館がある。もう夕日が落ちかけた頃とて、燈火の點つてゐぬ室内は、陰暗として殆んど物を見分け難い。然し、かうした聲のない薄暗のなかに大きなコリント風の圓柱の間や怪奇な姿をした諸々の彫像の間をしのびやかに歩いてゐると、宛らに遠く倶び去つて了つた人々の魂のなかを當てどもなくさ迷ひゆく氣がする。血に塗れた人の姿を描いた古い油繪などがこ　大きな柱廊のかげに薄蒼く微かな明るさを帶びて現はれる。かと思ふと蒼白い基督の死顏が、その邊不圖薄明のなかに浮んで見えたかと思ふとすぐ消えてしまう。自分は止め度ない不思議な『小説』を心のなかに讀みながら、この陰暗な世界に暫らくの間時を過した。——

外へ出るともう日はすつかり落ちてゐたが、その邊は未だそことなく明るかつた。晩鐘が彼方此方から響きわたつてきた。……

十一月一日

……また美くしい日和であつた。今日は萬靈祭の當日で皆が夫々花を持つてお墓詣りに出掛ける日だ。眼が覺めると昨日にも増して寺々の鐘の音が爽やかに鳴りひゞいてゐる。

昨日歩いたパセオ・デ・コロンの賑やかな通を右に折れると、幾つもの屋根越しに黑ずんだ古い尖塔が目にはいる。バ

シリカ・デ・サンタ・ユーラリアの寺院である。石道の狹隘な直ぐ行詰りになりさうな路次を曲折してゐるうちに、その寺院の胸先の所に不意に出る。朝日がずつと建物の上の方にだけ照り渡つてゐた。——

寺院のなかにはいり込む。パイプオルガンの壯嚴な韻(ひゞき)に和した僧侶の合唱の聲が、古い薄暗い濕(しめ)りを帶びた殿堂のなかに、祭壇の無數の燭光とともに搖れわたつて、街路からはいり込むで來たものの顏を靜かに打つ。斯うした場所で毎時(いつも)感じられる異教徒の身の上を今日も亦自分は犇と感じながら、なるべく人目に付かぬやうにと入口に近い廊柱の側に佇んでこの彌撒(ミサ)を眺めることにした。——

幾百人の男女の頭越しに古風で華麗な祭壇が見える。薄黄いろな蠟燭の火の光を受けて金や白やが燦々してゐる。香爐から立ちのぼる紫煙は祭壇をつゝみ、燭の火にからまり、會衆に交りながらに裊々として天上指して流れて行く。と見るとその煙の果てを一閃見るも眩ゆく麗はしい光線が虹のごとくに走つてゐる。色硝子(サイトローイ)を透いて流れこんだ朝の鮮やかな陽光である。『天よりの光』が、發止とこの柔らかな煙のなかを突き通してゐるのだ……

西班牙の寺院は、同じ加特利の寺院と言つても佛蘭西や伊太利やの夫れと比べて、著しく神秘(ミステック)の空氣に富んでゐるものであることは屢々聽いたところだ。自分は、靜かな然し熱い讃唱の聲のなかにうつとりと浸りながら、柔らかに動いてゐる聖煙とこの花やかな色硝子の燦虹とをぼんやりと見つめて、この神秘な空氣と言はれてゐるものを親しく眼で見てゐる氣さへ起すのであつた。——

後から後からとはいつて來る男女の數は多かつた。何時しか自分の立つてゐる廊柱の邊にも何人もの人々が集つて來た。何れも入口に近く備へてある大きな陶製の水盤のなかに一寸手を濕らしてそれで額を輕く撫でてから、片膝を地に落して十字を切る。そのさまは見てゐるものの心をも淑しくするのであつた。讃唱の聲はます〳〵高く、聖煙はます〳〵

濕かつた。

……寺を出てラムブラスの大通りに出ると、昨日に增した人通りであつた。若い娘が眞白な菊の花を兩手で携へながら愼ましやかに通つて行く。眞紅なダアリアを上衣のボタンに止めた若い紳士が澄した面容でその娘を横眼で見ながら歩いて行く。半ズボンの小さな子がそのあとから二三人連れでこれも花を手にして馳けるやうに歩いてゐる。黄金の尖兜に紅白の羽毛を翻へした將校がゆつくり〳〵歩を運んでゐる……空はあくまで青々と燦いて、そのなかを寺の鐘が段々と鳴りつゞけてゐるのであつた。

自分は昨日の鬪牛のことを想ひ起した。あゝした殘虐を欣こんでゐたこの市民が、今日は兩手に花を抱いて慶しやかな願のなかに寺院の扉をくゞるのである。何といふ傳奇的な中世的な性情であらう。然もこの傳奇・中世に隣合つて、この町は最も現代的なるサンデイカリストの爆彈をも持つてゐる。現に昨日もこの町のゴヤ劇場のまへで電氣工業雇主協會の會長をしてゐるビユホール氏といふのが殺られた。それから間もなくサンデイカリストの首領のサルヴアドール・セギイ氏といふのが往來で矢張り爆彈に見舞れた。折柄の通行人はこの飛沫を蒙つて重傷を受けたといふ。……それに昨日も今日も同盟罷業だと言つて市内には電車もなく馬車もない！

血を欣こんでゐるやうな町。然し慶しやかに聖母のまへに跪いてゐる町。中世の薄暗い雰圍氣が罩ち込めてゐる町。然し現代の烈しい爆彈の煙が騷いてゐる町。——自分は、『西班牙』の縮圖を先づこのバルセローナの町のうへに明白と見ることが能きると思つた。

……日本の名譽領事をしてゐるといふある佛蘭西人に逢つて、いろ〳〵とこの町の商況のことやカタローニヤ州の產業狀態のことなぞをも聽いてからホテルをさして歸る。

サラゴッサを過ぎて

……夕方の六時半の汽車でバルセローナを立つ。アラゴン州の首府のサラゴッサを通つて――と言ふよりも、あのグリンカの不可思議な樂曲『サラゴッサ史詩』によつて古くからある郷愁を感ぜしめられてゐたこのサラゴッサの町を一瞥してから、目指すマドリッドに赴かうが爲めであつた。

雨が落ちて來た。灰鼠色の夕暮のなかにまたしても寺の鐘が震へながらに響いてくる。二等車とは言ふものの日本の田舍の三等なぞよりももつと汚れて古ぼけた車室のなかに、五六人の人達と一緒に押込められる。辛ふじて車窓から頭を出しながら、雨と夕暮とのなかに消えゆくバルセローナの古都を眺めやつた。――

合乘の客は眞紅な天鵞絨のチョッキをつけた勞働者とその妻とを圍んだ一團の男女であつた。火の氣のない汽車のことゝて硝子戸を閉め切つたまゝに煙を吸ふ、唾を吐く、唱ふ、笑ふ、騷ぐ。石油洋燈の光が細々と車室の一隅を照してゐるだけで、字一つ讀むわけにも行かない。自分は帽子を眼深く冠り兩手をズボンの隱しに入れたまゝ殆んど身體を縛り付けたやうにして、この無遠慮な饗宴(?)の場面を詮方なしに眺めてゐた。旅愁は今更のごとく胸にあふれた。

然しこの一團の合客も一時間程で下車してしまつて、車内は自分一人ぼつちになつてしまつた。小さな硝子窓で隣室が覗けるやうになつてゐるが、覗いたところ前後の隣室とも全く空虚であつた。

雨はしきりと降つてゐる、車窓越しに外を眺めると、朧ろな闇のなかに山らしきもの丘らしきものゝ起伏してゐるのが僅かに感じらるゝ計り、燈火一點すら見えることもない。

寂さと寂寥とが刺すやうに襲つてきた。自分は搖れ動く微かな灯影をまじ／＼と見つめながら、若し此處で自分を救

す目的の下に誰かが忍び入つて來たとしたならばなぞと我から怖ろしき空想を創り出すのであつた。汽車が寒驛に停まる。雨のなかを一人の男が聲もなく這入つてくる。汽車はそのまゝ動き出す。アラゴンの荒野が果てなく擴がるなかを進む。その男が急にこつちを向いて眼を耀かせる。……そういふことがあり得ないとは誰が言へやう。……そうした陰暗なる空想のなかに、バルセローナの暗殺のことや鬪牛の血に塗れた鬪士の姿やが泛んだり消えたりした。

うと／＼としてゐるうちに時間は經つて行つたものらしい——

十一月二日

サラゴッサに汽車は着いた。朝の七時である。雨は未だ落ちてゐる、寒さは眠り足らぬ身體に一しほ泌みわたる。停車場を出ると間もなくプエンテ・デ・ピエドラと稱ばれしある橋にかゝる。エブレの河が凄いまでに濁つてその下を流れてゐる。河上を見遣ると一帶の山脈が白雪に蔽はれて薄寒い朝空にかつきりした形を鑄りつけてゐる。河岸、ピエドラの橋に近く聳立してゐる不思議な美を持つた寺院はヌエストラ・セニオラ・デ・ピラールであつた。

町にはいると朝未だ早いので店は大方閉つてゐた。人通りも稀れであつた。然しプラサ・デ・ラ・コンストツーシオンの附近には勞働者の群が彼方にも此方にも數團を爲して何やら密議をしてゐるのが見られた。バルセローナで聽いた噂のことが直に頭に浮んだ。何でもこの町の雇主協會の會頭をしてゐるデレスといふのが一兩日まへにサンデイカリストの手で暗殺されたので、雇主の方ではこれに對抗する爲めに工場閉鎖を敢行することにしたといふ噂である。——自分は、グリンカの樂曲や、さてはシヤムブリエの樂曲やを想ふてこの珍らしき土地を踏んだのであるが、そこに先づ展開した光景は、斯うした社會問題の縮圖であつた！

白いものがちら〳〵と眼をかすめる。ピレネー下しが痛いまでに頬に沁みこむ。プラサ・デ・アラゴンといふ廣場を通り抜けると泥濘の路がさらでだに重い旅の靴をます〳〵重からしめる。自分にはこの寒峭枯淡な町に今日一日を送らうといふ考は最早霧散してしまつた。

通りがかつた痩せぎすの女に、マドリット行の汽車の出る停車場（エスタシオン）は何の邊かと覺束な西班牙語を用ゐて尋ねると、何やら早口に言ひ捨てて去つてしまう。取り付くすべもなく暫し茫然としてゐると、今度は貧しい扮裝をした勞働者風の男が近く歩いて來た。『……パラ・マドリ』と同じ言葉を口にすると、その男は俺に隨いて來いといふ意味を手眞似で示す。その扮裝やその人和からして稍怖々にその後をしばらく間隨いて行くと、軈て廣々とした畑に出る。その男の指さす方を見ると、なるほど寂しい雪の山脈を背景にして寒そうな停車場が彼方に横つてゐる。自分が差し伸べた感謝の手を袖に見向きもせぬやうにしてその男は元來た道をぐん〳〵と引返して行つた——

アラゴン人。頑固で强健で誠實で、西班牙人のなかのフラマン人とも言へるアラゴン人。目の當りにそうした人間の典型を見たやうな氣がして、自分は先程の怖々した念を多少恥かしくも思ひながらしばらくの間その男の後姿を見守つたのであつた。

停車場へ着いた。腹も空いたし、手足も疲れた。プラットフオームを漫歩してゐる巡査に、レストランがあるか知らと尋ねて見ると人の善さそうな微笑を浮べながら手を取る樣にしてそのレストランに連れて行つて吳れる。何日も歐羅巴の旅で遣つてゐたやうに些少の心付でもと思つて、何程かの銅貨を取り出して渡さうとすると、否と押し止めて足早に立ち去つてしまう。こゝでも、剛直なアラゴン人らしい心を覗くことが能きる氣がした。

……言葉が通じないので食事の註文が意の如くにならないのに惱かしがつてゐると、十歳ばかりの少女が廚房の方から

遺つてきた。『何がお好みですか？』と覺束ないながらに佛蘭西語を口にする。これで註文がすつかり奥に通じる。用事が終つても少年は、自分の側に腰を下したまゝ、いろ〳〵覺束ない口付きで話しをし掛ける。自分はこのサラゴツサの町の商業學校に行つてゐること、そこで佛蘭西語を教つてゐること、佛蘭西語の先生はムッシウ何とかいふ老人のフランセエであるといふこと……それから、未だマドリットへもバルセローナへも行つたことがないといふこと。

『大きくなつたら日本にも來なさい』こんなことを自分は口にして、この少年に汽車の車室まで送つて貰つて別れの握手をした。青白い繊弱そうなこの少年は、線路の傍に立つていつまでもいつまでも、マドリットへと急ぐ自分たちの汽車を眺めてゐた。――

今朝までの汽車とくらべると稍綺麗でもあつた。それに有難いことにスチームも完全に通つてゐた。たゞ何分ひどく揺れるのには困つた。それと、時間が無暗に遅れること。

三等の切符を持つた者たちが一向お構ひなしに自分の乘つてゐる車室のなかにはいつて來て何時か車席はかうした百姓で一杯になつてしまつた。その連中の容貌や服裝やはまがふ方なきアラゴンの型であつた。日に焼けて赭くなつた如何にも樸訥で强健な容貌。茶色の天鵞絨の上衣にズボン、眞黒なこれも天鵞絨のチョッキ、眞赤な襟卷と帯。――そうした連中が思ひ切り高い聲で話し交してゐる。母音のきはだつて多いところ、それに抑揚が大して耳に觸らぬところなど兎もすると日本の言葉を口にしてゐるかと思はせる。それ計りではない、幾つかの車室を隔てた邊りで唄を口にしてゐるのが日本の追分節かなんぞのやうな節廻しを持つてゐる氣がする。そう言へば此等の連中は夫々手に風呂敷そつくりの包布を携へてゐる。また車窓の外を、いろ〳〵の品物を頭にのせて恰かも大原女そつくりと言つてもいい形で通つて行く女なぞが眼に付く……

然しながら、車外は一望砂漠の如き代赭色の山野である。砂丘のやうな崩れかけた丘の形。それから、草だけが辛うじて生えてゐる枯渇しきつた山の連り。それを除くと、一面たゞ荒涼たる赭いろの土塊の展がりであつた。

山の上には、崩れかけた古い城壁や塔やがよく立つてゐた。それが各れも同じ代赭色をしてゐるので、一寸見ると山の一部分のやうに思はれる。實際それは山の死ぬのと一緒に死んでしまつたのだ。

自分は不圖この荒涼な風物を眺めながらドン・キホーテのうへを思ひ出した。あの果てしなき希望に充ちたドン・キホーテの姿がかうした山野をさ迷ひ歩く光景が如何にも目のまへに描き出された。痩せた馬に鞭打ちながら異裝を凝らしたこの『勇ましき』騎士が、かうした索漠な荒野を辿つてゐる姿は、——あゝ、誰かも言つたやうに、それは全く『人間の良心』の持つ勇ましさと憐れさとを示すものでなくて何であらう。冷嘲と幻滅と絶望とは交る交るに押し寄せる。それでも尚勇ましき希望と悲しき郷愁とはこの壓迫から逃れ出て、新らしい城を求めやうとする。ドン・キホーテのこの心こそ、實に人類の持つ勇ましく悲しい運命でなくて何であらう。——

この代赭いろの荒野は、不思議な蠱惑に充ちてゐて、見る者の心を何とはなしに『無限』への郷愁に向けしめるのを感じる。ドン・キホーテでなくとも、この荒野を眺め遣つてはある怪しい誘惑の聲を感ぜずにはゐられない。自分は飽きることもなくそれからそれへと展がつてくるこの荒野を眺め盡した……

……汽車は夜の九時を首都マドリットに到着した。

マドリット滯在

十一月三日

オテル・パラス。カレ・デ・セルヷンテスの角に當つて堂々と聳立してゐる宏壯な旅館の一室に、自分は久振りで旅の心らしからぬ穏やかな朝を迎へることが能きた。

恰度この旅館には目下當地で開催中の萬國郵便會議に參列の各國委員が夥しく泊つてゐた。そのなかには日本からの委員も交つてゐた。舊知であるそれ等の人々を自分は先づ訪ねて歩いた。——

久振りで日本の言葉が口から出た！ 馬耳塞の港で日本へ歸る友人に別れてから、プロヷンスの各地を旅して更にピレネーを越えカタローニア、アラゴンを經てこのマドリツトに着くまでといふもの、それは全く孤りぼつちの旅であつた。故郷の言葉は言ふまでもなく自分の耳からも口からも全く消え去つてしまつてゐた。それが今こゝに生き返つて來た！自分は貪ぼるやうにこの言葉を耳にしこの言葉を口にした。あゝ何といふ安易、何といふ自由……

自分は今更に母國語と稱せられるものの強い潜勢力を感じた。これは何も我々が外國語を母國語ほど完全に使ひこなせぬからといふ計りではない。それこそアプリオリの力だ。我等の肉に喰ひ入つてる力だ。

自分はよく巴里で遠い日本のことを噂さし合つては屹度話を喰物の上に持つて行くのが常であつたことを憶ひ起した。『僕は日本に何等の愛着もないが、たゞ食物のことだけは何うも憶ひ出して困る』——こんなことを口にした人のあつたことすらも憶ひ起した。

然し母國の食物の持つ力の強さはまたその言葉の持つ力の強さでもあることを今更に想つた。それはまた、——そのまゝ擴充して母國それ自身の力でもあつた。自分は『傳統』の持つ根強さをありありと考へさせられる氣がした……

外へ出る。マドリツトの殷賑な都市が眼のまへに展開する。

それは全く『歐羅巴』の町であつた。『現代』の町であつた。自分が今まで見し來たバルセローナやサラゴッサやのやうな如何にも西班牙らしい特異な風格は、尠くもその外觀の上には認むることが能きなかつた。宏壯な建築、廣々した街路、車馬、行人——自分は巴里よりも稍々鄙びた都市を見てゐるに過ぎないのであつた。

唯この美事な新式の都市のなかに於て、最も不似合に感ぜられるのは、往來にみすぼらしい乞食が夥しいことと、これも乞食に類した慘めな裝をしたものが頻りと行人のまへに立ちふさがつて富籤(ロッテリア)を賣り付けてゐる光景である。

この光景は、猶豫なく西班牙の持つてゐる社會的痼疾を自分に印象せしめる。然しそれはそれとして、この西班牙の乞食は古來一つの職業とまで目せられて決してその境遇を恥づべきものとはなしてゐぬこと、自分も一箇の立派な『紳士(カバレロ)』であると自任してゐること、從つてこれに物を與へる人も決して憐憫の感情からではなく寧ろ敬虔な喜捨の念慮から來てゐるといふこと、斷はる場合も決して無情(すげな)なくすべきものではなく『兄弟よ、神の惠みによつてどうか宥して與れ』"Perdono usted, por el amor de Dios!" といふがごとき懇ろなる言葉によつて斷るべきものであるとされてゐるといふこと、などといふ事から推して、憂慮すべき社會問題なりとして若かく眉を顰めるには當らないかも知れないとも思つた。また富籤(ロッテリア)は政府の財政を救濟する爲めに不斷に行はるゝ制度だ。然しこの一見不健全極まる制度だとても、株相場を許し競馬の馬券を許し公設の賭博場を許し、さては勸業債券の發行を認めてゐる諸國である以上は特にプロテストを致し得る權利があらうとも思はれない。——

午餐を旅館ですましてから、誘はるるまゝに近くの近代美術館(ムセオ・デ・アルテ・モデルノ)にも出掛ける。

普請中と見えてその邊が大分散ばつて居り採光の窓なぞも方々閉されたまゝになつてゐる。その亂れた光景のなかを次から次へと見て行つた繪畫の多くは、宗教畫であつたけれど、それは何といふ陰鬱な宗教畫であつたことか！若者

受難の畫は、言ふに及ばず、數多い殉教者の畫に、蒼白な顔とぐだぐだした血汐と壓しつける闇のいろとで一樣にできてゐる。無氣味な生首が二十餘りもごろごろしてゐる畫さへあつた。自分は眼を外らさぬわけには行かなかつた。おのづと闘牛のことが頭に浮ぶ。あの闘牛の血を厭はない人間が、斯うした血に塗られた畫を描くのだ！闘牛を見てもなほ西班牙人のために彼等は特に血を欣ぶ譯でもなからうと辯護しやうとした自分は、この夥しい慘虐な繪畫をまへにして、その辯護が遂に徒爾であるべきことを感じるに至つた。西班牙人の性情には、確かに血を欣ぶ――尠くも血を左して厭はないものが存する！

この性情は何によつて生れ、また何を現はしてゐるのか。それはモールの血が彼等の裏に流れてゐるからだ。東方の異教が、砂漠の教へが烈しいアラーの聲が彼等の心になほ今に動いてゐるからだ。空には熱い太陽がいつも輝いてゐる。彼等は歐羅巴の半島にゐると言ふものの、寧ろ彼等の身軀と心とは『東方』の沙漠の方に開いてゐる。原始の光と熱とが彼等の頭の上に絶えず搖曳してゐる。彼等は、神經質の近代人のやうに痛苦に對して左程に敏感でもない。また、基督教によつてあれ程歐羅巴人が育まれた同情の念慮もこゝの半島の人には充分に行き亘つてもゐない。彼等は原始人のごとくに生きることを享樂する、決して現代歐羅巴人の如くには享樂しない。彼等は血にまで享樂する。死にまで浸く享樂する。それは徹底の眞面目さで、決して遊びではない。一般歐羅巴人の醇化され洗煉された享樂の味は、遂に彼等の知る所ではない。――

從つて彼等の信仰も、またこのムセオに展觀されたる畫布のごとく、血によつてのみ信仰の確證を傳へ得べしとなしてゐる。深き信仰は深き享樂とともに、當然血であり死であるとなすのである。

……夜、若い外務留學生の諸氏が集まつてすき燒の御馳走をしてくれる。いろいろ喋べつてゐるうちに咽喉がむしむし

いする。そのうちに聲が充分出なくなる。今まで默りがちの旅を續けて來たのを今日になつて急に喋べり出したので、その爲めに斯う聲が出なくなつたのじやないか知らん？と笑ひながら言ふと、いやそれはこのマドリットの氣候の變化の爲めで、誰でも初めて來た人は皆咽喉をやゝられます、と傍から答へて呉れる。そう言へばこの地の氣候の惡いことは豫ねて本なんぞでも讀んでゐた所だつた。西班牙全土を通じての最も惡い土地の一つだといふ。そうした所にこの首都が立てられてゐる、といふことも如何にも西班牙らしい。――

何時か十二時になつた。送りがてら外へ出やうといふので皆立ち上つて支度する。すると一人が扉を押してバルコンに出て手をたゝきながら『セレノ！．セレノ！』と高聲で呼んでゐる。あれは夜番を呼んで大扉を開けて貰ふためです、セレノといふのは例の小夜曲のセレノで夜番のことです、と傍に立つてゐた一人が說明して呉れる。自分もバルコンに立つてひえびえした蒼い夜の街を眺めやる――となるほど今迄何處かの家のかげにでも休んでゐたらしい一人の男が、カンテラを提げてこつちに遣つて來る。カンテラのちらちらする光を受けて胸の邊が白つぽく光る。あれは鍵で、町內全部の戸の鍵を預つて帶一杯に差してゐるわけです、と說明される。バルコンのすぐ下まで來た所をよく見ると、片手には槍さへも持つてゐる！

西班牙には中世紀がそのまゝに生きてゐると言はれてゐる言葉を、自分は憶い出さずにはゐられなかつた。こんな風な姿を、こんな古風な制度を、この近代的の首都マドリットの眞中に於て見られやうとは流石に思ひも付かなかつた。他の歐羅巴の都市ならば、戸の開閉は夫々一戸毎に門番によつて取扱はれる、それがこゝでは夜十時になると門番は勝手に寐てしまつてその代りにかうした夜番が、昔ながらの厳い合羽に身をつゝみ、大きな毛の帽子を冠り、槍とカンテラとを手にして、夜の白むまで各戸の戸の開閉を取扱ふことになつてゐる。否、單に戸の開閉許りではなく、一町內の

靜寂をも保護することになつてゐる。從つて、この夜番は絶對に信用を置かれる者でなければならぬ、夜番自身もこの神聖なる役割(ロール)を充分に理解してゐる。曾てある夜番が盗みの疑を掛けられたことがあつた、この爲めに夜番は痛憤措く能はずして遂に自殺したといふ話まで傳へられてゐる。——

官衙と銀行と店舗と自動車とに充ち溢れてゐるこの近代的都市のなかに於て、我々はかうした中世紀の『幽靈』を見たのであつた。否、それは幽靈ではなくて、それこそ西班牙の眞實のハートではないか? 西班牙は如何(どう)したつても歐羅巴になり切れないと言はれてゐるその秘密が、卽ちこれではないか?

皮の帶に夥しい鍵を差し込んだわが夜番はにこ〳〵と人の善い微笑を泛べながら、暗い階段を下りる我々の足をカンテラの仄かな光で照してゐる。もう三十何年もこの夜番を勤めてゐるといふ——

一寸立ち寄つたキヤツフエの内部の空氣は莨の煙と強い酒の匂とに充ちてゐて、自分の咽喉をはげしく刺激した。自分は直ぐ立ち上つた。そしてこゝで他の人々と別れオテル・パラス指してひとり更けた街を歸る……

十一月四日

オテル・パラスを引き拂つてインフアンタスの通りにある素人下宿に移ることに極める。一つにはこのオテルが一介の旅人としての自分には贅澤過ぎるものであつたこと、二つには短かい滯在を利用してすこしでも西班牙の內部を見たいと思つたために。

晝餐の時間までにと思つて正午近くその下宿に赴いた。裏通りになつてゐるが仲々殷賑な通りであの西班牙固有の黒い頭被ひ(マンテラ)を着けた女が頻りと眼に付くのも、嬉しかつた。煙草屋のまへにうんと人集(たか)りのしてゐるのは値の廉い煙草の

箱が到着したのでそれを求める人々だと聴かせられるのも嬉しかつた。宏壯なる大通りを離れることは、また同時に現代の『歐羅巴』から離れることでもあつた。——

正午と思つてゐた晝餐は午後の二時になつてやつと用意された。これは大概の西班牙の家庭の習慣(しきたり)であるといふ。そして晩餐は九時であるといふ！これは要するに朝の遲いこと、——即ち夜更しをすることを示すに他ならない。あゝ、こゝにも彼女の横顔(プロフィル)がある！芝居なぞも所謂晝興行(マチネ)と稱せられてゐるものは、實に夕刻の五時半から始まる。夜間の興行にいたつては十時に始まつて一時にならねば終らないといふ。それからキヤツフエなぞに立ち寄りをして家に戻るものとすれば、就眠がどうしたつて二時か三時になる。勢、晝餐は午後の二時頃にならざるを得ないではないか！

食堂は賑やかであつた。十人近い下宿人のなかには何人かの婦人もあつた。それが各自に無雜作に喋べり高聲に笑つて如何にもさつくばらんで快活な空氣を湧き立たせる。佛蘭西や別して英吉利やで感ぜられる謹ましやかな空氣とは大變な相違だ。卓上に運ばれる食事を見ると、仲々に凝つてゐて如何にも美味(おいし)い。それからその酒——リヨーハと稱ばれてゐる葡萄酒の味も佛蘭西邊のと較べて決して劣ることはない。

食物、酒、それから談話と笑、——彼等はこのなかにあつて如何にも生きることの歡びを感じ切つてゐるかの如くに見える。彼等の眼と口とはひつきりなしに外に動いてゐる。瞬時も靜止する所を知らない態である。この粗(あら)くて單純(シンプル)な賑やかさ——こゝにも西班牙の横顔(プロフィル)があらはれてゐるのだ。

……細雨がやつてきた。いらいらしてゐた咽喉もすこし見合がよくなる。そこに畫家のO氏といふのが見える。一緒に『ドン・ファン・テノリオ』の芝居をエスパニア座といふのに見に行かうといふのであつた。

バルセローナを歩いてゐた時もこの芝居のびらに氣が付いた。何でもこの芝居は日本の忠臣藏にも譬へられるべきも

ので、萬靈祭かけて必ず何處でも上場されるクラシツクであるといふ。

くだくだしいことは書くまい。たゞこの芝居で尼僧ドニア・イネスに扮したカルメン・マラガスの美貌と美聲とはその楚々たる風姿とともに自分の心を限りなく樂しませたことのみを書かう。自分はそゞろにポール・ブーの寒驛でバルセローナ行の汽車を待ち合せた折に眺めたあの若い淨やかな尼僧のうへを憶ひ泛べずにはゐらなかつた。あの冷たいまでの淨らかさは無論このドニア・イネスにはなかつたけれど尙そのつゝましやかで匂やかな美は尼僧の姿にこよなく適はしいものであつた。自分は、かゝる女性の美しさは到底西班牙を外にしては見得べきでなからうことを泌々と想つた。何となれば、かゝる淨く美くしき尼僧も亦中世紀の幻影に外ならぬのであるから。――

外へ出ると一時。細雨が煙のごとく罩めてゐる。自分はインファンタスの下宿の扉のまへに立つて、手を鳴らしながら『セレノ！』と高く呼んだ。暗い細雨のなかをカンテラがこつちへ這つてきた……

十一月五日

睡眠も充分にとれ咽喉の具合もいいので氣特が爽々しい。樂しみにしてゐたプラドの美術館を見に行くには恰度いいと思つて一人宿を出る。青空が所々に見えて折々燦ゆい日光が一杯に地上にあふれる。土が一時に砂金のやうに煌く。郵便局の傍を通る。宮殿とも見まがう計りに堂々たる建築である。目下この內部で萬國郵便會議が開催せられてゐる譯であるが、この會議の爲め計りに西班牙政府は折柄の財政不如意にも拘はらず巨費を投じてこの宏大なる建物を築いたといふ。この名譽心、この虛榮心、――これがまた西班牙のハートだ。

ヴエラスケスの銅像をまへにした白堊のプラド美術館は、『こゝを訪ねるがためにのみ西班牙に來るほどの價値があ

る』とまで言はれてゐる。殊にグレコ、ムリジヨ、リヴエラ、ヴエラスケス、ゴヤ等の西班牙巨匠の作品は言ふを俟たず、ルーベンス、チチアノ、チントレット等の作品に到つてもこの美術館ほどに數多く所藏してゐる所は他にないと言はれてゐる。自分は暫くの間異様の感慨に浸されたまゝ入口に近く立ち續けたのであつた。

希臘彫刻の蒐集を眺めてからゴヤの作品を並べた部屋を訪ねた。すこし丹念に眺め過ぎたので何時の間にか一時間は經つてしまつた。ヴエラスケスもチチアノもチントレットもルーベンスも、ゆつくりとその前に立つことが難かしかつた。エル・グレコ、そこからムリジヨやリヴエラなどの部屋へは、とう／＼足を踏み入れることさへ能きないでしまつた！また次に、——かう思つて自分は外へ出た。

ゴヤから得た印象は矢張り深かつた。夥しい彼の素描を見たことは、平素からの彼に對する自分の感念を一層深いものにした。人間の苦惱、人間の狂愚——それに眼を外らさずにぐいと睨み續けてゐた彼。その強い冷酷ヒーロイックなその執拗。然しながら彼には優しい涙や快活な氣稟もつねにあつた。——否人一倍多くそれがあつた。田園行樂の譜を見ろ。小兒嬉遊の譜を見ろ。『神聖なる家族』繪を見ろ。何といふ温和、何といふ滑稽。がそうした感情に甘やかされ愛撫されてゐる一方に、彼の心には嵐のやうに火山のやうに烈しく蕩揺する地獄があつたのだ。彼の激越な精神はまつしぐらに人間の獸性を引きずり出さずにはゐられなかつたのだ。彼は、微風であり微笑であり生でもあつたが、また暴風であり激昂であり死でもあつた！彼は陽氣な快活な享樂的な西班牙人であつた。が、また悲痛な苦惱に充ちた哲學者であり、寂寞無邊な魂の彷徨者でもあつた。——が、結局それは矢張り西班牙人に外ならない。ゴヤ、——それは要するに「西班牙」それ自身であつた。

ゴヤからヴエラスケスに移ると、我々には嶮しい山峡の間から忽ち穏かな緑野のなかに出て來た氣がする。我々には

魂の問題よりも、その氣品とかその配色とか、そうした技巧の點に心が惹かれはじめるのを感じる。ルノアールがこのプラドを訪ねて何よりも先づ、このヴェラスケスに傾倒してゐたこと（それを自分はヴォラールの書いた『ルノアール』で讀んだ）も、十八世紀の王朝時代の空氣を吸ふことを欣びとしてゐたルノアールにとつては當然すぎるほど當然のことだといふことが今更のやうに感ぜられた。ヴェラスケスにとつてはこの世のなかに美しい色と光と陰と形とで充ち滿ちてゐた。――それだけで彼は心から滿足である自分を樂しんだのだ。それを我々は何の畫布からも感じることが能きる氣がした。――

宿に戻つて晝餐をすまして、リョーハの際にやゝうと〳〵としてゐる所へ、これから郊外にあるサン・アントニオ寺院に行かう、そこにはゴヤの描いた壁畫があるから、と言つて留學生の人達が迎へに來た。

プエルタ・デ・ソル。譯して太陽の門といふ人出の多い廣場から電車に乘つた。この廣場はマドリットの中心になつてゐるといふ。やがて電車は町をはづれて樹木の多いあたりを通る。この左の方に王宮があるのです、と傍から敎へて吳れる。この王宮のまへで朝毎に衞兵の交代があるが仲々見事です、今度早く起きたら御一緒に見に參りませう、と言ひ添へる。朝早くつて、一體何時頃です？と尋ねると、十一時ですと、澄した答である――

電車はしばらく人家のまばらな所を通る。一向眺めに變化はない。こんな貧しい郊外しか持つことの能きぬこのマドリットを、あの郊外の美くしい巴里や倫敦やと較べぬわけには行かなかつた。氣候の惡いうへに景色すらもかく貧しい都市よ、おまへから酒と女と食物と歌と踊とを引き去れば、全くそれは砂漠でなくて何であらう。

サン・アントニオといふ寺院は路傍の埃を浴びて立つてゐる古ぼけた小さな建物だ。一寸欺されたやうな氣持になりながらそのなかにはいつて見ると、內部もまだ煤けてゐる上に光線がはいらぬので、一向に由緒ある寺とも見えない。

ゴヤの壁畫が見たいと申出でると、長い竿の先に蠟燭を點して來た薄汚い子供が、その邊の天井を何とはなしに照して與れる。赤と青と黑の色彩がたゞ微かに見える。

何といふ譯もなくしばらく天井を見上げてから外に出る。明暗の烈しい雲の姿が、急に明るみに出た眼を眩ゆくさせた。

すこし歩かうと、プラターヌの並木のつゞく靜かな郊外の道を辿つて行く。マドリッドで唯一つだと言はれてゐるマンサナーレスの河が道の傍を流れてゐる。水もすくないし汚なくもある。みすぼらしい家が何軒か並んでゐて、白い洗布がその庭に翻つてゐる。はるかの丘には宏壯な、然し可成り單純で退屈な感じを與へるルネッサンス風の建物が聳立つてゐる。——王宮である。

この寂しい郊外の風景を後にして　町のなかにはいるとこゝはまた如何にも場末らしい通りだ。不圖路端の家の硝子越しに澤山小鳥の煮たのが並んでゐるのを見て、誰かの發議で喰べて行かうといふことになる。薄暗い土間に粗末な木の椅子が並んでゐる。帳場のまへに立ちながらコップ酒を手にして高聲に話し交はしてゐる客もゐる。大きな皿に小鳥を盛つたのが、薄黑くよごれた卓子に運ばれた。——小鳥は雲雀だといふことであつた。あり合せの縁の缺けたコップになみ／＼とついだ白葡萄酒(ヴインブランコ)を手にしながら、この雲雀を口にしてる氣持は、如何にも西班牙の旅らしい感じを起させるのだつた。それに、未だ日の暮れるに間のある空は、簇がり走る厚い雲のためにおどろ／＼しく暗くなつて來た。その異樣な雲の姿は、——あのエル・グレコの描いた、畫面にある通りの不思議な色と光を持つた雲であつた。自分はあの平俗な無特色の郊外の風景から、はじめて西班牙らしい背景のなかにはいつてきたことを感じたのだつた。——

烈しい雨がこのなかを遣つてきた。

小止みになつた雨のなかを我々は先刻のプエルタ・デ・ソルの廣場まで戻つてきた。

……うそ寒い外部から我々は急に明るい温かなホールのなかにはいつた。ホテル・パラスの廣々とした地下室で、こゝに毎夕踊りや獨唱やがある、それを見やうといふのだつた。

西班牙の音樂と舞踊。それは言ふまでもなく普通歐羅巴の國々の持つてゐるものとは著しい差異がある。それは歐羅巴のものといふよりも寧ろ阿弗利加のものだ、『東方』のものだ。何といふその粗い魅力、怪異な蠱惑、烈しく新らしい美！熱い欲情にあふれてゐる渦卷が、歐羅巴の華奢な洗練せられた感性のまへに何といふ無遠慮さで、何といふ烈しさで湧きたぎつてゐることか！

然しながら、今見てゐるところのものは、我々が巴里や倫敦やの華やかな舞臺の上で眺めることが能きた西班牙踊りとか西班牙音樂とかいふものと左したる相違がないことを感じない譯には行かなかつた。日本の各地方の民謠などが東京に現はれると可成りに變つて來ることのやうに、この踊りや音樂やもこの土から離れて如何にも首都マドリッドの人々の耳目に親しみ易い風に變つて來てゐることを感じない譯には行かなかつた。自分は、もつともつと粗い簡素な烈しいものが見られねばならぬと思つた。南方へ――――矢張り自分は南方アンダルシアの地方まで赴かなければ、ほんとうの西班牙の心臟に觸れるといふことは能きまい！

……外へ出ると雨は霽れて冷たい風のなかに星がちら／＼してゐた。

十一月六日

トレド行

今日はトレドへ行かうといふ。トレドと言へば西班牙文明の最も典型的な場所と言はれてゐる町だ。黒人の文明と白人の文明とが世にも奇異な姿で交り合つてゐるといふ土地だ。そしてまた一代の鬼才エル・ゴレコのゐた所だ。自分は西班牙へ來るまへから訪ねることを最も樂しみにしてゐた場所なのだ。——

正午の汽車でマドリットを離れる。同行は西班牙語の達者なN氏と畫家のO氏。トレドには三時に着く豫定なので晝の食糧にと停車場から買つて來たサンドウイッチ（と言つても英吉利などで見るものとは全く形が違う）を擴げはじめる。そして礦水（アグア・ミネラーレス）。これは西班牙の水が元來惡いので皆この礦水の瓶を買ひ求めるのだ。

緩い鈍い曲線を持つた代赭いろの曠野が眼のまへに展がつてゆく。後方の方を振りかへるとその野の彼方にマドリットの市街が一塊になつてゐる。その塊團の彼方はるかに、密雲に閉ざされて半ば暗くなつた山脈が横つてゐる。その陰鬱な山影に輝いてゐる雪のいろ。

スチーム代りに足の下に置いて呉れる熱湯入りの鐵管の上に足をもたせかけて、この單調な風物を見入つてゐるうちに、何時かうと〳〵として來る。

『もう着きましたよ』

N氏の聲に眼を覺まされて驚いて時計を出して見ると、未だ二時にしかなつてゐない。未だ一時間もあるじやありませんか、と稍不平顏に言ふと、兩氏も成程さうですね、では次の停車場でせうと答へながら、再び荷物を手から離して腰を卸した。

しばらく汽車はこの停車場に停つてゐた。外を眺めると、まるで砂漠のやうな風物だ！代赭いろの平原が限りもなく續いてゐる。樹木すらも多くは見えない。鳥の影も見えない。何といふ荒い、憂愁に充ちた、沈默と孤獨との世界

か！それは何よりも先づ阿弗利加の寂漠な禁地を想ひ浮べさせられる。あのモール人の浸入！全くかうした風物がどれほど砂漠から來た彼等を欣ばしたことか、容易に想像することが能きる。彼等はこの土地に還つて來て心からの安易を、慰めを感じたに相違ない。こゝに『阿弗利加』がある！——彼れはそうしたアト・ホームを感じたに相違ない。

やがて汽車は動き出した。暫く經つて車掌が切符を改めに還つてきた。

『これは違ひますよ。トレドに行くには先刻の停車場で乘換へねばなりません』

斯う言つた意味の言葉を、N氏の通譯で聽かせられた時には何大したこともないと思つたが、やがて、

『今日中に後方に引き返す汽車はありません。明日の早朝までは如何しても待つ他はありません。泊る場所ですか、——それもこれから停車場が三つか四つ目の先になつてゐるチウダード・レアルまで行かなければありません』

といふ言葉を聽かせられた時には、一同暫らくはたゞ顏を見合はせる計りであつた。

が、車室の隅にゐた五十恰好の無髯の男と何やら話しを交してゐた車掌は、やがて我々の所まで引返して來た。そして言つた。

『あそこにゐる旦那が、貴郎達を自分の家へ案内しやうと言つてゐます。旅館といふ程でもないが兎に角人を泊めることが能きるといふことです。モーラと言つて、この次の停車場です』

無論何の躊躇もなく我々の話は纏つた。今晩はそこで過す、そして明朝暗いうちに上りの汽車に乘らう。たゞ停車場とその宿との間は一里近くもあるといふけれど、馬車があるといふから、何とでもならう……

橄欖(オリーヴ)の畑がひろ〳〵と展がる。臺灣邊にでもありそうな粗末な赭茶けた家がそこここに點在してゐる。丘が現はれる。廢れた城がその丘の頂に臥してゐる。——ドン・キホーテの夢がそこにある！

モーラの停車場に着いた。宿を貸して吳れるといふ男と一緒に馬車に乘る。馬車はやがて眞直の路をモーラの村さして驅け出す。何といふ搖れ方だ。皆はめい〳〵に手に近い幌とか橫木とかをしつかりと握むでゐる。

漸くのことで村にはいつた。雨が落ちて來た。佗しい寒げな村。

旅宿といふものの看板一つ出てゐない普通の建物のまへに我々は立ち停まつた。其男は大きな古風の扉に付いてゐる金具に手をかけてそれをどん〳〵と鳴りひゞかす。頑丈の樫の扉が開かれて、如何にも田舍者らしい妻君が現はれた。その肩越しに、明るい內庭(パチオ)が雨に光つてゐる。――西班牙の建物に特有と言つていい內庭(パチオ)が、眞中に水盤をもうけて熱さをふせぎ、また太陽の熱を除けるために壁を厚くし窓をすくなくした建物のためにすこしでも明るい光線を送り込まうとして考へ出された內庭(パチオ)が。

思つたよりもさつぱりとした部屋が我々を迎へた。我々は漸くほつとした氣持になつた。

茶を飲みにと、主人を案內にして我々は外に出た。カジノ、――先刻汽車の窓から見た橄欖(オリーヴ)畑、その儲けから建てるに至つたといふ村立の倶樂部に、一つには誇りの意味からも主人は我々にも案內しやうといふのであつた。

好奇の眼を光らせながら我々は、道に添ふた建物を、その形を色を、その扉を窓を、さては[illegible]輔を、子供を女を眺め遣るのだつた。單純な色合、プリミチーヴな形態、それは何の上にもあつた。靜かな寺鐘が、暮れかゝる細雨のなかを落ちて來た。

佗しい村には不相應に立派なカジノに我々はゝろきながら、――また稍寂しくも感じながら內部にはいつた。明るい灯。溫かい火。茶や菓子やベルモツトやらが、綺麗な桃花心木の卓子の上に並べられた。これはしばらくは、寒村モーラにゐることを忘れさせてしまうものであつた。――

ボーイの案内で屋上庭園に上つて見る。もう日は殆んど暮れてゐた。その蒼い煙のやうな陰影を通して、廣場や寺院や家屋や道路やらが不思議な美くしさを帶びて錯落してゐた。屋根が黒く壁が白い家屋の周りは雪の夜の趣さへも加はつてゐた。『モールの夜！』(フユニユイ・モーレスク) 自分は口に出して言つた。自分の眼には仄かな繪畫が、心には香かな音樂が浮んで來た。

……宿に戻ると間もなく晩餐であつた。食堂には我々許りではなく、一家族全體が、――老父母と主人夫婦と二人の子供とがもう席にあつた。

世にも不思議な、といふやうな面持をしてこの老父母は、我々の方を瞬きもしないで眺めてゐた。然し我々は三人の人數を頼んで、憚る所なく日本語を喋り散らすのであつた。

口も未だ意の如くには動かない稚い子供ではあつたがすぐと我々に馴いて來た。O氏はポケツトから小さな銀貨を二枚ほど出してこの二人に遣らうとした。が、思ひがけなく主人の聲が我々をおどろかした。小さな者にそんな多額の金を遣つて下すつては困ります。お遣りになるのでしたら、銅貨に願ひます。――かう言ふのであつた。

西班牙を旅行する折には特に氣を付けよ、人氣が頗る惡い國であるから。宿屋などに着いても必ず部屋にはいるまへに、帳場で宿賃のことを嚴格に契約せよ。――こんなことを書いた英語の旅行案内をその時自分は鞄のなかに持つてゐた。自分は、この小景を見ながら、何とはなしに冷汗を感じるのであつた……

眞白な肌理(きめ)の細かな、そしてうんと大きい麵麭。肉味の混雜したスープは美味でもなかつたが、肴や肉やは仲々うまかつた。

食事を濟してそのまゝ食堂で子供を相手に遊んでゐる傍で、主人夫婦は我々が喰べ殘した肉や肴やをおかずにして晩

祭をやつてゐるのだつた――

……靜かな靜かな雨の夜。

十一月七日

うと〳〵として眼覺めがちの一夜をすごす。その夢とも現とも區別の付かぬ境にあつて、旅舎のまへの路を歌聲高く張り上げながら過ぎ行くものの幾度かあつたことを微かながらに覺えてゐる……眼が覺めてからそれをN氏に尋ねると、夜番(セレノ)の振れ歩く聲であつたとのこと。『アヴェ・マリイア・ピュリシモ……』からいふ振れ出しで、今十一時であるかまたは一時であるとかいふことをその後に付け、それに晴れてゐるとか曇つてゐるとかといふ言葉で結ぶのであるとのこと。

『十一時の時には曇(ナブラドー)つてゐると言つてゐましたが、一時の時には晴(セレーノ)れてゐると言つてゐましたよ――』

N氏はかう言つて低い聲で『アヴェ・マリイア……』を繰返して歌つて呉れた……

なるほど、硝子窓越しに外を覗くと細かい星がちら〳〵して、そのなかに冷たい半弦の月が凍てついてゐた。雨は何時か霽れたのだ。

合間と電燈が急に消えたので、主人の運んで呉れた蠟燭の火で、着物を付けたり荷を纏つたりしてゐると、表の入口の大きな扉をどん〳〵と鳴りひゞかす者がある。停車場へ行く馬車が來たのである。

外へ出る。暁の光は仄かにそこともなく匂ふてはゐるものの、まだまだ夜であつた。然しながら近くの廣場(プラサ)に馬車が停つて、ほかの相乘りの客を待つ間に、次第にその明るさは通りを歩く人の數につれて增して來た。とは言ふものの、

馬車のなかの暗さはすこしも動かなかつた。誰かゞ急にマッチを擦つて莨に付ける。瞬く間に闇は破れた、が瞬く間に再び闇は戻つた。――自分はその刹那その光のなかにありくとヴェラスケスを見た！　その鼻、その眼、眉と額、その莨を啣へた唇、――

女の客が乘る、老人の客が乘る、青年の客が乘る、空席がほんの一つ位しかなくなつた頃漸くのことで馬車は動き出した。

馬車の入口の幕の間から外の景色がちらくと映る。明け切れぬ野にはあちこちに白い霧が流れてゐる。その霧の流れのなかに眞黑な川藻のやうに點在して見えるのは、橄欖の樹であつた。家は蒼白い幽靈のやうな姿をしてあちこちに眠りこけてゐる……

搖れる馬車がやつと靜かになつたと思ふと、そこは停車場であつた。一日に二度ほどしか汽車が來ないといふこの小驛では、この早さにも拘はらず矢張り客は多かつた。間もなく汽車は火花を散らしながらやつて來た。空を見ると、美くしい紅玉(ルビー)のいろが炎(ほのほ)めきそめてゐた。

モーラからアルゴドール。このアルゴドールで我々は昨日乘換へするのを忘れたのだつた。我々は苦笑とともにこの停車場に降り立つた。

停車場の構內にある茶店の庭先にある長い卓子に凭りかゝつて、我々は麵麭と珈琲とをあつらへた。朝の爽やかな空氣のなかに浸りながら、山羊(カブラス)の乳のはいつた味のいい珈琲を口にしてゐるうちに、眠り足らぬ頭も何時かすつきりと晴れ亙つてゆくのを感じた。朝の日が、樹に草に泥の上に屋根に卓子に我々の手に顏にあつた……

トレド行の汽車が來るまでの二時間といふものを我々は立つたり歩いたり話したり默つたりして過した。雨あがりの

ことゝてその附近はひどい泥濘であつた。そのなかを五六頭の馬が、大根らしいものを一杯積み込んだ車を牽いて行く。何處から來て何處へ行くのか知ら。見渡す限りは唯緩漫な傾斜を持つた曠野にすぎなかつた。たゞ砂丘とも見えるものが遙か彼方に横はつてゐた。この辭はな廣々した風物は、――全くワシントン・アーヴイングも言つたやうに一種壯嚴（サブリミテー）の印象すらも受け勝ちである。まるで海だ。海の嚴（きび）しい大きさだ。

汽車が來た。あゝもう三十分足らずに自分はトレドの土地を踏むわけなのだ！

今更のやうに自分の頭にはエドガル・キネの紀行やモーリス・バレスの紀行やから得た鄕愁（ノスタルジー）が強い力で再生して來た。またはかのロマンセロ・モーレスクの不思議な美に充ちた詩篇が『愛撫の庭』の數多い情欲的な歌謠が、酒の醉のやうに心を煙らしはじめるのであつた。さてはかの鬼才エル・グレコの畫面が！ 胸の動悸なしには、汽車の進行を感じることが能きなかつた。

遂にトレドへ來た！眼のまへに現はれたのは絢爛な阿剌比亞風に建て飾られた停車場である。自分の足はとうとうトレドの土に、――あの弗羅曼人が猶太人が加特利教徒が、そしてサラセン人があれほど烈しく踏み散し合つたこの古きトレドの土にしつかりと附いたのであつた。

埃つぽい道を我々は旅館の案內人に荷物を背負はせて歩いて行く。行き交ふ女は何れも眞黑なマンチジヤを頭から深々と冠つてゐる。長い杖を手にした牧者が何十となく山羊を連れて並木の間を流れるやうに通つて行く。

道は河に突き當つた。タホ河だ！ 雨上りのせいで黃濁の色を重げにたゝえてゐる。その對岸に起伏してゐる丘の土の色の朱さは！ それを蔽ふてゐる草の鮮やかな綠のいろ。その朱と綠との奇異なる排列は、忽ちにして自分の頭にエル・ゴレコの畫面を想い浮ばしめる が、それよりもその丘の上に一團となつて凝結してゐるやうな灰いろの町の姿は、

その色は、何といふ不思議な美くしさに浮び出てゐることか。おどろくほどに濃い蒼空の下を、この灰いろの町は凄い夢のつゞきのやうに際もなく置かれてある！　それこそトレドの町なのだ。

道の左手には直ぐ露はな岩の重り合つた山が聳える。そのうへには廢れた古城が――サン・セルヴンドーの古城が、生々しいまでに鮮かな代赭いろを空の深　蒼海色のなかに浸してゐる。

忽ち眼のまへに現はれたのは、タホ河に架したアルカンタラの橋だ。羅馬人が架したのをモール人が修復したといふ橋だ。十三世紀の昔からかうして横はつてゐるのだ。この古い怪奇な魅力を持つた　のうへを　自分は手を組みながら深い無言のなかに歩む。あの南佛はニームのポン・ド・ギヤルドの橋の下に立つてジヤン・ジヤツク・ル　ソーが、『我羅馬人たるを感ず』と言つたと傳へられてゐることが、忽ち頭のなかに閃いた。今かうして歩いてゐる自分は、まことモール人でなくて何であらう……

下手を見ると朱いこゞしい花崗岩が黄濁のタホの流れを潴き止めるやうに立つてゐる。その嶮しい岩の上にはまた何といふ優しい綠のいろ！　まるでそれは什草のやうに柔かく匂やかだ。

ソカドヴエルの廣場。――アルカンタラの橋を渡つてしばらく坂路をのぼると其處に出る。トレドの町の入口だ、そしてまたトレドの町の賑はひの中心だ。この廣場の眞中には――西班牙では何處の廣場でも見られるやうに――大きな石の噴水盤があつた。美くしく眩ゆい日が、その水のうへにきら〳〵と黄金粉を撒き散す。噴水の周圍には、日曜日の晴衣を付けた子供や女やらが寄り集ふて、ほがらかな笑ひ聲を高々と響かしてゐた。

我々の宿のガルニツケといふのは直ぐこの近所であつた。

……畫家のO氏は言ふまでもなく先づエル・グレコの巡禮を遣らうではないかと言ひ出した。パレスが『トレドの秘

密』に依つてこの畫家の偉大を限無く訓へられてゐた自分も、無論異議はなかつた。一寸顔や手やを洗ふや否や宿の男を案内人にして我々は外に出だ。

屈曲のはげしい狹隘な石の道が上下しながら我々の歩いて行くまへに現はれた。我々の歩む道に添ふた家の中に店を構へた所とては一箇所もなかつた。そして何れも、壁が厚く窓が少なかつた。それは道幅の狹さと相俟つて夏の烈しい熱さから脱れるために他ならなかつた。然しながら一方日の明るさをば充分に取り入れる爲めに、各戸必ず內庭(パチオ)を持つことを缺かさないでゐることが、夫々玄關から覗くことが能きた。濃い綠のいろ、赤や紫やの强い花のいろ、そして涼しげな噴泉の燦めき。――これが薄暗い玄關の彼方に搖めく外光のなかを繪のやうに動いて見えるのであつた。が人の影とては無かつた。

玄關の上には夫々家の紋章が木彫美くしく揭げられてゐた。

何といふ數多い寺院の町であることか！　我々は一寸した廣場に出る每に屹度そこには寺院が普通の家の褐色した壁に隣つて聳立してゐるのを見るのであつた。その多くは何れも阿剌比亞とゴチツクとルネツサンスとの奇異な混淆であつた。然し、なかには純粹のゴチツクを見ることもでき、またはエル・クリスト・デ・ラ・ルスの寺院のごとく全然阿剌比亞の樣式のみからなつてゐるものを見ることもできた。かうした夥しい多數な寺院の上に一寸通りすがりの眼を投げたけれども、かの基督教文明と回々教文明との烈しい葛藤の姿をあり〳〵と目前に、はた融和の姿を感ずることが能きる氣がするのであつた。

エル・グレコの作品は、多くかうした寺院のなかに收められてゐるのであつた。

本寺(カテドラル)を、エル・トランジトを、二つのサント・ドミンゴを、サン・フアン・バウチスタを、サンタ・マリア・ラ・ブランカ

を、サント・トートを、サン・フアン・デ・ロス・レーエスを、我々は何といふ生々した感情の姿を胸に燃しながら訪ね廻つたことか！　晴陰につゝまれた此等の古寺のなかの冷たい不動の空氣を通して、エル・グレコの光輝に滿ちた畫面が薔薇の匂ふが如くに開いてゐた！　それから、グレコの家（カサ）と稱せられてゐる建物、あの十二使徒の畫や『トレド全景』やを收めてゐるムセオ・グレコ。――自分は、パレスがこのトレドの滯在を遠くバイロイトの滯在に比したことを憶ひ起した。全くそれは藝術のエルサレムに他ならなかつた！　何といふ豐かさ何といふ貴さ、何といふ美くしさ。それは繪畫といふよりも更に超えたものだ。寧ろそれは音樂が、――奇異な不諧音の、然も何とも言へず美くしい音樂が、そのまゝに色と形をとつて現はれ來たのだと言つていい。それは幻想だ。夢だ。現實の彼方だ。杳かからの聲だ。聽き馴れない、然も何といふ親しい聲だ。

グレコが希臘はクレートの島に生れたのにも拘はらずこのトレドに移り住んでから何よりもこの地を深く愛し續けて遂に死ぬまで此處を立ち去らなかつたといふこと、從つて彼の制作はこのトレドの愛から創り出されたものと言へること、即ちパレスの所謂『グレコは予にトレドの秘密を說き明した』ものであること、――これを如何して自分は否定しやう。然しながら自分の眼には、このグレコが何よりも雄辯に先づトレド人の生活を習俗を顏を手を語つてゐるものであるとはなすことが能きなかつた。グレコが自分に語つてゐるところは、トレド生活ではなくて、更に杳かな更に深い生活であつた。――それは華麗にして清淨なる魂のいとなむ生活の世界であつた。風俗や容貌やの記錄ではなくて、魂の啓示であつた。その畫布に現はれた不思議な構圖、その鮮やかな色彩、その姿態、それは什麼微細な點までもグレコの息がふかぶかとかゝつてゐるのを見る。それは、クレートの眞蒼な海の上を吹いた微風とトレドの町を吹くシエラからの微風とを交へた息ではあるけれども、正しくこれは彼の魂の底から自ら（おのづか）らに吹き渡つた息にほかならなかつた。彼は愛

するトレド人と生活してゐることを欣こんではゐたらうけれども、然も彼の心は常に孤りで寂しかつた。高貴な魂の所有者の誰もが味はねばならぬ孤獨を、彼もまた烈しく味つてゐた。――それを自分は、彼の制作から感ぜずにはゐられなかつた。……

……エル・トランジトーの寺を出て近くのパセオ・デル・トランジトーの些やかな廣場に足を停めた頃は、もう日は彼方ロス・チガラーレスの丘陵越しに落ちかけてゐた。タホ河が眼の下に異樣な燦めきを返しながら流れてゐた。その崖に近い小徑に並べられたベンチに腰を卸して自分はしばらく息を付いた。

あれほど濃い碧色で輝いてゐた空　落日とともにその色と光とが消して行つて、今は何とも形容しがたいほどの重々しい靜かな、澱んだやうな蒼白さを帶びてきた。その壁のやうにじつとしてゐる蒼白い重さの下に壓し付けられたやうにして、一團の灰白色をした立體的の家屋が、息を凝してゐる光景は、――何と言つても神秘な『東方』の姿であつた。

奇異な節を持つた唄が、その邊から湧いて來た……

サン・マルチンの橋が、――阿剌比亞風のアーチを持つた古い橋が、夕靄を透して下の方に眺められた。主人はベンチから立ち上つて、その橋の方にと曲折してゐる坂路を辿つて行つた。汚ならしい着物、たゞの惡さうな顔、そうした何人かの子供が爭つて遣つて來た。『シンキートー！』かう口々に言ひながら、手を出して錢をねだつた。その子供たちの髮に眼に皮膚に自分は異體の知れぬ混淆を見た。それは、建築と同じやうに、阿剌比亞猶太と歐羅巴との錯雜であつた――煩さゝに堪へ得ないで叱りつけると、後の方から小石などを投げてよこした……

サン・マルチンの橋を渡つた頃には、日はまつたく暮れ果ててしまつて、その邊りが暮方の色合に融け込んでゐ

た。タホ河の燦きは消えて死んだ瞳のやうに重く澱んでゐた。

橋を渡り切つて、路傍の岩に腰を卸し、今は河向ひになつたトレドの町の仄かな薄暮の姿をつく〴〵と見遣る。灯がぽつ〳〵と點いて行く。空は乳のやうに白つぽく暈けて見える。本寺（カテドラル）の尖頭が黒い枝のやうにその空にさゝつてゐる。星が一つ、二つ。サン・マルチンの橋の上を渡つてゐる驢馬の頸に付けた鈴の音が、この重々しく靜かな空氣のなかを際立つて爽やかに鳴り渡る。その橋の袂の巨大な城砦の姿、その阿剌比亞式のアーチ。

自分の心は何時か數百年の昔に返つて行く……

十一月八日

……美くしく晴れ渡つた朝だつた。

また本寺（カテドラル）に足を向けた。サン・マルチンの橋の傍から眺めた時には、その美くしい姿を一目のうちに見渡すことが能きたが、今町のなかにあつて近くその堂宇を見やうとすると周圍に立て込んだ人家に妨げられて、唯南方に向いた面（ファサード）を見ることが能きるだけであつた。然しそれだけでも心の滿足はあつた。純黒と純白との大理石の交錯。パレスが『アンダルシアの少女の髮に、コルドヴの香り高き石竹の花にも似通ひて官能的なる豐かさ』と言つてゐるその色彩。——

内部の裝飾の華麗と豐滿にも増して自分を欣こばせるものは、まるで林のやうに立ち並んでゐる巨きな柱の群だ。それは全く不思議な森林の美くしさと神秘とだ。天頂を仰ぐとその柱の林は一樣に見事なアーチをつくつて、それが彩玻璃窓を通して射してゐる五色の光線のなかに、柔かな肉體のやうに煙つてゐる。燭臺の仄かな黄金いろの　のゆらめき

と流衆にけぶつた香煙のもつれとが、この彩玻璃越しの華やかな光に融け込んで、大理石の林の間を音もなく流れてゐる……そのなかにひゞき渡る禮讃の聲、靜かに歩く人の跫音。

世紀から世紀を超えて、些かの變移も見せずにかうした世界がある！自分は冷たい碧大理石の上に手を置きながら、この幽暗な世界のなかを河のごとくに流れゆく壯嚴な連禱のひゞきに、長いこと聽き入つたのである。

……サン・フアン・バウチスタの僧院の方角に足を向けると間もなく、ヴィザグラの古風な門にかゝる。驢馬を牽いた市人が、煙を吹かしながら長閑そうに幾人も幾人も通り過ぎる。日はあくまで燦やかしい。あたりの樹々は春のやうに綠があざやかだ。杳かにはシエラの山影が夢のやうに微かに浮んで見える。

サン・フアン・バウチスタからサント・ドミンド・エル・アンチクオ、それからムセオ……と、我々はまたグレコの巡禮を繰返すのであつた。自分は益々彼の偉大に心が牽かされるのに禁めがたいのを感じた。ひつ[illegible]りなしに溜息が自分の口から洩れた。

……晝餐を宿で攝るべくぶらぶらとタホ河の岸に添ふてアルカンタラの橋の方に足を向ける。空はおどろくほど眞蒼に輝いてゐる。その烈しい色と光のなかに、トレドの町の淡い灰色は消え失せてしまひはせぬかとまで思はれる。この奇異な對照は、……どう見ても阿剌比亞の情景に他ならなかつた。

タホ河の對岸はロス・チガラーレスの逞ましい形の禿い山だ。そのこゞしい岩の下をタホの濁流が日の燦きを散らしながら流れてゐる。白い道がきらきらして、我々の足許から上下しつゝ遙かずつと河岸に添ふて走つてゐる。白茶けた四角な小家がいくつ[illegible]この路傍に日を浴びて立つてゐる。家のまへには黑い頭巾を被つた母親が、子供を片手にしてしきりと[illegible]してゐる。小さな驢馬に乗りながらこの坂道を下りてくる大きな[illegible]の老人がある。あくまではつきりとし

た明暗。眩ゆいほどの日光。その空のいろ。

畫家のO氏はこの景色を餘念もなくスケッチしてゐる。自分はまた町で買つてきた燒栗をポケットから摘み出しては口に入れる……。

午餐をすました。自分はまたしても本寺(カテドラル)を訪ねた。もう日は西に傾いてゐた。内部は不確かな影に充されはじめた。白と黄金がその朧ろげななかにちら〱してゐた。聖壇の動く焰。煙の罩めたやうな彩玻璃の色と光。悲しみと夢と慰めと……

五時半の汽車でトレドを立つことにして、宿を出た。アルカンタラの橋の上から、廢れた古城を眺めると、落ちかゝる日を受けてしよんぼりと立つてゐる。タホ河の岸には、赭土のうへを白や黒やの羊の群が聲もなく動いてゐる。その羊の群がつてゐる邊は日が翳(かげ)つてゐるけれども、それに續いた丘には眞紅な夕日が刺すやうに照つてゐて、赭土のいろが血のやうであつた。サン・フアン・バウチスタの病院はその上に聳えて、蒼白い幽靈のやうに見える。——

汽車は時間通りに動き出した。日は全く落ちた。トレドの町にはもう燈火が點(つ)きはじめた。タホ河畔の森や丘やは、匂やかな薄明のなかを浮彫のやうに見える。去る思ひは自分を侵ふた。自分は言葉もなく車窓に凭りかゝつて消えゆく町を、丘を、森を、寺を、古城を、眺めつくした。

かなり汽車は進んでも、薄暗のなかに町の燈火が寶石のちろめくやうに燦いて見えた。

……八時近くマドリツトに着く。

十一月九日

プラド美術館のなかに一日を送る。あゝエル・グレコー
夜サルサイス座に大デユマの作『ナンシイ』を見に行く。西班牙の風俗、西班牙の音樂、西班牙の踊り……

アンダルシアの旅

十一月十日

……コルドヴ、セヴイジヤ、グラナダ、そうしたアンダルシアの地方を指して旅立たうといふ日になつた。自分孤りで、と思つてゐた所を立つ間際になつて畫家のO氏が急に行を倶にしやうと言ひ出した。

雨のなかを二人は南部停車場さして馬車を驅つた。もう日は暮れて、賑やかなサン・ベロニモの通りは燈の海のやうに見えた。

滿員に近い車室の一隅に腰を卸して、自分は今更にこれから我々が赴く土地のことを樂しげに想ひ遣つた。西班牙のなかの西班牙、――ビゼーの名曲『キヤルメン』のなかの土地、モツアルトの名曲『ドン・フアン』や『フイガロの結婚』のなかの土地、さてはロシニの『セヴイラの理髮師』のなかの土地。然しそれにも増して自分を烈しく蠱惑したのはかのドビユシイの『イベリア』の曲やシヤムブリエの『エスパニヤ』の曲、さてはラヴエルの『エスパニヤの時』に描き出された姿であつた！　その數々の美くしい異樣な音樂の韻律が、雨のなかを走る汽車の車輪の音にからまつて自分の心に泛んでは消え、消えては泛んだ。

夜の汽車に揺られた自分も、なか／＼睡りに落つることが能きなかつた。……

十一月十一日

氣が付くともう朝だ。それに、何といふ美くしい晴れ渡つた日か！　その鮮かな日の光を浴びて、わがアンダルシアの野が橫はつてゐた――

遠い地平線。のびのびした土地の傾斜。その上に光つてゐるとげとげした形の緖いろの村。橄欖の林。動いてゐる羊の群、鍔の廣い帽子を冠つた農夫。眞紅な前垂をした女。畑にゐる鳥。

十一時半に汽車は大きな停車場に停つた。コルドヷである。羅馬時代の盛んだつた都だ。モールによつてイスラムの首府となつた都だ。三百ほどの回教寺院を持つてゐたことがあつた都だ。それが今は、『町と海岸と島と』を書いたアーサー・シモンズの言葉を借りれば『白い、悲しい、物靜かにも艶な（ホワイト・サツド・デリケートリー・ロマンチツク）』所となり果ててゐる町だ。

我々はこの古い廢れた土地に先づ足を踏み入れた。

然しながら我々を旅館へと運んだ馬車は、到る所で滿員の故をもつて斷られることになつてしまつた。我々は結局このコルドヷに今夜を過すことは諦めねばならぬことを知つた。夕方五時半にセヴイジヤを指してこゝを出る汽車がある、それまでに一通りこゝを見終ることにしやう、かう我々は話を極めるの外はなかつた。

兎も角も晝餐を攝らうと、オテル・エスパニアといふ家にはいつた。帳場の者もガルソンも誰ひとり西班牙語以外の言葉を解しないのには不便を感じたけれども、またそれだけに眼を舌を心を樂しませるものがあるのを感じた。內庭（パチオ）に並べた椅子の一つにゆつくりと腰を卸して、細かい噴水の音を樂しみながら、投げ出した足を靴磨きに端念に磨かせてゐることも、食堂（コメダス）のなかで口にした白葡萄酒（ヴイノ・ブランコ）の柔らかな味も、コシドーと稱ばれる米を交へた料理の味も、さては、隣りに坐つた若い女の髮に飾つた大きな櫛も、どれとして西班牙深く來たことを想はせないものはなかつた。

頼んだ案内人が還つて來た。二人は外へ出た。日が黄金のやうに燦いてゐた。トレドやバルセロナやらで親しんだ狹い屈曲した石の道が、また我々のまへに現はれた。壁の厚い窓の少ない白つぽい建物が、靜かに立ち並んでゐた。扉口から内庭が見える。草花が美しく咲き亂れてゐ、蔓草が青々と壁を匍つてゐるのが、石に疲れた眼を樂しませて呉れた。

我々は本寺のまへに出た。この本寺こそ、今のコルドヴの持つ唯一つの寶であらう。同教寺院を直して聖母マリアを祀ることになつたとしても、それは依然として不思議な夢に充たされた異教の寺院である。

眞蒼な空のなかに聳立してゐる本寺の前衛をなすアルミナールの塔！ その塔の門衛はプエルタ・デル・ペルドンと稱ばれる。その塔と門との華麗な奇異な感覺的な形と色とは、先づ旅行者の心を限り知れぬ阿剌比亞の美しい夢のなかに溺れさせるものがある 『東方』の豪華。この言葉の含む意味が、これだけでも判る氣がする。

しばらく眺めつくしてから、その門をくぐると我々は不意に廣々した中庭に置かれる。大きな橙の樹がその庭を美くしく飾つてゐる。『橙の樹の内庭』と稱ばれてゐる所がこれだ。その濃い緑の蔭かげに累々と黄金の實をつけてゐる。強い日の光はその橙の黄金色を燦やかしその柔らかな匂ひを撒き散らすのであつた。

内庭の眞中には大きな大理石の小盤があつて水が豐かに鳴りわたつてゐる。アルミーダの泉だ。代赭いろの水瓶を手にした女たちが、その水を汲みながら、ほがらかな笑聲を交しあつてゐる、その、濃黄いろな顔のいろに黒い瞳は美しいろ。不思議な謎をたゝへてゐるその眼。そして口にしてゐる言。――

自分たちもその水盤に寄つて片手を冷たい大理石に觸れながらその水を口にした。――モール人もかうして飲んだであらうその水を。

案内人に促されて、寺院のなかに足を入れることにする。入口の大きな佈を番人が揭げてくれる。それをくゞると、

おゝ、そこに現はれた光景！

我々は綠と金との橙の樹の林から、突然に白と赤との大理石の柱の林のなかにはいつた。生きた阿剌比亞模樣の林、——それよりもあの『千一夜物語』のなかの寺院。それは不安と快樂との不思議な交錯だ。夢と現との奇異な配列だ。『アルハムブラの宮殿でモール人の詩を味つた自分は、このコルドウの回教寺院でコーラン經を味ふことが能きた』と言つてゐるエドガル・キネの言葉のやうに、この生きた林は、そのまゝにコーラン經だ、——美と壯大と果なき孤獨と荒野の宗教とのコーランの敎の姿だ。そうだ、自分はいまイスラムの心臟のたゞなかに立たせられたのだ！

我々は基督敎の寺院を見る每に、その神秘その夢幻に取り卷かれながらもなほ且眞の奧に煇いてゐる『理性』をはつきりと感ぜざるを得ない。理性の生むだ科學をもて、法則をもて、必至をもて、彼等は寺院を建て、飾つてゐる。それが、この回敎寺院のなかに立つて見廻はしたときに、我々が先づ感じる所のものは、理性ではなくて氣まぐれだ——氣まぐれの法則だ。論理とか經驗とか原則とか自然とか、そんな言葉や精神は彼等にはない。彼等にあるのは、幻想だ、夢想だ、錯感だ、渦卷だ、——底知れぬ獨創だ。これが、コーランを生み、またこのコルドヴの寺院を生むだのでなくて何であらう！

柱列の不秩序、白と赤との配色の奇異、——この全體が創り出す音樂は、まことにアラーの聲その　のであつた。恐怖と蠱惑との交錯、氷と炎との融和であつた。取りも直さず『幻想』の美くしさであつた。

自分は、獸のごとき慾をさへ自分の身に味ひながら、この幻想の林のなかをうろ〳〵と彷徨したのであつた……

立ち去るまへに、別れの眼を天頂に投げる。アーチの大理石の赤色が太陽の光を受けて火炎のやうに閃いてゐた。

……本寺(カテドラル)をうしろにしてしばらく行くと黄いろな河に出る。グアダルキヴイルの河だ。その橋を渡つて、紫いろを帶びた曠野を走る道を辿つて行くと、杳か彼方はセヴイジヤの町であるといふ。カラホルラの塔といふ阿剌比亞風の塔の建つてゐる橋畔に佇立しながら、その道の彼方を眺めた眼を返して本寺を前景としたコルドヷの寂しく廢れた姿を眺める。あゝたゞ思ひ出のみ！といふやうな氣が溜息のやうに湧いて出る。町を越してシエラ・モレナの山脈が空の碧いろに染まつたまゝ起伏してゐる。

アルカザールの庭園。河に添ふたこの庭園にはいると種々の花の匂ひが一度に鼻に簇まつて來た。緑の繁り、花の盛りが夏そのまゝの姿であつた。日本で見る菊の花や葉鷄頭や、さては水盤に泳いでゐる金魚やを見たことも嬉しかつた。庭を掃除してゐた男が、にこ／＼しながら菫の花を摘んで我々の胸に指して呉れる。それを見て案内人はヘリオトロープの小さな花を摘んで我々に與へる。鼻に近附けるといい匂だ。水盤に水が涼しげに落ちてゐる。飲めるか？と尋ねると、これはシエラ・モレナから落ちてくる水です、といふ。口を横にしてその水を咽喉にしてゐると、そのシエラ・モレナが、庭の大きな棕櫚の彼方に美くしく横つてゐるのが眼にはいる。——

町に戻る。眠げな、音もしない白つぽい通り。鐵の格子の付いてゐる家々の窓から時たま若いコルドヷ娘の顏が泛び出る。不圖シモンズの文章を想ひ出す。「——夜になるとコルドヷの町は早く眠りに就くので、その邊が空屋のやうにしんとする。この沈默に充ちた通りをしのびやかに歩いて行くとき、人は不意に、大きな鍔の帽子を冠りマントを身にした人影が鐵の格子の窓に凭りかゝつてゐるのを見出すことがある。と同時に人はその窓のなかに、生々した顏、黒い眼、そして髮のなかの薔薇の花のあるのをば覗くことが能きるだらう……」

自分は微笑しながらそうした家のまへを歩いて行つた。

……コルドヴよ去らば！頭を出した汽車のなかから、離れてゆく静かな町を殘り惜しげに眺めた。大きなカテドラルの塔が何時までも屋根越しに見えてゐた。

日は落ちたが空のいろは焰のいろのやうであつた。線路近くの大きな龍舌蘭や覇王樹やらが怪異な姿を黑々とその焰のやうな空のなかに浮立たせては消えてゆく。遠い野の此方彼方に燈火がちら〳〵する。窓からはいつて來る風は爽やかに車室を充たす。

セヴイジヤ着。九時半。オテル・シモンといふのに馬車で直行する。可成りに立派な旅館。

晩餐の時に怜にしたマンサニージヤの酒は舌を欣ばした。澁味のかつた雅醇な味のする酒。例の『キヤルメン』の第一幕の終りの方で彼女が歌ふ『セヴイルの營所の近く……』の唄のなかにあるマンザニーラを飲み合はうといふ文句で覺えてゐたその酒の名だ。あゝそう言へば、このオペラであゝもお馴染だつたそのセヴイジヤの町に、疑もなく自分は來てゐるのだつた！自分は今更にそのことを考へて、子供のやうに心が踊るのであつた………

窓から外を見ると、カレ・ヴエラスケスの明るい賑やかな通り……

十一月十二日

……窓紗(カーテン)を引くと日光が一杯に部屋に溢れる。そうだ、斷えざる輝きの町と稱はれ、日光と花との町と言はれてゐるセヴイジヤの夜が今明けたのだ。快樂の町、歌と踊の町、笑ひとお喋べりの町、女の、戀の、眞の町、さてはドン・フアンの町、フイガロの町、ル・シツドの町、キヤルメンの町、——あゝ今その町が自分の眼のまへに明渡けつたのだ。

カレ・セルヴンテスの狹い通りに立つて彼方を眺めるとゴチツク式の大きな本寺(カテドラル)が朝日にきら〳〵輝きながら聳立

してゐる。大きい鍔の帽子を冠つた男が、眞黒な薄紗を頭まで掛けた女が、さては水牛のやうに大きな角を持ち鈴を頸にさげた牛が、それからそれへとこの狹い石道を往來(ゆきゝ)する。子供の高らかな笑い聲。ひつきりなしの人々のお喋べり。車輪の石を噛むひゞき。寺の鐘の音。何といふ賑やかな快活な景色……歩き出す。一寸した廣場が現はれる。棕櫚の樹が林のやうに繁つてゐる。その下に水を賣つてゐる男。『水(アグア)！水(アグア)！』と怒鳴るその聲、茶褐色の水瓶から並々とつがれた硝杯を、眼を細くして唇にしてゐる人々の群。……

本寺(カテドラル)のまへに立つて今更ながら天を指すゴチックの美感に見惚れてゐると、にやにやと笑ひを浮べながら瘦身の男が傍に遣つて來た。案内人であるといふ。佛蘭西語が話せるか？と尋ねると、え少し(アン・プー)は、と答へるので雇ふことに極めたが、間もなくこのえ少し(いゝ)は全く文字通りに少し(いゝ)で、まつたく五つ六つの語彙の他は知りもせず話もせないのに氣が付いた。然し何かといふとにやにやとみ(あれ)を請ふやうに笑を浮べるその淺黒い顔を見ると、途中から追返へす氣もなくなつてしまつて、そのまゝに伴つて行く。Rの音を烈しくひゞかせながら、うるさいまでに間斷なくこの男の口から言葉が、――我々の解し得ない西班牙語が耳にと飛び込む。南部西班牙の邊ではお喋べりが一つの生きる樂しみになつてゐる、――から言はれてゐることまでが思出された。

この本寺(カテドラル)にもコルドヴの橙の内庭(パチオ・デ・ロス・ナランホス)のやうに橙の樹に充ちた内庭を通つて、本堂にはいれるやうになつてゐる。

熱い太陽、爽やかな微風、柔かな橙實の匂い、その黄金いろの煌めき、絶えず音を立ててゐる噴泉、――かうしたものを見ると『東方の休息(レポー・ダリアン)』などと言はれてゐる言葉の意味がありありと判る氣がするのであつた。子供や女が、そここゝに賑やかに遊び戲れてゐた。

羅馬の聖ペドロの本寺に次いでその壯大を誇つてゐるといふこのセヴイリヤの本寺！その内部の一部には[illegible]

しがたき感動を自分に與へたのであつた。昨日コルドヷの本寺を訪ねてイスラムの心臓に觸れたことを感じた自分は、今このセヴイジヤの壯嚴な本寺のなかにあつて加特利精神の最も深い聲をありありと聽くことが能きた氣がした。太い重い柱の列が何といふ強い力で大地を押してゐることか。それにまた何といふ烈しい力で天にまで突き通してゐることか。その圓柱に刻み込まれた垂直な太い無數な線條は見る人々の心を吸ひ込むだまゝずつと天の方へと上つて行く。何といふすばらしい清淨と節度と力とがこゝに溢れてゐることか！ この單純！ しかもこの單純の與へる豐かさ美くしさ！ あゝそれこそ『理性』の持つ最も美くしい姿だ。『知慧』の持つ最も充ちた姿だ。そしてそれこそゴチック精神の、加特利精神の、一番奧からの聲なのだ。

朝のお勤めの禮讚が、圓柱の林の彼方に湧き上つてゐた。自ら自分の眼には香煙につゝまれながら微笑してゐる聖母の姿が泛んだ……

この靜かな情景を眺めながらも自分は幾多の本で讀んだことのあるこゝの本寺で行はるる舞踊のことを想ひ遣らずにはゐられなかつた。その舞踊の儀式は中世紀以來變化なく今日にまで及んでゐるといふ。十六人の少年が(Seisesと稱ばれる) 碧色と白色との衣裳を纏ひ、羽毛の附いた帽子を冠つて、管弦に合せながら口々に聖母を讃へる唄――O mi, O mi amada Immaculada!を誦して踊るのである。『詩、聖歌、聲樂、器樂、彫刻、繪畫、衣裳、香料、是等あらゆるものが一つとなつてこの舞踊を生み出したのだ』――かうした言葉をシモンズも言つてゐたやうに、それはこの都の持つ性情をこの上もなく自然に現はしたものと言へるであらう。彼等は母に對してさへも、隣人に對するがごとく笑ひと歌とお喋べりとをもつてしてゐるのだ。彼等にとつては寺院もまた人生の饗宴場の一つに他ならないのだ。

寺院を恐怖と歡樂の殿堂となしたと見られるモール人、そのモール人の不思議な血が矢張りこのセヴィジヤ人の血管

のなかに流れてゐるのだ。そう思へばこのゴチックの壯嚴な建物の暗陰ななかに異教徒の奇異な光を帶びた眼がひそかに睨いてゐるのを感ぜずにはゐられなかつた。――

本寺(カテドラル)の傍に聳立してゐる阿剌比亞風のラ・ジラルダの塔といふのに上つて見る。階段を用ゐずに自然と爪先上りに上つて行く。阿剌比亞及びヴイジゴートの樣式から出來てゐる窓がそれからそれへと展望を縱にさせて呉れる。とう〳〵一番頂上まで上る。

眼がくら〳〵するまでに燦ゆい空と陽のいろと。眞白い壁の家が重り合つてゐる。そのなかから古い鼠いろの圓頂(ドーム)やら塔やらを持つた寺院が無數に突き出てゐる。あれがサン・ロレンツオ、あれがサン・サルヷドール、あれがサンタ・カタリーナ、……案内人は詩でも讀むやうにしてそれからそれへと寺の名を口にして指呼して呉れる。コルドヷの古都を洗つて來たグアダルキヴイルの流れが森を抱いて美くしくうねつてゐる。その煌き、四角な建物は煙草工場（キャルメンの舞臺だ！）圓い建物は鬪牛場(プラサ・デ・トロー)（これもまた！）と、これも案内人が指呼して呉れる。東の方を走つてゐる一帶の丘陵をのぞいては、限りのない平野で、地平のほとりは薄い霧が銀いろに煙つてゐる。青い空にひゞき交はす鐘の音……

モール人がその城砦とも爲しまたその王の居住とも爲したと言ふアルカザールはこの塔のすぐ隣りになつてゐる。何といふ絢爛、何といふ華麗、何といふ色彩、何といふ馨香。自分は不圖華美極まる陶器のなかにゐる感じを起した。これは東方の「路易十四世」だ！　果實が將に落ちやうとするその爛熟、その豐滿。自分は今こそ「東方の豪華」の姿相を一目のうちに見ることが能きた。果敢く去つたモール、亡びてしまつた阿剌比亞、――自分はそゞろに溜息を洩らさない譯にはゆかなかつた。

……マドリッドで見た『ドン・フアン・テノリオ』の舞臺面を頭に想ひ泛べながら、自分は靜かな古風な辷つた通りを歩いて行つた。眞白な壁、その上の眞蒼な空。草花の鉢を置いた窓から横顔を覗かしてゐる少女。何處からか聽えるカスタネットのひゞき。確かにその邊からドン・フアンが現はれて來ねばならなかつた……

自動樂器を色どつた車に乘せて、一人の男が歩いて來た。ムリジョの家と言はれてゐる古風な家の近くに來て停つたかと思ふと忽ちその樂器を動かしはじめた。西班牙踊りの烈しい調律が、不意に靜かな町をつゝんでしまつた。家かげから現はれた二人の女の子が通りの眞中で手を組んで踊りはじめた。——

晝餐を旅館ですましてからまた町へ出る。サン・サルヴドールの寺院、ピラトの棲むでゐたといふ家(カサ)、それからムセオ、かうしたものを見てから我々はグアダルキヴイルの河に架したイサベル二世橋の方に歩を向けた。通りは何處も綺麗で明るかつた。今まで歩いて來た西班牙の都市のなかでこれ程の綺麗さの所はなかつたと言つてよかつた。イサベル二世の橋の上に立つて見ると、無數の船が河の面をつゝんでゐる。はる〴〵とグアダルキヴイルの河を遡つて來た大洋からの船舶であつた。これを見ても、セヴイジヤの町は古い傳説のなかのみに息をついてゐるトレドの町やコルドヷの町やとは異つて、絶えず新時代からの爽やかな風を享けてゐることが了解される。これが、かくも町を明くしまた綺麗に保つてゐるのでもあつた……

闘牛場(プラサ・デ・トロス)のまへから埃つぽい石道をしばし辿つて行くと、正面に大きな正方形の古風な建築が聳立してゐる。煙草工場だ。

程近い公園の隅にある茶店に腰を卸してこの建築を眺めながら暫く休む。今更に巴里のオペラ・コミツクの舞臺面が想ひ出される。煙草女工——かう言へば色消し——であるが、此處の特別な言葉になつてゐるシガレラス、Cigarreras

その娘たちはあの工場のなかで働いてゐるのだ。華美で放埒で傲慢な娘たち。笑ひとお喋べりと歌と踊とに充ちてゐる娘たち。キヤルメンの娘たち、ジプシイの娘たち。……が然し自分は不意に畫家ルノアールが言つたといふ言葉を思ひ出した。『文學者たちがあんなに頌揚してゐる煙草工女がどうだつて？　ありやほんとうにお化けだよ！』自分の美くしい想像は急に破れてしまつた。

然しながら先刻ムセオへと赴く途中偶々立ち寄つた菓子屋で見た二人の美くしい姉妹の姿を思ひ泛べることによつて、再び想像は蘇つて來た。黒の勝つたブロンドの髪を眞中から分けて眞紅な薔薇の花を結びつけ、象牙のやうに白くして冷たそうな額と纖細な頰とオパールのやうに變る眼とを持つてゐたその二人の娘の面輪は、店先に立つて居る我々を眩しがらせて折角の菓子の選擇までもいい加減なものにさせてしまつたのであつた。自分はその面輪を煙草工女のなかに持つて行つた。そして安心した――

それにしてもセヴイジヤの女性は概して言へば他と較べて左程美くしいと言ふことは能きぬことは確かである。然しながらその快活と機智に笑ひとお喋べりに充ちた明暗の烈しい表情（わけてその眼！）から我々が眞先に受取るところの魅力である。それは限りのない動いた豊麗となつて我々の眼を心を捉へることは確かであると言へやう。

……日は落ちた。その餘光が曇つた空に美しいヴエルミリオンを漂らせてゐる。黄いろな細かい葉を持つたアカシヤの並木が薄れ行く光のなかに震へてゐる。その並木の下の白い道を眞黒なマンチラを纏つた女が往きつ戻りつしてゐる。霧のやうに細かいアカシアの葉がその道にと落ちる……

立ち上つて我々は旅館に向つた。

夜。案内人に連れられて踊りを見に行く。暗い街のなかに一軒あか/\と灯の點いてゐる所がある。そこがダンシン

ダ・ホールだ。

突き當りが舞臺だ。見物席は上下に分れてゐるが、その下の見物席は廣々としてゐて、舞臺の合間々々にはダンサーがこゝまで遣つてきて客と一緒に踊り廻る。客はそれ〴〵珈琲とか酒とかを註文してそれを見ながら唇にしてゐる。と暇のダンサーが其處へ遣つて來ては煙草を吸ふ酒をねだる肩に手をやる……

舞臺の上の踊りは、二人のギーター彈きを他にしては單に手拍子足拍子を遣つてゐるに過ぎない男女の樂師(？)にかこまれたなかで行はれる。一人、若くは二人のダンサー。

ダンサーは大概は若い女だが、時偶男もはいる。女は重に眞白な長い着物を付けて美くしいマンチジヤを肩に掛けてゐる。最初のうちは割に緩かであるが次第々々に急調になつて來て、最後にはまるで一塊の情熱の炎と化する。カスタネフトの激しいリズム、床を打つ足の强いひゞき、花のやうに一面に開く裾、欲情の苦みと歡びに太れ上つたやうな胸、燃えあがる眼のいろと唇。荒々しい蠱惑的なギーターと手と足とのひゞきは渦卷となつて、彼女をこの上にも熱させ激させ欣ばせ苦める。

此等の踊りは明かに肉情にその根を持たしてゐる。それは可成りに烈しい性欲のパントマイムだ。然しながら、それを單に猥りがましく感じさせるにしては彼等の踊りは餘りに眞面目でもあり熱烈でもあつた。それは苦痛にまで近寄つてゐるものであつた。生命がそこで燃え盡すまでの所へ押寄せたものであつた。それは快樂としてよりももつと深くもつと烈しいものであつた。そうだ、やはりそれは鬪牛と同じなものであつた。鬪牛の血にまで突き進んだ快樂の追及が、やはりこの踊りの苦痛にまで突き進んだわけなのだ。

…… 何時の間にか我々の卓子にも若いダンサーが遣つてきた。眞青なマンチジヤに花模樣の東裝の着物、木綿の眞白

な靴下、然しそんなことよりもその不思議な眼尖は！　自分はあの阿剌比亞の愛の詩集『愛撫の園』のなかにある文句を想ひ出さずにはゐられなかつた。『おまへの眼は睫毛の間にあつて恰かも樹の枝のかげにある火の流れのやうだつた』とある『見知らぬ女』のなかの詩句を。阿剌比亞がそこに燃えるやうに揺めいてゐた！

……我々はしばらくしてから其處を出て宿に向つた。方々のキヤフエには燈火と莨の煙と酒と笑とが充ち溢ちてゐた。

十一月十三日

……セヴイジヤを十時の汽車で立つ。グラナダに向ふためである。

一望涯のない耕野。限なく晴れ渡つた蒼空。汽車は龍舌蘭や覇王樹が大きな屍のやうに並んでゐる丘に添ふて東へ東へと進んで行く。

……ボーパデイルの乘換驛を離れると間もなく日が山に落ちた。この邊になると山影が彼方此方に迫つてゐる。その山影の涼しい色や姿。微かに光る水のいろ。空の雅びやかな紅。うすく煌いてゐる新月。はづかしげに覗いてゐる一つの星。アンダルシアの野は今や靜かに暮れてゆく……

汽車は遲れて十時半にグラナダに着く。オテル・スイサ――車中で知り合つた西班牙人から教へられたアエルタ・レアルにあるその旅館に落付く。

馬車のなかから見た夜のグラナダは、道路も廣いし建物も近代風だし店も明いし。セヴイジヤ邊と較べると遙かに『歐羅巴』に近いことを感じさせられた。

十一月十四日

……歩一歩我々は阪を上つて行く。陽の燦き空の蒼さには變りはなかつたが、頰を吹く微風に冷にするまでにつめたい。黄葉した林越しにシエラ・ネバタの山影が眼の覺めるやうに純白に煌いて見える。――雪だ。その煌々する白さが深い蒼空にくつきりと輪廓を描いてゐる美しさは！　林のなかには水の流れる音がひゞき渡つてゐる。林泉のひゞきなどを耳にするのも久し振りだつた。自分は急に日本のことを思ひ出した――水は遠くシエラ・ネバタから引いて來たものです、と案内者は足を停めた自分に說明して吳れる。

プエルタ・デ・ロス・グラナダスを通りすぎて間もなく、我々は遂にアルハムブラの宮殿に達する。

モール朝の宮人たちが水浴を試みたといふ『香草の庭』（あゝその匂と光と蠱惑と！　我々は全く東方の唯中にゐる！）それからアーヴイングの麗筆でその月夜の美はしさを描き出してゐる『獅子の庭』（我々は幸にも日曜日にこゝを訪ねたのだ。見よ、爽やかな噴水の飛沫を浴びて日光に燦々してゐる獅子の姿を！）それから『床の間』（不思議な微光の密室。音樂と香料と花と裸女との部屋！）それから『秘密の室』（捕虜を入れた部屋だ。快樂の間の背にしのび寄つてゐるこの闇と空虛の部屋！）……かうした部屋から部屋へと我々は歩いて行つた。茅屋が一夜にして光明の宮殿になつたと書かれてゐる『千一夜物語』のなかの幻想が自分を侵ふた。自分はまぎれもなく此處此處の部屋に横臥したり歌誦したり水浴したりしてゐるモール人の姿を見た。眞紅な花のなかを蛇のやうにうねつてゐる白人の裸女の姿をも見た。デビラの音樂がひゞき渡るのを聽いた。蜜蜂と接吻とファドル・エル・ハジリの唄のひゞくのを聽いた。……

ペイナドールの塔。そこに出た時自分の惱ましい幻想は忽ちに消え失せてしまつた。自分のまへに現はれたのは、眩

ゆい外光のなかに揺れ蕩ふてゐる一幅の油繪であつた。——見事なる一帶の展望であつた。自分は吸ひ付けられるやうに阿剌比亞風のアーチでできてゐるその窓に凭り添ふた。

見下すと自分の今立つてゐる塔は高い高い塔だ。赭いろをした丘の上に垂直に聳え立つてゐる。その丘をめぐつて流れてゐるのはダローの河で、このアルハムブラ宮殿の數々の歴史からは離れられない河だ。河に添ふ白い道がくねりながら左方の丘の方へと上つて行く。その丘一面を絨氈のやうに蔽ふてゐる暗綠は、翔[illegible]樹の群だ。その暗綠の絨氈を立ち截るやうにして赤い壁が廢れた姿をして長々と走つてゐる。阿剌比亞人の城壁だつたのだ。その附近の丘に薄暗いいくつかの穴が目に入る。それこそジプシーの住居なのだ。——

更に北を見る。黄葉の林が黄金いろに燦いて次第々々に高まつてゆく。そして澁い綠りを煙らしてゐる橄欖の畑につゞく。その橄欖の小山がいくつか重り合つた彼方に、おゝ、白雪を頂いて碧空にかつきりした線を刻み込んでゐるシエラ・ネバタ！　熱い太陽の下に涼しい微風を送り、乾いた土地に爽やかな水の流れを淚り、宮殿を飾る爲めに白や黑や赤や茶やの見事なる大理石を送り出しゐるこのシエラ・ネバタは、更にこの美くしき姿を以てアンダルシアの野を淨化してゐるのである。それにアーヴイングの『アルハムブラ物語』に從へば、遠く海を航するものもこの白き山影を眺めては鄕愁の思ひを消してゐるといふ。——

自分は元來た阪を下りながら今更に遠く去つたモール人のうへに思ひを[illegible]めた。この絢爛な宮殿を今までに知つたいろいろの寺院や橋や庭園やまたは踊りや音樂やと綜合して考へて來ると、そこにありありとモール人の秘密が現はれて來る氣がした。戰ひと快樂と、——そうだ、美の爲めの美の追求。彼等には天國はなかつた、地上の樂園だけがあつたのだ。生きることの快樂が彼等の全部の生活だつたのだ。生きることと以上に彼等を强く惹き付けるものは遂に無かつた

のだ。寺院(モスク)もアラーもそれは決して本寺(カテドラル)や聖母やと同じものではなかつたのだ。彼等は全く何よりも『人間的』であることを恥としなかつた者だちだつたのだ。……

午餐をすましたのち我々は馬車を馳つて遠いカルツーハーの寺を見に行つた。本寺(カテドラル)にも行つて見た。ダロー河の緣を縫ふて薔薇いろに煙る夕日を浴びながら、ジプシイの群の住むアルバイシンの村の方にも行つて見た。

パセヲ・デ・ウエラノの並木通をゆつくりと馬車を馳つてゐるうちに、すつかり黄昏になつた。アルミハラの遠い山脈が桃色に暈けて、金紫にちろめく西の空を限つてゐる。道の兩側のマロニエの並木は半ば靑く半ば黄金いろになつてゐる。日曜日の穩やかな夕暮。賑やかに人々が眞中の步道を往來してゐる。家の窓から、草花を植えた鉢越しに髮の毛の黑い眼の美くしい女がいくたりとなく通る人々を眺めてゐる。

寺の鐘が空 鳴り渡つてゐた。

……夜、踊りを見にキヤツフエに出掛ける。ジプシイの踊り。

十一月十五日

……午後二時頃の汽車でこの町を離れることにしてそれまでの間をまたアルハムブラの宮殿とその庭のなかで過す。

昨日も登つたラ・ヴエダの塔の上にまた登つて世にも美くしい展望を飽きることなく樂しむ。東に見えるのは、アルハムブラの宮殿だ、それに續く黄葉の林だ そのさきの糸杉(シプレ)の生え揃つた丘陵だ。東北に見えるのは、ダウロの谿谷だ、覇王樹の密生してゐる丘だ、丘の上の赤い城壁だ、ジプシイのゐるアルバイシンの村だ。そのむかうに白く煌いてゐるのは言ふまでもなくシエラ・ネバタだ。西南に見える山影はアルミハラの山脈だ、その北に見えるのはアルフアカー

ルの山脈だ。西の方は廣々とした平野で、そこに白とブロンドとの配色の美くしいグラナダの町が白晝の夢のごとくに横はつてゐる。……そうした總ての上をかくやくと照し出してゐる太陽の光！

千四百九十二年の初め遂に力及ばずしてこの宮殿を敵手に委して遠く阿弗利加の彼方に立ち去らねばならなかつた當時のモール人の悲しみが自分の胸にもはつきりと感じられた。この美くしい景色、この綺麗な宮殿、この快い微風、これを捨てなければならなかつたモール人の寂しさと口惜しさとは！　然し自分とても今やこの土地を離れて北へと行かねばならぬ身なのだ。再びおまへを見る日が來るか如何かも知り難い身なのだ。モール人のその悲みが感じ得られないで如何しやう……

汽車はグラナダを離れた。大理石を藏してゐる氷のやうな白い岩の山が蒼空を劃してそれからそれへと續く。橄欖の樹につゝまれた白壁の町が其處此處に光つてゐる。羊の群が野に丘に動いてゐる。それを牧ふてゐる者の古風な姿。村へと走つてゐる白い街道と實業の並木。そして、シエラ・ネバタの山影は何時でも目のまへにあつた。

……モレダで乘換をする。日は西へ落ちてしまつた。あたりの山々の頂をいろどる雲の姿と、その深い色合は！　やゝ濁つた薔薇いろ、薄い桃いろ、碧玉の閃き、黄玉の仄かさ。それにシエラ・ネバタの頂の雪をいろどつてゐるその澄み切つた色彩の美くしさは！

薄明のなかを幾匹かの驢馬を急がせながら杳かに燈の點つた村を指してとぼ／＼と過つて行く農夫の姿も見えた。道もなき岩の間を彷徨ふがごとくに歩いて行く貧しい男の影も見えた。遠く羊を呼ぶ何の音も聞えた。

何時しか夕映は消えてしまつた。空には三日月の影がかゞやきはじめた。

……明日の朝はマドリッドに着ける。いろ〳〵と調べたいものもある。三四日は滯在して、それから北に向つて立たう。エスコリアル、ヴイアドリ、ビルバオ、サン・セバシチアン、——それからいよ〳〵佛蘭西にはいるわけだ。あゝ巴里を離れてもう彼是一月近くにもなつた！街の並木の葉もすつかり落ちてしまつたに相違あるまい。わびしい冬の霧があの明るかつた街を立て罩めてゐるに相違あるまい。それに雨と寒さとが。然し、その代りにはオペラが音樂會（コンセール）が繪の展覽會が、それに溫い暖爐（シユミネ）が書物が自分を待つてゐるのではないか？

……何時か自分は深い眠りのなかに落ちて行つた。（完）

時論

法學博士　吉野作造

議會記事を讀みて

○

世故慣れぬ朴柄な一靑年來りて僕に問ふ。議會とは一體何をする處です？ と。

大事な子供の健康を良くしやうとて、父母祖父母近親が集つて相談をする。養生をさせるがいゝの運動をさせるがいゝので一日をつぶし、扨て養生には牛肉がいゝ否卵がいゝの評議中々收らず、運動の方もまたテニスだボールだの議論に火花を散らす。愈々物を買ふといふに何處の舖がいゝで又爭ひ、やつと之が極ると使にゆく者の適不適で紛擾を繰り返す。とど擲り合が始つて警官が來る裁判所に訴へる辯護士に頼む。肝腎の本問は一體何時になつて埒が明くやら全で見當が付かない。

議會の徒らに喧々擾々として國利民福の本務を等閑に附する、宛も斯の如し。議會は一體何をする處かの疑を懐く者あるも怪むに足らない。

○

されぱと云つて議會は駄目だと匙を投げるのも亦早計だ。病人を前にして何や彼やの評議に無駄な時を費して一向埒があかないからとて、藥は駄目だまじないに限ると云ふ譯にも往くまい。罪は藥に在らず人間に在るのだ。今日の樣な議員の手に托されては、どんな物だつて國家の利益に活用さるゝ氣づかひは無さそうだ。日本今日の議會政治の不仕鱈に憤慨する者は、先づ攻撃の矢を議員其人に放つべきである。

尤も議會政治其者に元來何れ丈の價値ありやは自ら別問題だ。坊主が憎けりや袈裟までの譬の如く故なく議會に愛憎をつかすものの外、議會政治其ものに本質的の缺陷を論證せんとする者もないではないが、其の實際に於ける功過如何は、未だ我國に於て完全に實驗せられたと謂ふことは出來ぬ。何となれば、我國の議會が所謂選良の名に應はしい代議士の多數に依て指導利用されたことは、殆んど一度もないからである。

理論上今日の議會制度が近代精神の要求に照して何れ丈の意味を有するものかに就ては、今日學界にも色々の説明がある。僕はかね〴〵本誌上に於て、かの政治否認論を斥けて議會擁護の側に立つて來た。併し僕の擁護せんとする者は、議會といふ制度であつて、日本今日の現實の議會そのものではない。

日本の議會は、敵方からは勿論のこと、今や味方からも愛憎をつかされる程つまらぬものと成り下りつゝある。

○

今日の議員が自ら侮るの甚しきは言語道斷であるが、暫く之を別論としても、先づ如何に無用の言議に貴重の時間を徒費するかを見よ。

第一に質問といふものを見るに、能くも斯んな馬鹿〳〵しい問に腹も立てず答辯をするなと、つく〴〵政府委員に同情する樣なこともある。一つ二つの例を擧げん乎。曰くなにがし神社は立派な神社であるが、何故昇格の手續に及ばないか。曰く、電柱架設によつて人民に迷惑を掛けて居るが、政府の所見如何(二月七日豫算分科會に於て)。斯んな下らぬ質問は、議員銘々自制して出させぬ樣にしたいものだ。單に之ればかりではない。概して各般の事實の疏明を需むる底の質問は、成るべく簡單な文書の交換を以てすること、英國の例の如くしたいものである。議會は專ら討論の府である。本務以外の仕事に多くの時間を割かしむべきではない。

質問に藉口して意見を述ぶることも、我國議會の流行だが、之ももつと愼んで貰ひたいと思ふ。此點は昨今議長が八釜しく警告する樣である。併し議長がそれは質問事項外に非ずやと注意し、又は當局大臣が夫れは議論であるから答辯するの限でないと云ふものゝ中には、必しも斯の理由で一概に排す可らざるものもある。議會の本務が討論に在ることは先にも述べた。政府の執る所の策を非として其の理由を質し、其の主張の根柢を明にする爲に自見を披瀝するは、最も好ましい所である。此種の質問は寧ろ大に之を歡迎すべく、且つ十分の時間を割愛すべきである。

我國の議會の質問戰は、無用の言説を待つに寛にして有用の論辯を逸すること稍酷に失するの嫌はないか。

要するに僕は、我國でも佛國の例の如く質問の種類を二つに分ち、單に事實の釋明に止るものは主ら英國の成例に倣つて文書を以て簡明に濟まし、議論に亘るものは壇上に於て十分討議論明せしめたら能くはなからうかと考へる。

○

若し夫れ單に黨爭を繁からしむるに過ぎざる醜穢卑劣の問題

に至ては、其の多きこと我國の如きは恐らく世界に其の比類を見ないだらう。近頃最も奇怪なるは龍野某氏の御苑闖入事件である。氏名を詐稱して帝室の殊遇を窃むは憎むべき曲事に相違ない。併し之は堂々と議會の壇上に論ぜらるべき程の問題だらうか。事御苑に關するが故に一寸世人の視聽を聳てしめて居るけれども、僕等の考では、是れ寧ろ輕率無思慮より來れる一小過失にして、例へば市井の小童が御通輦を拜し奉らんとて過つて警戒線を突破したるにも比すべき程の事であらう。龍野氏自らが忠君愛國の念切なるものあり誤つて此輕擧に出でたと辯ずるのも滑稽だが、本人が既に恐れ入つて居るのなら之れ以上追及すべき問題ではあるまい。夫れを何ぞや、天下の大政黨を以て任ずるものが其黨員をして之を仰々しくも正式の問題たらしめんとは。之をしも徒らに無用の黨爭に汲々たるものと謂はずして何をか責むべき。僕は私に提案者の動機を想像して極度の不快を感ずるを禁じ得ないものである。

鳩山事件にしても同じ樣な事がいへる。鳩山氏の行爲に紳士として許容し得べき毫末の點もないことは申すまでもないが、大政黨が協議の上で告訴させたり、又議會の問題として議長の責任を問ふなど餘りといへば大人氣ない沙汰ではないか。多數黨の横暴に憤るもさる事ながら、敵を攻撃する種ならば外に幾らもあらう。滿鐵事件でよし、阿片事件でよし。殊に之等は其の究明が啻に敵を窮地に陷れ得るばかりでなく、又天下萬衆の疑を解く所以にもなる。斯くてこそ反對黨は漸次國民の同情を買ひ得るなれ。今の樣に政界が互に血迷うてゐては、政友會には固より疾うから望をおかないが、憲政會にも我々は事を托する氣にはなれなくなる。

○

反對黨は二た言目には大臣の責任を問ふといひ政府の處決を促すといふ。而して其の根據として擧ぐる所の所謂政府の失政なるものは餘りに雜駁を極めて居る。もつと問題を選擇して力を一點に集中せでは、折角の努力も其效甚だ薄からざるを得まい。

世の中に起つた總ての不都合は、一から十まで政府の責任といふことは出來ない。北越に大雪崩があつて澤山の人が死んだといへば、鐵道大臣の責任如何と詰め寄る。部下に山憲の樣な極道者が出來たと云ふ樣な事は、内閣を組織するもの政友會たると憲政會たるとに拘らない。之れ等については一般に監督不行屆とか職務上の注意を怠つたとかいふ形式的の責任問題は起らう。併し之は官規内部の問題に止り、政治的責任を論ずべき筋のものではあるまい。見よ。今日上下兩院を通じて此種の小

責任問題が人を代へて繰り返し〳〵論ぜらるゝの如何に多きかを。

其辯眞に政治的責任を糺彈すべき類の問題に對すると、其の攻擊の意外に深酷ならざるは僕等の怪訝に堪へざる所である。我國の政治的責任問題の多くが同時に政黨に纏綿する罪惡に基因して居るの實狀に照して、殊に此感が深い。例へば滿鐵事件にしても、東京市會議員の疑獄にしても、將た神戶寶塚郵便局事件にしても、就中關東州阿片事件にしても、政友會の幹部に對する疑惑の跡は豫審調書の上にも歷然として蔽ふ事が出來ない。然るに之に對する在野黨の糺彈の聲には聊か隔靴搔痒の感があり、政府黨亦殆んど之に對して誠意ある辯明の勞を執らない。故に議會に於ける質問應答はいゝ加減に濟まされて、國民の疑惑と不信とは政黨に對して益々深くなりまさるばかりである。而して之については朝野兩黨とも其の責を免るゝことが出來ないと思ふ。」

○

議會の言論の中で最も唾棄に値するは、過去に於ける敵黨の罪を數へて以て得々として自家を辯護し得たりと爲すことである。人から惡口をいはれると、手前だつて其の惡は何だと罵り返すのは匹夫野人の常だ。相手も同じ過ちを犯したといふ事は少くとも紳士の間に於ては、自家の立場を辯護する材料とはならない。日本が支那で阿片の密賣をすると詰られると、英米だつてやつて居るではないかと能く人は云ふが、政治外交問題などになると不當に昂奮するのは日本人の常だから、凡庸の人には暫く之を恕すとするも、床次內務大臣の如きまでが、態々大隈內閣時代の犯罪件數を司法省に調べさして政府辯護の料に供するとは、其の道義的觀念の低陋なる實に驚嘆の外はない。大隈內閣もやつたから今の政府も少し位惡い事をしてもいゝとは、國民は決して許してゐない。

○

政友會も仕末におへぬが、憲政會も餘り亂暴だ。あゝ揚足を取つて彌次にばかり骨折らないで、も少し眞面目に議論をしたらどうか。或る憲政會所屬代議士をつかまへて斯う詰問して見た。すると彼は、どうせ政友會は多數をかさに理が非でも自說を押し通す、我々の主張は內容の如何に拘らず徹頭徹尾排斥さるゝにきまつてゐるのだから、眞面目に議論をするだけが馬鹿げて居ると答ふるのであつた。

成る程、どうせ負けると始めから決つて居るのなら、眞面目に骨折る氣にもなれまい。我國の政界に眞面目なる研究と誠實なる運動の起らざるに毫も怪むに足らない。

併し議會の言論は、議會に於ける仲間にのみ聽かせるものと思ふのは、大なる誤りである。成る程彼の議論は差當り問題の勝負には關係しないだらう。けれども議會の外には數千萬の國民が取り圍んで居る。國民は識らずしらずの間に其の言論を通して其人の評價を無遠慮に定める。斯くして議員の努力は、よし議會に於ける當面の問題の解決に左したる影響を與へ得なかつたとしても、結局に於ては國民より與へらるゝ信認といふ事に依て酬いらるゝのだ。之が集ると次の機會に於て少數黨が變じて多數黨とならぬとも限らない。之を相撲に譬へるなら、勝負で勝つても現在の番附は變らないが、今日の努力は必ず次場所には酬いられる。其處で一生懸命に働くのである。差當りの番附に變りが無いからどうでもいゝでは觀客が承知しない。議會の言論も、相手には國民があると思つて、も少し眞面目にやつて貰ひたいものだ。我々國民の議會を見る亦此心得を以てして居るのだ。わけても今日の樣な形勢の下に於ては、政府の發案は一として通過せない事はない。夫にも拘らず各種の論難辯駁に一々目を曝らすのは、何れが最も忠實に國利民福の增進に努むるやを知らんが爲に外ならぬのである。

○

併しまた顧つて考ふるに、各政黨の今日の努力は、確實に而して又相當に、必ず明日酬いらるゝかといふに、少し怪しい。相撲なら今日の努力で明日の番附がきまる。政界に於ては、今のところ必ず變ると決つても居ないし、又變り方が努力に正比例するなどとも固より恃めない。識者の眼には明白な勝負でも、關係者に惡意の物言ひをつけるもの多く、其の爲め局外者には一寸其關係が分らなくなることも多い。假令勝負の數が略ぼ分つたとしても、言を左右に托して從前の地位に其儘居据ることも珍らしくない。見物も之ですつかり誤魔化さるゝのだが、肝腎の登場代議士に取つては、之では丸で働き甲斐のない譯であつて、斯くして自ら棄て鉢の妄動を弄ぶ樣になるのも無理のない話である。

優劣の別が內面的の實價と沒交渉に固定する時は、必ず紛擾の起る時である。昔は士族と平民との階級的對立が社會的に固定して、其の天分を十分に開展するの機會さへが一部の人民には閉ぢられて居つた。之を破つたのが近世初期の所謂民主的革命である。今や貧富の階級がまた漸く固定的對立たるの觀を深うし、經濟上に於ける眞實の機會均等の要求が勞働問題といふ形に於て八釜しく叫ばるゝ。何ぞ獨り政界に於て局面打開の切實なる要求が、時に手段を擇はざる矯激の運動と化するを怪まう。昨今我國の政界に於て、多數少數の區別は殆んど恒久的に

固定せるの外貌を呈して居る。詳しく云へば政友會は多數なるが故に權位を占め、權位を占め居るが故に益々多數を作つて已まない。彼等が權位を利して所謂地盤を開拓し以て政界を毒するの弊は、曾て屢々之を責めた。斯かる變態の改められざる限り、議會の喧々擾々は遂に收るの日はなからう。而して之は高橋首相の言ふが如く必しも國民の自覺の足らざる爲ではないのである。

○

強い者は強いが故に益々強くなる。日本今日の如き政狀に在て局面打開の難きは、支那の督軍政治の容易に覆し難きと同樣である。然らば之は結局如何なるかといふに、今一歩退いて歷史の先蹤を追ふて教訓を求むると、不思議に斯ういふ强者の强力ほど頼みにならぬものは無いことを見せつけらるゝ。畢竟强い者は其の力を恃み過ぎて氣誇り、遂に自ら禍の種をまくからであらう。其の頼みとする力を養ふ所にボロを出す。卽ち河童の河流れの醜態は、成る程今や滿鐵事件や阿片問題など現れて盛に國民の憤慨をそゝつて居る。打つちやつておいても政友會の天下はさう永いものではあるまい。僕は日本國民の道義的名譽のために無理にも斯く信じたいとさへ思つてゐる。

併し若干年月の後に來るべき自滅を待つまでもなく、普通選擧でも實施されたら、從來の關係はガタ／＼と崩れるだらう。普通選擧になれば、各選擧區に於ける選擧民の數は幾層倍する。從つて之れ迄の地盤關係は根本的に崩れざるを得ない。すると各政黨は新に地盤を開拓せねばならぬことになるが、之には最早從來の方法ではいかぬ。さうすると結局嫌でも應でも言論で直接民衆の良心に訴ふるといふ方法の外に途はないことになるのだ。斯くして始めて勝負は民衆の無垢な良心の判斷に委されて、憲政の變態は確實に影を潜める事になるのである。普通選擧を施行する本來の眼目は玆處に在るのではないけれども、一面に斯く云ふ道義的効果あることをも看過してはならないと思ふ。

一般國民に取つて大に歡迎すべき普通選擧は、正に道の文化的効果あるが故にまた各政黨の忌む所となつて居る。何となれば之に由て現在の勢力の根源たる地盤關係は根柢から破られるからである。是れ彼等が言を左右に托して普選の實行に反對する所以である。

併し世の中の事は面白いものだ。普通選擧は政友會ばかりでなく憲政會も國民黨も腹の中では歡ばないのだ（此事は數年前まで彼等が擧つて此の國民的要求に耳傾けざりしに依ても分る）が、中々倒れさうにない政府を無理にもたゝかう爲には、

國民の强大なる後援を容易に期待し得べき武器を取るの必要ありといふ所からして遂に普通選擧問題を持ち出すことになる。當節は何事でも國民的といふ冠詞を附けなければ世間が通らない。普通選擧は國民的要求たることの明白なるに於て、强勢なる政府と對戰するに恰好の武器である。在野黨は心ならずも之を取つたが、一旦之が提唱さるゝと、國民の人氣は一層湧き立つて、嘗ては策略として之を唱へた者までも民衆と一所になつて熱狂せざるを得ざる程の人氣問題となる。斯くして後には之に反對せる者までが遂に之に迎合せざるを得ない樣になつて往く。政友會は行き掛り上今なほ尙早論を唱へて居るけれども、幹部の一人は既に公然、近き將來に於て婦人にも選擧權を與ふるの日あるべきを斷言し、漸を以て擴張するの宿論に基き、も少し緩つくり時期を見たいとの聲明に依て、辛うじて國民の面責を避けて居るではないか。

時の勢は恐しい。流石の政友會もやがて自ら甘じて毒杯を擧ぐるの日は來るだらう。僕等は今日の所謂普選運動者に無條件の後援を與へ得ないものであるが、普通選擧の要求が之等の運動を超越した獨自の威力を以て我國今日の政界にせまりつゝあることは看逃す譯には往かない。

華府會議協定の側面觀

○

華府會議の成果たる諸協約は昨今漸をおうて發表されて居る。其大要は既に新聞にも報道されて、一ト通りは内容についての批評も公にされた。之等に關する詳細の評論は何れ今後時々本誌の論題に上ることがあらうが、玆には只吾々が之をうけ更に之に基く各種の施設をするに當つて、如何なる態度を持すべきかに關し、一二の注意を述べて置きたいと思ふ。

○

華府會議の成果たる各般の協約に付てはやがて批准の問題が起るだらうが、之に付て早くも協約の憲法違反を說く者がある。曰く、海軍縮少の如き又屬領諸島の防備の如き、もと皆陛下の專決親裁を憲法上の要件とするもの、之を内閣の權限に奪つて全權使臣が勝手に取極めるのは越權でないか、否、憲法上の大切な要件の蹂躙ではないかと。

憲法の理論として右の提說の誤なることは論を待たないが、假りに然うだとしても、今日の世界の形勢は、我國ひとり斯んな形式論に拘泥して折角の協調を破ることを許さない。吾々は

今やもつと廣く經世的眼光を鋭敏にして世界の平和に實質的貢獻を爲すべきを要求されて居る。

甲の町では道路は左側を行くものと決めてある。然るに乙では右ときめ、丙では中央と定まり、區々まち／＼になつて居る。交通機關の發達に伴ひ各町村の往來が頻繁となつて來ると之れでは大變不便になる。況んや交通機關にもいろ／＼の新奇なものゝ發明を見るに於てをや。於是廣きに亘る交通の安全を期せんとて、各々の町の代表者が集つて或る事を相談することになる。此時もし、かくして出來た新協約が從來の規定に背くとて不滿を表するものあらば、人誰れか其迂愚を笑はぬ者があらう。

未開草創の時代なら、格別の意義なき規則にも無理にも服從を强制して人々を法的生活に訓練するの必要はあつたらう。現代の文化人には、形式よりも先に内容の意味の方が重ぜらるゝ。而して斯うした立場から法制其ものの改革が叫はれるのだが、其の叫びの甚しき今日の如きは蓋し從來に其比を見ざる所である。有らゆる方面に於て改造の力强く唱へらるゝ今日に於て、仍ほ過去の規則に拘泥して時代の要求を抑へんとするは、子供の身長の伸びたるを罵つて强いて去年の衣物に甘ぜしめんとするのに外ならない。

斯くいへばとて僕は只漫然として法律の權威を侮蔑するのではない。況んや憲法をや。然れども、今日の如く急激なる變遷を經過しつゝある時期に際會しては、法の權威も時代の要求には一歩を讓らねばならぬと思ふ。「時」が新しき秩序を作るのだ。憲法の規定＝而かも其の誤りたる解釋に累されて新時代に相應する新秩序の創成を阻むのは、往々反動思想の巧妙なる發露と認へらるゝの恐れあるのみならず、少くとも時勢を識らざるの譏を免れない。

但し華府會議の成果が新時代の新要求を完全に表現するものなりや否やは別個の問題である。現に米國上院に於ては、此觀點から近く辛辣なる批評を受けんとして居る。かうした内容の吟味からではなく、只憲法の在來の型に入らざるの故のみを以て其の採否を決せんとするのなら、夫は餘りに曖昧な時代錯誤だといふのである。

○

僕は子供の時斯う云ふ話を聞いた。仙臺の藩祖伊達政宗が諸大名と共に家康の前に出で、愈々封祿の辭令を貰ふと云ふ時、家康は政宗の名を呼び上げ、奥州仙臺三十一萬石と云ひ渡した。政宗は故と聞えぬ振りをしたので、家康は更に一段と聲を張りあげて三十一萬石と繰り返したのを、政宗すかさず合せて六

十二萬石有り難く頂戴と御受けしたと云ふのである。無論事實あつた話ではないが、機智によつて勝を制するといふ點に世俗が一種の値打を認めた氣持は能く分る。而して國際談判などは萬事此の調子で國利國益を謀るべきものとする思想は、實は今日でも多くの人々の胸の中に往來してゐる樣だ。所謂使命をはづかしめぬ人材とは、斯うした當意卽妙の機智に富む者をいふとさへ考へて居る者が頗る多い樣である。

斯う云ふ頭で今度の華府會議の成績を觀る。遺憾の點甚だ多いことは申すまでもない。が、また見樣に依ては、頗る成功と云へぬでもない。理窟なしに無理押しに押した所も可なりある樣だからである。併し僕等の考では、斯ういふ頭で現代の國際談判を觀るのは、飛んでもない誤りだと思ふ。

國際關係が事實上道理に依て支配されず、弱い者は虐げらるゝ一方で、強い者同志はまた一時の苟安をぬすむ爲に各自の言ひ分を調節しやうといふのが、所謂國際問題であつた昔の時代に在つてなら、其談判に掛引の餘地あるは固より言ふを待たない。冷靜な國民の判定を全で眼中に置かない夫の議會の論難と同じ樣なものだ。下らぬ隙に揚足を取り、つまらぬ缺陷に乘じて相手を困らせて喜ぶのだから、惡く智慧の伸びた者が一番調法がらるゝ。國家の利益とか、世界の平和とか、本當に實のある問題に通ずるだけの者は殆んど無用の長物視されて仕舞ふのである。

併し今日は最早こんな時代ではない。少くとも戰後の世界は大に面目を一新した。舊來の弊習を一掃したと云つたら若干言ひ過の嫌あるかも知れぬが、主たる潮流が世界の平和と幸福との實質的確立に在る事だけは疑を容れぬ。斯くして國際的協同の精神の漸く盛ならんとする時に、ペテンに掛けて人をごまかす樣な小策は、最早默つて通されまいではないか。腹に一物を藏して出掛けて來る政治家の間には、御互だからまだ可いとして正直な周圍の民衆が承知しない。昔なら會議の談判をさへうまく切り拔ければ萬事が了つた。今は談判の席上に於ける表裏一切の事情が直に赤裸々にさらけ出されて、永久に世界の民衆の道德的批判の的になるのである。民衆の同情が今後の國際關係に重要な作用を爲すものなる限り、我々は大に昨今の新形勢に眼を開いて、國際談判に對する態度を改めなくてはなるまい。

之を政宗の昔噺にくつ付けて考へる今日の頭で往けば家康の三十一萬石といふ見當が正しいか、政宗の六十二萬石といふ要望が正しいか、當時の天下の客觀的形勢に基いて判斷されるので、偶然の言ひ懸りできめるなどいふことは許されない。假令

家康と政宗との掛引で多少の出入があつたとしても、仙臺藩の祿高の幾ら位であるべきかは道理上始めから定る所がある。華府會議に於ける海軍割當の決定の如きも此の見地から是非すべきであつて、全權の出樣に依てはもつと割が能く定め得たるべしと思ふのは大間違である。若し夫の割當に不滿だとすれば、それは獨り帝國全權を責むるばかりではなく、會議其ものを責めなければならない。

○

大局から觀て今度の華府會議の協定は其の當を得て居るかどうか。之に付ての愚見は屢々述べたから今また之を繰り返さないが、世人が一般に此問題を正當に解するに當つての一つの障害となるものは、東洋に於ける日本の從來の地位といふ事であると思ふ。この點を反省する毎に僕はつく／＼强者の悲哀といふ感に打たれざるを得ないのである。

玆に兩親に死別した孤兒があるとする。莫大な遺産を管理する爲に叔父御が世話を見る事になる。其の苦心に依て本人も立派に育ち財産も殖へた。斯くして長い年月を經るに從ひ少しく叔父御の我儘が現れて來る。子供ももう一本立になつたから御世話は入らぬと、そろ／＼叔父の排斥が始つて來る遺産の管理に依て優勝な地位を占め、之を利用するともなしに種々便益を得て居つたのに、急に逐ひ除けられては立つ瀨がない。のみならず、折角有つて居るものに執着し未練を殘すのは概して人情の常だ。無理に除け／＼と責められると、あべこべに舊日の恩を忘れたかと云ひたくなる。從來の歷史を無視してひた責めに責めて來るのも穩でないが、生中惠まれたる地位に置かれた者が兎角その地位に執着して公平の態度に出で得ないのは悲しむべき事實だ。理窟がなくとも强い者は或る點まで旣に有てる物を保留し得る。此意味に於て强者の力を認めるが、併し此力あるが故に、讓るべき時に讓り得ずして時勢の要求に面を背ける。

我々が自分の生活を道義的に組み立てゝ行かうとする時、つく／＼强者の悲哀を思はざるを得ないのである。

日本の東洋に於ける地位は正に親戚の子供を預る叔父さんの夫れだ。西歐諸國の侵掠を幾分喰ひとめたといふ功勞がないでもない。併し功勞があるからとて己れの言ふことには萬事從へと强ふるのは正當であるまい。最近の日本は强者の動もすれば陷る所のその過に陷らなかつたと誰か言ひ得るものぞ。斯くして段々生長しつゝある子供達の間から非難の聲が起る。今度の華府會議では日本は或る意味に於て被告の地位にあつた。此の事を吾々は忘れてはならない。

日本に對する今日の世界の要求は、東洋平和の確立である。

實質的に且つ積極的にこの仕事の完成のために指導的地位に立たん事である。而して强者としての力に戀々たることは全然此使命と兩立しない。東洋に於ける强者なるが故に此大使命を與へられながら、强者なるが故に從來の地位に未練を殘して道の世界的期待に裏切る様では是れ實に日本國民の恥辱ではないか。

支那近事

(甲)租借地の返還

華府會議の終り頃の或る機會に於て、英國の全權バルフォーアは突如威海衞還附の公然たる聲明をなし、佛國も亦廣州灣を還す決意を通じたとか。租借地の還附といふ事は、支那に取つて大事であるばかりでなく、國際關係に於ける思想の變遷といふ着眼點から觀て甚だ興味ある問題である。

支那に於て所謂租借地の數は五つある。膠洲灣、關東州、威海衞、廣州灣、九龍灣卽ち是だ。支那に於ける外國の借地は之に限るのではない。外に居留地といふがある。又他の名稱を以てするのもあるが、之等の外に於て獨り所謂租借地が八釜しい問題となつて居つたのは、其の法律關係が特異であつたからだ。詳しく云へば、外のは文字通り支那から借りたものに相違ないけれども、租借地だけは單純な借り物でないと認められて居つたからである。

僕は昔大學に於て「租借は割讓なり」と敎へられた。租借は割讓の一種變裝したものに外ならぬといふ論證を試みて博士になつた人もあると聞いて居る。而して支那に於ける實際の取扱も亦略ぼ割讓に均しいものであつた。一つの例を擧げん乎。諸外國は支那に於て所謂治外法權の特典を有し、甲乙兩國間の單純な借地契約は第三國のこの特權を無視することが出來ないと云ふ理窟から、所謂專管居留地などに於ては、支那の主權の活動は一切之を排除するに拘らず、各國の治外法權だけは之を尊重せねばならなかつた。然るに獨り租借地に在つては此點に於て割讓と同一の効果を認め、治外法權を顧慮する要なしとされてあつた。故に例へば我が租借地内で一米人が罪を犯したとする。我が官憲が之を捉へて後之を米國領事に引渡すには及ばない。直に我が國法に照らし我が官憲に於て裁判して可いのである。乃ち見るべし。租借の効果は殆んど割讓に近きものあるを。學者の多數は借りたものは何處までも借りたものだとて、割讓論には反對であつた様だが、事實は久しく割讓と同樣に看

做されてゐた。租借國も亦全然自國領土と同樣の考で各種の經營をして來たのである。

然らば租借などいふ文字を使はず短刀直入割讓といつたらよからうと云ふ問題が起るが、玆に實は微妙なる政治關係が伏在するのである。そは近代支那に於ける各國の勢力發展史を見ればよく分る。初めは力に任せて支那から土地をもぎ取つた。後には多少の抵抗力に遠慮して取るとは云はずに借りると云つたのである。腹は取つた積りであるのだが、一時の面倒を憚りて表面を飾つたまでの話なのだ。之が即ち租借であつて「借」といふ字を用ひねばならなかつた所に、また支那側の多少の力が顧念された跡を見る。支那では貸すも嫌なのだけれども、壓力に堪へずして貸すといつた。各國の方では固より貰つた積りなのである。斯くして出來た租借といふものを、法理上から動きの取れぬ解釋を一定しやうといふのが一體無理な話であつた。

僕の考では、租借といふものは元來が支那と外國との力の兼ね合で出來たものだから、其法律上の性質の如きも勢力の抗衡が安定するまでは定らない筈のものと思ふ。支那が益々弱くなれば、嫌が應でも結局割讓的に落ち付くだらうし、又その反對に強くなるの時あれば、何時とはなしに單純な賃借關係となり了し、還附問題もやがて起らぬと限らぬだらう。支那の力次第で如何樣にも變るものだと考へて居た。換言すれば租借の性質は結局「時」がきめて呉れるものだと考て居たのである。

果せるかな、今日遂に「時」が此の租借の性質を確定した。借りたものだから何時かは還さなければならぬといふに今日疑を挿むものはない。何となく只で還したくないといふ感情はある。が、何時までも保留するといふに何等の理由も見出し得ぬ事實に疑はない。借りた時の政治的理由が消滅した以上、速に還すのが正當だといふ議論さへある。斯く租借の性質が「時」の勢で確定されたのは兼ての豫想の通りだが、只其の原因に至つては僕の在來の豫想とは丸で違つたものである。僕はもと支那の實力の如何といふ一事の、之を決する最終の原因だと考へて居たのだが、成る程支那自身も近年長足の進歩を示しては居るが、併し對外抗衡の意味に於ては左まで實力を伸したとは觀ることが出來ない。然らば何處に此變化を來した本當の原因が存るかといふに、そは支那自身に求むべきではなく、寧ろ各國の對支觀念の一變といふ方面に求むべきものと考ふる。もつと廣く云へば、小弱國家に對する各先進國民の氣分が一變したといふ事に求むべきものだと信ずるのである。

昔は、抵抗力の薄い處には水の低きに就くが如くどん／＼侵略して往くことが互に競はれたのであつた。今は弱い者は弱い

たりに其生存を保障し、且其向上發展を皆で補翼しやうといふことに氣持が纏つたのだ。英佛兩國の政治家は、何の考ふる所あつて還附の聲明をしたかは知らない。政治家の實際問題として之が何れ丈け誠實に取扱はるゝかも分らない。が吾々はとにかく、政治家を驅りて義理にも斯かる聲明を發表せしめねば措かなかつた世界最近の機微の裏に、靜に流るゝ一大新生命の躍動を透視せずには居られない。

(乙)列國の對支政策

英佛兩國は威海衛と廣州灣とを還附するといひ出した。還すのは單に之ればかりではない。又英佛兩國に限るのでもない。今度の華府會議では、事に緩急の別はあるも、領事裁判權も追てはやめると云つた。關稅の引上にも應ずると約束した。やらずに濟むものを我から進んで之を還さう彼も取れと云ふ所に、我々は列國の對支政策の驚くべき變化を觀る。

人或は之を釋いて支那側の巧妙なるプロパガンダの結果だといふ。宣傳丈けで世界が動かせるものなら、我々日本ももつと宣傳に努めたらどうだ。其外支那に阿り一實は別個の大利權を獲んとするの魂膽に出づると爲して之を說き得た積りの人も居れば、斯くしてすべて有てるものを吐き出さねばならぬ形成を作つて大に日本を苦めやうと企むのだと昂奮する輩もある。そんな單純な動機で國際政局が勝手に廻轉せしめ得るものと考ふるは、誠に御目出度い限りである。

僕は矢張り之を國際的デモクラシーの抑へ難き發現と視てゆきたい。今や弱い者を意の儘に虐げるといふ事は許されなくなつた。弱い者にも夫れ相應の地步を認めてやらねばならぬ。否、單に力の一觀點からのみ强弱を分つことすらが誡めらるゝ世の中となつたのだ。斯くして我々は支那に對しても從來の侵略的態度を改めねばならぬことゝなる。是れ最近數年この方の新しい形勢である。

支那に對するこの新形勢にも實は自ら二つの階段があつた。見樣に依ては二種の見解が今仍ほ平行して行はれてゐるとも謂へる。支那の民生の幸福を謀つて遣らねばならぬといふには何れも皆一致して居るのだが、さて其方法はとなると、列國で支那の行政を管理してやらうと云ふのと否支那人自身に委せよと云ふのと二種の意見があつたのだ。支那人に自ら治むる能力ありやを疑つた人々は、支那の爲を謀つて國際管理の結論に到達したのだが、之にも拘らず、支那人自身に委して可なりとする立場の近頃既に多くなりゆくのは、自ら其前提として支那人の能力――少くとも其將來に於ける發展を信用する樣になつたも

のと觀ねばならぬ。

　支那政界の混亂を極むることは今も從前と變りはない。統一の急要を感ずること今に始めぬ所ながら、一向其緒に就けるの氣色さへない。ブラント氏ならずとも其前途を悲觀するのは當然だ。夫れにも拘らず、近來國際管理論の如きが頓と聲を潜めて、却つてあれもやらせろ、之も委せろと、一々支那人自身に托するの風潮を致せるは何の爲か。此處に吾々は少しく思を致すの必要を認める。

　一つには支那人を政治的に無能力と考へた從來の觀察が誤であつたといふ事が明になつた爲でもある。支那の樣な日本の議會にも增した群雄割據の亂世其儘の現狀に於ては、道理の要求するが儘にスラ〳〵と事の解決せぬは當然の話だ。政界の狀態こそあんな風であれ、之とは不相應に民間の智見は昨今實は可なり高まつてゐたのである。政狀があんな風だから民智も頗低からうといふのは大なる誤であつた。此事が段々明瞭になつたのが一つの原因でなくてはならぬ。

　されぱと云つて大丈夫委してもいゝと云ふ程に進んだかどうかは一つの疑問である。多少此間に買ひ被りの嫌なきかと危まるゝ點もある樣だ。諸外國は固より之を知らぬではないが、夫にも拘らず、支那人の自治能力を說く爭ふことを得なかつたのは、最近國際會合の諸々の機會に於て支那の代表者が頗る卓拔なる見識を示したからであらう。例へばヴェルサイユ會議にしても、華府會議にしても、日本の新聞では敵方の故を以て痛烈に罵倒を加へたのだけれども、實際のところ支那委員の見識は列國の使臣に比してさう見劣りするものではなかつた。此點に於て日本の全權は位や官歴などばかり偉くて實際の腕の頗る怪しかつたのは、我々の甚だ遺憾とする所だつた。支那の全權は年こそ若けれ、皆文明の教育を受け、世界の氣分に能く浸み込んで居る。列國の使臣はどうしても彼等の見識に接して此上彼等の要請に面を背けるを得なかつた。支那が今度の諸會議に於て多くの意外な獲物を得たのは、一つには之等青年代表者の賜だと謂はねばならぬ。

　併し支那一般は固より未だ代表全權其人程に進んでは居ない。故に代表全權諸氏は慥に支那に取つて光明であり前途の希望ではある。が支那が全體として世界の期待に辜負せざる爲には、更に今後に於ける彼等の教導に待たなければならない。彼等の責任も亦大なりと云ふべきである。

　何れにしても我々日本人は支那の諸般の近狀につき大に學ぶ所なければならない。

(丙)華府會議に於ける支那の地位

僕は最近の國際的諸會合を機として支那に對する外人の信用は大に增したと述べた。之に對して或人は、ヴエルサイユ會議の際はいざ知らず、少くとも今度の華府會議では支那側の躍起運動も更に成功せず、米人などの同情は却て日本の方に傾いたと云ふ。同じ様な事を云ふ人は支那にもある。僕の知人某君(支那知名の士)は、先き頃華盛頓より歸朝の途次僕に向つて米國の支那に對する同情も昔日の如くではなくなつたと慨かれた。併し斯う云ふ觀方は、或る意味に於て正しく又或る意味に於ては大に間違つて居ると思ふ。

第一に日支兩國を原被兩造の如く見るのはいけない。前者に對する同情の增加は直に後者に對する其減退なるかの如く速斷するから、兎角間違が起るのだ。細目の點に於て多少の出入はあらうが、米國の態度は其の根本に於て前後變る所がないと僕は考へて居る。

日本と支那との關係を純客觀的の公平な見地から觀ると、何れの點からしても日本の立場に道理は尠い。此點に於て米國は根本に於て日本に加擔するものではない、從つて支那の主張を彼等は從來進んで支持して來た。此點に於て米國は外見日本の敵なるが如く見へる。併し米の日本に敵するが如く見へるのは、日本其ものを憎むのではなく、道理に背くを憎むのである。故に若し道理に背くの著しきが支那の行動に現れんか、彼は又た轉じて支那にも敵すべき筈である。而して支那が日本を攻擊するのはいゝ。只彼は其の反撃に當つて常に一定の限度を守つたかと云ふに必しもさうではなかつた。坊主が憎けりや袈裟までの古諺の通り、支那は實に一から十まで日本に反抗したのである。斯うなると誰れでも其の主張のすべてを裏書するに躊躇する様になるのは已むを得ない。山東問題に於ける支那側のかの頑强執拗な態度の如きは、可なり米國の惡感をそゝつたらしい。而して支那側は自己の主張の正當なる畛域を超えざりしや否やを反省するに遑なく、米國が引續き自分達を完全に後援せざるを苦に病んで、彼等の同情昔日の如からずと憂ふに至つたのである。併し之を見て直に米國が支那に飽きて日本に肩代りしたと速斷するなら、それは大なる誤である。

無論米國の日本に對する諒解は昨今大に增した。日本の立場は依然之を非とするも、其の非なる所以の矯正は實際上おいそれとは往かぬことに氣がついた。膠州灣を還附するのが正當の理なりとするも、兎に角數年の經營をへた今日、右から左へと手放す譯にも往くまい。「理論」が「實際の政治」に適用さるゝ

場合には、其處には順序もあれば手續も要る。斯うした理解が高まるに連れて、流石米國人も幾分日本の言ひ分にも尤もな所があるといふ風に見て來た。夫れ丈け支那の頑強を抑へて日本の顏をも立てんとするの風潮になつたのだが、之を以て米國が一轉して徹頭徹尾我に秋波を寄せるものと自惚れたら大變だ。米國輿論が根本に於て日本の立場を正當と觀ない點は、始終一貫して變らないからである。

以上の風潮は單に之を米國のみの事と觀てはいけない。日支兩國の懸案に對して最近世界の態度が大體右の樣に變つて來たと思ふ。支那のことは支那に委して玆に論じない。我々日本としては、一時の好景氣に安價な滿足を買ふことなく、世界の輿論の眞の同情は一體何處に向くものかを冷靜に反省しやうではないか。否一歩進めて他人の事には頓着なく、世界的新形勢の許に於て我等は果して如何に行動すべきやを、獨自の了見で究明して行かうではないか。

Juvenia

正確堅牢



高尚優美

世界の有ゆる博覽會、共進會に於て最高名譽賞牌六百八十四個を有す

瑞西國最高級時計

ジュベニーヤ

全國各都市最信用ある時計店に於て販賣す





三疊の間

正宗白鳥

土曜日の夕方、いつもの時刻に、例の如くさま〴〵な食料品を持つて訪ねて來た夫の敬一を、停車場に出迎へた弓子は、寒い道を寄添つて自分の家へ急ぎながら、この週間の自分の容體や、二三の用件について義務的に報告したあとで、ふと、左右を見まはしてから聲を潜めて、

「私、今日變なこと聞いて、あの家が氣味が惡くなつたのよ。……おきよには怖がるといけないから話さないのだけど、三疊の女中部屋には何かしら不吉なことがあるらしいの。今日洗濯屋の主婦さんがその事を云ひかけて、ふと私に遠慮して話を外らしたのです。」

「お化でも出るといふのかい」と敬一は微笑した。

「私氣になつたから、早速三疊の間を檢べたのよ。さう思つて見ると、成程變なところがあるやうに思はれるの。あの家主はあれほど家の中を構まないでゐるのに、三疊の間だけは、壁全體に紙が貼つてあるんでせう。ためしに隅の方をめくつて見たら、紅い斑點が見えるの。磨り取つたのか、薄くしか殘つてゐないのだけど、人間の血ぢ

やないか知ら」

「お前の神經だよ。……一月あまりも何ともなかつたのだから、今更ビク〳〵しなくつてもいゝだらう」

「私、誰れかによく譯を訊かうと思つてるの。そして、本當にいやな事があつたのなら、外へ轉居するか、いつそ東京へ歸つちまふかと、先つき獨りで考へてゐたのよ。今日はあなたの入らつしやる日だつたからよかつたけど、おきよと二人きりだつたら、今夜は怖くつて眠れないに違ひないわ」

「三月分の家賃を前金で收めてるのに、今移つちや馬鹿らしいぢやないか。自分に關係のないことを根堀り葉堀り人に訊ねて、神經を痛めるのは詰らないことだよ」

　敬一は口では快活にさう云つたが、洗濯屋の主婦が餘計な事を微見かしたゝめに、妻の心の傷つけられるのをひそかに氣にしてゐた。

　弓子は、去年の春結婚して以來病氣勝ちで、絕えず藥餌に親しんでゐたが、多少肺尖にも故障があるさうだから、東京にゐて病院通ひなんかしてゐるよりは、思切つて、轉地して、半年でも一年でも充分に靜養した方がよからうと、敬一はじめ傍の者の相談が決つたので、當人も漸々その氣になつて、ある知人の世話で手ごろな貸別莊を借りて。十一月も押迫つた時分から大磯に住むことになつたのであつた。敬一は日々の職務があるので、老母と二人で東京に留まつて、土曜日毎に、一泊あるひは二泊の豫定で、病妻を見舞ふことにしてゐた。

　家は海に近いところにあつて、日當りもよかつた。弓子は溫い日には濱邊へ出て、貝殼を拾つたり漁船を見たりして退屈を紛らし、寒い日には炬燵に當つて雜誌などを讀んだり假寐をしたりして、張合ひのない時を過してゐるので、土曜日の晩が何よりも待たれてゐた。

「旦那樣が來たよ」と、近所の主婦や娘だちが口をつけるやうになつてゐた。弓子はそれを煩さがつて、今日は少し廻り道をして、庭の裏口から家へ入つた。

火氣の盛んな火鉢の側で、夫婦差向ひで敬一持參の品々を開けて、緩くり食事をしたが、さうして互ひに東京と大磯との話をし合つてゐる間には、弓子も三疊の間の變事など殆んど念頭に浮べなかつた。

「停車場へ下りるたびにさう思ふよ、こちらは空がよく澄んでる。空氣が奇麗なんだね。それに寒さだつて何と云つても東京のやうに烈しかないよ。お前も氣を長く持つて、少くも花の咲く時分までは此方に落着いてゐなければなるまいね。血色も大分よくなつたやうだから、轉地の効能は確かにあるに違ひないよ」

敬一はさう云つて、稍々もすると弱い音を吐く妻に力をつけた。彼れは、妻の健康が果して完全に回復するものか知らと、つねに疑つてゐるのであつたが、それは兎に角、かうして毎週大磯へ訪ねて來て、夫婦水入らずで氣儘に遊んで行けるのは、これまでに經驗しなかつた樂みになつてゐるのであつた。日々の乾燥無味な職務に從事してゐる間にも、大磯行を思ふと心が暢びやかになつた。妻に頼まれてゐる物を買ふのも樂しかつたが、今度は何を土産に持つて行からかと、妻の喜びさうな物を考へてゐるのは一層樂しかつた。土曜日の定刻に會社の務めを終つて停車場へ驅付ける間、汽車に乘つてゐる間、到着間際に窓から顏を出して、プラットホームに出迎へてゐる妻の顏を搜す時など、彼れは新婚當時にも得られなかつた樂みを感じるのであつた。寒い時や氣分の惡い時には出迎へなくつてもいゝと、來るたびに妻を戒めてゐながら、いつも出迎へを待設けてゐた。

「弓子が三月も四月も轉地してゐてもよくならないやうなら、何とかしなきやなるまいな」と、母親は時々不安な思ひを敬一に向つて洩らしたが、敬一はそのたびに煮え切らない返事をしてゐた。一旦妻として迎へたものを、病氣のため

に離別するといふやうな無情なことが出來るものかと、母に逆らつて言切るほどの熱情は、彼れは持つてゐなかつた。弓子の外には、差當つて彼れの心に描かれてゐる女は一人もないのだから、彼女の病氣が早くよくなればいゝと願つてはゐたが、一週一度の大磯通ひに故障も變事も起らない限りは、その願ひが彼れの眞劍の願ひにはならなかつた。

「今日夕がけに、銀座の繪葉書屋へ寄つて西洋畫を見てるうちに思ひついてこんな物を買つて來たのだ」と、敬一は徐に外套のポケツトから小さな紙包を取出して、「何だと思ふね」と思はせ振りに云つて微笑した。

「分らないわ。……繪葉書ぢやなくつて」弓子も微笑して、興ありげに手に取つて重味を計つたり、破れ目から覗いて見たりした。

やがて包みを開いて見ると、それはトランプであつた。

「いゝものを買つて來て下すつたわね。二十一やクヰン拔きくらいなら、私だつて知つてるのよ。……お正月にあなたがゐらしつた時に、近所にカルタを取つてる聲がしてゐたから、私の家にもトランプでもあればいゝつて、私が浮かり云つたのを、あなたは覺えてゐらしつたのね」と、弓子は悦しさうに云つた。

「あゝ。退屈さましにはいゝと思つて」

敬一は妻の言葉を覺えてゐたのではなかつたが、妻にさう思はれて喜ばれると、一層買つて來た甲斐があるやうな氣がした。そして机に添へて買つて來た「トランプの遊び方」といふ小冊子を開けて、いろ／＼な遊び方の說明を讀上げた。弓子は熱心に耳を傾けた。

「この次にあなたがゐらつしやるまでに、私ゆつくり研究して、六ケ敷取り方もよく覺えて置くわ。……今夜はやさしいのをやつて見ませう」と云つて、弓子はふと氣づいたやうに、「だけど、お母さんには秘密よ。病氣の治療に行つてゐ

ながら、トランプなんかして遊んでると思はれちやいけないから」

「承知した。……そんな遠慮は入らないんだけど」

「でも、お天氣のいゝ日に、海邊へ出て砂の上を歩いたりなぞしてる時に、いゝ氣になつて唄でも唄いたいやうになると、みんなに迷惑を掛けときながらそんな上ついた氣になつちやいけないと、氣が咎めてならないのよ。」

「唄ひたい時には勝手に唄つたらいゝぢやないか。どうせ保養に來てるんだから、自分の好きな事をして、成るべく飽かないやうにしなきやいけないよ」

「さうは思つてるんだけど。……私、傍の人に厄介者扱ひにされないうちに、早く海へでも入つて死んだ方が幸福ぢやないかと思ふことがあつてよ」

「飛んでもないことを云ふぢやないか。さういふ話は御免だよ」

敬一は心配したやうに顔を曇らせたが、目を潤ませた弓子が、哀れを籠めた聲音でさういふ話をするのを聞くのも、一概に不愉快にのみは感ぜられなかつた。あたりに遠慮のない浪の音のみ聞える大磯の家で、若い病婦の浮世を果敢んだ泣事を聞いてゐると、逞ましい敬一の肉體にも何處かに潜んでゐる「人生の淋しい思ひ」が呼出されて、相手のそんな話にもしみ〴〵と感應されるのであつた。

「決してあなたを疑ぐつてるのぢやないけど、今にあなたが此方へ來て下さらないやうな時が來るんぢやないかと思はれることがあつてよ」と、弓子は悲しい思ひを自分一人の胸に収めてゐられなくつて、留められるのも構はず言葉を續けた。「よくなるにしても、悪くなるにしても、早く極りがつけばいゝのだけど、何時までも同じやうで日を送つてるんぢやぁ、自分で自分の身體に愛想が盡きるんですもの。傍の人が見てゐたらさぞ歯痒く思はれるだらうと思はれるわ。夜

中に目が醒めた時にはそりやいやなことが考へられるの。……私あなたに隠立てしないで何でも云つちまひたいんだから怒つちやいやよ。……昨夕あなたが繪に書いたやうな奇麗な女と一緒に野原を歩いてるところを夢に見てゐると、夜廻りの太鼓の音で目が醒めたの。私は馬鹿だ、何のためにそんな夢を見たのだらうと、醒めたあとで可笑くなつたのだけれどね。私これで随分嫉妬心の強い方なのかも知れないわ。自分だけ病氣してるのは口惜しいから、私の知つてる人がみんな病氣になればいゝと心から思はれることさへあるんですもの。……こんなにしてるうちに次第に痩せて、骨と皮とになつちまふやうなら、今のうちに一思ひに死んだ方がいゝと思はれるのだけど、いよ／＼死ぬるとなると、私でもこの世に心殘りがされるのよ。私は生れた故郷と東京との外には日本の名所や古蹟は知らないんでせう。そんな所は格別見たいとは思はないけれど、死ぬる前には是非一度會つてゆくり話を聞きたいと思ふ人があるんです。私の身內でもなし、お友だちでもなし、何でもない人なのだけど、その人こそ私の迷ひを晴らして呉れさうに思はれるの。」

「迷ひを晴らすの晴らさんのと云つて、坊さんにでも會ひたいの？」敬一は不思議に思つて訊返した。

「坊さんぢやないわ。……五六年前に、私がまだ學校へ通つた時分に、一度だけ會つたことのある人なの。これまで思出したこともないので、その人は今何處にゐるのか何をしてゐるのか、私ちつとも知らないのだけれど、先日の晩に、いろ／＼な事が考へられて悲しくつて爲様のなかつた時に、ふいにその人の事が思出されたのよ」

弓子は今その人をハツキリ思出さうとして目を凝らした。向つてゐる敬一の淺黒い逞しい顔の側に、深く物を考へてゐるやうな蒼白い青年の顔が朦朧として浮んで來た。

「その人は何と云ふ人？。年を取つた人かね」

敬一が熱心に訊きだしたので、弓子はふと氣を變へて、「その話、もう止しませう。何でもないの。一人でゐるといろ

んなことが考へられるものね　と云つて、話を轉じた。そして、暫くして、食事の跡片付だの晩の用事を濟ました下女のきよを呼んで三人でトランプをした。

寢床に就いてから、敬一は改めて、妻の心の中に宿つてゐる人の事を訊ねたが、弓子は自分でも實際にはよく知らないその男の事を詳しく話す譯には行かなかつたし、自分の空想に描かれてゐるまゝに　すのも何となく夫の感情を害しさうに危まれたので、その話は避けてしまつた。

眞夜中にふと目を醒ました弓子は、女中部屋から洩れて來る寢息に耳を留めた。そして、洗濯屋の主婦が微見かしたことに脅かされてゐたが、敬一が側に寢てゐるのだから、今夜はさして怖くはなかつた。たゞ夫が歸つた後の淋しさが今から氣遣はれた。

古い家だから、燈火を消すと鼠が盛んにあばれた。鼠の音と下女の鼾とは、平生夜中に目醒めた時の弓子の淋しい思ひを紛らせるものになつてゐたが、今夜は耳を留めてゐると、下女の寢息は不斷とは違つて、魘れてゐるやうに聞かれた。微かな震え聲の獨言がはじまつた

弓子は身を起して電氣を點けた。すると、敬一は薄目を開けて見上げて、

「どうしたの？」と、寢呆聲で訊いた。

「何だか變よ」

「身體の加減が惡いのかい」

「いゝえ」

「三疊の間の一件か」

敬一が笑ふと、弓子は首肯づいた、
「臆病だね。それほど氣になるのなら、念のために行つて様子をよく見たらいゝぢやないか。僕がゐない時には夜中に三疊へは行けないだらうから」
「ぢや、あなたも入らつしやいな」
弓子が寢卷の上に羽織を引掛けて、そつと襖を開けた後から、敬一も起上つて随いて行つた。女中部屋の電氣を探つて點けると、額際まで夜具を被つたおきよは、寢床に縮こまつたまゝ何の異狀もなく眠つてゐた。敬一は今まで見たことのなかつた部屋の中をよく見て、戯れに左右の[illegible]をト[illegible]〳〵と叩いたりした。
「夜中にこんなにしてもお化が出て來ないくらゐなら、もう大丈夫だ。安心してゐていゝよ」と、笑ひ〳〵云つた。
「何でもなかつたのね」と、弓子もやうやく安心して、「私、誰れかにも一度よく譯を訊いて見るわ」
「もう訊かない方がいゝよ。何でもないことでも、人間は針小棒大に云ひたがるものだからね」
敬一は、詰らないことを聞いて妻が神經を惱ますのを恐れてゐたが、弓子は、いゝにしろ惡いにしろ、微見かされた事實の眞相を充分に聞取らなければ滿足されない氣がした。
翌日は幸ひに穩かだつたので、二人は砂丘の側で日向ぼつこをして無邪氣な話をし合つたり、美しい貝殼を捜して拾つたりした。そして日曜一日が例のやうに樂しく過された。これまでに日曜の夜も泊つて行くことがあつたのだが、今度は母親の注意によつて、敬一は夕餐後に歸ることにした。
「明日の朝早く、一番で立つてもいけないの？」と、弓子は引留めたが、敬一は會社の大事な用事を口實にして聞かなかつた。後髮を牽かれるやうな氣がしたが、母親の意嚮を害ねてまで歸りをおくらせる決心はつかなかつた。

手頼りなげな顔して口數も利かない妻に、停車場まで見送られて、次の土曜の訪問を約して汽車に乘つた敬一は、これまでにも増した哀愁を感じたが、歸京後その氣持を書いて妻に送らうと思ひついて、手紙の文句をいろ〲に考へてゐると、時の立つのも忘れられた。

弓子は上り汽車を見送つた後で、下關行の急行車が通過するのをも見送つてから、薄暗い道をトボ〲家へ歸りながら、次の土曜日までの時間の長さを見詰めてはしほれてゐた。この土地へ來ると早々、近所の娘だちと懇意になつたおきよは、垣根越しに高い聲で誰れかと話をしてゐた。弓子は平生おきよを通して、この土地の出來事や近所の人々の生活ぶりを聞いてゐるので、それは日々の淋しさを紛らす材料になつてゐるのであつたが、自分だちの事も彼女によつて世間に吹聽されてゐるのだと思ふと快くはなかつた。

弓子は炬燵に當つて、獨りでトランプを弄んだ。六ケ敷遊び方を研究したり、札をめくつて吉凶を占つたりしてゐたが、この日は不斷よりも運動をし過ぎたゝめに疲れてゐたのと、炬燵の温みのためとで、知らず〲假睡の夢に入つた。汗ばんでいやな氣持がして目を醒ました時は、可成り夜が更けてゐて、おきよも寢ついたらしかつた。弓子は炬燵を離れて寢仕度をしたが、差當つた彼女の重要な問題は、三疊の間の秘密を見極めることであるやうな氣がして、打棄てゝ置けなかつた。時刻も丁度昨夕と同じころらしかつた。

彼女の睡氣は去つて、精神は一點に凝つた。家の中は絶海の孤島か深山の奥のやうに、これでも人間の住ひかと疑はれるほどに寂としてゐた。耳の側でジイーと微かな音のするのが、空氣と空氣との囁きのやうであつた。彼女は胸を騷がせながら、靜かに襖を開けて、怖々三疊を覗いた。寢息のしないのを怪んで、電氣を點けると、其處には寢床は延べてあつたがおきよはゐなかつた。

弓子は襟元へ水を打掛けられたやうにゾッとした。恨をもつた亡靈か妖怪かゞ今にも暗い所から現はれて來さうな氣がして、自分の身の置きどころがなくなつた。で、おきよの寢床の中に潜り込んで、目を瞑つて兩手で耳を壓えて、神か佛か何かを一心に念じてゐたが、そこへあり〳〵と現はれたのは、神でも佛でも敬一でもなくつて、五六年前に會つたSといふ蒼白い顏の柔しい目をした青年であつた。……あの人なら、病氣の惱みからも死の恐ろしさからも、妖怪變化の脅かしからも自分を救つてくれさうに思はれた。

ふと戸の音がしたので、頭を持上げると、「奥様」と、おきよが聲を掛けた。

弓子は慌てゝ女中部屋を出て、

「お前何處へ行つてゐたの？」と、咎めると、おきよは呆氣に取られた顏して、

「お風呂へ行つてゐました。……奥樣はどうなすつたんです？」

「どうもすりやしないわ。……もう餘程遲いぢやないの」

弓子はおきよの目を避けるやうにして自分の寢床へ戻つた。三疊の間の秘密の恐怖は薄らいで、Sの面影は彼女の守り本尊として枕邊に立つた。

あくる日、氣保養に丸髷に結つて見ようと思立つて、女髮結を呼んで來させたが、いろ〳〵な世間話の間に、事もなげな口調で、以前この家に變つた事があつたのぢやないかと訊ねると、

「私はよく存じませんですが」と、女髪結は暫く考へたあとで、「四五年前に東京の方が此處を借りてゐらつしやるうちに、お亡くなりになつたことがありましたが、その外には別段變つた事は聞きませんですよ」と答へた。

「その方は病氣でお亡くなりなすつたの？」

「さうでせうよ。たしか若い女の方でした。……でも、その後いろ〳〵な方が住んでゐらつしやつたのですから、お家は奇麗になつてゐますのですよ」

弓子はたゞそれだけの事かと、三疊の間の秘密の解決は手易くついたのであつたが、若い女が病死したことは自分の將來を暗示してゐるやうで氣味が惡かつた。

珍らしい丸髷姿を人に見られるのは極りが惡いので、一日外へは出ないで、ひとりで縁側に日向ぼつこしながら日を暮らしたが、雜誌や新聞の濫讀やトランプいじりや、針仕事も、興もないものになつて、心の屈した彼女のをり〳〵の慰めになるものは、Sの面影であつた。Sが云つた言葉の斷片的な思出であつた。……Sが實際云つたかどうだか分らないことも、Sの言葉として思出してゐたのであつた。敬一の話した事さへSの話として思出してゐると一層つよく彼女の心は唆かされた。

夜になつて眠りから醒めると、弓子は最早解決がついてゐるのにも關はらず何となく氣になつて――むしろ變事のあることを望んでゐるやうに――わざ〳〵起きて三疊の間へ出掛けた。例の如くそつと襖を開けて、手さぐりに電氣を點けたが、そのトタンに、おきよは脛も露はに飛起きて、

「あら、奥樣どうなすつたんです?」と震え聲で叫んだ。

「私、淋しかつたから」と、弓子はドキマギしながら言譯をしたが、おきよは、弓子の顔を見ながら恐怖に襲はれた。

「もう安心してお休みな」

弓子は靜かに自分の寢床へ戻つたがおきよは夜の明けるのが待遠しかつた。眠ると怖い夢に襲はれては目を醒ました。そして、あくる日朝餐を濟ますと、

「私、ちよつと東京へ歸らして頂きたいの、御座いますが」と願つた。
「だしぬけにそんなこと云つちや困るよ。私ひとりで此處にゐられる譯はないぢやないか」
弓子はいろ〳〵に說いて引留めたが、おきよはどうしても決心を飜さなかつた。やう〳〵午後まで延ばすことだけ承知したが、その間におきよの口から、歸京の理由が近所の人々の耳に傳はつた。
弓子は電報を打つたゞけでは心元なくつて、會社へ出勤してゐる敬一に電話を掛けた。
「夕方までに行く」といふ返事を得た弓子は、郵便局から歸ると、直ぐに丸髷を潰して自分の手で不斷のやうに結直した。

惧れ

新井紀一

一

晝間だか夜だか分らない。いや、兩方を一緒くたにしたやうな灰色の世界である。息苦しい。胸の中へ手を突つ込まれて、呼吸器をぎゆつと何者かに締めつらけれたやうな苦しさだ。淺見はその瞬間思つた。自分は今、沼か川に陷つてぶくぶくと底の方へ沈んでゆくのではないかしら？　と。で、その水底に落ち着いてからぽつかり眼を明けた時の、晝でもない夜でもない灰色の世界が、恰度この苦痛を意識した時の彼の頭に浮んだ凡てであつたのだ。が、時にはその水底からふわ〳〵と浮き上つて、明るい世界を見る事もあつた。その時には、それまでどこに眠つてたか分らない知覺が一齊に目を醒まして、自分がふつ倒れるやうに床に寢つく時から今日に至るまでの樣子を、殘らず彼に物語つてくれた。

ええと、もう幾日になるか――と、彼の頭はその亂れた緒を探つてゐた。……昨日と、いゝや一昨日だ、熱冷ましを買つて來て貰つて服んで、床の中にもぐり込んだのは。それからうんと汗が出て、寢卷を幾度も着換へたつけ。さうだ、さうして俺はその

まゝ寢てゐるのだ。

何しろ熱が恐ろしく高いやうだ。まるでやくざな瀬戸物に熱湯を注ぎ込んだ時のやうに、頭がぴんぴん鳴つてゐる。龜裂がいるのか、おそろしく痛む。——

仰向いて寢てゐる彼の額の上には、手拭に包まれた氷が湯氣を立てゝゐる。融けた餘りの滴がツーッと糸を引いて、頬を流れる。彼の充血した眼は凝乎と天井の一隅を見詰めてゐる。彼の魂はその時、お前はしつかりしてゐなければいけないぞ——と、まるで茹でられたやうにぐつたりしてゐる彼の肉體を、口うるさく戒めてゐた。……お前がうつかり口を滑べらさうもんなら、お前の身はもうそれきり破滅だ。わすれても「あの事」ばかりは喋るな。——

熱の高いせいだらう。飯も喰べられない狀態でありながら、紅い血が頬に燃へて彼の顏を生々と彩つてゐる。が、苦痛の皺を刻みながらも、一見その穩やかな面上を低氣壓の襲來する前後の空に見る、陰慘な影が不斷にその穩やかな顏をかげらす。

その時彼の心の眼は、恐る恐る心の一隅に堀られた墓穴のやうな眞暗い秘密室を見詰めてゐたのである。其處には彼が努めて忘れやうとしてゐる過去一切のものが藏まはれてある。そして若しも、彼がひとり物思ひに沈んだり、ぼんやりしてゐるやうな事があらうものなら、舌切雀の話にある慾張り婆の葛籠のやうに、いろ／＼なものがによき／＼と出て來て、彼を責める。さうした瞬間、熱に燃へてる彼の體をぴりぴりと電氣のやうに戰慄が走る。恐怖の戰慄が……。

彼の眼は魅せられたやうに、その眞暗な秘密室の中にある或るものに惹きつけられる。が、彼はやがてその「或るもの」の何であるかを了解した。彼は身悶へしながら叫んだ。

「許してくれ、大澤！　どうか何も云つてくれるな。そんな眼をしていてくれるな！」

庭の水溜りに映つた太陽の光線が天井に反射して、圓い環をつくつてゐる。どろんと融けかかつたやうな瞳をした彼の眼は、ぼんやりとそれを見詰めてゐた。と、その環がいつの間にか、まぼろしに見た大澤の顔になつてゆらりゆらりと、天井を匍ひ廻つてゐる。

彼の胸の中はいま、四十度といふ熱が燃えてゐるのだ。そして血を交へた桃色の痰が、烈しい咳と一緒に彼の口からひつきりなしに吐出される。その度びに軀中の筋肉が、絞木にかけられたやうに油の汗を絞り出す。さうして苦んだ瞬間に於て、朦朧とした彼の知覺はパツと呼び醒まされる。

俺はいま囈言を云やしなかつたらうか――

彼はかうした懸念に捉はれながら靜かにあたりを見廻した。まるで「老衰」とでも題名をつけて飾られた木彫像のやうな母の姿が、默然として先つきのまゝ枕もとに坐つてゐる。何といふ苦しい事だ。やり切れない。もう一切を懺悔しちまうか――

彼は自分の胸に堀られた秘密の墓穴の中から、怨みと苛責の眼で睨めてゐる大澤の顔を見ながらさう思つた。

だが一體誰れに懺悔するんだ。誰れに……よし、また懺悔したとしてからが、大澤の顔が俺の秘密室から消えると云ふのか。大澤が俺を許してくれると云ふのか。――頭が割れるやうに痛む。この熱だ。この熱がいま俺の心を握つてゐるのだ。そして今かうしてゐる俺を何處へ引つ張つて行くか分らない。そしてどんな事を俺に喋らせるか分らない。

天井にゆらいでゐた大澤の顔がふつと消えた。灰色の霧のやうなものが、もや／＼と目の前一杯にひろがつて來た。彼の意識は再び深い深い水底のやうな息苦しい世界へ落ち込んで行つた。

――どこを見ても灰色で塗りつぶされてゐた。彼はその灰色の道を歩きながら思つた。俺はかうしてこのまゝ死んで

了ふのではないかしら？……ほう、この灰色の霧は――ぶるぶるつと戰慄が彼の軀を走つた。――さうだ、屹度死ぬんだ。でなくてどうしてこんなへんなとこを歩くもんか。俺は今――と、彼は又思つた。彼の目には只ひとりゝとぼ〳〵とその死への道を歩いてゐる自分のしよんぼりとした姿が描かれた。

淋しい影！

彼は眼に涙をたゝへてその影を見つめた。或る寒さ、冷めたさの感じがその影を取り卷いてゐた。が、彼の意識はやがて自分とその影とを一緒にして了つた。意識が朦朧とした霧の中に包まれて了つたのだ。

彼はいつか幻覺の世界を彷徨ふてゐた。そしていつから歩き初めたとも知らないその灰色の道を、無始から無終に行く――と云つたやうな氣持で歩いてゐた。が、彼の眼は間もなく一大障害をその道に見出した。彼の前にはいつ現はれたともなく、高い高い石の階段がそびへてゐたのだ。そして灰色の道はその階段につゞいてゐるのだ。彼はいつか自分の描き出したその畫の中に入つて、疲れた足を引きづつて一段一段と呼吸をはづませながら登つてゐたのである。

彼の足はその時疲れ切つて膝も立たないやうであつた。彼は階段に手をかけては辛ふじてそれを攀ぢ登らうと足搔いてゐた。

なぜこゝを登らなければならないのか――彼は或る宿命的な觀念に支配されてるらしい氣持で、蟻の這ふよりも遲く、足腰の利かない體でじりじりといざり上つて行つた。

夜、朧の夜、人跡の絕へた山奥の祠に見るやうな周圍の情景であつた。あたりは全く靜かであつた。微動だもしなかつた。そこには只、押しつけるやうな無氣味さと、微そかさのみがあつた。一刻も早く登つて了はなれけば――と云ふ焦燥に驅られながらも、彼の體は竦んだやうに動かなかつた。

この時である。彼は死んだ妹の聲を聞いた。

「兄さん、何をぐづ〳〵してゐるの？ 早く登つてゐらつしやいよ」

彼はハツとして聲のした階段の上を見上げた。今まで誰れもゐないと許り思つてたその上には、津留子がぼんやりと坐つてゐた。

「おやツ」と、彼は愕きの聲を揚げたやうに思つた。「お前はいつここへ來たんだい？ いや、それよりもここは一體どこなんだい？」

津留子は何んとも答へない。只、默つて、彼の顏を見守つてゐる。

この瞬間、彼の頭にはこれまでの一切が電光のやうに素早く明瞭に掠め過ぎた。何んとも云へない泌み入つた感情がきゆつと彼の胸を締めつけた。彼は呻いた。

「津留子！ 餘り俺を責めないでくれ。俺はお前に對しては實際すまない事だらけだ。お前の事ではこれでどの位、心を苦しめてるか知れない。ねえ、勘忍しておくれ。そんな目をしないで……。お前の大澤さんを……うむ、云ふのが苦しい、大澤さんは實はこの俺がなにしたのだ、殺したのだ。何も理由はない。只、さうなつて了つたのだ。

あゝ、俺はこゝでもう一切をお前に懺悔しちまはう。まあ俺のこの秘密室の扉を開いて見てくれ、お前は定めし顏を反けることだらう。そして俺の侮辱に對してどんなに血を立つたことだらう。だが俺は、意識の確かな間はたとへ神さまの命だつてこの扉は開かないだらう。俺は熱病患者の多くが、よく他愛もなく、平常は堅く口を噤んでる事をべらべらと喋つて了ふのを知つてゐる。俺はほんとにそれを怖れるのだ。

津留子！ その秘密室には一體何が入つてるとお前は思ふ。お前のその眼、責めるやうに俺を瞶めてるその眼を見る

と、俺はなんだかお前が既に、俺の秘密室を見透かしてるやうにも思へて無氣味でならない。だが、なんにしても随分いろんなものが入つてゐる。過去三十年間のものがそつくり入つてるのだもの。この中にはお前の知つてるあの榮子が素つぱだかになつて、俺の命ずるまゝの姿態をして俺の慾望を滿足させてるではないか。嘗て觸れ合つた彼女の滑らかな皮膚の感觸は、永久に俺の心に煩惱の種を植へつけて了つたのだ。到底忘れることが出來ない、それからお前もだ。いくらお前が悧巧さうな顔をして人前を飾つてすまして見ても、俺の秘密室に入れられたが最後、矢張り素つ裸體にされるのだ。そして眞つ暗な夜、墓を發いて屍を喰ふ何かのやうに、お前の誇る眞白の體はべろべろに甜め廻されるのだ。そして俺の自由になつてるのだ。俺は俺の意志するまゝに、自由にお前を弄ぶのだ。

津留子！　大澤さんはどうして死んだんだと思ふ。恐らくお前は知るまい。俺が殺したんだよ。……あゝさうだ。それはさつき云つたつけな。だが、なんで殺したんだつたか、……あゝ俺は夢中だつたのだ。何んの理由もない。怨みもなけりや、さうだ、怒りもない。強いて云へば……あゝ云ふまい。只、云へることは、榮子に逃げられた俺は淋しかつたんだ。そこへお前は大澤さんを手に入れて、これ見よがしに俺の目の前でいちやついてたと云ふことだ。その時に俺の心は決まつたのだ。只、それだけなのだ。

しかしあれからもう幾日經つね。なんでも暮も押しつまつてから、俺と大澤さんとの間に約束が出來て、伊豆の大島へ出かけて行つたんだつたね。――ところが行く時には二人だつたやつが歸りには大澤さんはもうゐなかつた。靈岸島を出る時の俺の胸には、惡魔の黒い影が白い齒を剝き出して嗤つてゐたのだ。「犠牲よ、犠牲よ」つてね。その日は十二月の末としては稀らしく暖かな靜かな晩だつた。何しろ百噸餘りの船がさう甚く揺れもしず滑るやうに三崎沖を走つてゐたのだ。船室にはいろんな人間が豚のやうにぎつしりと詰まつて熟睡んでゐたつけ、俺と大澤さんとは顫へながら甲

板の上から神秘な星空を眺めてゐたのだ。海は靜かだつたので海員達の姿も甲板には見られなかつた。皆んな安心してゐたのだらう。「三崎の燈臺！」と叫びながら舷側に延び上つたその刹那だ。大澤さんの「呀ッ」と云ふ斷末魔の叫び、怨めしさうに睨めたその眼が、俺の秘密室の扉の奥深くに藏ひ込まれたのは。

津留子！　いや、お前ばかりではない。大澤さんの死が餘り思ひがけない突然だつたので、隨分皆んなを愕かしたつたなあ。お前なんかその時、内々疑惑の目でこの俺を見たつたかも知れないね。だが、大澤さんの神經衰弱がまあ萬事を圓滿に解決してくれたんだつたね。だが併し、この事件は俺に取つても多少、見當違ひの復讐だつた感はある。が、何んにしても俺に取つてはその時誰れでも關はない、一人犧牲が欲しかつたのだ。――

餘り喋つたせいだらう、彼は喉がひり／＼痛んで呼吸が苦しくなつて來た。で、喋るのを止めて喘ぎ喘ぎ、次の階段に手をかけた。が、どうしても登れなかつた。彼は憫みを乞ふやうな眼をして上を見た。と、其處にはもう津留子の姿はなくて、佩劍の柄を握りしめた巡査の儼めしい黒い姿が、にゆうつと立ちはだかつてゐた。森ツと靜まり返つた灰色の世界であつた。その中に光る巡査の二つの眼――それはまるで漆黒の空に輝く星のやうに、彼の大切にしてゐる灰密室を透視してるやうに光つてゐた。

彼は冷やりとした痛みを心臟に感じた。鋭利な刃物で抉られたやうな痛みであつた。瞬間、彼の手は階段をはなれて眞つ逆さまに落ちるのを、彼は感じた。だが、その激動を軀に感じると同時に、今まで在つた階段も何もすつかり掻き消えて、舊の川底のやうな息苦しい灰色が身の周りを立て罩めてゐた。

その後暫くの間、時間にしてどの位の長さに亘つたか、兎に角彼の知覺は全然なくなつて了つた。生も、死も、快感

も、苦痛も、凡て考へもしなければ感じもしない。若しこの時に呼吸が絶へたのなら、彼は死と云ふ事實に對して恐らくは何んらの恐怖も、寂しさも、また殘り惜しさも感じずに、死ねたに違ひない。

併し彼の肉體には再び猛烈な苦痛が蘇つて來た。それは失心狀態に陷つてた彼の肉體が再び意識を取り戻したからであつた。

二

彼の五官は再び働き始めた。それも風の強い曇り日のやうに、チラッと拳大の碧空が現はれたかと思ふと直ぐ、暗憺とした黑雲が蔽ひかくして仕舞ふ狀態ではあつたが。が、その爲めに却つて幻覺と現實との織り交つた微妙な世界が彼の頭に展開して、その不思議を不思議として感受する事の出來る瞬間が、如何にも自分そ大病人であると云ふことを意識させずには置かなかつた。

洞窟のやうに空しく見開かれた彼の瞳は、その時自分の頭の上に吊り下がつてゐる氷嚢の紐をじつと見詰めてゐた。見詰めてる内に彼の眼には、その白い紐が忽ち天井に仕掛けられた器械から無限に製出され、自動的に下へ下へと落ちて來るさらし飴の棒のやうに映つたりした。だが時には、餘り奇怪な幻想を頭に描いてその後で直ぐ意識を恢復した時なぞ、俺の頭は少し變だぞ——と云ふ自己批判の力さへ出て來た程であつた。

「もう大丈夫です。峠を越しました。だがもう二三日といふところが肝腎ですから氣をつけて下さい」

時には彼の耳はかうした醫者の言葉をすら完全に受け入れる事があつた。が、多くの場合は矢張り昏々と眠つてるのだつた。

さうした日が幾日かつゞいた。彼の眼はだんだん、より確かに物を見、耳はより確かに物を聞くやうになつた。彼は自分ながら病氣がもう終りに近づいた事を知つた。同時に自分の體が可なりの程度にまで、熱の爲めに破壊されたと云ふ事をも知つた。

快方には向つたと云ふものの、それでもまだ胸の中は烈しい混亂が渦卷いてゐた。抉るやうな烈しい咳はいつまでも止まなかつた。時には、このまゝ呼吸が絕へて了ふのではないかと思はれる事もあつた。[illegible]が破れて始終血が出てゐた。

彼がその咳の爲めにひよいと意識を取り戻した時であつた。彼は寢[illegible]から少しはなれた[illegible]際の處にチラツと、改まつた坐り方をしたふたりの人を見た。いや、人と云ふよりも茫乎とした二個の影であつた。その瞬間、彼の心臟はびくつと錐で刺されたやうに痛んだ。到頭分つたな。……さうだ、例の大澤の一件が露れたな——と。

彼は呼吸をはづませながら暫くその影を見詰めた。が、見詰めてる內に、その一人は彼が病氣になる遙ひ二ケ月許り前から勤めるやうになつた店の荒木と云ふ番頭さんである事が分つた。彼はほゝと安心の息をもらした。が、もう一人の方は、はつきり見へない位置にあつたせいもあるが、どうしても彼に思ひ出せなかつた。併し彼は、その荒木と併せ考へて直覺的に、それが自分の捕縛に來た警官でないと云ふことを知つた。で、彼はせめてその人の聲を聞いて、それが誰れであるかを判斷しようと思つた。が、その人はそれこそ物の影のやうに押し默つたまゝ、口を少しも開かうとはしなかつた。

彼はまた不安になつて來た。——あの男は一體誰れだ。殊に依つたら俺が餘り永く店を休んでゐるので、俺の代りに新らしく入つて來た人ではないだらうか。若しそれなら……いや、それも仕方がないことだ。

彼はまたうと／＼と眠りに落ちて行つた。

熱も時に依つては著しく上る事もあるが、兎に角追々に降つて行く樣子であつた。父の顏も見へ始めた。母の顏も見へ始めた。妹の顏も、そして弟の顏も。だが、その中に交つて一つ、おしろいを眞白に塗り立てたお盆のやうに圓い見知らぬ顏が、彼には何かしら異樣なものの出現のやうに滑稽にさへ思はれた。母はその人を「久良木さん、久良木さん」と呼んでゐた。

遂ひ頭の先きには、鮮紅色の薔薇の花が綠の葉に織り交つて、死のやうな灰色の世界に彷徨してゐた彼の眼を射た。

「おゝ綺麗な花！」

彼は思はずかう呟いてうつとりと見入つた。が、眼は直ぐ疲れた。神も佛も持たない彼ではあつたが、この時何に感謝して好いのか知らないが、胸の底から衝き上げて來るやうな感謝と歡びとが洪水のやうに漲つて來るのを覺へた。

生きるんだ、生きるんだ、何者を犧牲にしても生きなければ嘘だ。──

彼の眼は歡びの涙の中に漂ひながら、音樂のやうな節調を以つて響いて來るこの聲に聽き入つた。

ちや、生きる爲めには何を犧牲にしても許されると云ふのか──酒に醉つたやうにうつとりとしてゐた彼の魂は、この時ふつと大澤の顏をひ思浮べながら顫へ聲で呟いた。

犧牲にしてもいゝのか、いゝのか。俺は生きる爲めにやつたのではないか。だのにこの苦しみは──

この時家の前の敷石道をぎゆつぎゆつと靴の歩く音が鳴つた。がちやんがちやんと佩劍が鳴つた。

彼の呼吸はぴりつと止まつた。やがて次の瞬間には急激に動悸を打ち始めた。いつ頃だつたか意識を失つてた時、幻覺の世界で見た並木の黒い夥しい姿が窓の隙に頭を出した。靴の音はみな一家の前を通り過ぎた、が、胸の動悸はあまら

ない。彼の胸の中をいろいろの不安が渦を卷いて流れた。

俺はあの時、何か警言を喋りはしなかつたらうか――彼はおどおどした眼を臆病らしくあたりに振り向けた。

三

俺はこの病氣であのまんま死んで了つた方がよくはなかつたらうか。――意識が明瞭になつて來ると同時に、病氣をする前までの胸を刺すやうな苛責と恐怖が再び彼を責め始めた。波の音、燈臺の光り、大澤の顔――。が、旋廻してゆくフイルムのやうに通り過ぎる傍から、憑き物のやうな佩劍の音、靴の音がこちこちと響く。黑い影がすうつと近寄つて來て襟頸に手を伸ばす。――

油汗をじつとりと搔いて彼は呻きながら惡夢をつゞける。と、この時彼はふつと或る物音に眼を醒ました。パラパラ……パラツと、豆を轉がすやうな輕やかな仔猫達の足音が、快く彼の耳を打つたのだ。彼は救はれたやうな寬ぎを覺へて、ほつと微かな溜息をついた。

ニヤーオン

ニヤーオン

隣室の鳴き聲は更につゞいた。彼はその柔かみをもつた鳴き聲から、まるまると肥つた綿の塊りのやうな愛くるしい仔猫達を眼に描いた。追つかけくらでもしてゐるのだらう、パラパラ……パラツと云ふ輕やかな足音がまたしても隣室でする。ニヤーオン、ニヤーオンがまるで伴奏のやうに響く。

「あの猫の仔をこつちへ連れて來ておくれよ。隨分大きくなつたらうね」

彼はかう云ひながら倚も隣室の樣子に耳をすました。

「あらツ、兄さんが……」

直ぐ枕許で民子の頓狂な聲がした。彼女はついつと立ち上ると、一寸彼の顏を覗いて急いで隣室の母の處へ走つた。

そして云つた。

「母さん、兄さんがね、今何か云つたのよ、囈言ぢやなく……猫が大きくなつたかつて」

「叱ツ、靜かになさい。なんですね。騷々しい！」母のたしなめる聲がした。

やがて母と民子の二人の顏が並んで彼の傍へやつて來た。晴れ晴れしてゐた。

「どう、氣持はどうだね」

母のうるんだ感慨深さうな聲が云つた。

「兄さん、うるさかあない？ こつちへつれて來ませうか。隨分大きくなつてよ。……今までもね、兄さんがうるさいだらうと思つて此方へはちつとも寄越さないやうにしてゐたの！」

民子は物稀らしさうな顏をして、つゞけさまに喋つた。

「あゝこつちへつれておいでよ。うるさかあないから」

民子がそつと襖を開けると、仔猫達はばつたりその騷ぎを止めた。そして菱形に圓味をつけた眼が金色に大きく見張られて、六つ、襖のところに並んだ。怪訝さうな顏をして。或るものは照れ隱しに襖の角に鼻をこすりつけ、また或るものは後足で立ち上つて小さな柔らかさうな爪を研ぐ眞似をしてゐる。が、やがてその中の一匹が尻つ尾をぴんと眞つ直ぐに立てゝ、おづおづと開け放たれた彼の室に入つて來た。と、つゞいて後の一匹もどこか不安げな眼つきをしながら

入つて來た。

彼等は自分の知らない、新らしい世界を發見したと云つたやうに其處らの臭ひを嗅ぎ廻つたり、眼を見張つたりして室内を觀察してゐた。と、最初入つて來た奴がいきなり、彼の寢てゐる掛け布團の上へぽんと驅け上つた。するとつゞいてあとの二匹がその後から驅け上つた。布團の上では直ぐ咬み合ひが始まつた。鞠のやうにころ〳〵轉がり落ちた。

彼は何もかも忘れて、自由に身輕に跳んだり轉つたりしてゐる仔猫達を見ながら、うとうとと再び眠りに落ちた。すつかり疲れて了つたのだ。

四

意識がはつきりし始めて來たとは云ふものの、彼は矢張り起き上る事は出來なかつた。で、仰向けになつたまゝじつと寢てゐた。が、或る日初めて母と看護婦の手を借りて、體を横に、寢返りをさせて貰つた。約半ケ月間まるで意識を失つてた彼の眼には、物稀らしい許りに生々と外の自然が迫つて來た。手洗鉢の傍に植へられた柘榴の艶々した若葉のかげには、朱の球のやうな蕾が點々として覗いてゐた。それからステツキでも押つ立てたやうに何んの奇もなく、庭の隅に陣取つた梧桐のてつぺんには、淡黄から綠にならうとする廣葉が我れ勝ちに群らがり擴がつてゐた。それから又垣根の際に押しつけられたやうに植ゑられた躑躅には、血のやうな紅が、樹全體を蔽ふて燃えてゐた。自然の凡ては今日醒ましいばかりに、初夏の空氣の中に息づいてゐるのだ。

彼は貪るやうに、それらのものを飽かず眺めてゐた。が、その内に彼の眼はふと瑞々しく生へ揃つた隣家の畑の茶つ葉が、垣根越しに日光を吸つてるのを見た。彼の眼は、何者かに魅せられたやうに茶つ葉に惹きつけられてゐた。うま

さうな菜つ葉だ。あの菜の葉をあのまんまむしや〳〵喰べたい。さうしたらこの胸の中が清々するだらう——!

彼の眼は飽かず、あの土と日光と空氣との寵兒であるらしい青い菜の葉に見惚れてゐた。それは熱に乾き切つた彼の肉體と、瀕死しかゝつた生命が本能的に欲求したのだ。彼は馬のやうにあの瑞々しい菜つ葉を、口一杯にしやり〳〵と嚙む刹那の快感を想像した。

「菜つ葉が喰べたい」

彼は漸く疲れて來た眼を輕く閉ぢながら云つた。

「えゝ、もう少し我慢してらつしやいね、いまに煮て差し上げますから」

直ぐ枕もとに坐つてゐた久良木さんのかう云ふ聲が、何處か遠くの方でしたやうに彼の耳は聞いた。

晝と夜との區別がつくやうになると同時に、いつも彼を奇怪な幻覺の世界に閉じ罩めてゐた灰色の霧は、だんだんと彼の周圍から取り去られて行つた。彼は三度三度、卵だとかソップのやうなものを少量づつではあるが攝るやうになつた。

或る日、隣りの室で母と久良木さんとの何かひそ〳〵と囁く聲がふと彼の耳に入つた。久良木さんの聲は云つた。

「私の手がなくとも大概もう間に合ひますし、それにご病人の方はあの通り日増しによくなつてくのですから、私はこれでお暇をいただく事にしませう」——

それから二日ばかりした後ち、看護婦の久良木さんは愈々歸ることになつた。來た時の容子がどんなであつたか知らないが、白い看護服はバスケットに押し込み、一寸見違へるやうな服裝をして彼の寢てゐる室へ現はれた。その平べつたい顔に、おしろいでつぶれる程眞白に塗り立てゝあつた。

「ではこれでお暇します。どうぞお大切になさいましね。もうご病氣の方は決してご心配ありませんから」

かう云つて彼女は立ち上つた。

彼の耳には隣室の母と久良木さんの話す聲がはつきりと聞かれた。彼はぼんやりした瞳で天井を見詰めながら、聞くともなく二人の會話を聞いてゐた。

「おかげさまであれもどうやら命拾ひしました。あなたに來ていたゞいた時分はもうどうなることかと思つてたんですが。……何しろもう熱にうなされて囈言ばかり云つてますし、それに瞳は開いちまつて内の者の見分けもつかないで、何を云つても通じないんですものね」

かう云ふ母の、感謝に滿ちた感慨深さうな聲が彼をすつかり感傷的にして了つた。彼はなんとなくかう泪ぐましい敬虔な氣持にならずにはゐられなかつた。彼の目頭には涙がじーんと滲み出して、天井の木目も茫乎とかすれて了つた。

「ほんとにねえ、私もはじめてお伺ひする時はまさかあれ程になつてようとは思つてませんでしたわ。只、ほんの流行感冒かなんかで少し熱が高い位に思つて參つたんですの」

久良木さんの若い彈力のある聲は、晴れ晴れした初夏の空氣にしんみりと融け込んでゆくやうであつた。

「でもこんなお目出たい事はありませんわね。あれ程のご病人が癒くなつたのを見て歸るんですもの。會へ歸つてからもどんなに肩身が廣いか知れやしませんわ」

彼女の聲は心から嬉しさうであつた。彼は自分の癒くなる事が、そこに別の意味があるにもせよ、今まで見ず知らずの他人にまでそんなに喜びを與へるかと思ふと、嬉しい以上、そこに何者かに感謝せずにはゐられないやうな氣持にさへなつて行つた。

「それからこれを……宅があなたのお歸りになる時渡すやうに——つて云つて出たんですが、それ、あなたがいらつした日に、看護婦會から寄越したのだと云つたあの勤怠簿……」

母はかう云つて何かしら火鉢の抽斗を開けて出すやうであつた。

「まあ、ほんとに……これを忘れちや大變だつた。これ妾たちの軍隊手帳なのよ。こゝに書いていたゞいた成績で妾たちの等級やお給金が變つて行くんですもの。……これに就て面白い事がこの前ありましてね」

彼女は如何にも可笑しかつたと云つた風に、終ひの方を笑ひながら云つた。

「まだ逢ひこの間の事なんですよ。濱野さんて方が矢張り會から病家へ派出されましてね、その濱野さんが歸つて來ると直ぐ、この勤怠簿を會長さんのとこへ出したんですの。するとどうでせう、それには濱野さんが出張中に病室で煙草はすぱ／＼吸ふ、病人の召し上る御菓子には手をつける。居眠りはする。それに看護が不切親で何がどうだ——と、もういろ／＼惡い事ばかりが書いてあつたんですつて。で、その晩會長さんから呼ばれましてね、散々叱られたんですの。するとそれからまる二日ばかりといふもの、濱野さんは口惜しい口惜しいつて　物も喰べずに泣いてるんですもの、それはほんとに氣の毒なくらゐでしたわ」

「まあ、ほんとにそんな事をなすつたんでせうか」

母は如何にも驚いた、と云つたやうな聲をして云つた。

「さあ、それはね、ほんとにそんな事をしたかどうですか、大方病家の感情でも害ねるやうな事でもして、おまけをされてるのかも知れませんわ。ですが濱野さんて方はふだん會にゐらつしやる時も餘りお行儀がよくありませんでね、煙草は吸ひますし、それに始終何か買つて來ては喰べてますの。そんな風でしたから會長さんもそれを信じないわけには行

かなかつたんでせう。ふだんの行ひが行ひでしたから。それに一度さうした成績を通知して寄越されますと、何處へ行つてもその履歴がついて廻りますのでね、濱野さんなんかももうこんな會は出てしまふなんて云つてましたが、さあどうしますか」

久良木さんはかう云つてからふと、「それにしても妾のにはどんな事が書いてありますかしら。怠け者で、不親切で……には違ひありませんが、おほほほ……」と、終ひの方を冗談らしく笑つて了つた。が、その笑ひの底には笑ふどころではない眞劍さが、潜んでるやうに感じられた。

「いゝえそんなご心配はいりませんよ、宅なんかも始終、久良木さんは親切だ、あゝ好い人に來て貰つた――つてもう口癖のやうに云つてましたものね、もうそれだけはご安心なすつて大丈夫ですよ。……しかしお若い方ばかり大勢居らつしやるんですから隨分面白い事もございませうね」

「面白い事より辛い事の方が多うございますわ。そりや稀には隨分變つた事はありますけど。……もう半年ばかり前の事ですけど矢張り私の方の會から出張した方で、病家の患者と心中したなんてのがありましたわ」

横越しに聞いてゐた母と久良木さんの會話が、だん／＼遠くに行くやうに思つた時、彼は又眠りに落ちかゝつてゐたのであつた　で、次に彼が眼を覺ました時には、もう久良木さんの彈力のある聲は聞かれなかつた。室内の空氣までがぐつたりと疲れた色に染まつてゐた。

五

「氣分はどう？　何か欲しくはない？」

母がかう云つて彼の傍へ來た時、彼はまた隣りの畑に生へてる青々とした菜つ葉を見てゐたのであつた。で、彼はその時、道夫が來たらば二三枚採らして、誰れもゐない時喰べてやらうと思つてゐたのであつた。が、道夫が來ないで母が來た——彼は不機嫌な顔をして默つてゐた。

彼の眼はいつまでも、生々と呼吸をつゞけてゐる菜つ葉に濺がれてはなれなかつた。自分が起きられるんなら、足が利くんなら、何んでもないのに——と思ひながら。

雨霽りの日であつた。家の中は森ッとしてゐた。外では、母が民子と二人がかりで洗濯をしてゐた。學校から歸つたばかりの道夫が隣りの室で復習をしてゐた。

「おい、道夫！」彼はどうにも制し切れなくなつた誘惑を感じて云つた。「そこの畑にある菜つ葉を二三枚採つて來ておくれ」

彼は道夫が再び隣室の自分の机の前に坐つて復習を始めるのを待つて、手にした菜を一緒に口の中へ押し込んだ。彼はまるで飢へた者のやうに、隣室の道夫に氣を兼ねながらむしや〳〵とそれを嚙んだ。

バサッと本を伏せる音がして道夫の立ち上る氣勢ひがした。彼は顔をしかめながら慌てて、口にしてゐたものを嚥み下した。

熱はもう夕方を除く外、滅多に平温を上るやうな事はなかつた。醫者はもう一日に一同か隔日にしか廻つて來なくなつた。來てももう心配げな様子は些しもなく、たゞ通り一遍の診察をして行くに過ぎなかつた。

しかし病氣はよくなつても體はまだひどく衰弱してゐた。殊に床から起き出る事が出來ないので、日の内に幾度となく、その中で眠つたり醒めたりしてゐた。醒めてゐる時には退屈が洪水のやうに押し寄せて來て、彼を苦しめた。彼は布

圍の下から兩手を出して見入つた。血の氣のない、垢にまみれた兩手は骨と皮ばかりに細く痩せてゐた。爪が氣になる程長く伸びてゐた。次に、彼はその兩手をぎゆつと握りしめてみた。が、握りしめる事が出來なかつた。兩手の指は彼の意志とは無關心にだらりとしてゐた。折り曲げる事も出來なければ擴げる事も出來なかつた。彼は幾度も幾度も繰り返し、指の運動を試みた。けれどそれは幾度やつてみても結局失敗であつた。自分とはまるで關係のない義手をつけたやうに、頑固に云ふことを聽かなかつた。

一體これはどうしたことだ——彼は愕きの聲を揚げながら自分の手に見入つた。それに心配はそればかりではなかつた。ふだんから健忘症の彼ではあつたが、病氣してから一層記憶力がなくなつてゐた。何か云はれた事を直ぐ忘れて了つた。それから、舌がもつれて思ふやうに口が利けなくなつてゐた。發音が充分に出來ない。殊に或る音になると、如何に骨折つても口から出て來なかつた。まるで三つか四つの子供が舌たるい調子で、片言交りに何か云ふやうであつた。云はうとする意志——その意志を充分に表現する事の出來ないもどかしさが、彼をすつかり癇癪持ちにして了つた。彼は自分の周圍で起る、眼に觸るるもの凡てに腹が立つた。母に甘へてやんちやを云ふ道夫の聲を聞いても、ぐづ〳〵云つては拗ねるのを見ても、凝乎としてゐられない程彼の心をむか〳〵させた。つまり眼に映る限りのもの凡てが、彼を苛々させ苦しめるのだ。だから何も見さへしなければ平隱でゐられるのだ。もうどんな事があつても彼等のする事を見まい——と思つたことも一再ではなかつた。が、狹い家の内の事であつて見れば、どうしたつて見ないわけにもまた無關心でゐるわけにも行かなかつた。眠つてる時以外の出來事は、凡てが耳に入り眼に入つた。その度びに彼の心は油煎りにでもされるやうにじり〳〵した。大きな聲で思ひ切り呶鳴つたら、幾分か胸が透くだらうとは思つても、彼の喉は微かなしやがれ聲を出すに過ぎなかつた。そして却つて道夫たちの侮蔑を招くもととなつた。

朝からむせるやうな雨がひつきりなしに降つてゐた。室の中の空氣はすつかり冷へ、それに濕めつぽくなつて、眼に觸れるもの凡てが氣持惡く迫つて來た。

三匹の仔猫達は眼の覺めてる限り、彼の寢てゐる布團の周圍ではた〳〵追つかけくらをしてゐた。この間まで彼の枕もとで、眼の覺めるやうな紅と、香はしい匂ひとを漂はしてゐた薔薇は、色の褪せた幾つかの花辨を邪魔さうにくつ着けて、雨の中に放り出されてあつた。

「こんな大きな蛞蝓が匐つてるわ！」

民子の戰慄を帶びた聲が勝手の方でした。彼の眼には體を硬張らせながら全身の毛穴を立て、憎惡に充ちた眼でその蛞蝓を瞶めてゐる民子の姿が描かれた。

「毎日のやうに雨が降るんだから仕方がありません。火箸かなんかで挾んでそとへ打つちやつておしまひなさい」

と、つゞいてから云ふ母の聲も聞へた。

何もかも腐らして了ふやうな雨の音に聽き飽きた彼は、もう退屈でたまらなかつた。彼はそつと布團の中から兩手を出して、指の運動を試み始めた。相變らず思ふやうに屈伸が出來なかつた。呑氣な川田氏の「なに、自然によくなつて來ますよ」と云つた昨日の言葉が、彼の頭に浮んで來た。

「手足の方は兎も角として、私が心配しましたのは餘り熱が高いし、長くつゞくので腦症を起しはしないかと、それ許りが氣になりましてね。何しろあの熱がもう二三日もつゞくと乾度腦を冒されたでせう。いや、現に舌の廻らないのも手足の利かないのも、忘れつぽくなつたのも、皆んな腦症の徴候なんですよ」――

川田氏はさうも云つたのである。醫學の事にはまるで門外漢である彼も、腦症の恐ろしいことは知つてゐた。自然に

なるか、死ぬか、それより外行き道のない脳症——それを只ほんの徴候だけで喰ひ止めてくれた川田氏は實に彼の恩人ではないのか とも思つた。無意識に手の指と指との間をひろげてみたり、又折り曲げてみたりしてゐる内に九彼はふと自分がまだひどく悪い時分見舞に來てくれた、店の番頭さん達の事を思ひ浮べた。また自分の仕事がどう處置されてゐるだらう、と云ふ氣懸りが、痛切に彼の心に喰ひ入つて來た。それから二人來た內、どうにもはつきり分らなかつた一人の事を思ふと、彼の心は一層憂欝になつて來た。

彼はそれを思ふことが恐ろしかつた。口に出せなかつた。口に出せないだけにその事が絶へず彼の心を苦しめた。さうかと云つてあの頃の事を母に訊くのは尙はゞかられた。熱にうかされた自分はあの當時何を云つてるか分りはしない。そんな事を訊いて折角忘れかけてる母に、再びいやな事を想ひ出させる——それは實にたまらない事だ。いや、もう一切を忘れることだ。——彼はかう思つて眼を閉じた。

この時彼の頭にはふと、同僚の新島の顔が浮んで來た。煙草好きの新島が火鉢の中に一杯吸殼を並べながら、店の二階で忙しさうに事務を執つてる姿が描かれた。それから彼は煙草の煙でもつていつも曇つたやうなあの事務室を思ひ浮べた。あの電車や自動車の爲めに年中、地震のやうにぐら〳〵搖れてる事務室にゐて、ペンを執つてゐる自分の姿も其處に置いてみた。風が吹く日には其處の窓から朦々と砂塵が舞ひ込んで、机の上は拭いてから五分と經たない內に眞白になつた。また、室の隅には古新聞紙に包まれた店の品物がごた〳〵に置かれて、何のことはない、物置と兼帶の事務室であつた。しかもその事務室の上の屋根裏はほんとの物置になつてて、包裝用の新聞紙の束はその事務室を通して絕へず出したり入れたりされてゐた。それに小さな小僧たちがそれを遠慮もなくどすんどすんとその屋根裏から落すので、時に依るとその事務室には居たゝまれない程、埃になつたり騷々しかつたりした。彼は、自分の缺勤の爲め訪問や

ら事務やら一人で背負つてやつてる新島が、その埃の渦の中で顏をしかめながらペンを握つてる姿を想像して、氣の毒にもなり濟まないとも思つた。

彼はその時ふと、自分の病因が其處の埃にあつたのではないかと思つた。又、いつまで經つてもその店の空氣に慣れ親しむことの出來ない、氣づまりな生活がその原因の一つに違ひないとも思つた。この店へ入つて間もなくである。彼は此處でする自分の仕事が決して自分の氣質に合はない、又將來の爲めにもさう大して期待の置けない、その上物質的にも極めて酬ひられることの少ない爲めに、可なり嫌氣がさしてゐた。彼は幾度、もとの勞働生活を思ひ浮べた事だらう、其處には氣詰りな、頭を使ふ仕事はない。只、筋肉さへ働かせば好いのだ。さうした中に浸つてる氣易さ、比較的物質的にも酬ひられるその工場生活——店の仕事に嫌氣を催して來た彼は幾度、そつちの方へ誘惑を感じた事だらう。併かも彼が最も淋しいと思つたのは、自分がこの店の仕事に對して、又將來に於ける自分のかうした仕事に對して、些しの自信も持てない事であつた。少年時代から今の年になるまで工場生活をして來た彼には、勞働者としては尠なくとも一人前だと云ふ自信を持つてゐた。從つてその慣れた工場生活を捨てゝ、かうした適不適も分らない新らしい生活に入る事は、尠くとも今の彼に取つてはいつも不安であつた。工場へ歸らうか。今の店を勤めようか。と始終迷つてゐた。その爲めに彼の心はいつも苛々してゐた。店へ入る前の彼は勞働生活にはもう可なりあきあきしてゐた。で、生活の更新と云ふことを何かしら、偶像に對する盲目的な崇拜の氣持で翹望してゐたのであつた。併かもその生活の更新と云ふ事を單に外的に許り解釋して、永い間の工場生活を——何の生彩もない職工生活を、本能的に嫌ひ出してゐたのだ。只、生活の様式を變へる事に依つてのみ、この生活の不安から脫れ、苛々しさを救ひ、生彩のある生活に入れると思つてゐたのだ。

朝、床の中で眼が覺めると同時に、今日はどうしよう？　思ひ切つて店の方は止しちまひ、工場へ行からかしら――と、彼は迷つてゐた。そして無意識に床の中から手を延ばして、枕頭の時計を採つたのである。彼は今、その當時の自分をまざ／＼と眼に思ひ浮べることが出來る。工場へ行くには朝五時には起きねばならなかつた。彼が朝ぽつりかり眼を開いて時計を探る時、大概それは五時前後を示してゐた。起きようか起きまひか、と彼の心は可なり長い間迷つてゐた。コチコチと刻むセコンドは遠慮もなく針を進めてゐた。時計を握つたまゝ迷つたなりに。彼はいつかとろ／＼とまどろんで了ふのであつた。すると彼の頭には間もなく、ハンマーを握つてカンカンやつてる工場の仲間の顔が浮き上つて來る。機械のガラ／＼廻る音、油の焦げる臭ひまでが意識の上に蘇つて來る。彼の心の眼は凝乎とそれを眺める。その時の彼の魂はもうすつかり工場の中へ入つてゐる。そして仕事の單調な事、無意味な事につくづく愛憎をつかしてゐる。

　こんな仕事にどれだけの價値があり、意義があるのだ。何も俺でなくてはやれない、と云ふ仕事ではないではないか、どんな馬鹿でも二本の腕さへあれば立派にやれる事ではないか。――

　こんな考へが奔流のやうな勢ひで彼を捲くし立てる。と、どこからともなく、又、石炭の煙だか土の埃だか分らないものが朦々として彼の身邊に漲つて來る。そして彼の頭に描かれた工場の幻影を追つ拂つて了ふ。と、彼の眼には今度は新らしい世界が展開する。

――其處は店の二階である。新島が相變らずぽつねんと机の前に坐つて、鼻をくん／＼云はせながら煙草をふかしてゐる。

　ふつと氣がついて彼はまた枕頭の時計を取り上げて見る。六時過ぎてゐる、もう駄目だ、――と呟く。工場へ出るにしては六時前に飯を喰べて家を出なければならないのだ。しかし彼はこれですつかり氣が落ちついて、又布團をかぶつて

寢て了ふ。そして八時を打つてから仕度をして店へ出かける、とは云へ、工場の方の引つかゝりが全然彼の頭から消え去つたわけではない。病氣缺勤、と云ふ名目で工場を休んでる彼の處へは、事情を打ち明けてある仲間のKから時々決斷を促すやうな手紙が來る。時には自身でやつて來る。そして、店い方はどうだね、見込がありさうかい――と云ふ。工場の方もね、餘り君の缺勤が永くつゞくのでいろ／＼に取り沙汰してゐるよ。この間なんかも、「疾病解傭」にしようなんて噂が事務所から出た程でね――とも云つて來る。

それを聞いた彼の心がどうしてびく／＼せずにゐられよう。貴樣は卑怯だ。なぜ背水の陣をしかないのだ。なぜ二股膏藥なんか貼つてるのだ。どつちとも早く決めて了へ――と云つて嚴しく極めつける。

俺にはどうして決斷力がないのだらう。俺にも少し自信力があつたら……

彼はかう心の中でめそ／＼泣きながら、店へ出てゆく。――これが彼の病氣をする前までの生活だつたのだ。

六

胸の方はもうすつかり元の通りに癒くなつたんだが――と、打診を経へて川田氏は云つた。胸の底を抉るやうな咳も殆ど出なくなつた。體溫も平熱に復した。暫く何んにも詰め込まなかつた胃の腑は、猛烈な食慾に目さめかけてゐた。だが、起き上る事も出來なければ布團の上へ坐るだけの氣力すらまだなかつた。恐ろしい無聊の恢復期間を彼は相變らず眠つたり醒めたりして床の中で過してゐた。ボトンボトンと簾を打つ雨垂れの音に、彼の胸の中を泥濘のやうに濁らした。

「よう[illegible]さん[illegible]」

關係なく。悪い事だ――と思つてみても駄目だ。長子と末子でその間の年齢の差が餘り大きいせいか、喧嘩になつた事はない。だが二人の間には相互に反噬し、敵視し、憎悪し合ふ血が流れてゐるらしかつた。

同じ父、同じ母から血を分けながらどうしてかう憎まずに居られないのか――

時にはかうした反問を自分にして見る事もある　だがそんな事でどうして滿足な解答が得られよう。自分自身の中にさへ善と悪との對立があり、相憎み相愛する血が渦を卷いてるのではないか。若しその兩極の血を二人が別々に受けついだとしたら――もうその結果は分り切つてゐる。で、その兩極が益々反撥するやうなら、いつか必ず兩者の間に火花を散らすやうな爭ひがないと、誰れに斷言出來よう。彼は本能的に自分の血を怖れた。

「よう、おくれつてば。……たつた一つで好いから、ねえ、いゝだらう」

道夫は再びかう云つて脊をどしんどしん壁にぶつつけてゐる。これだけの事に彼の神經はもうぴり〳〵尖り出して來るのだ。

「もういけません。さう生の梅を喰べるとまたお中を悪くして了ふぢやないか。餘りぐづると、ほら、兄さんに又叱られますよ」

母は俺の癇癪をだしに使つて道夫を宥めようとしてゐる。――彼はこれにも餘り好い氣持はしなかつた。癪に觸つた。

「ケチンボ！　母さんのケチンボ！　一つばかりなんだい」

かう云つた道夫の顏が彼には眼に見へるやうだつた。頬を尖らかして、その下に睨み据へた二つの陰險な眼がじつと母と共處らに置かれてあるだらう梅の實とを等分に見較べてる蝙蝠のやうな顏――彼の胸はもう爆發するばかりになつ

た。

「さあ」――

母の小さい聲がした。道夫も默り込んだ、だが彼の胸の中は捌け場を失つた鬱憤の爲めに、まるで安全瓣のない汽罐が極度にまで氣壓を高めた時のやうに、不安とも不快とも云ひやうのない狀態に陷ち入つた。

彼はじつと胸の中に渦卷いた暴風の過ぎ去るのを待つた。

ガラ〳〵つと格子の開く音がした。が、彼は氣がつかなかつた。

「兄さんはどう？　いくらかよくなつた？」

障子を明けると一緒にかうした太い調子の貞次の聲が、彼の耳を貫いた。同時に彼の胸には前よりか一層不快の氣壓が高められた。

「いやな奴が來やがつた！」

彼は自分自身に呟いた。

「忙しいだらうに度び〳〵有難ふ。兄さんの病氣はもう日增しによくなつて行くが、今月はどうしたの、榮子は留守かい？」

それは母の聲であつた。いやな聲だ。彼は脊筋の邊をぞうつと血が逆流するやうな不快を感じた。それはまるで硝子と金屬との觸れ合ふキイキイ云ふ音から感じる戰慄であつた。確かに氣のせいでも、ひがみのせいでもない。母は貞次に媚びてるのだ。景氣の好い、金のある貞次に諂つてるんだ。彼は母に對しては殆どいかな場合にも、無條件に頭をさ[illegible]

その時彼はまた思つた。――俺が病氣になつたのはあの物置のやうな事務室に渦卷いてる埃の渦でもなければ、氣詰まりな不滿な生活でもありやしない。あの貞次が俺の胸に病菌を蒔いたのだ。――

彼は貞次に逢ひたくなかつた。貞次の期待してるであらう、病氣見舞に對するお禮の言葉をすら與へたくなかつた。

彼はなるべく不自然でなく思はせるやうに、平和な面持をして眼を閉じた。彼は隔ての襖がすうつと開くのを聞いた。同時に、彼は自分の眼の縁の筋肉がぴくぴくつと痙攣するのを感じた。

「兄さんは眠つてゐる」――

貞次の呟く聲がした。と、同時に襖はすうつと閉められた。彼は凝乎と耳をすました。そして、まるで間諜にでも入り込んだやうに息を殺して、隣室の靜に氣をつけた。

「貞兄さん、ボール買つとくれよ。ねえ、買つてくれない?」

彼の耳がぴくつと引き立てられた。道夫の聲を聞いたからだ。彼の眼には蝙蝠のやうな道夫の顏がまたしても意地惡く浮んで來た。

道夫は更にせびつてゐる。

「だつて誰れも買つてくれないんだもの。ようツ、買つとくれつてば」

「道夫は貞兄さんの顏さへ見ればねだるんだね。そんなにうるさくねだるともう貞兄さんは家へ來ないつて云ふよ」

さう云ふ母の眼がチラツと、道夫から貞次に移されたのを彼は感じた。それからまた、自分の前に居る時には殊勝らしく默り込んで、自分が脇を向ひてる時なぞそつと、その卑屈な陰險な眼で刺すやうに鋭く見る道夫の眼が、彼には耐らないものの一つであつた。

彼の胸には先刻から高められてる不快の氣壓が、今にも爆發するばかりに衝き出よう衝き出ようと捌け場を探してゐた。彼はもう彼等の言葉を耳に入れまいと思つた。彼等の世界に立ち入る事は徒らに、自分自身を苦しめる事であつたから。「景氣はどう？　相變らず好いのかい？」

又、母の聲がした。何事も聞くまいと努めてる彼の耳には、まるでラッパででも吹き込まれるやうにはつきりと耳の傍で響いた。

「今のやうなばかッ景氣はさう永くつゞくもんぢやありませんよ。なんしろ買へば儲かると云ふんだから面白いやうです」勝ち誇つたやうな貞次の聲が云つた。「僕の友達にやこの間まで乞食合百なんかしてゐたのに、遂ひ先日鎧橋の傍に店は小さいけれど現物店の株を買つて開業した奴があるんです。そして一本二千圓以上もする電話を四本も一時に買込んだりして……」

「へえ、素張らしい景氣だねえ。でも景氣の好い話は聞くだけでもいゝね」それは母の聲であつた。「でもまあ景氣の好い今の内にどつさり儲けといて早く手を引くんだね。あの商買ばかりはいつどう變るか分らないんだからねえ」

「でもまあ當分は大丈夫です。何しろ日本の相場も今は世界的になつてるし、また世界中の物價の標準は騰る一方なんですから。幾ら物價調節のなんのつたつて、日本ばかり下るやうな事はありやしません。あそこの商賣ばかりは高くなりさへすりや景氣がよくなるんだから」

顔さへ見れば儲かるとか儲からないとか、損をしたとかしないとか、そんな話をばかりをしてゐる。いや、それより一歩も出る事の出來ない貞次を彼はどんなに輕蔑してゐた事だらう。彼が貞次を嫌ふのは、非常に金を持つてるといふ物質上の優越に對する嫉妬からかもしれない。いや、これは一番大きな原因だらう。[illegible]貞次の傲慢な態度、[illegible]

的にはどうかしらないが――その傲岸な態度が彼には耐らない反感の基であつた、それに貞次は、彼の名も知らないやうな、無論着たこともない織物の着物を着て、併かも家へ來る度びにそれを代へてゐた。彼に取つてはそんなことの一つすらが氣に喰はなかつた。

遂ひ半年程前の事である。その頃は彼はまだ今の店へ入らないで工場へ通つてる時分であつた。彼が時代遲れの、薄汚れのした洋服を着て仕事から歸つて來た時、貞次と榮子とが家へ來て母と何か話し合つてゐたのを彼は記憶する。その時貞次の不遜の眼がチラッと彼の古びた洋服の襟のあたりから、ズボンの裾の方へかけて注がれたのである。彼はぶるつと不快な身震ひをした。が、貞次は平氣な顏をして云つた。

「兄さん、若し着るんならおつ母さんにでも縫ひ直して貰つてこれを着ませんか。まだ拵へたばかりなんだけれど……」

貞次の手から何かしらどつしりした艶のある着物が取り出されて、彼の前へどすんと放り出されるのであつた。榮子は見るやうな、見ないやうな、妙な眼をして彼をチラッと見上げた。そして母と素知らぬ顏をして何か話してゐた。その眼は彼に對する侮蔑と、憫笑を催すのを強いて我慢してるやうな眼であつた。が、また同時に、彼に顏を見られるのをはゞかるやうな、かと思ふとふてぶてしく、どうでも勝手にしてくれ――と云つたやうな、非常に複雜した、また矛盾した光りを眼の奥に湛へてゐた。

彼は自分の働きのない無能さ、貧乏臭さを貞次に依つてすつかりあばかれたやうに感じた。若しこれが他の人であつたならば、彼はそれ程の侮辱は感じなかつたであらう。が、貞次であるといふ事が彼に耐らない嫌惡と、憤りの情を起さして了つたのである。

「着物ばかりそんなのを着たつて俺にや吊り合はないよ。いらないもんなら乞食にでもくれてやるさ」

彼はさう云 と胸をむかくさせながら、二階の居間へ上つて行つたのだ。その時彼は下に残つた貞次を初め恭子や母が、顔を見合はせながら自分の偏狭を嗤つてゐるのを感じた。

二階へ驅け上つた彼はその時、毎日、日課のやうに少しづつ書いてゐた小説の原稿に對つた。彼は殆ど無意識にペンを握つて原稿紙を睨めてゐた。これまでどういふ事を書いてゐたのか、今それから先きをどう書くのか分らなかつた。だが、その時の彼は一體何を書いてた事だらう。彼は殆ど器械的に初めから讀み返してみた。そこには、彼をモデルにした一人の青年が主人公になつて描かれてゐた。そこには、主人公とその許婚の女との小さい時からの生活が描かれてゐた。主人公は文學好きの勞働者であつた。で、工場へ行く時間を割いては創作に耽つてゐるので、その主人公はいつになつても物質的の滿足をその家族に、又許婚の女に與へる事が出來ない。が、その時既に女は主人公に自分を許してゐたのである。二人の間は最早單なる許婚の間柄ではなかつた。既に二人の魂はしつかりと結び合つてゐる。と少なくも主人公だけは思つてゐた。ところがそこへ矢張り小學校を出ると直ぐ奉公にやられた主人公の弟が、投機に手を出したのがうまく當つて金の力で父や母は勿論、終ひには兄の許婚の女の心をまで惹きつけてしまふ。その時に主人公は周圍の事情がもうすつかり自分に反いて駄目になつた事を悟つて了つたが、その心の中には夫等の逆潮に抗つても自分の意志を貫かうとする意地と、そんな意地を通したところが結局は破滅だ。仕方がない。自分は今までの道を弟に讓つて新らしく生活の道を拓かう。と云ふ二つの心が絶えず爭つてゐる。其處へもつて來て遠廻しに、そして陰険な手段を弄して、許婚の女を弟の望むまゝに主人公からもぎ離さうとする兩親の態度が段々露骨になつて來る。が、主人公の氣の弱さが、父や母に反感を持ちながらも到頭、女を弟にくれて了ふ。そして自分は家族の者とも段々口を利かなくなる。

ひとり居間に閉ぢ籠つては創作に沒頭し、僅かに鬱憤を洩らしてゐる。やがて主人公の弟とその女とは結婚する。——が、こゝに敗者の地位を自覺して凡てから離れ、凡てを忘れようとしてゐる主人公に對して、彼等弟夫婦はいつも勝者の地位から彼を見下さうとする。そして主人公に取つて彼等はいつも、生活の脅威者となり、嗤笑者となり、絕望を來らせる惡魔の役目をする。主人公の心にはいつとは知らず、彼等に對して復讐の念が萠して來る。主人公が自分でそれと氣がついた時には、それはもう確定的の計劃として其の目的を遂行する爲め、いろ〳〵の手段を考究し、單にその時機を待つてるといふ、せつぱ詰まつた心の狀態になつてゐる。——

二階に驅け上つた彼はその時てうどそこまで書いてあつた原稿に對つたのだ。しかしその時彼の心は創作するべく餘りに平衡を失してゐた。今の侮辱に對して餘りに憤怒に燃えてゐた。餘りに復讐心に燃えてゐた。原稿紙に詰め込んである字も、その一つ一つが眼に入らないくらゐであつた。併かも彼が書きかけたその創作は、彼のその生活を再現した所謂自傳的のものであつた。そして其の主人公こそ彼れ自身であり、その弟こそ貞次であり、その許婚の女こそ榮子であつたのだ。しかも主人公の絕望と、その絕望が當然辿りつかねばならぬ破滅の世界を現はさうとしたのではないか。それこそ彼の自傳であり、悲劇に終る彼の人生ではないか。

彼は一旦置いたペンを又取り上げた。そして怒りに任せてこの胸の鬱憤を晴らす爲め、貞次を榮子を、いや主人公の弟を、そして弟と結婚した主人公の許婚の女を、思ふさま殘虐に取り扱はうと思つた。彼はじつと原稿紙を見詰めた。が、これ程熱し、昂奮した彼の頭にもまだ幾らかの藝術的良心が殘つていた。いや、僅かにその影が彼の頭に閃いた。彼は今のやうな頭の混亂し動搖してる時、創作の筆を執る事は藝術の神に奉仕する忠實なる使徒のする業でない、と悟つた。

彼はペンを投げ捨てた。そして机の上に仰向けに寢轉んだ。彼は何も思ふまいとした。が、天井をじつと見詰めてゐた彼の眼は、其處にあり〳〵と貞次の顏を見た。榮子の顏を見た。それに交つて創作の中の主人公の顏も出て來た。主人公はいつか彼等に對して復讐を企てゝゐた。主人公の生活や氣分を絶對に安穩にし、平靜にする爲めには、その弟と女とをその世界から抹殺する事が必要であつた。藝術家としての彼は、その時如何なる方法に依つて彼等を抹殺することが最も自然であり、人間としての主人公の心に與へる苦痛を尠なくし、そして其の罪惡の發覺を防げるかを、主人公の心になつて考へてゐた。それは恐ろしいことであつた。併し彼の頭には時々疑問の影がさした。それは如何に藝術とは云へ、又創作の上でとは云へ、又如何にその怨みが深いとは云へ、さうむざ〳〵と人を殺すことが如何に殘虐なる、人道に反した行爲であるかに想ひ到つたからである。

その頃からであつた。彼の神經が一寸した事にも昂奮し易くなり、怒りつぽくなつたのは。些細の事にも絶望を感じて生きてる事をすら否定したいやうな心の狀態になつたのは。そして夜は何時までも何時までも、晝間の勞働で疲れ切つてゐながら眠れなくなつて來た。また、やつと眠つたと思ふといろんな夢にうなされ、終ひには醒めてる時にすら、夢見てるやうな具合に惱まされた。

彼の健康は次第次第に勞働に堪へられなくなつて來た。彼は工場の醫務室へ行つて診斷を受けた。醫者は案の條、神經衰弱だと云つた。そして一週間の靜養を彼に命じた。彼は工場を休んだ。が、靜養の一週間は又一週間と重なられ、秋の中ば頃からのやつが到頭冬の終りまで引きつゞいて了つた。が、彼の健康は少しもよくはならなかつた。

その生活を變へて見たら――と云ふ友人があつた。そして其の紹介で、彼はその[illegible]で今の所へ入つたのだつた。いくらかいゝやうであつた。それでも休む日が可なりあつた。

毎日毎日不快な日がつゞいた。低く垂れた雲、煙るやうに、時には撒水車が撒く水のやうに、どつどと降る雨――秋の終り頃からさうした日の連續であつたその毎日は、彼の重苦しい氣分を一層重苦しくした。それにも拘らず、彼の周圍からは時には愉快さうな笑聲が起つたり、騒々しい喧嘩が始められたり、又は歌をうたふ賑やかな聲が起つたりした。

彼は自分が今、彼等周圍とはまるで別の世界に棲んでゐる事を知つた。眼には見へないが何かしら、眞黒な異形な怪物が彼の心の中に巣喰つてゐて、それが彼の世界に雨を降らし、風を巻き、彼の生活を眞黒な幕でもつて遮斷して、ひとり別の世界に閉ぢ罩めようとしてるかに思はれた。單に家にゐて靜養しろと云つてた醫者は、今度は何處でもいゝ、靜かな海岸へでも轉地して見たら――と勸めるやうになつた。

どうせ仕事の出來ない體なんだ。金さへあれば醫者に勸められるまでもない、こんな不快な家は飛び出して一切の不快の根元から遠ざかるのだが――

彼はかう思ひながら十二三年も前、四五人の友達と一緒に遠足した時のM――山の靜寂を想ひ浮べた。そして、あんな靜かな空氣の淸らかなとこに十日も行つてたら、どんな神經衰弱だつて立ちどころに癒つて了ふだらうと思つた。それに彼が轉地といふ事と關聯して直ぐとその山を想ひ浮べたのは、轉地に要する費用に一番頭を惱ましてゐた彼の頭が無意識の間にその山の生活費の安かつた事を想ひ出させたからであつた。

ちつと許りの金があればいゝんだが――彼は心に呟いた。だが家の者に、その金策の相談をしたくなかつた。なるべくなら要るだけの金を自分で拵らへ、誰れにも話さずにそつと抜け出したかつた。それは兒戲に等しい程度のものでは

あつたが、その時の彼は可なり眞面目な、復讐の氣持でそんな事を考へてゐたのであつた。

彼は工場の貯金奬勵會から殆ど強制的に買はされてあつた勸業債劵を處分して、いつでも出發出來るやうに用意したが、さうなると彼はその金を持つて、いつでも家の者を愕かしてやれるぞ、と云ふ悦びの豫感の爲めに、さう急いで轉地に出かける氣がしなくなつたのであつた。彼は毎日、家にごろ〳〵しながら創作の筆をつゞけたり、また、漠然と、何か大きな運命の變轉が自分の上にやつて來ないものか。――とそれを希ふ心持になつて日を送つてゐた。

だが、到頭その日が來たのである。彼の待ち望んでゐたより以上の結果を刈り取らすべく、惡魔は彼の心に種を蒔いたのである。そして何んらの怨みもない一人の人間を、彼の手を以つて殺さしたのである。

貞次と榮子との結婚と殆ど前後して、妹の津留子が大澤爲吉と云ふH生命保險會社の社員の處へ嫁入つたのであつた。その大澤は地方へ出張中、やはりひどい神經衰弱にかゝつて、彼がいつ山へ向つて出發しようかとその機會を待つてる頃、てうど歸京して來たのであつた。生れつき人嫌ひである彼は、この大澤をも餘り好いてはゐなかつた。しかしこれぞと云ふ深い宿怨も憎惡もない二人の間には、暫くの間に同病相憐れむ感情から、忽ち轉地の相談が持ち上つたのであつた。

大澤は云つた。

「伊豆の大島へ渡つて見ませんか。僕は中學時代に一度行つた事があるのだけれど、物價は安いし、一般の氣風は朴實だし、それに空氣と來たら申し分のない好いとこです。牛乳なんか十錢もやると一升もくれますよ」

「さうさ、海の中の離れ小島もいゝだらうね。殊に俺なんかにはあ[illegible]らへ向きらしい。物價の安いのが何よりだ」

山に生れて山に育つた俺に、この年になるまで海といふものを[illegible]

彼は洋々とした陸地の影も見へない紺碧の大洋を想像した。空の青と、海の碧と、その中に輝く太陽の下にまるで木の葉のやうな船に乘つかつて漂つてゐたら、この鬱屈した胸の重苦しさは霧のやうに消散して了ふだらうと思つた。

「大島なんて雜作ありませんよ。夜の九時頃靈岸島を出ると翌朝はもう着いてるのですからねえ。離れ島とは云ふもんの、伊豆の半島なんか手が屆く程近く見へるんです」

大澤は嘗て遊んだ大島を眼に浮べて、寫眞の說明でもするやうにかう云つた。

「ぢや、直ぐ出かけるとしよう。俺はもういつでも出られるんだから」彼は云つた。

十二月もずつと押しつまつた日であつた。彼と大澤とは汽船發着所の待合室で落ち合つた。そこの薄暗い電燈の下には煙草の烟が一杯渦を卷いて、人の顏がまるで波のやうに動いてゐた。がや／＼した人の話聲、調和の缺けたその動搖めき、騷音――はその室へ入るなり、彼の頭をくら／＼とさせて了つた。どうしてかうもうるさい人間ばかり此處へ集まつて來たのだらう――と彼は思つた。彼は煙草の烟を透かして、隅つこのベンチに靑いこけた頰と、鋭く光るかと思ふと鉛のやうにどんよりとして了ふ眼を持つた大澤が、手提に肱を突いて入口の方を凝乎と見守つてる姿を見つけた。

何んといふ影の薄い男だらう――

彼は不意に變つた大澤の面影に少なからず愕かされた。彼の心には何かしらかう寒い影を投げつけられたやうな感じがした。その瞬間、この船出は中止しよう。ろくな事はない――と云つたやうな豫感がチラと彼の頭を掠めた。何んとも云ひやうのない、不快なとりとめのないものがもや／＼と胸の中にひろがつて來るのを彼は感じた。だが、そんな心持がなぜ不意に彼の心を襲つたものか、彼には分らなかつた。それは、底も知れない眞つ黑な魅力のある海に對する無經驗が、この理由のない不安や恐怖を生んだものかも知れない。彼はさう解釋して、自分の心に投じられた寒い影を消

さうと努めた。

彼の頭は海と云ふ青い青い、無限にひろがる未知の世界を想像してゐた。そして萬一の難船の場合を描き出して、この暗夜の海の表面から眞黒な深い深い底へ沈んで行く自分を想像した。それはたまらない事に違ひない。彼の頭には打ち消す傍から傍から、良くない不吉の豫感が頻りと閃いた。それは黒暗の中にチラッと光る希望のそれとは反對に、光りそのものの遍滿した中に射す一條の黒暗であつた。彼は何となく不安を感じた。

「大變な人だね、こんなに大勢乘り切るかしらん?」

彼はかう云ひながら大澤の傍へ行つた。

「隨分ゆつくりでしたね。ひよつとしたら僕は……」

大澤は何か口籠りながら暗い顏をして云つた。彼は大澤の暗い顏と、ぶつ〳〵呟きかけて口の中で揉み消して了つた言葉で、大澤も何か忌まはしい不吉な豫感に責められてゐたのではないかしら? と思つた。電車でも衝突して俺が怪我をしたとか、自動車に轢き倒されたとか、――彼は、大澤がかうした事件を空想しながら、只俺の前に云ふのを憚かつてゐるのだと思つた。が、その時別に轢き殺されてもゐない彼を、滿足な彼を見た大澤は、それで幾らか安心したと云つたやうに眉を開いた。そして云つた。

「僕はこゝで待つてる内に何んだか厭やな事ばかり頭に浮んで來ましてね。何んだかもう氣ばかり滅入つて了ふので、ほら、もうこの通り一本空にして了ひましたよ」

大澤はかう云ひながらウイスキイの小瓶を取り上げて、すかすやうにして振つて見せた。矢つ張りさうだつたのか――彼はそこにしきりに舌打ちしながら大澤の顏をチラッと見た。この話題になんだか怪しい氣味があるんなので、死人と

對座してるやうな無氣味な戰慄を感じた。彼の眼は本能的に周圍に人を求めた。奇怪な形相をした煙のやうな異形がうよ〱と其處らをうろついてゐた。彼等は何かしら解らない言葉でぺら〱喋つてゐた。そして筒拔けのしたやうな、腹に響かない聲でげら〱笑つてゐた。

「淋しいねえ」――

大澤の聲にふつと彼は我に返つた。

「だつてこんなに大勢居るぢやないか？」

彼は強いて心にもない元氣を見せてから云つた。が、大澤はそんな事に頓着なく、まるで自分の心に穿たれた暗い洞窟を眺めるやうな響きのない聲で呟いた。

「僕はこの大勢の人を見てる内に遂ひぞ近頃思ひ出した事もない、可なり前にあつた事を思ひ出してね。何んだかへんな氣がして仕樣がないんです。もう何年位前になるか……なんでも日は忘れたが正月の出來事だつたので今だに忘れずにゐるんだが、兄さん覺へてゐますか。あのA――丸とか云つた小つちやな汽船が矢張り大島か何處かへ行く途中沈沒したと云ふのを……」

「あゝ、そんなことがあつたつたね。なんでも規定以上の船客を乘せたつたとかで、大分八釜しかつたぢやないか」

彼は再び周圍の澤山な人達を見廻した。茶褐色の獵服を着て鐵砲を持つた男が四五人、一團となつて何か一言喋つては爆發するやうに笑つてるのが眼に入つた。踵の磨り切れたズボンを穿いた髮のモジャ〱した十八九の青年が、三脚だのカンヴスだのを重さうに肩にしたり、手にしたりしてゐるのも映つた。それからこの冬期休暇を歸省するらしい學生の群れ、商賣用の爲め出向くと云つた風の番頭さんらしいの、その他種々雜多の人達が只もう雜然と、渦を卷いて埃

のやうにふよ〱してゐるのを見た。彼は今、大島へ行つて見たいなぞいふ先つきまでの希望は煙のやうに頭から消えてゐた。ばかりでなく、何の爲めにかうした不安に怯へながら、逡巡する心を押し切つてまで出掛けねばならぬか、自分のする事が不審でならなかつた。まるで催眠術にかゝつた者が、無意識にいろ〱の行動をするやうに、只、自分の體が眼に見へない糸に依つて操られてゆくのを傍觀するばかりであつた。

二人はまるで墓場にでも居るやうに、何んらの喧騷も感じずに、默り込んで各々の考へに耽つてゐた。若しこの時、眞黑な河面を壓して鈍角的な響きを持つた汽船の號笛が響いて來なかつたら、二人は永久に默り込んで化石してしまつたかも知れない。彼と大澤とは汽笛の音に思はず顏を見合はせた。彼は自分が今、何を考へてゐたのか知らなかつた。彼の頭は空つぽであつた。

「伊豆七島行きは出ますからお仕度をねがひます」

出札掛りのその聲を聞いた時、彼と大澤とは無言のまゝ立ち上つた。周圍の喧騷は一層烈しくなつて、改札口の方向へ突進しつゝあつた。片手に同じやうなあけび籠を提げた二人は、まるで渦卷の中へ卷き込まれた木の葉のやうに、揉まれ揉まれしてる内にいつかその列の中へ加へられてゐた。波止場へ降りる危ぶなつかしい斜面を歩きつめると、其處は横着けになつた艀舟であつた。艀の方には荷物が山のやうに積まれ、中程から舳へかけて乘客が一寸の餘地もない程ぎつしりと詰まつて立つてゐた。

艀舟が本船に近づくに從つて、その船首の側腹に書いてあるこんぴら丸と云ふ錆びた金字がぼんやりと讀まれた。彼と大澤とは都合の惡い位置に居た爲め、皆んなの一番あとから舷梯を登つて行つた。甲板にある船室にもう先きへ入つた人達の爲めすつかり塞がつてゐた。彼等に風呂敷包みや、鞄やらを枕にして、もう長い航海でもつゞけて來た人のやう

にさも疲れたらしく、又、さも慣れたらしくその體を横たへてゐた。あとから登つて來た者は皆、倉庫の壁に穿たれた鼠の巣穴のやうな狹い入口から殆ど直立した鐵の梯子を降りて、船底の室に入つて行つた。重苦しい、何とも云へぬ臭氣の充ちた空氣が先づ彼の呼吸を怯やかした。

梯子を降り切つた左手が船室になつてゐた。鈍いランプの光線が黄色く一方の隅から梯子の一部を照らしてゐた。がそこはもう彼等の坐る場席もない程、先客の爲めに一杯に塞がつてゐた。彼と大澤とは亂雜に置かれた彼等の荷物を一方の隅へ片づけて、やつと坐るだけの場席を作つた。

「こんな窮屈なところで坐つたまゝ一晩明かすのは隨分辛いなあ」

彼はかう云ひながら大澤を顧みた。その時彼の眼は、大澤と並んで膝を幾分崩し加減に坐つてるひとりの若い女を見た。

「うむ、これぢや兎てもやり切れない。せめて體を横にすることが出來るといゝんだけれど……」

大澤は窮屈さうにきちんと坐つたまゝ肩をすぼめた、

時計が九時になつた時、頭の上で眠さうな響きをもつた汽笛がボーツと長く鳴つた。愈々出るんだな、と彼は思つた。つゞいて錨を卷き揚げるらしい音が船首の方に聞へた。それから心臟の鼓動のやうにガツチンガツチン云ひながら、汽罐が細かい顫動を船全體に傳へ始めた。暫くたつた。が、船は果して動いてるものやらまだ止まつてるものやら分らなかつた。なぜなら少しも進行してるらしい動搖を感じなかつたから。

彼は坐つたまゝ眠らうと努めた。が、閉ぢたかと思ふと眼はすぐに開いた。彼の眼はその度びに大澤の隣りに居る若い娘の上に留まつた。彼の眼はそこに澄んだ瞳を見た。形の好い額の生へ際を見た。頬から頸へかけてのすんなりした

線を見た。それから稍々鼻孔の仰向いた偏平の鼻を見た。それらの凡てが、久しく眼にしなかつた石油ランプの鈍い黄色な光線を斜めに受けて、如何にも時代を經た浮世繪を見るやうな感じを與へた。若しこれが煌々とした電燈の光りだつたら、兎てもこのしつとりとした落ち着きのある色彩は出なかつたに違ひない。彼はその古典的な感じを與へるその娘を見る度びに、何處かで見たことのある、また誰れかに似てゐる顏だなと思つた。彼の頭は知つてる限りの女の顏を描き出しては、彼女の傍へ持つて行つた。そして似てゐる處の有無を見較べてゐた。彼女の瞼はだん〳〵重さうに垂れ下つて來て、その澄んだ瞳を隱さうとしてゐる。やがて隱れてしまつた。快い倦怠が彼女の顏に現はれてゐた。その時彼の頭は二十年も昔、田舍にゐた頃矢張りかうしたランプの下で双六か何かをして遊んだ、榮子の面影がふうわりと浮んで來た。(これだ!)と、彼の心はこの時叫んだ。よく似てゐた、が、どこが似てゐるか分らなかつた。仔細に類似點を見つけようとしてゐた。見てゐる內に似てると思つた部分がだん〳〵似ても似つかないものに變つて行つた。と、娘はぱつちりと眼を開いた。そして怪訝さうに彼を瞶めた。彼の胸は微かに顫へた。三十年の垢に混濁し汚辱しつくした彼の眼は、生れたまゝの純眞そのものの眼に射悚められたのである。しかもその眼は、二十年の昔に持つてゐた榮子の眼と同じではなかつたか。我れにもなく彼は眼を伏せた。

汽罐の震動は絕へずぴりぴりとこの船室を顫はしてゐた。ランプの燃へる油焰の匂ひ、人の體から發する臭氣、船室に塗られたペンキの臭氣――それらは重苦しい此の船底の空氣と交り合つてたへ難い程不快なものになつてゐた。船は些も搖れなかつた。進行してるのか、靜止してるのかすら分らなかつた。只汽罐の運轉する響きに依つて多分動いてるのだらう、と察しられた。先きに此の室へ入つて來た連中は、體を長くして橫になつてゐた。まるで獸のやうであつた。彼等の發する臭氣は、船室中の空氣を耐へ難いものにするやうに思はれた。獸、獸、獸……彼はかう心に叫んだ。

時間は經つて行つた。それにつれて汽罐室から響いて來る震動は、最高潮に達した心臟の皷動のやうに、やゝ不安を感じさせる程急調になり、皆の心を亂打した。船首で切つてゆく波の音ばかりでなく、船の側つ腹に當つて碎ける波の音が、ザザザ……ザザザ……ツと、暴風雨のやうな響きを傳へ始めた。氣がついて見ると、船は左舷へ可なりの程度で傾いてゐた。それ許りでなく、波の山に乘せられたり、谷に引摺り降されたりして飜弄される樣子が、船の動搖に依つてはつきりと頭に描かれた。

「今どこら邊を走つてるのだらう？　大分波が荒れて來たやうだが……」彼は大澤を見ながら云つた。「さう寒くはないやうだ。ちつと甲板へ出て見ないか」

わざとらしく眼をつぶつてゐた大澤は、その時不精無精に眼を開きながら帶の間から時計を出して見た。そして呟くやうに云つた。

「出てからもう二時間餘り經つてますよ。殊に依るともう羽田あたりを走つてるのかも知れませんね」

しかし大澤は立ち上りさうな樣子も見せなかつた。頭は重くなる、胸はむか〱する、彼はもう息詰まるやうな感じに襲はれて、凝乎としてゐられなくなつた。兎に角彼は人間の臭氣のしない、直接海風に吹かれて見たくなつた。夜の夜景──そんなものはどうでも好い。だが、見たくない事はなかつた。彼はよろ〱しながら立ち上つた。そして殆ど直立に近い鐵梯子を上つて、頭をあちこち打ちつけながら狹い穴から甲板に出た。舷側にぶつかる波の音が快く彼の耳に響いた。墨汁をたつぷりと毛筆に含まして濃い鼠色の紙に持つて行つてなすりつけたやうな陸影が、漸ぼんやりと遙か右舷の方に眠つてゐた。チラチラした灯影がその所々に瞬きしてゐた。

彼は頭から外套をかぶつて甲板の上にしやがみ込んだ。其處には人影らしいものは一つもなかつた。凡てのものが闇

に包まれて眠つてゐた。闇から闇へと黒い波を分けて進んで行く船——頭の上には星がキラ〳〵瞬いてゐた。

　かうした夜、かうした波の上で永遠を思はせる星の瞬ぎを見てゐた彼は、すつかり感傷的な氣分になつて了つた。字宙に遍滿してるらしく思はれる生命と云ふもの、その生命の僅かな部分を各自が引つ掴んでこの地上に蠢いてゐる人間と云ふもの。——彼は移り行く陸地の灯影を見ながら、その人間達が營む地上の生活を想つた。あの灯影の閃きにも似たはかない生命をもつた人間の生活を。しかも其處には愛と憎、それらか起る鬪爭、強者と弱者の鬪爭が不斷に行はれてゐる。人間はなぜ僅かの間しか與へられてない、その生命の享樂さへ滿足に充たせないで不斷に爭はねばならないのか？——それは尠なくとも一刻前の彼の疑問であつた。又、それは凡ての人の疑問であるだらう。彼は嘗て或る人の云つた「天國に往かんよりも予は寧ろ地獄をえらむ。そは天國の無爲の平和は永遠の生命に取つて耐へ難い退屈だ」と云ふ意味の言葉を想ひ出した。何の波瀾もない生活——それは恐らく耐へ難いに違ひない。我々の生命は不斷に刺戟を欲求し變化を希望してゐる。刺戟そのものに依つて生命を感じるのだ。して見れば人間に取つて唯一の刺戟である爭鬪は、自然が人間に生命を感じさせ生活を充實させる爲め擇んだ唯一の手段ではなかつただらうか。若しさうだとすれば、或る一派の人達の叫んでる平等と云ふ事、彼等の呪つてる專制と云ふ事、それらは尠なくとも自然が人類に與へた生命の感受力そのものではなからうか。——彼ははげしく頭を振つた。その考へは正しいのか。果してお前の本心から生れ出た考へなのか。と、確かめるやうに。が、彼は更に思つた。人類がお互ひに殺し合つたり、血を流し合つたりすることは、成程自然が人間に刺戟を與へる、生命を感じさせる一の手段として選んだ方法であらう。いや、それに違ひないのだ。と、すれば現在の社會狀態は人生の過程に於て當然の進路を當然に押し進んでる、最も自然の狀態にあるのだ。善くも惡くもないのだ。また、それを善いとか惡いとか云つて爭ふのも、善くもなければ惡くもないのだ。この社會狀態

を悪いと云つてぶつ壊しにかゝるのも、善いと云つて固守するのも、つまりは同じことなのだ。不合理と思ふものは現狀を破壊して自分達の理想に進むのが善い事であるし、合理と認める者は現狀を固守するのが善い事であるのだ。さうしてお互ひが血を流し合ふことに依つて、彼等は自己の生命を感じ、生活の意義を認めるのだ。さうして人生はこの闘爭のつゞく限り存續するのだ。闘爭を限りなくつゞけてゆくのだ。

生命の讃美者よ、だから闘爭は善であり美であり、そして永遠であるのだ。闘爭を絶滅しようがために闘爭すると云ふ思想は成り立たないのだ。若しそれが成り立てば、人生は終局が來たのだ。生命を感じない灰色の死が來たのだ。——寒くなつた。彼は立ち上つた。夜の神秘を探らう爲めに漆黑の闇を分けて進むかのやうな船は、仄かな明るみを湛へた海面をまつしぐらに滑つてゐる。彼は再び小さい四角な穴から人間の臭氣の充ちた船底の室に降りて行つた。換氣法の充分でない船室には、腐敗した空氣がどぶ泥のやうにどんよりと停滯してゐた。むーッと迫つて來る臭氣は、ゲーゲー云ひながら突き上げて來る胸先の不快と喉の處で爭つてゐた。よくもこんな處に居られたもんだ——と、彼は侮蔑の眼でもつて室内を見廻した。大澤と彼の傍に坐つてゐた娘とは此の時何かしら小聲で話し合つてゐた。

彼は默つたまゝ煙草に火をつけた。

「どうでした、寒くはなかつた?」

暫くしてから大澤が云つた。

「よくこんな處に入つてゐられるね、俺は此處へ入つて來ると直ぐ頭がぼーッとして、胸がむか〳〵して來る」

彼は大澤に對して自分が今又嫉妬めいたものを感じてゐるのを知つた。彼は努めてそれを拂ひ退けやうとした。で顏をしかめながら云つた。

「だが外の空氣は好いよ。そしていろ〱な事を考へさせられるね。じつとひとりで星を見てると誰れでも哲學者になるんぢやないかと思ふ程だ、生もなけりや死もない。一切を自然に任せると云ふ氣になるね」

から云つた彼は、ふと悟つたやうな自分の言葉に操られるやうなこそばゆさを感じた。彼の胸に巣喰つた或る者がせゝら笑ひながら云つた。

「生も死も、憎も愛も、凡ての上に超越したと仰言るお前さんの腦裏に刻まれてる貞次や榮子はどうしたんですい？　津留子や大澤に對してすら、何も思つてないと斷言するんですかい？　嘗て榮子に失戀し、これこそ俺のもんだと自惚れてゐたお前さんが、今になつて誰れがその榮子を奪つた貞次に何んの怨みもないと云ふお前さんを本當にするんだい。いゝやさ、津留子が大澤の處へ嫁つたのに對してすら平氣でゐられなかつたお前さんではないかね」――

いやな氣持だ。頭がくら〱する。カタコトカタコト震動する汽鑵の響きが、むか〱込み上げて來る胸先きの不快を一層不快にする。船に醉つたんだな、と思ふ。少し體を横にしたいと思つてもその場所すらない。窮屈に坐つたまゝ眼をつぶる。過去にあつた生活のいろ〱なものが頭の中を掠め過ぎる。その中には無論貞次もゐる。榮子もゐる。津留子もゐれば大澤も居る。道夫までが白い眼を剝き出して肩を聳やかして居る。凡てが敵だ。敵意を持つた眼だ。俺はいつの日、俺の手から榮子を奪ひ、俺を侮辱した貞次に報復することが出來るのだ。俺から反き去つた榮子を取つちめる事が出來るのだ。それとも俺は又一生、彼等から見下げられ、憫れまれゐなければならないのか。何んと云ふ殘酷な俺の人生だ。――彼は何か毒酒でも呑まされたやうに、胸の中をくーつと黒い無氣味なものが走るのを感じた。頭がくらくらつと暗くなるのを感じた。日射病にかゝつて卒倒する時のやうに、眼の前で何かゞくるくると渦を巻いて世界が引つくり返るやうに感じた　と、この時彼は突然立ち上つた。何んの爲めだか知らない。只、大澤の嘲罵した顏が[illegible]

の眼に映つた。大澤は眼を閉じてうと〳〵してゐる。何も知らずにゐる。立ち上つた彼の顏にニヤニヤと無氣味な黑い笑ひが浮んで、直ぐ消えた。彼の眼は血走つて、その體はそろそろと人の呼吸を覗ふ死神のやうに、大澤に近寄つてゆく。まるで獲物を睨まえた守宮のやうに、彼の眼は大澤の喉をぐつと見据へてゐる。兩手先に力を籠めたその腕は物を扼するやうに前に突き出されて、苦しげて呼吸は怪しくはづんでゐた。

突然——舷側に烈しい濤の碎ける音がして、船がぐらぐらつと搖れた。守宮のやうな姿勢をしてゐた彼の體は、その反動でぐいつと足をすくはれて前によろけかゝつた。彼の手は危ふく低い天井の梁を支へた。瞬間、彼の口は「危ぶない！」と叫んだ。が、何が危ぶないのか分らなかつた。併し彼は瞬間の後ち、自分が今何をやらうとしたのかを意識した。彼はぞつと冷水を浴びせられたやうな惡感を覺へた。急に胸がどきどきし出した。彼はまたもとの席に坐つた。娘もいつか行李に寄りかゝつて居眠つてゐる。體を[illegible]にしてる連中は何れも豚のやうに深く眠り込んでゐる。

「どうかしましたか。顏色が眞つ靑だけれど……」と、眼を開いた大澤が物憂さうな聲で云つた。

「なんだか氣分が惡くて……屹度船に醉つたんだよ。また甲板に出て見ようと思つてるんだけれど……」

彼は大澤の眼が眞正面に見られなかつた。で、避けるやうにして云つた。胸の鼓動は自づとその言葉をまで顫はしてゐた。

「おや僕も出て見よう。眠ることも出來ず、横になることも出來ず、全くやり切れない。それに頭の心は痛むし胸はむか〳〵するし、矢つ張り醉つたのかも知れない」

大澤はかう云ひながら外套を引つかけて立ち上つた。そしてよろ〳〵と二三歩よろめいた。彼も立ち上つた。

「少しは寒くも甲板の方がどれだけ好いか知れやしない」

梯子を登りながら彼は云つた。矢張り一切が闇に包まれてゐた。彼等が甲板に出ると擦れ違ひに、便所に行つたらしい人の影がすうつと甲板の船室に消えた。氷の破片を撒き散らしたやうな星は、先つきと同じ神秘な光りを放つて瞬いてゐた。それは冷めたい感じのする光りであつた。二人は默つたまゝ右舷から見へる陸地に對つて並んで立つてゐた。人なつつこい灯影の一閃が、遙か右前方に見へた。二人の眼は其方へ惹きつけられてゐた。灯影はなかなか近づきさうにも見へなかつた。

「東京灣を出るのももう直きですね。あれはなんでも横須賀らしいですよ」

寒いせいか大澤は歯をがちがち顫はして云つた。「貞さんや榮子さんも一緒だとよかつたんですね、賑やかで……」

彼は默つてゐた。が、腹の中で叫んだ。

「莫迦いつちやいけねえ。俺はご免だよ、あんな奴らに來られたらそれこそ穩やかにはすむまいぜ」――

で、暫くしてから彼は云つた。

「貞次や榮子よりも君はなぜ津留子を連れ　來なかつたんだい？」

彼は努めて平靜に云つたつもりだつた。が、それにも拘らず、大澤は急に變つた彼の語調にぴくつとしたらしく、陰鬱な眼をしよぼしよぼさせながら彼を見た。だが彼は直ぐ自分にはづかしくなつた。彼は自分に對して烈しい輕侮の念を懐かずにはゐられなかつた。併し自分に對する輕侮や憤激よりももう一層強い反感の血が、彼の胸底を流れてゐた。それは卑屈の血であつた。自分の無能な事、意氣地のない事を強いて認定して、貞次や榮子を憐みながらしかもどうする事も出來ないで、見逃がしてゐる事に對する憤りが、時に爆發する程に彼の內心を攪亂した。

彼は物質的に優越を誇る貞次に對して、決して自分を弱者と目したくなかつた。彼は貞次を憎む爲めに貞次の發して

ゐる階級をも一緒に惜まずにはゐられなかつた。

何んら生産的の勞働もしないで只、資本の力に依つて寄生蟲のやうな生活を營んで居る。しかも贅澤な生活をしてゐる。人の小股を掬ふやうに隙ばかり覗つてゐる。相場師——なんて厭やな名だ。それに彼等を代表するやうないやに狡す辛い眼——俺はその眼が第一に嫌ひなんだ。それにお前達のどこに尊敬に値ひする處があるんだ。お前達ぐらゐ、資本制度の惡辣な觸角の能きをするものはないではないか。まるで毒嚢を持つた牙ではないか——

彼の頭の底にはいつも傲岸な貞次に對するかうした憤激があつた。併かもその貞次の持つた僅かな金の前に、親としての權威を放擲しご機嫌を取つてる父と母、女としての生命を擲つた榮子——併かもそれらを黄金の有する特權かのやうに心得て、彼等の魂を踏みつけにしてゐる貞次の傲然とした態度——それらは長い間かゝつて築き上げた冷やゝかな彼の理性も常識も、凡てを沒却して了ふ程强く彼の心に反抗の血を燃え立たせるのだ。彼はこの闇に浮動する彼等の顔を見た。彼は自分の心臟が不規則な、急激な動悸を打ち始めたのを意識した。なんでもかんでも今こゝで血を見なければ納まらない。と云つたやうな、怨みに對する一図な復讐の念が本能的に彼の魂を衝き動かしたのだ。その瞬間、言葉に云ひ表はせない恐怖が奔流のやうに頭のてつぺんを突き抜けた。彼はたつた今、甲板へ上る時にも一度、それに襲はれたのだ。そして危ふく大澤の喉を締めようとしたのだ。だのに、また——彼は困惑と自分の血に對する恐怖の底から「また始まつた!」と身じろぎしながら思はず叫んだのである。彼は急いで深淵の中に飛び込まうとする自分を引き戻さなければならなかつた、が、駄目であつた。一切は——常識も理性も、彼の頭から煙のやうに抜け出して了つたのだ。絶壁の上で重心を失つたやうに、彼の魂はその恐ろしい深淵の上に半ばつくのめつてゐるのだ——彼はこの時の心持をどう表現していゝか知らない。勿論普通の狀態ではなかつた。カーッとのぼせて了つたのだ。やがて彼は叫んだ

「行くところまで行け！　さうだ、やるところまでやるんだ！」

彼の心の中には盲目的な衝動に依つて凝乎としてゐられない或る力が充たされた。津留子がどうなるかなんて考へてもゐなかつた。彼の頭は悪魔に捧げる犠牲の血をのみ考へてゐた。

波は黒い舌を吐いて嗤つてゐた。風は侮蔑と嘲笑の曲を奏して彼の狂暴性を煽つた。

が、その時、頭の隅つこに押し込められ、幾重にも密閉された自我は、狂暴な悪魔に依つて占められた廃墟のやうな肉體の蠢動を悲しげに眺めてゐた。幾らかの反省はさうした彼の心の中にゝあつたのである。が、悪魔は暴風のやうな叫喚を發して、手に觸るゝもの凡てを破壊し盡さずには置かないと云つたやうに、廃墟の中をひた走りに踊り狂つてゐる。彼の眼は飢へた狼のやうに、血を、犠牲を、と求めてゐる。その時深淵は黒い舌を持つた悪魔の口をかりて叫んだ。

「早く、早く、犠牲を投げ込め！」

憐れな犠牲は悪魔の眼に留まつた。冷たい氷のやうな薄ら笑ひが悪魔の面を掠めた。悪魔は犠牲に近寄つた。その時犠牲は欄に寄つて背延びをしてゐた。そして口を動かした。何か云つたいだ。

「三崎の燈臺が見へる！」

血に飢えた悪魔はニタリと氣味の悪い笑ひを洩らした。彼の黒い舌は死の曲を奏しながらゲラ〳〵と笑つた。

「呀ッ！」

「呀ッ！」

同時に二つの口から迸り出た。一つは絶望の悲哀を罩めた犠牲の口から、一つに幾重に密閉された自我が心霊の寒さに顫へながら悪魔の口を突き破つて。

凱歌を揚げた惡魔の歡聲が遠く遠く聞こへた。深淵の奧底深くに……。

舷側に碎ける波の音がふと彼の耳を打つた。彼は左右を見廻した。彼はしつかりと兩手で鐵の欄を掴まへてゐた。誰れもゐない。彼は立ち上つた。くら〳〵と眩暈がした。

俺は今何をしたのだらう？――彼は考へた。百年も前から、生れぬ前から此處にからやつて立つてるやうな氣がした。怪しげな光りが彼の體を包んだ。と、意識した瞬間、光りは去つて前よりも濃い闇が彼を包んだ、光りと闇とが交互に來た。波の音は益々彼の耳を打つた。

燈臺！

眩しかつた。彼は眞正面に凝視めた。一分二分……。

彼はよろ〳〵する足を踏みしめて急いで穴倉のやうな船室に降りて行つた。そして又慌てゝ甲板に上つて來た，それから狹つこい甲板を船首から船尾へかけてくる〳〵と一廻りした。息がつまりさうだつた。彼の足は又もとの位置に來て止まつた。彼はそこへぺたんと尻餅をついた。

彼は萬事を了解した。胸が押し潰されるやうに苦しかつた。呼吸が出來なかつた。空氣といふ空氣は悉皆、自分の周圍から取り去られたやうに感じた。が、涙は些も出ない。髑髏のやうにから〳〵に乾いてゐた。

「大澤！」

彼は聲をひそめて呼んだ。そして耳をすました。

「大澤！」

再び前よりやゝ大きな聲で呼んだ。

「大澤、大澤、大澤……！」

彼はつゞけさまに呼びながら、ばた〳〵船長室へ驅けて行つた。扉をどん〳〵叩いた。彼は中へよろけ込んだ。歯がガタ〳〵鳴つて口が利けなかつた。

「大澤が居ない、大澤が……」

彼は乾いた空虚な眼で船長の眼を瞶めた。寢臺の上に起き上つた船長の驚愕した顏が何か云つてゐた。が、彼の耳には何も入らなかつた。彼は船長の寢臺に體を支へた。初めて涙がぽた〳〵こぼれ落ちた。そして船長の慌てゝ扉を蹴つけながら出て行くのを、うつろの眼で見送つてゐた。

こんぴら丸は翌朝×時×分、大島の岡田港に着いた。定刻より一時許り遲着したのであつた。

七

「こんな良い體格でこんな病氣になるなんてまつたく分らんもんですなあ」

トントン、トントン、と彼の胸や脊中を打診しながら、川田醫師は傍に控へてゐた妹にこんな事を云つた。それはもう快復期に向つてめき〳〵健康を取り戻してゆく一個の若者を前にして、主治醫として感じる安易な氣持から出た言葉であつた。が、川田氏はその時ふと何か思ひ出したやうに、革たまつた口調で彼に云つた。

「あなたは病氣の前に何か非常に頭を悩ましました、つまり云へば胸を痛めるやうな出來事はありませんでしたか」——

彼は、その時何んの氣なしに云つたのであらう川田氏の言葉に、ぎくんと心臓を突き刺されたやうな痛みと驚愕を感

した。川田氏がそれを病氣の凡ての原因と見てゐなかつたのは分つてゐたが、些なくもそれを原因の一部と見てゐるらしいことは、その口吻で彼にも肯けた。彼はその時川田氏の顏を眞正面に見てゐる事が出來なかつた。

矢つ張り醫者だ！

彼は恐ろしいもののやうにチラツと川田氏の顏を竊視た。自分のこの急激な顔の變化をどう思つたどらう——と思ふと、彼は何んとかこの場を取り繕はなくてはならないやうな狼狽をさへ心に感じた。

胸を痛めるやうな事……それだ、それだ、それの爲めに俺はどのくらゐ心配した事だらう。俺の秘密室にしつかりと藏ひ込まれた筈の大澤のあの顏、それから「呀ッ！」と云つたあの叫び聲。それから惱ましい胸を懐いてひとり淋しく東京へ歸つて後の物怯ぢをする心。あの時自分を全心的に衝き動かしたあの憎惡、奮激。復讐の相手を——正當な復讐の相手をさへ選び出す事の出來なかつた、あの盲目的な衝動は何から起つたのか。彼はあの時夢中であつた如く、今でもあの時の自分の心持を理解する事が出來ない。あれだけの行爲をするのに、これと云ふ理由の見出せない事が却つて彼を茫然とさせたのは事實である。——實際、彼は何を見ても怯れた。見慣れない人がじつと自分の顏を見てゐると、彼れは若しや……と思つて胸を痛めた。殊に夜寢靜まつてから——彼はさういふ時、殊にあの夜の船の出來事を想ひ浮べてゐた。——コツンコツンと裏に鋲の打つてある靴を穿いた巡廻の警官の足音、それから佩劍のガチヤン／＼鳴る音を聽くと、體がぞうつと顫へ上つた。胸が無暗に動悸を打つた。いきなり自分の寢てゐた布團をたゝんで押入に藏ひ込み自分もその中へ這ひ込んだ事も一再ではなかつた。めしり、めしり、階段を云はせて二階へ上つて來る弟や妹の足音でさへ、彼はいきなり机の前を立ち上つてうろ／＼逃け場を探し求めた。彼はさうした時、自分がどんな恐い顏をしてゐたかを、或る夜の小さい妹の愕きに依つて知ることが出來た。

俺はなぜ罪もない大澤をあんな目に逢はせたらう。俺はいつ捕縛されるか分りやしない。成程、表面は大澤の投身自殺と云ふ事で片がついたらう。だがそれは犯人を探索する上に於ける彼等の常套手段なのだ。何んと云つても一番嫌疑を受けるのは俺なのだ。もう大方調べがついて警官達が大勢俺の處へ向つて來る時分に違ひない。――と思ふと彼の胸は急に動悸を打ち出した。かうしてはゐられない――と云ふ焦燥が、彼の眼を狂的に室の四圍に向けさせた。もう來る、もう來る……彼の耳は凝乎と、外を歩く人の足音をうかゞつてゐる。と、その時であつた。めしり！と忍びやかな音が階段にした。

彼はハッとして膝を立て、室の入口に目をつけた。愈々來た！　どこから逃げよう――彼の眼は又直ぐに室の入口から裏の畑に面した雨戸に向けられた。めしり、めしり、とつゞいて階段を踏む足音がした。

たしかにさうだ。捕縛に來たのだ。もう遁れられない――彼は立ち上る、突嗟に身を轉じて雨戸に手をかけた。と、その時である。もう既にひとりの人影が室の入口に現はれて彼の方を見てゐた。彼はビクッと呼吸を止めて、おづおづ體をそつちへねぢ向けた。机の上から無意識に掴んで來たのだらう。一挺のナイフが刃をむき出しにして彼の手に握られてゐた。

「あれーッ」と云ふ驚聲を殘して、その人影はバタ／＼下へ降りて行つた。が　彼はその聲ではッと我れに返つた。妹の聲であつたのだ。だが胸の動悸はいつまでも靜まらなかつた。

「兄さん、どうしてあんな恐い顔をしてゐたの！」あとで妹が云つた。彼は只默つて妹の顔を睨み返したのであつた。

いけない、いけない。あの大澤の顔とあの聲とが俺の胸を内部から突つき破つたのだ。そして、この……この恐怖が……あの胸が痛む。あの顔、あの聲を想ひ出すと、そしてこの恐怖がある限り、折角縫つた結果がまた綻りこんだ。あ

れが俺の心から消え去らない限り、この病氣は何度と云ふことなく起るたらう。そして結局に於て……。

彼はぞつとして周圍を見廻した。そして呟いた。――結局に於て死ぬんだ！

彼は、これまでによく講談なんかで、怨みを呑んで死ぬと云ふやうな場合に使ふ「取り殺すぞ」と云ふ言葉を思ひ出した。

取り殺す――それは有り得る事だ。俺はやがて大澤に取り殺されるのだ。

彼は臆病さうな眼を瞬ぎながら川田氏の眼を見上げた。

川田さん、胸を痛めるのなんのつて僕は人殺しをしたのです。大澤と云ふ男を海の中へ突き落したんです、――彼は胸の中でかう呟きながら顫へ聲で云つた。

「別にこれと云つて胸を痛めるやうな事はありませんでしたが……」

彼は毎朝、新聞が來ると誰れより先きに手に取つて讀んだ。そして隅から隅まで眼を通しても、そこに大澤の事件について只の一行も書いてないのを確かめると、ほつとして新聞から目を離すのであつた。

無爲の日が永久につゞくやうに思はれた。退屈の黑い影は、慄へ悚んだ彼の心に殘された唯一の芽――健康へ、光明へ、と藻搔いてる憧憬にすつぼりとかぶさつて、宛ながら梅雨期のやうな憂鬱にひき込んで行つた。

何をしよう、何もすることはないぢやないか。健康がなんだ。名譽がなんだ。富が、權力が……。

彼は此のまゝ體が無爲の中に融けて腐つて了へば好いと思つた。さうした退屈の空氣に浸つてる時、黑い幕をかゝげてふつと肩越しに顏を覗けるものがあつた。

大澤の顔である。大澤は相變らずの——最後の刹那の顔をしてゐた。が、彼の心はもう別に愕きはしなかつた。それは、彼の心が空虚を感ずると、きまつて、其のあとを塞ぐやうに出て來る顔であつた。

「かういふ大病をしたあとで恢復すると、前よりか却つて丈夫になるものですよ。これからはもう肉だつてどん〳〵ついて來ます」

川田氏が云ふばかりでなく、來る程の人は皆んな同じ事を云つて行つた。だのに、彼の瘦せこけた肉は復舊どころか少しも肥る様子は見へなかつた。自分ばかりでなく、母までがそれを氣にして毎日、彼の手首や腿のあたりを手で以つて太さを計つてはもどかしがつてゐた。

「この間も父さんがね、自由に歩けるやうになつたなら何處か、海岸の温泉のある處へでも一ケ月許り轉地さしてやらうと思つてるんだが——と仰言つたよ」と、母が云つた。

夜となく晝となく、あの大澤が墓穴のやうな心の隅から出て來て俺の肉を喰ふのだ。心を責め苛むのだ。呪ふのだ。肥るどころぢやない、俺は近に内にほんとに取り殺されて了ふだらう。——

「僕はもう瘦せこけたまゝ肥りやしません、もとのやうに歩けるやうになるかどうか、それさへ危ぶないもんです」

彼は殆ど呟くやうに、惱ましげに云つた。

「そんな意氣地のない事を云つてゝどうするんです。病氣はもう癒つた、と川田さんも云はれるし、筋肉とかの加減で肉さへつけば元の通り歩けるやうになる、と仰言つてるぢやないか。そんな氣の弱い事を云つてるから、何時になつてもはき〳〵肥らないのです」

この様な、云[illegible]た[illegible]に〻知らないでゐる事を示してゐた。彼は今まで[illegible]しない[illegible]感じてゐた

心の重い負擔を、この時すつぽりと、取り除かれたやうに感じた。
母はほんとに何も知らないのだらうか。あのひどい熱の時にも、あれ程怖れてゐた事を俺は何も口走らなかつたのであらうか。――いや、朧氣ではあるが俺はあの事に就て何か云つたやうな氣もするのに……。
併し彼には思ひ切つて、「僕がまだ熱の高かつた時分、何かへんな事を喋りはしなかつたらうか」とは訊けなかつた。何んだか恐ろしかつた。彼は母の顔を眞正面に見る事さへ憚かられるやうな氣がして、眼を反けて了つた。
「で、父さんも折角あゝ云つて下さるんだから早く歩けるやうにして、轉地にやつて頂くやうにするんだね」
母は再び云つた。が、かう云はれると彼は今の恐れとは別に、母に喰つてかゝりたいやうな憤りを感じた。
「轉地も好いけれど一體その金はどこから出るんです？」
父と云ひ母と云ひ、この物價の高い今日一ケ月の轉地の費用をどの位に見積つてるのか知らないが、併しそれがたゞの氣休め許りでなく、ほんとに何處からか都合して來るらしい口吻に、彼はかう訊かずには居られなかつたのだ。何んだか有難迷惑にも感じられたし、その金を得る爲めに父や母がどれだけ心を苦しめてるかを思ふと、自分までが心苦しくなつて來たのだ。第一、親子の間柄とは云へ、そんな血の出るやうな金で遊山なぞしたくない、と云ふ氣がした。それ許りでなく、心の隅にはこれまでの行き懸り上、そんな恩惠は受けたくない、と云ふ氣までした。
「それはね、もう直き父さんの方の賞與が貰へるんで、それを持つてくやうになるんだけれど、……だがそんな事はどうでも好いぢやないか」
母は暫く口をもご／＼させてから云つた。が、彼にはどうも母のその態度が不自然らしく、嘘を云つてるとしか思はれなかつた。その金はどこか他から出るんだ――と云ふやうな氣がした。なぜなら、父の貰つて來るその賞與は、いつ

の年でも足らない位に貰はない前きから當てにして使はれてるのだし、殊には自分のこの病氣で今年は一層多くの出費がある筈だから。それに轉地費用を他から融通して貰ふとすれば、それは今のところ貞次に賴むより外なかつたのだ。父か母か、もう貞次の處へ行つて俺には內緒で金を借りて來てるに違ひない――餘りに臆斷だとは思ひながら、この頃中の母の態度がどうも彼にさう思はせてならなかつた。

「おつ母さん、貞次から借りたんだらう」

彼は自分でも意外に思はれる程、とげとげした聲で極めつけるやうに云つた

母は默つてゐた。が、暫くしてから「貞次がね、兄さんには云はないで默つてた方が好いだらう、と云つたんだけれど……」と云つて考へる風をして、また直ぐ後の句を云ひ足した。

「家でもいろ〳〵要るだらうからこれを使つて下さい、つてね、實は此の間お金を持つて來たんだよ、そして、今月は儲かつただけの鞘を皆んな利喰ひしたので大分お金が手に入つたんだつて」

ヘッ、人を馬鹿にしやがつて……樂子の身の代金と云ふわけだな――と、云はうと思つたが流石にうしろめたくて默つて了つた。が、少し強く出ると直ぐ參つて了ふ母の氣の弱さが氣の毒になつて、それ以上云ふ事が出來なかつたのだ。

「で、いくらぐらゐ寄越したんです?」

「二百圓!」

「ふむ、安いもんだ!」彼はそつぽうを向いて唇を咬みしめた。「儲かつた儲かつたと云ふから、少なくも千圓ぐらゐ寄越したのかと思つたら……」

「だつて二百圓てばたいしたお金ぢやないかね。これだけあれば當分温泉へでも何處へでも行つて來られるつて」

「まあそれつぱかりの金で恩に着られるのは止しませう。……が、そりや、無論そのお金をおッ母さんが貰つとく分にや、僕は何んとも云ひませんがねえ」

彼は、自分が今貞次等に對して何んにも思つてないやうに、努めて冗談でも云ふ風にかう云つたが、自分の頭に描かれた貞次や榮子の顏を咬みつくやうに睨めてゐた。そして今度こそ病氣が癒つたら、彼等の顏を見ない爲めに、何處か一人で家を離れて自活しようと思つた。

八

夏は深くなつて行つた。危ぶなつかしい腰付をしてではあるが、彼の脚もどうやら歩けるやうになつた。彼はまるで歩きはじめの赤ん坊のやうに、座敷で毎日〳〵歩き方の練習をした。關節と云ふ關節がまるで弛んでゐるので、どうかしたはづみにぺたんと尻餅をつく事があつた。だから歩く時には、コンパスの兩脚を開いてそれを交互にポツンポツンと歩かせるやうに、彼は出來るだけ膝に力を入れ、棒のやうに眞つ直ぐにしてお臀を後ろに引き、靜かに歩くのであつた。それは自分ながら噴き出さずにはゐられない程妙な格好であつた。で、彼は朝早くか、夕方薄暗くなつてから杖をついて、人通りの餘りない提防の上を散歩した。

ひよろ〳〵した彼の兩脚が踏みしめた大地――それは健康の時彼が無關心に濶歩した時とはまるで違つた印象を與へてくれた。それから頭の上に浮んだ夕雲、その間からやがて輝き出す星――それは永久に彼から去つたものを、さう諦めてたものを、思ひがけなく再び自分の手に戻してくれた形であつた。彼は何者にか感謝しずにはゐられないやうな氣持で、飽かずその悦びの中に身を浸した。

夜の河風は頭の上に生ひ茂つた櫻の葉をさやさやと鳴らして吹き過ぎた。

生きるんだ、兎に角、生きなければならないのだ。——彼は生きる事の悦びに胸をふくらましながら散歩から歸つた。

溫泉行きは、彼の意向は兎に角として、親達の間に殆ど決定した形を取つて進渉しつゝあつた。彼も、それに就てはもう文句は云ふまいと思つた。併し、貞次の金でもつて行くといふ事は、不快には不快であつた。が、貞次に取つてはそれは出さなくては氣のすまない金であり、彼がそれに就て何等の恩惠をも感じないなら、その金を使ふ事は彼に取つて些も疾ましくはなかつた。それどころではない、彼は出來るだけ多く、貞次から金を出させてやらうかとさへ思つた。

愈々轉地の日が來た。父や母は彼の轉地費用が思ひもかけない貞次の手から出た事に、有頂天になつてゐた。彼等の顏は晴れ晴れしてゐた。

「なに、海岸の空氣を吸つて溫泉にでも浸つて、一ケ月も遊んでゐやり見違へる程丈夫になつて來るさ。歸つて來る時にやもう杖なんか要らなくなつて、宿屋へでも忘れて來るやうになるかも知れない」

父はこんな冗談を云ひながら、彼と母とを玄關に送つてくれた。まだ思ふやうに步けない彼には、母が一緒に附いて看護婦の役を勤める事になつたのだ。彼は東京驛に行く俥の上に揺られながら、「何故の轉地だ！」と、心に繰り返した。

彼はまるで脫け殼のやうな體を俥の上に揺られてゐた。自分が今、何處をどう運ばれてゐるのかさへ知らなかつた。が、この時彼はまた、例のこんぴら丸の出來事を思ひ出してゐた。あの時の星の光り、黑い波の跳躍、それから最後に恐らく大澤が此の地上で見たものの內、最後のものであつたであらう燦爛の閃光　　彼はこれ以上思ひ浮べるに忍びなかつた。

太陽はもう可なりの高さに上つてゐた。が、彼の周圍にはあの時の黒暗がひしひしと押し寄せて來た。ばかりでなく「呀ッ！」と云つたあの時の大澤の叫び聲が、ひよつとうつかりしてゐる彼の耳の傍で爆發するやうに起つた。その度びに、冷たい血がぶるぶるッと脊筋を走つた。

彼は自分の前を矢張り車上に揺れてる母の姿が、なんだか大澤であるやうに思へてならなかつた、大澤が自分の嚮導となつて、自身の今棲まつてゐる深い海の底へ導いてるやうにばかり思へた。彼の心は何んとも云へぬ懼れの爲めに、堅く冷たく縮こまつてゐた。（完）



傷付いた人

小川未明

彼は、いつもかうして、同じ場處の腰掛に腰を下すのでした。その場處がすでに他の人によつて占められてゐる時は、仕方がなく他の腰掛を撰ばなければならなかつたが、そんな時は、なんとなく、いつもと勝手が異ふやうな落付なさを感ずるのでありました。

それ程、この居酒屋は、彼にとつて、久しく行きなれたところでありました。彼は、自分の前の拭き擂らされたテーブルの木目までが、どこにゐてもはつきりと思ひ出された程ちつと俯向いて、屢々眼をその上に落してゐることもあるのでした。

彼が、此處に來て、いつもかうして、眼を一どころに落して頭の中で耽る空想といふものは決して、樂しい、また華やかな、そんなやうなものではなかつた。何となく、悦しげに、今はじめて、そのことを悟つたやうに、一種悔恨と悲哀のしみ〴〵と縺れて湧いて來るやうな、またやるせない心を掻きむしるやうな感情の細い線の切つても切れない如く、いつまでもつゞいて目に見える半生の記憶でありました。

「ほんたうに、いつの間にか時代は、すつかり變つてしまつたのだ」

彼は、うす曇つた前の硝子戸を透して、往來の方を見るのでした。河端に植つた柳の木の枝は、絶えず風に靡いて、長い、その髮の毛のやうな枝を小止みもなく波打つてゐます。眞面にそれを受けたなら、誰でも息詰るやうな、黄色な沙塵が、乾いた路の上から起つては、電車の軌道について、彼方へと走つてゐます。

その景色に、昔も、今も變りのない焦燥と憂欝とが感じられたが、そして、街の建物にも、河の流れにも變りはないが、時代はいつの間にか變つてしまつたといふことが悟られるのでした。

「さうだ、俺は、もう年をとつた。あの時代の青年は、みんな老年になつてしまつたのだ。あの時代の娘は、みんな母親となつて、幾人かの子供を抱へてゐるだらう。そして、美しいとか、醜いとか、いふやうなことは、もう問題にならなくなつてしまつた。

彼は、また、ある時は、こんなことを考へて、センチメンタルになつたこともあるのでした。同窓のある者は、教育界に、ある者は、政治界に、また、ある者は實業界に、そして、そのうちの薄倖者は死の世界に、いろ／＼な運命に支配されて、別れて行つてしまつてからは、殆んど階級が異つてしまつたやうに、顔を合はす機會もなく過ぎてしまつた。

『彼等が、機械になつて、一つ方面にのみ働いてゐるのを俺は馬鹿だと思つたのだ。名譽が何にならう。金錢に何の權威があらう。人間は、そんなもの丶ために、この世の中に生れて來たのでない………俺は、ほんたうに、さう思つたのだ。そして、何事に對しても眞劍になることが出來なかつたのだ。俺は絶えず疑つて來た。臆病であつた譯ではないが、俺には、命をかけて打衝つて行くところが見出せなかつたのだ。たとへば、戀といふものに對しても………」

彼は、さびしく瞳を、またテーブルの上に落しました。その頬は肉が落ちて、骨が突出してゐた、色は青白く、髮の毛は伸びて、眼ばかりは光つてゐるが、その鋭い眼の輝きのうちに、何となく傷み易い、この人の正直さを表はすうる

ほひが含まれてゐるのを見脱がすことが出來ぬのでした。」

「Kさん、何をあげますか」

紅い襷をかけて、働いてゐるこの家の三十二三になつた女房が、かういつて彼に、どんな肴を取るかとたづねました。

この時、彼は、やつと顔を上げて、

「あ、なんでもいゝよ」と、女房の方を見ながら答へた。

「なんでもいゝつて、好きなものをおいゝなさいよ。今日は、いろ／＼なものがありますから」

女房は、輪廓のはつきりとした明るい顔をしてゐました。眼は、大きく、それに感情家らしい氣質の活々しさを見せて、この都會に育つたらしく、物言ひのさつぱりとした、氣速なところがある女のやうに思はれました。

彼は、十日ばかりも借金が重なつてゐるので、多少そんなことが氣にかゝつて、勝手なことも言はず、控目にしてゐたのであるが、女房は、彼が、惡い人間でないのを知り拔いてゐるらしく、どうせ、あの人なら、そのうち金が入るだらう。その時は、すつかり拂つてくれるにちがひないと思つてゐるのでした。

彼は、やがてこの店の女房が、前に置いてくれた肴で飯を食べるのでした。そして、頭の中では、かうして自分は生きてゐるために、其の書物に書いてあることが必ずしも自分の主義に一致するとは言へない、また必ずしも興味を惹いたとも言へない、その飜譯をつゞけなければならぬ……そして、一つ仕事が終ると、また他の仕事を探さなければならないやうに、さうした不安な生活をして、いつたい何になるのかといふやうなことを考へてゐたのです。

三月の末で、木立は、まだ多いまゝの枯れた姿で立つてゐたけれど、梢を吹く風は、寒いといふ程でもなかつた。土

の面は、黒くしつとりと濕つてゐました。凍傷の跡は、いつしか癒えてしまつて、底から、やがて表皮を破つて芽ぐむであらう、そして、いろ〳〵の草によつて、夏の時分には被はれる野原に來て、彼は、いま前に崖を見下しながら立つてゐました。

それは、星晴れのした靜かな夜でありました。空のある處は、灰白く、吹きかけられた淡い地球の息によつて曇らされてゐました。その霧の裡から、星は、やさしい瞬きをして、何ものかをぢつと見守つてゐるのです。

空地は、長い間、見返へられもせずに捨てあつたが、この頃ある富豪が買つたと見えて、やがて其處には廣壯な家屋が建てられるらしい。一方の低地に面した部分は、もはや切石で高く、堅く、下からは絶壁のやうに築かれてゐました。彼は、今その崖の頂上に立つて、ちやうど森蔭を上つた月の光りで、下の方を見おろしてゐるのでした。麓には幅の狹い流れがあつて、水の面が月に照らされながら、微かに顫えてゐます。流れの兩側には藪が繁つてゐました。そして、暗い木影を水の上に落して、其處だけを暈どつてゐます。崖の上から、下までは板を立てかけたやうに、たゞ白くぼんやりとしてゐたけれど、月がもつと西に廻つて、其の石垣の面を照した時には、それが雪のやうに白く見えるだらうと思はれます。

まだ、仕事が全く終へ切らないために、下には、切石が積み重ねられてあるばかりでなく、今度、この崖の上の眺望の好い處へ建てられる西洋館に、使用されるらしい、赤い煉瓦が、處々に、積み重ねられてありました。

その富豪とはどんな人か。恐らく、この廣壯な建物が出來上つた時に、其の内に住むであらう。贅澤な、華かな、飾りを凝らした幾つかの室を其家は持つにちがひない。植込みの深い奥の一間からはピアノの音が朝夕響くであらう。其時は、嚴めしい大きな門が既に出來てゐて、もう誰でも勝手にこの地を踏むことを許さないのだ。彼は、いま自分が立

つてゐる足許の地を見詰めながら考へるのです。

なんで、こんな宏壯な建物が彼等にとつて必要なのだらう？　家を持たない者があるばかりか、その日の生活にさへ困つて、苛酷な勞働を強ひられ、社會に向つて呪ひ、叫んでゐる多數の無産者があるのにと考へると、かうした普請をして誇りとする人の氣持が分らなかつたのです。

「俺は、高いところから、下は見られなかつたものだが………」

彼は、不意にこんなことを思ひました。どうして、人が、あの高い湯屋の煙突の先に上るだらう？　どうして、六階も七階もある高い窓から、下の日の照り付ける敷石の面を見下して、恐怖を感じないだらう？　彼は、それを殆んど不可能のことに思つた程高い處に登ることに對して、神經質であつたが、いま、彼は、平氣で、しかも崖の最も端のところに立つて下を見おろしてゐるのでした。そのことは、彼自身にとつても不思議なことであつたのです。

「なぜだらうか？」

彼は、かう言つて考へました。しかし、それは、眞に考へやうとするのでなかつた。その前に、彼は、全く絶望的であつたからです。ほんたうに、彼は、眞倒樣に、下の切石の上に落ちて死んでもいゝと思つてゐたからです。生きてゐて何にならう？　かう彼は、絶えず自身を罵る如く心の中で叫んでゐたからでした。

自殺をする程、彼は、また死に對しても、感激が持てなかつたのでした。この時、彼の頭は冴えてゐました。たとへ、其の崖の絶端で倒立をしても、決して、彼は、過ちなくそれをなし得たでせう。そして、彼の心は、重く、沈んでゐました。

彼は、しばらく死んだものゝやうになつて、其處に立ちつゞけてゐました。

なんといふ、柔らかな、人懐かしい感じのする夜だらうと彼は思ひました。遠く、近く、いくつかの燈火が乳色の靄の裡に浮いてゐます。その火の點るところには、それ〲異つた人間の生活が營まれてゐる。淫蕩、虚僞、反抗、闘爭、と考へるのも目まぐるしい程、息詰るやうな彼等の狀態が想像される。しかし、かうして、たゞ見るところでは、都會は、夜のうす絹の帷の裡に息づいて、平和に眠つてゐるものゝやうに見えるのです。そして、時々その鼾のやうに、長いうなり聲と、また齒ぎしりのやうな小さな何か堅い物を叩く音とが混り合つて、何處からともなく聞えて來るのでした。

何處に階級爭闘があらう? 何處に貧富の差別があらう? いま都會は、描かれた繪のやうに、また幻のやうに、苦惱もなげに彼の眼の中に映りつゝあるのでした。

長い冬の間、貧民を泣かし、勞働者を苦しめた寒い風は、すつかり昔日のことを忘れ顏に、また全くその時の風とは異つたものゝやうに、ちやうど女の眠息の如くある時は穏かに、香はしく吹いてゐるのでした。

中空には、月がぶら下つた姿で懸つてゐました。そして、地の上から立ち登る靄のために、一面に空は、おつとりとうるんでゐました。風は、時々、嬉しさのためにはしやいで、氣まぐれに唄をうたつて頭の上を過ぎたけれど、ちつとも肌を刺すやうに感じませんでした。かうして、木々の梢を風が吹くたびに、芽は、次第〲に腫れ上つて、迅速にこの世界に顏を出すべく意氣込むやうに思はれます。

遙か、北方の地平線から、やゝ高く、あちらに金色の星が一つ輝いてゐます。その周圍の色は青く、海のやうにさびしかつた。その星の照らす下には、まだ雪が土の上を掩うてゐるにちがひない。しかし、その土地を緑の若草が包むのもそんなに遠い未來のことでないと星は悟つてゐるやうに、ずつとさびしさを堪えて涙ぐんでゐるやうにも見えるのでした。

ポ、ポ、ポ――

汽車が月の照らした、停車場にとまつて、荷を積み、客を下し、また、其處から出て行く光景が、この音を聞いた瞬間に、彼の目に、描かれたのでした。そして、過ぎ去つた、ちやうど今夜と同じやうなある夜のことを思ひ出させたのでありました。

これは、どんなに悔恨の限りを盡しても、二たび、彼の前には歸つて來ないのです。彼は、青春の去つてしまつた、この年となつては、たゞ醜い、乾固まつた、血の冷えた一塊の體に過ぎないことを自から感じました。ぼんやりと立つてゐた、彼は、足許の土の上に力なく蹈るとホツと歎息を洩らした。すると、目の前には、見るともなく、まだ若かつた彼の青年時代が蘇生つて來る。それを彼は、さながら、第三者を見るやうな氣持で、恍惚として過去、の思ひに耽つたのであります。

編輯室の窓から外を見ると、春の細い雨に、あたりは煙つてゐました。建物の家根は、悉く金屬で張られたやうに光りを放つて、電線からは白い水銀のやうな雫が、心ありげに、一つ、一つ小さな孔を穿つやうに下の泥濘の中に落ちてゐるのでした。若い女は、色彩的な着物の裾を溜り水に映しながら、顔を隠すやうに、傘を目深に翳して歩いてゐます。彼は、其の光景をながめながら、頭の中で、先刻、社會部の二人の記者の噂について思ひ出してゐました。Aは、藝者を情婦とし、Sはある美しい琴の師匠を其の戀人にしてゐるといふことであつた。彼は、自分もまた、どんなやうな女でも、戀人に持つことが出來るといふやうな、空想を二人の記者と自身とを比較しながら恣まに描いてゐたのでした。ある時、二人のまだ二十以前の女が、彼を、下宿にたづねて來ました。その女は、どちらかといへば都會の良家の中の

澄んだ、利巧さうな女でしたが、彼の前には、ほんたうに、面羞かしさうにして、膝を見詰て坐つてゐる、全くの處女に見えたのでした。時々、女は上目使ひに、彼の顔を見ては、視線の觸れ合つた時は、耳朶まで赤くするのでした。そして、彼の書いたものを讀んでゐて、好きなところは暗誦してゐて、幾たびも繰返して語るのでした。女は、歸ると、手紙を寄來した。それには、

「妾は、あなたを慕つてゐます、あなたが、もし妾を愛して下さるなら、妾は、どんなに苦勞をしてもあなたのために盡すでありませう」と、いふ意味のことが書いてあつた。

女から、かうした手紙を出すのは、一通りの大膽さではできぬのに、女は、それから幾日目かに、二たび彼をたづねて來ました。恐らく、彼に 先日の返事を聞かうと思つたのでありませう。

彼は、女を見た刹那、いぢらしい女だと思ひました。また、女が、どんなに思ひつめてゐるかといふことを感じない譯ではなかつたが、それに同情するには彼の心は、あまりに眞實さがなかつたのであります。俺は、どんな女でも戀人に持つことが出來るのだ。この女は、哀れな女だが仕方がない……………かうして、彼は、一言も先日の話には觸れずにゐました。日が暮れて、間もなく夜になつた。女は、名殘惜しげに別れを告げて歸る仕度をしました。

「そこまで、送つて行つてあげませう」と、彼は、言つて、女といつしよに宿から出ました。

女は、白い足袋を穿いてゐた。其の足は、鼻緒の赤い草履を踏みしめて、音を立てぬやうにして歩いてゐました。そして、彼の後から、ついて來た。たとへつゝましやかに歩いてゐても、乾いた道の上には、彼女の重い體を運ぶ草履の下から、夜目には見えないけれど、黄色な埃が立つてゐたにちがひなかつた。

それは、ちやうど、櫻の花の咲いてゐる時分でした。濠邊の廣い通りを歩いて、停車場の方へと行きました。女は、多

分、男が、先日の手紙について、何か言つてくれることと期待してゐたらうと思ひます。しかし、男は、何も言はなかつた。

ポ、ポ、ポ――と、あちらの停車場の方で、出て行く汽車の笛の音が、穏かな春の空に響き渡つたのでした。

道を曲ると、あちらには、明るい燈火が、林のやうに立つてゐる、幾本かの或は高い、或は低い、棒の先について、星の如く群がつて見えたのでした。小さな赤い火、紫色の大きな火、その大きな燈火は、周圍の空氣までが、ぼうとうす紫に色づいて、春の夜の暗緑色の大空に咲いた花のやうに暈取つてゐたのでした。

「もう、こゝでお別れいたします」と、女は、きつぱり言つて、丁寧に挨拶をしました。絶望を感ずることによつて、彼女を理智的にさせたのか、其の聲には、切れるやうな、冷たさがあつたのです。

「さうですか」

彼も、また冷淡に答へた。

女は、二足、三足、行きかけたのを、遽かに振向いて、

「妾、明日、故郷へ歸りますから………」と、言つた。

これが二人の最後に別れる時の言葉であつた。そして、女は行つてしまつた。

女の故郷は、この都からは南の方でありました。彼はその後になつてもこの女のことなどは、思ひ出しもしなかつたが、ある夏の日に、女から、意外にも手紙がとゞいた。

「妾は、ある人と結婚をして、いま臺灣に居ます」

彼は、この手紙を讀んだ時、それを手に持つたまゝ、蒸し暑い、熱帶地の植物の林に、きら／＼と強い日光の射す有

様などを眼に描いた。その光景とあの圓顏の女の貌のどこやらとが、不思議にも調和あるもの丶やうに思ひなされて、一種の蠱惑的な氣持を感ずると共に、嫉妬に近い感じも起つたけれど、それも束の間のことで、すぐに消えてしまつた。

明る日、彼が、街の植木會社の前を通つた時に、硝子戸の内側に、いろ〳〵の赤い花が咲いてゐたのをいつまでも記憶してゐます。

若い時分には、女といふものは、彼にとつて、たいした問題ではないのであつた。しかし彼にも、ついに離れ難い女が出來た。その時は、もう、彼は青春の終りに近づいて、一時のやうに、燃えるやうな血氣もなく、世帯に窶れた時であつた。其の女といふのは、その時すでに年増で、もとはオペラの女優をしたこともある女であつたのです。

四五年間も同棲をした後でありました。二人は、よくちよとしたことから言ひ爭ひました。

「妾は、もうあなたに愛がさめてしまひましたの、え丶、いつでも出て行きますわ」

前髪を分けた、色の白い、眼尻の釣り上つた彼女は、頬骨の尖つた横顏を彼の方に向けて、未練氣もなくから言ひました。

「妾は、貧乏暮しが厭になつてしまひましたの、え丶、妾は、物質的の人間なんですもの、いまからでも行けといふなら、出て行きますわ」

彼女は、立ち上ると着物を被かへた。そして、ちよつと、外へ用達しにでも行くやうな、無造作さで、そして、とてもこれが永久に、彼から離れて行くとは思はれないやうに、平氣で、

「左様なら、御機嫌好う」

かう言ひ遺して、彼女は玄關を出て行きました。彼は、果して正氣で、彼女が言ふのだらうかと胸をどきつかせたから、草履の音の消えて行くのに耳を澄してゐたのでした。

其時、彼は、女の後を追うともしなかつたが、それぎり、——もう、其時から今日までは、幾年も經つてゐるのであるが——彼女は、それぎり歸つて來なかつたのです。

いつでも女は得られると思つてゐた。そのうちに、青春も去つてしまつた。最後に掴んだ女は、ほんたうに、彼をば愛してはくれなかつた。

「俺には、世の中といふものが、たゞ眞實のある人達でなぐさめ合つて渡るといふ單純な事實が分らなかつたのだ。」

彼の小さな、黑い體は、冷たい地の上に踞つて、兩手で頭を抱へるやうにして、しばらく、悔恨のやるせなさに惱んでゐました。

「今晩は」

不意に、かう呼びかけられたので、彼は、頭を上げますと、月光を浴びて、前に、一人のみすぼらしい樣子をした青年が、外套も被ず、また帽子も被らずに立つてゐました。月の光りは、そんなにも明るくはなかつたので、地の上も、森影も、すべてがぼんやりとして目の前に浮んでゐるのでした。

彼は、この青年を誰であらうと思つた。そして、返答をするのに躊躇してゐますと、

「いゝ晩ですね、もう、春ですね」

青年には、さも嬉しさうに言ひました。彼は、なんでもない、この月に憧がれて、青年がこの廣場にやつて來たことを

感ずると、この未知の青年に對して、言ひ知れぬなつかしみを覺えたのであります。
「さうです、もう春らしくなりました」と、彼は、答へた。
「かうして、立つてゐても、ちつとも寒くありません。ぢきに花が咲きますね」と、青年は浮き〳〵とした氣持で言ひつゞけました。
春になつたつて、何がそんなに嬉しいのか、まだこの男は、若いからだ。若いうちは、何かにつけて、こんな風に感興が持てるものだと考へると、彼は、つひこの未知の青年に對して皮肉を言つて見たくなつたのです。
「そんなに、春になるのが、うれしいのですか」
と、彼は、言つた。
「え〻、さうです。あなたは?」
「毎年同じやうなことが、繰返へされるだけぢやありませんか」
彼は、なぜか知らず腹立しい氣持すら感じられた。
「しかし、私は、この春が見られないと思つてゐました。もう二度と花が見られないとあきらめてゐたのです。もう恋いこともないでせう。やはり、私は、春を見ることが出來たのです。つひ十日ばかり前にも、私は、喀血をしました。私の命は、とても長くは、持ちません。こんなことをお話して、失禮かも知れませんが、私には、どんなにか、春が待遠しかつたでせうか。しかし、私は殘念です。春に遇つたけれど、この社會の新しい春には、到底遇はれないのです」
　青年の言葉は、次第に、熱して、悲しくなつた。
彼は、ぢつと俯向いて、石のやうに身動きもせず、青年の言ふことに耳を傾けてゐましたが、しばらくして、顔を上

げました。

「ご病氣なんですか。……………あなたの喜びは、よく私に分りました。しかし、あなたは、この世の中が、いまに、もつと善くなるとでも考へてゐられるのですか？」

かう彼が、問ひかけると、いまゝで悄然(しょんぼり)とした風で立つたゐた青年は、急に元氣付いたやうに、あたりを歩き廻りながら叫ぶやうに言つた。

「將來、かならずもつと、善い社會が産れます。社會革命が來るのです。その時は、貧富の差別が無くなるのです。壓迫する階級も、壓迫される階級も一切が無くなるのです。そして、平和と自由と平等の上に善い社會が建設されるのです。なんで、私は、其の日の來るのを信ぜずにゐられませう。私達は、みんな苦しんでゐます。理由のない壓迫や、掠奪や、貧困に堪えて來ました。それは、正義が必ず勝つといふことを信ずるからです。眞理が、いつかすべてを征服すると信ずるからです。其の輝かしい日を見ずに、永久に暗い世界へ行くのが悲しいのです

「しかし愉快です。私達の仲間は戰鬪をつゞけてゐます。そして、至る處に、彼等に打ち勝つてゐます、もう曉の光りを見るのも遠いことではないのです」

この時、彼は、身を起して立ち上りました。そして、自分も青年といつしよに、あたりを歩き廻りました。

「どうして、君のやうに、さう強い信仰が持てるだらうか。僕には、その希望がないのだ。かうして生きてゐても、死んでゐると同じことなのだ」と、彼は、深い歎息を洩した。

「恐らく、あなたは、生活を疑はれたことがないのでせう？」と、青年は、立止つて、憫れむやうに言ひました。

「疑はない？　この位生活を疑つて來た者もないだらうに？」と、彼に、強く、頭を振つた。

「いえ、あなたの疑はれたのは、いはゞ贅澤なんです。人間並の生活が得られない者の疑ひではなかつたのです。そして、そんなやうな、贅澤な生活が、何うしてなし得られるかといふことについては、決して、あなたは疑はれなかつたのでせう」と、青年は、つゞけ様に叫めいたのである。

彼には、青年の言ふことが、少しうるさく感じられたのであつた。

「僕には、君の言ふことがよく分らない。たゞ、君が強い信仰を持つてゐるのが羨ましいのだ、そのことが羨ましいのです。さだめしこの人生には意義があるのだらう。生活が愉快であるにちがひない。それが僕には、分らないのだ。さびしくて仕方がない。いまも、此處で青春の過ぎ去つたのを獨り悲しんでゐたのです」

彼は、自から言つたことに感激して、泣き出しさうになりました。

「青春？……私には、そんなやうなものはなかつた。戀もなければ、瞑想もなかつた。たゞ、反抗、過勞、貧困、そして、病氣があつたばかりだつた。ほんたうにあなた方から見れば、不自然でありませう。私も、さう思ひます。しかし、これは、誰がさせたのでせうか？」

青年は、つひに泣き出した。月は、空にあつたが、彼には、この青年の顔が、はつきりと分らなかつた。

「しかし、君には、信仰がある。僕には、それがないのです」

彼は、自分を憫れみ、同時に、彼を慰めるやうに言ひました。

「私は、堅く信じてゐます。しかし、しかし私は、近いうちに死んでしまうでせう」と、青年は、答へた。

「朝に道を聞いて、夕に死すとも可なりといふことがあります。信仰のある人は、幸福です」と、彼は、空しく、生きながらへてゐる自分の體を却つて悩ましい事實のやうに感ずる如く言ひました。彼は、刹那、眼の前に、ピストルと小

さな壜に入つた、透明の水のやうな毒藥とを空想に描くのでありました。

「私は、もうこの體では運動が出來ないのです。どうなつてもいゝのです。私は、勇敢な友達を信じてゐます」

青年は、聲に力を入れて言つたが、それは彼の耳に、何となくさびしく聞えた。

やがて、二人は、坂を下つて、靜かに、しつとりとした月の光りの裡を歩きながら、街へとさしかゝりました。數歩前には、「おでん」の紅提燈が、低い軒下に懸つてゐた。それに眼を向けて、

「君、おでんでも食べて行きませう」と、彼は、傍に立つてゐる、痩せた、黒い姿を顧みて言ひました。

「別に、腹も空きませんが……」と、青年は躊躇して、人通の少ない、行手の廣い往來の上を無意識に眺めてゐたが、

「まあ、ちよつと」と、彼が、重ねて言つたので、青年は、彼につゞいて家へ入ると、居酒屋の女房は、黒い大きな眼を二人の上にぢつと向けてゐました。

彼は、いつもの自分の腰をかける場處を、他の客に占領されてゐるので、空いてゐる處へ腰をかけて、その隣りの椅子を青年にすゝめました。

「おかみさん、ご無沙汰してしまつた」と、青年は、さもきまり惡げに、女房の方を向いて、直には椅子にも腰をかけずに言つてゐました。

「體が惡いので、仕事に行つたり、休んだりしてゐるもので」と、青年は、つゞけて言つた。

「しばらく見えないから、どうなさつたかと思つてゐましたよ」

「そのうちに、きつと來るから」と、青年は、言譯がましく言ひました。

「かまひませんよ」と、女房は、氣にかけてはゐないやうな返事をした。

彼は、青年も曾ては、此家に來たことがあるのかと思つてゐました。

酒より他に、彼の憂鬱を消すものはなかつた。青年は、病氣で酒を飲まなかつたが、彼は、獨りで盃を上げてゐた。

そして、こゝに二人の人間が、たとへば植物や、また動物であつたら、恐らく、もつとのんきに生を送るであらうに、不自然にも、苦しんだり、悩んだりして、どの途長くもない生をもてあましてゐる、實に奇體な姿を見るのでありました。

「私は、昨夜、珍らしく子供の時分の夢を見ました。お寺の家根に石を投げて蜂の巣を壞してゐたんです……」と、青年は、さびしげに言ひながら笑つた。

彼は、はじめて、この時燈火の下で、青年の顏を凝視しました。彼の眼に映つた青年の顏には血の氣がなかつた。それは、彼が酒を飲んで醉つたせいでない。決して醉つてゐなかつた。青年の顏は、死の面を被つたやうに、冷たい感じを與へた。そしで、白い齒と濃い眉毛とが一層凄味を添へてゐたのである。青年を見てゐると茫漠とした闇が、あたりに擴がつて、自分は、何處に、何うしてゐるかすら、分らなくなるやうな氣持がしたのです。

「この男の胸に、革命の燃えた火があるのか！」彼は、驚異を感じた。

二人は、この居酒屋を出ました。青年は肯垂れて、彼の前に立つて歩いてゐました。彼は、青年を心から敬愛する念を禁じ得なかつたのです。友達を信じて、眞實に生きることより以外には、人生の樂しいことも意義も他に存在しないからでありました。

「この青年は、どんな者に對しても恐怖を感じない筈だ」かう思つて、彼は、瘦せた、あまり脊の高くない青年の後姿

を眺めた。

やがて、道は、二筋に分れてゐました。一筋は、暗い、河淵について、南方につゞいてゐた。其の片側には、家が建並んでゐたが、燈火が稀であつて、風は、其の人通りの絶えた往來の上の埃や、紙片を吹いてゐるのでした。死が灰色のものなら、其の道の行手は、無限の死の色の中につゞいてゐるのです。そして、他の一方の道筋には燈火が煌いてゐた。

其處に來た時青年は立止りました。

「なんだが、明るい方は暖かな氣がしますから、廻り道ですが、こちらから行きます」青年は、暗い道を一人離れて行かずに、しばらく、明るい街を彼といつしよに歩いてゐたが、ある路次に達して、つひに別れて、狹い、曲つた、闇の中に消えて行きました。そして、また、彼は、最後に、たゞ一人となつた。

もう場末の溝渠のあたりは、さはめく人影も見えずに寂然としてゐました。彼は、其處の橋の上に立つて星を仰いだ。

「そんなに遠いことでない。二十年……三十年の後、俺も、あの青年もゐないだらう。何も、かも新しくなつてゐるんだ……」と、彼は、思ひました。――一九二三、二作――

中央公論大賣捌所

同	神田區裏神保町	上田屋
同	京橋區銀座三丁目	東海堂
同	京橋區元數寄屋町	北隆館
同	日本橋區本石町	至誠堂
同	本郷區春木町	盛春堂
大阪市	北區梅田町	盛文館
同	北區東梅田町	立盛堂
京都市	七條停車場前	共盛社
同	四條西洞院	前田大誠社
名古屋市	富澤町	中京堂
朝鮮	京城本町二丁目	日韓書房

◉定價 金八拾錢郵税金貳錢五厘（海外郵税貳拾四錢 但支那を除く

冊數／國別	內國	外國
六冊	金四圓八拾錢	金六圓貳拾四錢
十二冊	金九圓六拾錢	金拾貳圓四拾八錢

以上郵税共

▲但し新年號春秋二期附錄號增刊號は各倍冊に付普通號二冊の代金を申請くべし、即ち一ケ年通計十七冊分の割合なれば一ケ年分御注文の方は內國は金拾參圓六拾錢外國は金拾七圓六拾八錢の割さなれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし

一誌代郵税は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし

一振替貯金 口い東京三十四番なり

一郵券代用 絶す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるゝ

一代金引替 の取扱は一切謝絶す

一集金郵便 御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし

但集金郵便の申込を受くるも其金受領濟にあらざれば雜誌發送せず

一金一圓迄 金六錢

一金五圓迄 金七錢（集金委託料及送料共）

一金拾圓迄 金八錢

一中央公論及婦人公論代金取り纏め御拂込みの場合には各誌割當て金額御指定を乞ふ

一受領證請求は必ず返信料を要す

大正十一年二月二十五日印刷納本

大正十一年三月一日發行（禁轉載）

發行兼編輯人 瀧田哲太郎

印刷人 高木酉三

發行所 東京市本郷區本郷三丁目六番地 中央公論社 電話小石川一四四 電信略號コウロン

印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING CO., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48; Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.